金原省吾著

構想の研究

東京 古今書院發行

序

私は子供の時から遊びは嫌ひであつたから、トランプ、將棋、碁等のやうに、極めて一般的な遊びさへ遊び方を知らないでしまつた。お正月に子供とする「いろはがるた」位が私の知つてゐる唯一の遊びである。食べ物や着物にも全然興味がない。煙草もすへないし、酒も飲めない。勝負に我を忘れたり、酒食に我を忘れたりする事の出來ない程、私は窮屈に出來てゐる。

私の專門は東洋の美術研究である。その專門さへ不十分な私が、何故こんな專門外の書物を書いたか。私は一昨日自分の學生達をつれて大島に行つた。學生達は櫻丸の甲板の上で、夜がふけるのを忘れて騒いでゐる。船室から上つて行つてみると、俚謠をうたひ踊つてゐるのである。私ははしの方に立つてそれを見て居た。私は四十何年、つひに一度も、この眼の前の學生達のやうに、我を忘れて騒いだことはなかつた。おそらくこの後も亦、かかることなくして終るであらう。空には傾いた月があつて、浪は靜かである。東京灣の上で爽かな風にふかれつつ、自分のこの窮屈な生涯を思ひうかべてゐた。さういふ私である

から生活の外の部面では、自分を解放することが出來ない。ものを讀み、ものを書く働の中でのみ、自分を解放し、自分を慰めることが出來た。私の道樂といふのはそれだけである。もう三年たつが、私は今でも顏を赤らめるやうな書物を一つ出してゐる。「日本農民史」である。日本は「みづほの國」とよばれつつ、しかも一貫した農民史を持つてゐないのを氣にしてゐたので、ふと思ひ立つことがあつて、自分の專門でもないこの方面に手を出してみた。これが私の脫線のはじめである。第二がこの「構想の研究」である。

綴方或は作文の成績は思はしくない。素質のある生徒はずんずん延びるがだめの生徒はいつ迄たつてもだめである。その上にこの教科の才能は、他の教科の才能とはちがつて居る。他の教科では純才のものが、かへつてよく出來たりする。しかし私はこの二つの上に久しいこと疑問を持つてゐた。學校で分數や電氣を敎へる場合には、理解力のない生徒にどうして理解させるかに苦心するのが常である。しかるに綴方や圖畫では、だめなものはだめとして、才能のあるものだけを對象にしようとする傾がある。問題はこのだめの生徒を如何

にするかにある。私は實驗をしてみた。それが本書第五章の構想の展開形式で述べてゐるものである。その結果これ迄才能なしとせられ、方法なしとせられた生徒に對しても、とるべき方法あるを信ぜしめた。それと共に、他の教科に才能を有するものは、この教科にも同樣に才能を有することを知り得た。他科の低能力者は、この科に於いてもまた低能力者であり、初等教育の程度では、この才能は並行することを知り得た。そして綴方乃至作文は、推敲を重ねて鍛錬して行くことが唯一つの道であると信じた。その回數と方法とは、學年と事情とによつて異る。そこで私はこの問題を中心に置いて、觀る働と描く働との考察をなした。それがこの書である。

故に本書は「日本農民史」に繼ぐ意味で、私の學問的脇道である。この書物をまとめたのは、一昨年の夏であつた。まとめては見たが、「日本農民史」を出したばかりで、またこれを出すといふのは、可成り氣のひけることであつた。それでこのことはごく親しい友人に語つたばかりで、そつとして居た。しかしいつかその事が知れて、書肆からこの書の公刊をすすめられた。しかし私はその氣にならなかつた。更に研究を進めて、確かな著述にする抱負を持つて居た譯でも何で

もない。自分の專門方面の著述が一二册出た後でといふ卑怯な考からであつた。ところが昨年の秋は「東洋美學」の一書が公刊され、また續いて東洋美術の論文集もまとまる事になつてゐるから、この本を世に出しても、或は人も許してくれるかと思つた譯である。

私は現在の綴方或は作文教授の實際を知らない。その道の人に尋ねて見ると、其の思潮は常に變りつつあるらしい。しかしいくら變つても、文を綴る働は、構想の問題を離れる事は出來ない。集團の構想でも、個人の構想でも、構想の問題を外にしては、行はれ得ない。故に教授の實際がどう變つても、常に構想の問題は基本的な問題として變らずに殘るのである。この點で本書も世の一隅に存在し得る理由があらう。

本書の組織は、次の如くである。

第一章　觀る働・描く働。これは次にくる各章の序說である。後の章は何れもこの章の萌芽を發展せしめたものであり、隨つて後章は時にこの章と重複す

る箇處がある。

第二章　眞實。吾等が觀て眞實とし、描いて眞實とするものが何であるかを、概念と寫生との對比の上で明かにするのが目的である。

第三章　言葉の幅とその定位。言葉は幅を有つのが本質であるが、その幅は如何にして定位せられ、定位せられたものは、如何なる性質を持つか。これ等の點を檢して、象徴並びに形象の問題に入つてゐる。

第四章　構想。ここでは暫く言葉の問題から離れて、構想が如何にして生ずるかを、觀る働と描く働との一致した立場から、觀察して居る。

第五章　構想の展開形式。兒童の描く働の觀察から、構想の展開を研究し、その形式を設定し、各形式の移動について考究した。

第六章　推敲。第一章が總論であるやうに、本章は結論である。推敲の問題によつて、觀る働、描く働の定立を行はうとしたのである。

而して本書中には次の如く既に發表せられた部分を含んでゐる。

一、觀る働・描く働。「國文教育」昭和三年三月號。

二、概念歌。「國語と國文學」大正十五年六月號、七月號。
三、言葉の幅。「國文教育」昭和五年三月號。
四、言葉の定位。「國文教育」昭和五年四月號。
五、東洋畫の純粹性。「美術新論」昭和五年三月號。
六、構想の展開。「國文教育」昭和三年四月號、六月號、八月號。
發表の多くは「國文教育」によつてゐる。私のある生活時期の記念である。今思ふと私には實に遠い氣がする。

本書の成立事情は以上の如くである。観る働、描く働を中心にし、推敲の形を以つて構想の展開をはかる處に、構想の意圖を置いてゐる。この意味で本書は東洋的立場による構想の一試論である。（昭和八年六月五日朝　東京市杉並區上井草町一三二五の寓居にて記るす）

目次

第一章　觀る働・描く働

一

十一月の末のある朝であつた。私は信濃上諏訪町の高島小學校に上つて行つた。霜が落葉の上にも、草の葉の上にも、石の上にも、白く凍つて居た。生徒は――尋常三四年位の生徒であるが、めいめいノオトをもつて、學校の下の菜園で綴方の寫生をしてゐるのである。大きい石の上に一枚の菜の葉が置かれてある。その菜の葉の上には霜が凍りついてゐる。石のまはりには三人の子供が居る。

「この色は何だ」

「鹽だな」

「鹽より光つてゐるし、つめたいし」

「砂糖か」

「砂糖が光つてゐるかえ」
「つめたいかえ」
さういつて、しきりに吟味してゐるのである。
「困つたなあ」
つひにさういふ嘆聲さへも聞える。その時私はそこを通りすぎてしまつた。私は急いで居たからである。描く働は小供には、樂みではない。樂みよりももつと冷かな、もつとさぐり入る研究である。この光景を今も猶忘れることが出來ない。あの霜を何と表現することにしたか聞きもらしたのを殘念に思つてゐる。

二

觀る働は決して簡單ではない。觀る働が、簡單であり且容易である樣に見えるのは、觀る働が最も直接なる働の一つだからである。
飛驒山脈に年久しく登つてゐる、有名な登山家の話である。陸地測量部の地圖に、假製版といふのがあつて、それは暫時のもので、本製版の作られた時は、直に廢棄せられる性質のものである。その故に假製版は、本製版に比して、不正確でもあり不整備でもあると信ぜられてゐる。然

るに登山して、ほんとに道の嶮難を知り、危急を豫知するのには、木製版では不十分である。假製版でなくてはならぬさうである。假製版には、觀られた山の相貌がその儘にあらはれて居るのに、木製版では轉寫の間にそれが弛められ薄められて居るのである。地圖でさへも、觀る働がかく直接に鋭敏であり、この鋭敏さは轉寫によつてもそこなはれる程のものである。地圖の轉寫でもそれである。複製し難き程に、直接であるのが觀る働である。どんなに粗末であつても、その場で作つた見取り書きは、あとで作つた周到な清書に勝るのである。

かく觀る働が直接だと言ふのは、それが何の媒介をもまたずして成され、且展開する意味である。そしてこの成績が承認せらるるのに、亦かくの如く媒介を要せぬ意味である。この觀る働の直接性に立つのが描く働である。されば正岡子規氏の言へるが如く、「寫生とは有りのままに寫す」ことに外ならない。

然らば觀る働が何故に、かく直接であるか。觀る働は單に、與へられたものを觀るに過ぎないやうな、受身の働ではない。觀る働の基礎には當然性がある。當然性が觀る働を成り立たせるのである。受身で强要せられて、「である」とするのではない。「でなくてはならぬ」とする積極的な態度である。この積極的態度が展開して行くから、存在が確立するのである。うたがひなき存在が確立するのである。この當然の感なくしては、存在も存在とはなり得ないのである。「在る」

ことは、この「あるべき」事に支持せられて、はじめて確かである。ここに觀る働の直接性がある。故に直接とは、必然であることと、その必然が無限の展開可能を示すこととである。故に觀る働は、一目にして行きつまる様な平面ではなくて、觀るに從つて深さを增す立體である。ここに觀た通りにかくといふ寫生が、限りなき深さを示して來るのである。觀る働が直接であるといふこと、卽ち寫生が直接であるといふことは、働として單純だといふことではない。されば十歳十一歳の少年にして、菜の葉に凍れる霜を觀る働に苦心し、同一の地圖にして猶且、轉寫し得ぬ獨自なる者を有するのである。

三

對象は吾等の觀る働をまつて存在するものである。換言すれば吾等の解釋をまつて存在するものである。吾等の觀る働を豫想するのである。故に對象は解決として存在するのでなくて、「問題」として存在するのである。對象を觀得たといふのは、これは一つの解釋である。しかも觀る働はこれに止るものではない。更に深さを以つて、再び之を觀かへし得るのである。故に一つの觀る働は更にその先に、一層深い觀方を要求するものである。觀得たといふ解釋は、同時に更に進んだ深い觀方の存することを示すのである。故にこの解決は更に深い次の疑問を産出するので

ある。觀得たことは、更に觀るべき要求と可能とをふくむものである。卽ち對象に對する理解と更に深き疑惑とを意味するのである。疑惑の深さを示すのである。故に觀ることは理解と疑惑との限なき連續である。

描くとは對象の眞を寫す意味なることには、疑ない。而して對象の眞とは、決して一定の平面ではない。限りなき深さを有するのである。卽ち限りなき特性を有するのである。故に對象の眞といふ點には疑ひないのであるが、それが果して對象の眞なりや否やについては、これを判定すべき一定の標準はない。之に照して決定すべき、一定の標準はない。一つの解決たる眞は、更に次の解決たる眞を呼ぶからである。

この事は子供の發達の上にも同樣である。例へば尋常一年生は浦島太郎の話を喜んできいてゐる。尋常二年生になるとだまつて聞いてはゐられなくなる。「昔の龜は人と話をしたであらうか」といふ疑問を持つてくる。それから海の底に行つても、水をのんで死なないのは何故であるかと疑ふ。海の底にも太陽があるかと疑ふ。夜晝があるかと疑ふ。はじめの理解は、次の疑惑を生んだのであつて、子供の眞實はここに一步を進めたのである。

隨つて眞の中には、それを眞と信ずると共に、更にその眞を超越せんとする要求が滿されてゐる。これが當然なるものの感である。ここに益その眞を實現して行く可能がある。眞として豫想

せらるるものの、實現して行く可能が、當然性の感である。この深さあつて、觀る働は生涯を通じて、舊套に墮し終ることがないのである。

今の圖畫に、共通した缺點は、一を二時間以上持續して描きつづくる持續のないことである。一時間に滿たずして、既に何もかくことのなくなるやうな、粗末にして、且直に行きつまる觀方を以つて終始して居ることである。生徒は苦みつつ、惱みつつ、自分の力を以つて一步一步正しく深く步み入る。この態度を指導することが出來なくては描く働の指導とはならぬ。たのしんで描くのではなくて、苦しんで描く。苦しみつつも倦むことなく描き續くる。この沈痛なる心持に置かねばならぬ。一つの重大なる勞作として、持續する生長として描かしめねばならぬ。そしてこのことは綴方に於いても全く同一である。

四

今から四年前の夏である。飛驒山脈を登りあるいて、槍ヶ岳にいつた。この時盲學校生徒の一團が、槍の峻峰にかじりついてゐた。特有の沈着と用意とで、何の過失もなく、その頂上迄よぢ登つた。そして彼等は一樣に嘆聲を發した。

「景色がいいなあ」

私達は思はず笑つた。景色といふものは、眼でみるものである。手に觸れてみるものでもなく、また音にきくものでもない。景色は自分から離れてゐる。手でさはることも出來ない。景色は形である。音にきくことも出來ない。香にかぐことも出來ない。故に盲人の一群が、槍ヶ岳の頂上で發した嘆聲は、おかしくてたまらなかつたのである。しかしこれは考へてみれば無理である。吾等こそ景色は眼でみる。しかしそこには谷の底深く流れてゐる谿流の音がある。峰から峰をふいて通る風の音もある。顏にかかつて來る山の香もある。日の光もある。そして其等は何れも、この峻峰の上でなくては感じられぬものである。それ等の一切を吾等は集めて觀る働に入れてゐる。故に觀る働とは、單に眼の感覺だけでないことは明かである。それ等を暫く眼の感覺が代表してゐる迄である。そこで暫く眼だけを除去しても、その他の感覺の綜合によつて、なほ所謂觀る働がなし遂げらるるには相違ない。盲人は、今この山上でそれをなしたのである。されば眼あるもののみが景色を見得べしとするのは、激しき思ひ上りである。

その後諏訪湖上のスケエト大會に盲人が手をひかれて觀にゆくのに逢つた。また失明した幼な友達に、上野へ花見につれて行つてくれと賴まれたことがあつた。更に、かういふ一つの例がある。神田のある活動寫眞館へ、表現派の映畫を觀にいつたことがあつた。映寫中に何かの故障で畫が消えた。それにも係らはず辯士德川夢聲氏は、說明をつづけてゐる。物たりぬ心持でぼかん

としてゐる私達の鼻先で、ピシャピシャと手をたたいた。それが彌次ではない。熱心な拍手である。變だと思ふと、それからはその拍手が氣になつた。前から時時拍手があつて、それが何れも變な時である。氣をつけて居ると、ますます變である。休憩時間になつたので私はどんな人かと思つて、その人をのぞきこんだ。それは盲人であつた。盲人であるから、映畫に手をたたかずして、說明に手をたたいたのである。この盲人の觀る働も、もつと精しく、そして私達眼あきからみては異常な總合によつてゐたのである。ここで私は悲痛な感で、おのづから胸がいつぱいになつた。

五

故島木赤彥先生は、さういふ觀る働の最も集中した例を、次の如く記してゐられる。

「故萩岡流家元某氏が、年老いて只一人の子を亡くした。谷中齋場で葬の式が終り、柩車が地に軌つて墓地に運ばれる時、老人は首をあげて其の軌る音を聞いた。老人は盲してゐたのである。耳に遙に車の響を追ふことが、わが子を送る唯一の方法として老人の前に置かれた道であつたのである。その時の老人の姿勢が僞りなく尊い感を與へたといふことを、嘗て岡麓氏より拜聽した。失明の不自由が、內心の集中と充實になつたのである。

寫生の究極は斯ういふ所に入るであらう。物に離れて猶物に卽してゐるのである。斯ういふ話が小生には有難い。」

これは大正十二年一月號の「アララギ」に載り、後「萬葉集の鑑賞及び其批評」に容れられた文章である。ここまで來なくては觀る働は、成されたとは言ひ得ぬであらう。

六

觀る働は、それが深まるにつれて、豐かな總合性を要するのであるが、その總合が可能であるのは、觀る働がその根柢に當然性を有つからである。そして當然性の實現には、沈着に細かに對象に集中する外はない。極めて熱心な植物分類學者があつて、その人は時間さへあれば、自分の標本を紙に寫生してゐる。自分の持つてゐる標本を、改めて寫生する必要もあるまいと思つたので、その理由をたづねた。するとその植物學者は、描いてみなければ形がわからないと答へたさうである。これは西尾實氏の話である。眼の前にある標本さへも、之を描いてみなくてはわからぬといふことは、吾等に多くの敎訓を與へる。

私にも之と同樣の經驗がある。私は今から十五年前に、平福百穗先生について、寫生の稽古をした。寫生は草花であるが、東京に居ては寫生の材料に困るのが普通である。困るがまゝに庭先

の雜草や、茗荷の葉や、何でも手あたり次第に寫生したのである。はじめにはこんな見處のない草などが、畫になるであらうかと疑ひつつ、それに對した。それに對してゐると不思議にその草から面白い處が見えてくる。節や、斑點や、細かい毛や、それ迄は全く見てゐなかつた面白い處が、順次に出てくる。こんなに美しい所のあるのを、今迄見のがしてゐたのであらうかと、不思議に思ふのが常であつた。そしてどんなにつまらぬ、かそかな草でも、必ず一つや二つの美しさを、ひそかに、つつましやかに持たぬことはないと、私は思つた。私の畫の稽古は二三年でやんでしまつて、畫はものにならなかつた。しかし私はどこにでも美しさはある。自然の中に美しさを持たぬものは一つも存在してゐないといふことを學び得た。これも私に描く働が教へたものであつた。描かずして觀ただけでは、この事實を知ることは不可能であつたと信じてゐる。ここに於いて描く働が、觀る働を深めること、觀る働は描く働によつて深めらるることを知り得るのである。觀る働が深まるにつれて、描く働が手間どれる。前には一時間で描けた草花が、今は二時間でもかけなくなる。そのうちには三時間でもかけなくなる。後には描くのに手間どれるばかりではなく、着手さへも困難になる。一本の草花を前にして、七日も八日も腕組をしてゐる。そのうちに草花は枯れてしまつた。觀る働は深まるにつれて解決でなくて疑惑となるのである。草花に對してその疑惑を解き得ないにがい苦痛の中に沈んでゐる。さういふ微力を自ら苦しんだ。

七

と言つてゐる。然らばこの「中」は當然なるものであり、「和」はその觀られたものである。そして觀らるることの深きにつれて、中庸の德は發顯するものと言はねばならぬ。されば「中庸」は「中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す」と斷言してゐるのである。

八

かくて觀る働は、描く働によつてなされ、描く働は觀る働によつてなされる。觀る働と描く働とは連續した一連の働である。この故に觀る働を考へてくれば、自然に描く働に移行しなくてはならぬ。故に寫生は觀る働と描く働との一致の上に成立する。

今私は山道に立つてゐる。この山道は靜かな冬山である。私の立つてゐる處は、赤松の林で、その林の先に、冬枯の雜木林がある。私はここまであるいて來て、ふと立ちとまつた。立ちとまつたのは、さあつといふ音をきいたからである。私はまだ一一の松の姿をみてはゐないし、靜か

な冬の土もみてはゐない。雜木林もみてはゐない。ただ私はさあつといふ音を聞いたのである。そこで私は立ちとまつた。この時私の感じたものは、この冬山の全體である。この冬山はあるもの、存在するものではなくて、この冬山のあるべきもの、この冬山となるべきものである。ここにあるのは當然なる冬山である。しかも私が立ちとまるに隨つて、おのづから年古りて茂れる赤松の枝、赤松の幹、そして幹に流れてゐる樹脂、細かい葉をもれて來る冬の日光、日のあたつてゐる所は黃にそして陰は紫にみゆる道の土、それから黃が樺色にうつつて行く變化、細細と枝をまじへた雜木の群。それ等が漸く見えてくる。雜木林の外郭が日光の中で、あたたかにほぐれて柔かい鼠色になつてゐるのもみえる。最後にこの冬山の上に、底まで澄みとほつた、靑い大空がある。枯れ草か心もち赤くみえる。そして枝をとぶ四十雀の姿もふと眼にとまる。この冬山で動いてゐるのは、この四十雀の數羽である。かう見て來て更にはじめにきいたさあつといふ音を耳の底にきく。枯草と山の土の日にかはく、輕い香もする。さあつといふのは、風の音でもなく、そして林の光でもなく、枯草の香でもなく、全山をつつんでゐる日光でもない。ただその全部が集中してくる澄み徹つたものの感である。この冬山で當然なるものは、このさあつといふ音である。さあつといふ音は、單純でありながら、全部を覆ひ、あらゆる細部となり得るものである。最初に感じたものは、當然なるものである。そして最後に感じたものも、この當然なるものであ

る。この最初にあり、且最後に至つてますます完全なるものは、當然なるものである。これを東洋の畫道と書道では骨法とよんでゐる。

九

ここでこの場合に內容と形式といふ概念を適用する。內容といふのはこの冬山の松や雜木や土や日光や空である。形式といふのは當然なるもの、卽ちさあつといふ音である。そこでこの內容を第一內容と名づけ、この形式を第一形式と名づける。しかも第一內容と第一形式とは決して別物ではない。基礎をなすものと、その基礎をなすものの展開とである。基礎をなすものが形式であり、その展開、卽ちその存在の形が內容である。そしてこの內容と形式とが完全なる展開の形で統一せられた時、之を對象性と呼ぶ。對象性とは、對象の中に當然なるものの實現をみるのである。對象を骨法の展開として見るのが對象性である。第一內容と第一形式との一致が對象性である。ここで觀る働は一度その解決に達する。そしてこの解決は更に第二の解決に向はねばならない。これが描く働である。描く働とはこの對象性を內容とし、繪之具或は言葉を形式とした統一作用である。この對象性は第二內容であり、繪之具或は言語は第二形式である。

先の觀る働では、第一形式が展開して第一內容となつたのに、この描く働では、第二內容が展

開して第二形式となつたのである。この兩者は關係が逆である。されば言葉や文字や繪之具や線は決して單なる形ではない。この形あつて、はじめて內容をみるのである。觀る働はここにはじめて完結して、色や線や言葉の中に結晶するのである。卽ち作品の中に結晶するのである。さきの萩岡流家元某氏の觀る働は、その觀る態度の中に結晶してゐる。吾等はその態度を通じて、その人の觀る働に觀入るのである。色や言葉を外にして、觀る働はあらはれない。そこで第一形式が、第二形式となる働が、寫生の働である。寫生とは第一の形式、卽ち當然なるものが、形體の中に展開するのである。この寫生の成績が制作である。ここに於いて觀る働は、描く働を通じて一先づその解決に達する。

けれどもこれは決して最後の解決ではない。その作品は更に讀者に或は觀者に呼びかける。鑑賞者はこの作品によびかけられて、鑑賞者自身の解決に導かれる。鑑賞者はこの作品の指導によつて、自己の解決をなすのである。そして鑑賞者の無限なると共に、この解決も亦無限である。故に藝術は永久の生命を有するのである。

そこではじめにさゝあつゝと言ふ音に感じた冬山の當然は、作品化されて來て、ここに「空山」といふ一つの解決に達する。そしてこの「空山」の意味は、當初の當然の中には未だ有せざりしものである。有すべきものであり、且有せざるべからざりしものではあるが、猶未だ有せざりしも

のである。それが觀る働と寫す働との深化によつて、はじめて明晰な形として取り出される。すべては「空山」の中に結晶したのである。そしてこれが文の形象である。

十

形式が內容化せられ、內容化せられたものが更に形式化せられる。このことは、先づ存する全體的なるものが、更に細かく明かなる全體、緊密なる全體となることを意味する。この働の全部が寫生である。故にこの形式の形式化は、解決の深さを示すものであり、この深さに於いて個性はますます個性となると共に、それはますます次にくる人人に呼びかける。個性はここに個性なるが故に、一層普遍性を得るのである。

故に寫生とは寫生する人に對しても、形式の形式化であり、之を味ふ人に對しても、亦形式の形式化である。されば寫生は無限の形式の形式化である。

十一

かかる形式の形式化の結果は、可成り特色のあるものとなる。されば倪雲林は、自分の描く竹は、胸中の逸氣を寫したものであるといつてゐる。この「胸中の逸氣」とは、當然なるものであ

り、「成竹」とは、當然なるものの構成である。故に對象性は、第一內容に比して、可成り特異なる面目を有するものなることが知られる。

白井華陽は「畫乘要略」で、圓山應擧が沈南蘋の鶯が梅にとまつてゐる畫を批評したことを記してゐる。鶯が大きくて樹が大變に短かい。この缺點は小さい畫面に樹全體を描くからである。鶯は四五寸だのに、樹は三尺迄ない。こんな譯はないといつてゐる。之に對して安西雲烟は、「近世名家書畫談」において、

經營位置は、作家の尤も肝要とする所なれども、繪事の大旨は骨法用筆にあり。全幅の布局に於いて間然する所なければ即ち經營位置の成れる也。數算に拘り相當するに至りては、圖に成りて畫に非ず。專ら寫眞を以つて畫とするものは、眞の畫を知るとすべからす。……夫れ圓山氏の畫を作る。用意苦心のある所、頗る古人に反す。……人物翎毛、毫釐の長短を誤らず、以つて畫道の妙處と爲す。

といつてゐる。畫面の重ずる處は、部分比例の正確さでなくて、骨法の正確さである。即ち當然なるものの正しさである。骨法が正しければ、畫面の部分比例の如きは末であるとするのである。そして寫生の旨とする處、またここにある。

然るに高山樗牛氏は、この關係を理解し得なかつたので、「應擧は近世寫生の一生面を開きて畫界の一雄鎭たり。而して其の時流に容れられざること尙ほ是の如し」と「日本畫の過去及び將來」

と言つてゐる。「日本美術史稿」も亦同一である。氏は寫生を以つて當然なるものの展開だとは考へず、ただ第一內容に第二形式の結合した形であると考へてゐるのである。

これに比べれば正岡子規氏は、寫生の深まることによつて生ずる變形についての、深い理解があつた。鳥羽僧正の「鳥獸戲畫」を評して、これには少しも俗氣がなく、成心がない。それのみか實に眞をつかんでゐて、解剖學的にも正確である。これは寫生だからであるといつてゐる。「鳥獸戲畫」さへも、之を寫生と見てゐるのである。そして文晁の畫については、文晁は七福神や如意寶珠の樣なものをかいても俗であるが、華山の方は女郎や雲助をかいても品がある。これは華山の人品が高かかつたせいであるが、また寫生によつて描いたためである。應擧の山水は流石にうまいが、どこかに俗氣が漂つてゐる。寫生がいたらぬ爲であらうと言つてゐる。華山の畫、鳥羽僧正の畫を、寫生の至れるものとし、應擧の畫を寫生の至らざるものとするのは、たしかに卓越した見識である。普通の見方では、華山はしばらくとして、應擧は寫生の至れる處に價値を置き、鳥羽僧正は寫生などてんで捨ててしまつて、最初から顧みない處に、その價値があると見てゐるのである。しかしこの見方には私は賛成する事が出來ない。應擧は寫生の不十分なもの、鳥羽僧正は僧生の至れるものと信じてゐた。正岡子規氏に夙にこの批評あるを知つて、ひそかに心强く思ふのである。

子規氏が應擧や文晁の俗氣がどこから來るかを、精しく論じてゐないのは實に殘念であるが、蓋しこの二氏は當然なるものの展開に立たなかつたからであらう。應擧の畫に古法なしと稱せらるるのは、この展開の不十分を示すものである。子規氏が、寫生が出來ずして精神が加へられるであらうかと言つてゐるのでもしられる。俗氣とは精神の加へられぬ缺點をいふのである。精神が加へられるといふのは、觀る働に於いては第一形式の形式化の完全に行はれる事であるし、描く働に於いては、第二形式の形式化の完全に行はれることである。應擧や文晁に俗氣があるとはこの二重の形式化の不十分を意味する事に外ならない。卽ち形式の形式化の不十分であり、寫生の不十分である。故に寫生の外に精神を出し得る道はないのである。

故に湯垕の「畫論」に、

梅を畫く、之を梅を寫すといひ、竹を畫く、之を竹を寫すといひ、蘭を畫く、之を蘭を寫すといふは何ぞや。蓋し花の至りて淸きもの、之を畫くには、當に意を以つて寫すべし。形似に非ざるのみ。

といつてゐる。意を以つて畫くの意味も亦、形式の形式化の意味に外ならない。

また惲南田が「甌香館畫跋」の中で、

虞美人草はこれ卉の極麗なるものなり。その花に光あり。態あり。韻あり。綽約便娟、風に因りて拂舞し、乍ち低く、乍ち揚り、語るが如く、笑ふが如し。予の作るものは、能く工なるも、輙ち似る能はず。似るも輙ち佳なる能はざるを見

る。蓋し色、光、態、韻は形似の外にあり。故に之を得るもの鮮きなり。此の種の研色、余甚だ之を畏れ、携へて吳門の山齋にあり。新涼人に快き時、始めて爲に筆を拈る。未だ識らず、色、光、韻、態に於いて、ほぼ得るありや否やを。

色、光、態、韻等が形似の外にあるとは、第一內容の外にあるもの、卽ち第一形式の中にあるものなることを言ふのである。よく寫生の消息を示してゐる。

十二

しかも觀る働と描く働との、直接なる心證からいへば、形式の形式化は、形式の形式化としてあらはれずして、己を空くして、一意專心自然に沈潛し、自然に學ぶといふことにある。それはロダンがエレンケイ女史に語つた言葉の通りである。

年の若かつた時には、私は自然を支配し、匡正するのは藝術家の機能であると信じてゐました。といふのは、まだ自然を知らない時には、自然を匡正するのは、自分の天賦であると信じがちなものですから。年をとるにつれて、私はますます熱情的に自然を愛するやうになり、また自然が正しさを持つてゐることが、ますます明かに見えて來ました。自然を會得しようと學ぶより外はありません。私達が常により明かに自然を啓き現はさうといそしむ時に、私達はますます發見することが出來るのです。私達の眼が一度自然の無盡藏なことに開かれ、さうして自然をその眞理の中に再現しようとする外に、努め求むるところがないならば、私達は私達の天賦の涸渇を怖れることはありません。美は在るのです。存在する一切の中にあるのです。

故に寫生とは、自然に忠實なるべしの一語に盡き、自然に忠實なれとは、形式の形式化の意であ

るし、その全體は觀る働の深化にあることを知るのである。そして寫生の深まると共に、自らなる形象の變形も行はれ、その變形の中で一層强く鮮かに當然なるものの姿を見得るのである。「塚も動け」と「奥の細道」の詩人をして詠はしめ、「妹が門見ん、靡けこの山」と「萬葉」の詩人をして詠はしめたものは、何れも誇張ではなくて、深化に基く變形である。そこに强く迫る力を感ずる。ここに至つて初めて寫生は極るものと言はねばならぬ。

第二章　眞　實

一

島木赤彦先生は、「歌道小見」及び「萬葉集の鑑賞及び其批評」中で寫生を以つて歌の大道とせられて居る。それに係らずまた「併し乍ら、吾吾の感情は時あつて具象的にのみは働かない。若くは具象的に働いても、夫れが必ずしも具象的表現法を取ると限らない。左樣な場合は歌に於て少かるべきであるが、少いことを以て少いものの價値を蔑にすることは出來ぬ」と「短歌に於ける主觀の表現」中では論ぜられて居る。若し寫生歌外にかかる概念も亦認められ得るとすると、「少いことを以つて少いものの價値を蔑にすることは出來ぬ」のであるから、先生の寫生道は、同時に他にも價値ある道を認めた事となる。隨つて寫生の價値は相對的なるものとなるのである。歌の道に二つあり、一つは寫生の道であり、一つは概念の道である。その數は甚だ少いが、しかし概念歌の價値を棄てる事は出來ないとされてゐる。そこで先生の認められた價値ある概念歌が

如何なるものであるか、そして寫生との關係が如何なるものであるかを吟味して見たいのが、この考察の目的である。

この目的の爲に、先づ藝術上の眞が如何なる意味を有つかといふことを考へたい。眞には二の姿がある。その第一は鏡像の如き眞である。藝術の作品が、鏡の映像の樣に、そのまゝに對象を寫したと見られる場合である。もし之が林檎の畫であるならば、その畫の題材となつた林檎と、かかれた畫とを並べて置いて、それを一つの鏡にうつしてみる。この時兩者が寸分違はぬ形になつて鏡に映つるならば、この林檎の靜物畫は眞だとされる。故に色づけ寫眞の成績が之を代表する。而して寫生とは作品の上に眞を求むる態度である。しからばこの鏡像の如き眞を求むることが、寫生となるであらうか。これに就いて先生は旣に早く明治四十一年五月「アカネ」に「寫生趣味について」を載せられて、「客觀的描寫と云つても只事物の並列ではない。必ず作者の性格の溶化せられた特殊の趣味を備へたものである」と言つて、寫生は作者の個性によつてそれぞれ特殊の面目を持つたものであり、「庭上見る所の一草一木と雖も、昨の見る所と、今の見る所と觀察に於て寸毫の差異なきは、己に其人趣味の停滯を意味して居らねばならぬ」のであるとして、鏡像の樣に、今日も昨日も同じものを映して居ては、寫生とは言はれぬことを明かにしてゐる。寫生には、平面以上のもの、卽ち深さがなくてはならぬからである。故にその姿は

我等の歌の寫生に卽くを嗤ふ者あり。鴨を一羽の鳥と思ふの徒なり。芒を一本の草なりと思ふの徒なり。我等秋毫も關心する所なし。（アララギ編輯便　一）

我等は只事象より深く澄み入らんことを希ふがゆゑに、益益深く事象の微動に觸入せんとするなり。我等の寫生斯の如きのみ。（同）

である。個體は個體として終るものではない。個體はそれ以上の深さを持つてゐる。そしてその個物に深く澄み入る働が寫生であると言ふのが先生の意見である。故に鏡像は寫生ではなくて、寫生の不完全なるものである。鏡像の眞は、藝術上の眞としては不完全なるものである。その眞は博物學的の眞であり、その寫生は博物學的の寫生であつて、藝術としての寫生ではない。

然らば第二の眞とは如何なるものであるか。これはその姿に於いては、鏡像と異つて居る。この眞は對象と直接に相應ずることを必要缺くべからざる性質とはして居ない。林檎の畫は林檎の寫眞と寸分たがはぬことが第一の性質ではない。同時に林檎の寫眞から全く離れ去つて、火鉢と見えたり、帽子と見えたりすることをも亦、必要の性質としては居ない。その形體は自然を基礎として居ればよいのであつて、自然を直寫して居るのではない。倪雲林が自分の描く竹は胸中の逸氣を寫したものである。似てゐるか居ないか、葉が繁つて居るか居ないか、枝が曲つてゐるか居ないかといふ事を、自然の竹と比較しようとは思はない。「或は塗抹之を久しくて、他人視て以

つて麻となし、蘆となすも、僕も亦强辯して竹となす能はず」（淸閟閣遺稿）と言つてゐる。自然を離れることを當然とし、「いささか以つて胸中の逸氣を寫すのみ」と言つてゐる。胸中の逸氣を寫すのが目的であつて、自然界の竹を寫すことを目的として居ない。故にその竹は麻と見えたり、蘆と見えたりしても、少しも差支ない。それはやはり倪雲林の依然たる竹である。故に蘇東坡はまた畫を論ずるのに、形似の巧拙を以つてする樣では、その見識は兒童の範圍を出でないものだと言つて居る。かくの如く形似を捨てて行くことを以つて、其の畫をますます畫たらしめる所以であると考へてゐるのである。この故に東洋畫は、形似を捨てれば捨てる程、ますます純粹になり得るものであると考へられ、「氣韻生動」は、形似を捨てねば得られぬものの樣に考へられて居る。卽ち鏡像の位置から脫しなくてはならぬと考へられて居る。

それならば蘇東坡は畫をかくのに如何なる心掛けを以つてしたのであらうか。「先づ成竹を胸中に得、筆を執りて熟視し、其の畫かんと欲する所の者を見て、急に起ちて之に從ふ」と言つて居る。ここで注意すべきは、胸中に得た「成竹」の何であるかといふことである。これは第一に自然界にある竹卽ち生竹とは異つてゐる。もし同一ならばその畫竹は生竹と似る筈であつて、形似を重ずることになる。形似を重ずるのは兒童の見識の如くに低愚なものであると言ふのであるから、形似ではない。成竹とは自ら別のものでなくてはならぬ。倪雲林がその畫竹は麻や蘆の如く

見えても平氣であるといふ所から見ると、これ亦同じく生竹と異るものである。どこが異るか。蓋し胸中の逸氣を寫すのみといふその逸氣を寫したから異るのであらう。然らば彼の畫竹には逸氣があるから生竹と異るのであつて、東坡の「成竹」は、此處に於いて「逸氣ある成竹」の意味なることが知られる。畫面形體は、鏡像形體でなくて、胸中の逸氣を有する形體なることが知られる。然らば逸氣とは何か。逸氣とは常然化の傾向である。故に成竹とは作者によつて十分に當然化せられた生竹の形體である。換言すれば成竹は自然の形體が、作者の形式化によつて發展した形體である。かかる形體なるが故に、「鴨を一羽の鳥と思」ひ「芒を一本の草なりと思」ふのは誤である。其れ等は生鳥以上のもの、生芒以上のものである。以上といひ得るのは、一事象より深く澄み入つた」一消息を示すからである。

かかる形體は自然を準據として、深く澄み入つたものであるから、その成績を以つて、その出發たりし自然と比較すれば、必ずしもそこには正しい一致を得ないのである。鏡像にあつては、胸中の逸氣などの加はることなしに、その對象を示してゐるのであるから、對象と作品とは、直接且緊密に相應ずる。然るに發展形體たる作品を、その出發となつた未發展の對象と比較して、その間に一致を見出さうとするのは、既に無理なことである。對象は發展の準據となつたことを示すのみであり、作品は對象の一層深まつた形を示すのみである。故に兩者の間には一致がある

のでなくて、發展がある。この發展ある故に、作品を創作と言ひ得るのであり、同一の理由によつて寫眞は截然として寫生から切り離されるのである。

二

隨つて藝術上の眞とは、對象が作品の基礎となつて居る事を示す意味である。對象に卽してそれを形式に發展せしめた意味である。故に之は作者自身から言へば他人の見た自然でなくて、飽くまで自分を凝視した自然である。藝術上の寫生であるか否かを區別するには、その作品を自然と並置して比較しても無意味であつて、自然が凝視されたか否かを見なくてはならぬ。成竹は凝視の結果である。さればその成竹には彼の見たる、また彼ならずしては見得ざる自然がある。昨日も今日も同じき自然、甲にも乙にも同じき自然ではない。昨日も今日も同じく、また甲にも乙にも同じき自然は、これ博物學上の自然であつて、藝術上の自然ではない。之と反對に胸中の逸氣があつては、並びにまた成竹であつては、植物學とはならぬ。しかし其がなくては藝術の作品とはならない。作品は自然に對する作者の態度と要求とを示してゐる。寫生とは平面鏡の如き公平を示す鏡でなくて、態度と要求とによつて彎曲した曲面を有する鏡である。そしてこの曲面の中で、他の面ではみられぬ作者の眞實を見るのである。胸中の逸氣とはその眞實化を內觀したも

のである。故にシルレルは「美は最も十分なる意味に於ける眞なり」と言つたのである。

されば作品は自然の摸倣ではない。自然は藝術に對して素材を供給するのみであつて、藝術の性質を左右し、その作品を決定するものではない。林檎を描くよりも、和氣淸麿を描いた方が、作品として價値が上だとは言へぬ。天の岩戸の前の水たまりに泳いでゐた蛙の子をかくのも、勇力絶倫なる天手力男神をかくのも、それだけの事では、作品の價値に變化は無い。

作品は素材の摸寫ではないから、素材の價値がそのままでは作品の價値とはならない。作品の價値は素材では決定されない。如何となれば作品の有する形體は單なる映像でなくて、ある個人によつて形成されたものであり、そこにその形體は意味ある形體となつてゐる。卽ち創造せられたる形體となつて居るからである。故に作品は一方に於いて自然の摸寫と見られると共に、卽ち自然の眞意と見らるると共に、自然の虛僞としても見らるる所以である。「畫そらごと」とはこの意味である。「古今著聞集」に鳥羽僧正と繪かきの寺法師との問答を書いてゐる。

同僧正のもとに繪かく寺法師ありけり。餘りに好く習ひければ、後ざまには僧正の筆をも恥ぢざりけり。此事を僧正ねたましくも思はれけん、如何にもして失を見出さんと思ひ給ふ所に、或時件の僧、人のいさかひして、腰刀にて突合ひたるを書いて、自愛して居たりけるを、僧正見給ふに、その突きたる刀、背中へ拳ながら出たりけり。よき失と思ひてのたまひけるは「和僧が繪書、永く止むべし。如何なるものか、人を突くに拳ながら背へ出づる事あるべき。柄口まで突きたるなどするこそ、いかめしき事には云ふを、これはあるべくもなき事なり。かく程の心ばせにては、繪書くべからず」と云

はれければ、此僧かいかしこまりて、「其事にて候。これは繪の故實に候なり」といふを、僧正云はせも果てず、「和法師が繪の故實、片腹いたし」と云はれけるを少しも事ともせず、「さも候はず。古き上手共の書いて候おそくづの繪など御覽も候へ。その物の寸法は分に過ぎて大に書いて候こと、いかでか實にはさは候べき。ありのままの寸法に書いて候はば、見所なきものに候ゆゑに、繪そら事とは申事にて候。君の遊ばされて候物の中にも、かかる事は多くこそ候らめ」と、くりおかず言ひければ、僧正理に折れて、言ふことなかりけり。

この寺僧が刀と共に拳の背にとほつた畫を描いたのは、これ胸中の逸氣である。おそくづの畫の大形描寫も亦胸中の逸氣である。すべて「調子」といふこと、特に調子の强めらるるといふことは、自然をそのままに摸倣することではない。かへつて自分の價値を以つて獨立する事である。かかる價値によつて作品は吾等に情感をもたらすのであるから、作品の與へる情感も亦、作品の素材の有するものではない。更に深さと連り、更に確かさと連つてゐる。卽ち壓力を有ち、啓示に連つてゐる。換言すればその情感は著しい緊張を有つてゐるのである。かかる緊張は、自然そのものから得られるのではなくて、創造せられたる形體、卽ち意味ある形體より生じ來るのである。もし自然よりして直にかかる情感を得る人があつても、それは自然そのままのものから受けるのではなくて、自然の發展形體、卽ち藝術形體を創作して、その創作形體から得てゐるのである。博物學的形體は遂にかかる緊張せる形體とはなり難いのである。

三

以上の如くにして、自然と作品との間には著しい差違がある。今此處に最も精密に描かれたる一つの風景畫を取つて、それをその畫因となつた自然と比較する。畫面は如何によく描かれてあつても、その精細さに於いて遙かに自然には及ばない。樹木の數、葉の數、苔の數、土砂の數の如き、何れも自然の有する數を盡し難い。特に遠い山の一一の木や岩を描くことは、其の無意味さに耐へられない。特に前景であつてもその葉裏の蟲の卵や、幹の背後の苔の如くに、廻らねば見得ぬ姿は描かれない。次に畫面はその色の活活した生彩を描き難い。太陽の光、土の色。水の色をそのままには描き難い。更に土の香や、風の音や、流れ去り流れ來る水の運動を描くことは望むことさへ既に不可能である。第三に風景ではその中を前後左右に歩み得るのに、畫面には其の幅と奥行との深さがない。第四にその風景中からかかる畫面を選び取つたのは、これは全く自然が示したものではなくて、作者の自由決定である。此等の點から見て、畫は終に自然とは同一でもなく、同一になり得るものでもなく、また同一ならん事を望みもしない。この事は文學に於いても亦同一である。さればカントが「自然は同時に藝術と見ゆる時に美である。藝術はその藝術たる事が吾等に意識せられながら、しかも吾等にとつて自然と見ゆる時にのみ、美と呼ばれ

る」といつたのは、容易に承認せらるる事である。作品の示す眞は、眞なりとせらるると共に、眞ならずとせらるる性質である。作品を素材に比較すると、それは素材の眞を傳へると共に、素材の眞以上のものを傳へてゐる。隨つて作品は自然の眞に卽くと共に、眞以上のものを具へるのである。かかる眞が藝術の眞である。かくて藝術の眞は自然に卽くと共に自然から離れる。卽くが故に離れる。離れるが故に卽く。ゲエテが「吾人を生活より最も完全に遊離せしむるものが藝術なると共に、吾人を生活に最も緊密に結合させるものもまた藝術である」と言つたのは、蓋しこの意味である。

現實とは、吾等に具體的に活き活きと働きかける力である。吾等を最も強く且深く動かすもの程、現實性に富んだものである。而して自然の有する現實性は、藝術の有する現實性とは全く性質を異にして居る。その兩者の現實性の差は、その細部に於いても、生彩に於いても、構成に於いても、共に異つて居る。藝術には一方には「そらごと」と稱せらるる程の强調があり、他方には貧寒だと思はれる程の短少と缺乏とがある。その現實性に差異あるは必然である。故に自然の有する現實性を以つて、作品の現實性を量ることは全く無意味である。素材の現實性は實行に結合するのに、藝術の現實性は實行に結合しない。そこから藝術の深遠と永遠とが生じて來る。深くして遠きものほど存在としてたしかであり、且眞實であるから、この意味で藝術は自然よりも

確固であり、且眞實である。寫眞よりも藝術が確かなりとせらるるはこの故である。

これは藝術が自然主義的なものでなくて、理想主義的なものだからである。理想とは常に現實となりつつ、しかも遂に現實となり終る事なき傾向である。永久の現實であると共に、永久の未現實である。されば永久の實現である。作品も亦、吾等の鑑賞の中で、常に現實となりつつ、しかも現實となり切る事なき深さと遠さとを有するものである。受用により直に現實となり終り、それと共に再び現實となる力を缺く樣なものではない。そしてかかる無限性を有するのは、藝術が創造されるものだからである。自然をそのまま摸倣する事を以つて藝術とするならば、この無限性は得られぬ筈である。吾等が自然の中に汲めども盡きぬ無限の味を感ずるのは、既に自然を吾等の鑑賞の中で、藝術の形に創造して居るからである。博物學的存在たる自然には、この無限性を有しない。これが藝術は寫實主義的なものでなくて、理想主義的なものであるといふ意味である。

故に自然を以つて藝術の原理とすることは、無意味である。卽ち素材を鏡像的に直寫することを、藝術の根據とするのは無意味である。作品が鏡像として度の高い程價値があるとするのは、藝術を計るに他の標準を以つてするものである。然るに作品と素材との關係は、花を咲き實を結んだ植物と、一粒の種子との關係の樣なものである。素材は創造作用をとほして、重ねて形式化

されて居る。素材を作品と同一視するのは、この形式の形式化を認めて居ないからである。隨つて内容も形式もないものを、藝術とみると同一であり、藝術の破壞となるのである。

四

かくの如くにしてほぼ作品と素材との關係、卽ち寫生の意味は吟味し得たやうである。この吟味を豫備として、島木赤彦先生の「寫生雜記」の所說を考察してみたい。

> 客觀的描寫と言つても、只事物の並列ではない。必作者の性格に溶化せられた特殊の趣味を備へたものである。
> 客觀的作物も一種の主觀的發表である以上、又已に吾人の主觀は時時刻刻に、而かも永久に進步發達すべき活物である以上、客觀的作物は決して時期を限つて死滅し荒廢すべきものにあらずと信じたい。（寫生趣味について）

ここには三つの要點がある。第一に寫生は作者の個性によつて、それぞれ特殊の面目を持つものである。第二に寫生も亦主觀的發表である。そしてこの二つは寫生が自然そのまゝの摸寫でないといふ性質から來る。寫生がかく創作であるから、寫生は永久に發達すべき可能があるといふ第三の特色が生ずる。

> 我等の歌の寫生に卽くを嗤ふ者あり。鴨を一羽の鳥と思ふの徒なり。芒を一本の草なりと思ふの徒なり。我等秋毫も關心する所なし。
> 我等は只事象より深く澄み入らん事を冀ふ。益益深く澄み入らんことを希ふがゆゑに、益益深く事象の微動に觸入せんと

するなり。我等の寫生斯の如きのみ。

先にも引用したこの「アララギ編輯便一」には二つの要點がある。第一、個物は個物として終るものではない。第二、故に個物に深く澄み入りて、その深き消息をとらへることが可能である。この澄入の働が寫生である。そしてこの寫生の性質は、前の寫生が主觀的發表であるといふ性質と互に關係する。主觀的發表といふ事は、主觀を發表する爲に、對象を借り用ふるといふ意味ではない。對象を方便にする意味ではない。對象に卽すれば、自らにして主觀が表れる意味である。寫生の中には何等企つる所なく、その中に深く入れば、自らそこに主觀が表れる。これ個物として終るものに非ずといふ意味である。故に田邊元氏が「歌道小見をよむ」の中で、感動の姿をあらはすのに、その對象たる事象の個性的なる姿を以つてするのが寫生であると言はれたのは、同一の事實を逆の方向から見たものである。

身邊の事象日夕推移して苟且も止まらず。悲傷ここに生じ、哀樂ここに移る。淚數粒膝に至る時、我の諦念至り、我の諦念熟する時、膝なる茶碗の茶も冷ゆべし。膝なる茶碗の茶の冷ゆるは、我の諦念の作象にあらずして、我に對して、直に諦念其物の實相なり。此の意味に於て吾人の寫生と稱するもの、外的事象の描寫に非ずして、內的生命唯一眞相の捕捉也。表現也。寫生の要諦斯の如し。

主觀活動の眞相、寫生を離れて現し得る者鮮し。

寫生の念とする所、已に、外的事象の描寫に存せずして、內的生命の直接なる表現にありとすれば、寫生の捉ふる所は、

事象にして事象に非ず。事象なりと雖も、心と相觸るる事象の中核のみ。一心集中する事益益尖鋭微細にして、相觸るる事象の中核は益益尖鋭微細を來すべし。恰もレンズの焦點集中すること、一なるに至つて遂に物を燒くに足るに至るが如し。……吾人の寫生は事象を重ず。重ずと雖も、事象の中核に觸るるを重ずるのみ。(アララギ編輯便　二)

此の記に對すれば、自ら膝を正す心がする。膝の茶碗の茶の冷ゆるのは、もとより諦念の作象ではない。しかしその茶の冷ゆる事實の中に、吾の諦念は感ぜられる。吾等は直接にその冷ゆる茶の中にその諦念をみるのである。故に冷ゆる茶に對する心は、その諦念に對する心である。茶は諦念そのものである。ここに外物は直に内的生活の實相であるといふ重要な意味が生じて來る。これは先の個物は單なる個物ではないと言ふ意味と相通ずるものである。

五

然して次に主觀は必ず外物を離れては表現し得られぬかどうか。外物を離れて、主觀そのものを表現し得る場合があるか。この問題について、「寫生を離れて現し得る者鮮し」と言つて、或る少數のものは寫生を離れても猶主觀の現れうることを、言外に言つて居られる。これは蓋し後に寫生外の道による概念歌の存することを說かれるのと相應ずるのである。

寫生が内的生命の直接する事象を捉ふるにあれば、事象の中核はこれ内的生命である。「事象に

して事象に非ず」と言ふ所以である。「事象なりと雖も、心と相觸るる事象の中核のみ」と言ふ所以である。故に「一心集中す」とは「相觸るる事象の中核」に集中することである。隨つて中核が外在するのでなくて、集中點を中核と感ずるのである。大正六年九月三十日の夜の暴風雨に、夜明けまで二階の雨戸を押してゐた事を書かれて、

馬吉と予が一枚の戸を押し支へたのは、予の住せる全家屋を押し支へたのである。嵐の夜の家を押し支へるためには、一枚の戸を押すことが必要にして十分なる條件であつたのである。圓の弧の頂點を押したと言へば只夫れ丈けである。一枚の戸を押したというても只夫れ丈けの事である。夫れが一軒の家を押し支へたのであると思ふ時、一枚の戸は單に一枚の戸でなく、弧の頂點は單に弧の頂點では無くなつてしまふのである。
我我の寫生は、嵐の中の家から只一枚の戸を捉へんと念ずる。卽ち物及び現象の中核に滲み入つて、直ちにその生命を捉へんとするにあるといふことは、取りも直さず、夫れが作者自身の生命を捉へんとすることである。（草上偶語）

と言はるる所以である。事象には中核がある。寫生はこの中核を捉へるのである。換言すれば中核を視出すのである。放漫な心では、この中核を捉へること、卽ち視出すことは不可能である。緊張した心で集中した心で事象の中心を捉へねばならぬ。ここに現るる所少くして、しかも中に湛ふる所無限なる天地がひらけて來る。これは對象を無限なる意味にて滿すことであり、卽ち對象によつて、對象の中に無限なる內的生活を視且味ふことである。これが先に寫生は對象を發展せしむるものであり、寫生は對象の鏡像を作ることではない、創像を作ることであると言つた意

味である。

心深く行住に潜み、現るるの抽象ならずして具體的ならんを冀ふは、寫生歌を念とする予の基底を成す心である。現るるの露はならず、歌ふ所の具象的なるを以て、直に主觀を沒却すとなし、形骸を寫すに止まるとなすが如き異説は、今人の容易に我が寫生歌に加ふる非難であることを知つてゐる。（寫生道）

對象に深く入れば何故に作者の生命を捉へる事になるか。これは既に論じたる如く、外物は深き觀照に於いては、內生活の實相である。隨つて深く對象の事象に潛むことの要が再び明かにされる。かかる要求は例へば料理の上などにも現はれてゐる。

煮方としては支那料理は火力を利用して、隱れたる本味を引き出す事を主とするが故に汁物多く、從つて長煮主義なり、長きは三日三夜に渡り火を絕たざるものあり。長く煮るは肉を柔かにすることその目的の一なり。西洋料理は味を肉に保たしめ、外に散さぬ故に煎り物多く半煮主義なり。西洋料理の書物には、肉を煮るに一ポンドに付き十分以上煮るべからず。併し豚肉に限りて十五分間なりとあり。是可成短く煮て肉の自然の柔らかみを保たしめんの目的に外ならず。日本料理は味を肉に保存するにもあらず、又味を引き出すことを主義とするにもあらず、風味又は澁味と稱するものに好尙を持ち、料理の極致とする風ありて、汁物は長煮を好まず。支那流の本味とは少しく標準を異にするやに見ゆ。風味とは垢ぬけのしたる淸鮮味にて、感じより起る心花の妙境とも云ふべきか。（木下謙次郎氏、美味求眞）

ここに味を出すといふのは、吾が主觀の味を出すことである。對象に卽した心の味であつて、これまた支那日本西洋それぞれの寫生の味である。事象に深く潛みてその味を出す苦心を、吾等は料理道の上にも亦見得るのである。

そして日本の食べ物が、その物に即して心の味を出す點で我國の文學美術の好尙とその軌を一つにしてゐるのは、與味深いことである。この境地は、

一分一厘の表現の差を爭ふのは、感情の具象的表現が感情の的の中心に位置してゐるからである。殊に、感情の精錬せられたる或域に入つてゐるものは、感情の動いてゐるのか、ゐないのかさへも分ち難いほどの所に入つてゐるものがある子規子の歌でよく擧げられる

瓶にさす藤の花房みじかければ疊の上にとどかざりけり

などがそれである。(短歌に於ける主觀の表現)

である。形の上に動く主觀がないから、その作品は主觀を缺いてゐるといふのは、無意味である、その歌が少しも具體的でなくて、概念的であるから、寫生歌でないといふ議論の無意味なると同一である。浮動することは、あることの證據にはならない。

併し乍ら、吾吾の感情は時あつて具象的にのみは働かない。若くは具象的に働いても、夫れが必しも具象的の表現法を取ると限らない。左樣な場合は歌に於て少かるべきであるが、少いことを以て少いものの價値を蔑にすることは出來ぬ。

もの言はぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ(實朝)

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませど夫れ猶し學ぶ(宗武)

などが夫れである。これらの種類の歌も、その表現に威力が現れてゐる點に於て、何等か作者の具象的感情の根據を持つて生れて來てゐるものであることは想像出來るが、現れてゐる所は抽象的概念的である。抽象的概念的であつても、その表現に威力が出て居る限り、歌の價値は沒却出來ぬのである。(短歌に於ける主觀の表現)

此處に擧げた概念歌と言ふものは、第一にその形が抽象的概念的であること、第二に概念的ではあるが、威力を持つてゐることである。隨つてこの威力のある點から見て、この概念歌も何等か具體的な根據を持つてゐると思はれる。そしてこの威力を生ずる所以は次の如くである。

第一に表現の目的に對して、各言語の意義と一首の意義との有機的渾一である。第二に各言語の響き乃至調子と、一首の響き乃至調子との一致より來る威力である。前者は意義である。後者は意氣込みである。意義であり意氣込みであるけれども、この兩者は本質的に不可分のものである。響きであつて、意義である。意義であつて響きである。此二者は、吾人が凡べての歌に對してその價値を評量するに必要にして離るべからざる要件である。具象的表現というても、此條件に照して價値は左右せらるべきである。（短歌に於ける主觀の表現）

意義上の統一と響乃至調子上の統一とよりして威力を生ずるのであつて、具象的なるものの價値もこの意義と意氣込みとにて量らるるものである。然らば歌の價値は具體的か否かによるのでなくて、威力ありや否やによるのである。かくて威力と寫生との關係が問題となる。もし寫生によつて威力が生じないとするならば、寫生は竟に歌の根本に觸れ難いものとなる。

「歌道小見」の中で同じ問題を論じ、前の源實朝の歌について「概念を以つて歌はれた歌でありますが、その概念が一個の生き生きした命となつて我我に迫る心地がいたされます。如何にも單純で一途であります。さうして聲調に痛切な響きがあります。『あはれなるかなや』『親の子を思ふ』と八音字餘り句を重ねて重大な感じを我我に惹き起させます。それほど重大な感じの前には

『すらだにも』といふ如き稀代な弖仁波の疊すら目立たなくなるのみならず、却つて稚拙愛すべき素樸感をさへ與へます。これほどの力となつて詠み出されるといふことは、その背後に必然的に何等かの具體感が作つてゐることが想はれるのでありまして、實は、その具體感がさながら歌の上に現れてゐるのでありませう。概念の歌であつて、單なる概念の歌でないといふ心地がいたされます」と言はれ、また同一の意見を表されてゐる。

六

概念歌と寫生との關係を吟味するには、此處で一先づ先生の寫生についての意見をまとめて見ることが參考になる。「歌道小見」中の寫生の項と象徴の項と寫生雜記中の「田邊元氏の『歌道小見を讀む』について」の項とは何れも著しいものである。

私どもの心は、多く、具體的事象との接觸によつて感動を起します。感動の對象となつて心に觸れ來る事象は、その相觸るる狀態が、事象の姿であると共に、感動の姿でもあるのであります。左樣な接觸の狀態を、そのままに歌に現すことは同時に感動の狀態をそのまま歌に現すことにもなるのでありまして、この表現の道を寫生と呼んでゐます。(寫生)

此は最もよく寫生の意味を明かにしてゐる。

　第一、感動は具體的事象との接觸によりて起る。

第二、感動は感動を示すと共に事象の姿を示す。
第三、感動の姿を直寫するのが寫生である。

といふ三點に歸するのである。

象徴とは、實相觀入（この語齋藤茂吉氏用うる所）の上に、心靈の機微が自らにして現れるに至るを極致といたしませう。別言すれば、象徴の極致と寫生の極致と一致するといふことになります。さういふ域に入つた象徴歌は、露はに象徴と見えずして、象徴の意が深く内に籠ります。例へば人麿の

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる

赤人の

み吉野の象山のまの木ぬれには許多もさわぐ鳥の聲かも

湯原王の

吉野なる夏實のかはの川よどに鴨ぞ鳴くなる山かげにして

などになると、歌ふ所の境地は山であり、川であり、材料とする所は雲であり、樹木であり、鳥であるけれども、現れる所は、作者心靈の動きの機微であります。その機微が露はに現れずして、自らにして、樹木や雲や鳥の中に潛んで居ります。即ち、是等の歌にあつて、樹木は樹木でなくして作者の心靈であり、雲も鳥も雲と鳥でなくして作者の心靈そのものであります。是までに至つて、初めて象徴が高い位置に置かれるといふ心地がいたされます。……我我の歌は、象徴を目がけるといふやうなことをせずとも、一心を集中して寫生してゐれば、入るべき時に自らにして象徴に入りませう。（象徴）

故に象徴とは對象の姿の中に、作者の内生活があらはれ、作者の内生活と對象とが全く一致して

新しい一形態を創始してゐることである。換言すれば當然によつて對象の貫かれた形である。象徴にはもと二つの形がある。第一は約束によつて結合される形と意味との關係である。この結合は理知である。約束である。吾等の直觀の中に現れる形ではない。故にこれは比喩である。比喩は謎であつて、文學ではない。故に先生が「比喩の歌を以て象徴の歌とするものがあります。必しも違つては居りません。只比喩歌を以て高い意味の象徴となし得る場合は、比喩歌に生きた歌の少い如く少いであらうと思ひます」（象徴）と言はれる所以である。先生の象徴歌はかかる意味ではない。第二の象徴の意味である。第二の象徴とは、形と意味とが約束によらず、理知によらず、直觀の中で直接に一致してゐるのである。作者心靈の動きの機微が、「露はに現れずして、自らにして樹木や雲や鳥の中に潛んで居る」ものであつて、「樹木は樹木でなくして作者の心靈であり、雲も鳥も雲と鳥でなくして作者の心靈である」ものを指してゐる。意味の中に形を見、形の中に意味をみるのである。寫生とは感動の姿を直寫するものであり、その感動は自己の感動を示すと共に、事象の姿を示すものであるから、象徴の意味と自らにして同一である。象徴と寫生とは同一であるが、ただ寫生はそれが作られる働についていひ、象徴はその作られた成績についていふのである。その差は視點の差であり、視點の差であるから互に之をずらす事が出來、これをずらせば兩者は互に一致するのである。されば「一心を集中して寫生してゐれば、入るべき時に

自らにして象徴に入りませう」と言はるる所以である。

寫生は必ずしも今目に見てゐるもの、耳に聴いてゐるもの、體に觸れてゐるものを歌ふことには限らない。否寧ろそれの經驗が或る根强さを以つて保存せられて、更に表現の衝動を伴ふ時に如實に内心に結象せられる。結象せられるけれども、その結象は決して目で見たもの耳で聞いたもの體に觸れたものと同じくはない。寫生が接近を忌むといふのはこの爲であつて、實在と藝術と互に獨立し得るも亦この爲である。この獨立性は寫生によつて究極し得ると思はれるのであつて、その極まる所の或る場合に、全然形から離れた概念的なものへ踏み入ることもあるのであつて、左樣な概念歌は寫生歌と言ひ得ざるも、寫生歌と同じ系統の上にあるものであつて、藝術としての威力を有ち得る點に於て寫生歌に異らないこと、「歌道小見」中概念歌の所で言及した。寫生道から生れた概念歌であるから熱と力と眞實性とから離れないのである。（田邊元氏の「歌道小見を讀む」について）

ここに於いて寫生に於ける貯藏性と、變容性と變容に伴ふ概念化と、寫生の非接近性と、寫生に於ける獨立性との問題を解いてゐられる。

第一、寫生となる經驗は貯藏せられたものである。

第二、貯藏せられた經驗が結晶する時、最初の經驗は變容せられる。

第三、がその變容の究極に於いては、全然具體形を離脱して、概念形となる概念化が行はれる。

第四、故にこの概念形は、寫生の系統中にある。

第五、かく變容するが故に、寫生はその經驗の博物學的原形を保存する寫實或は摸寫とは同一でない。

第六、かくて藝術の作れる藝術形體は、經驗の因緣たる實在と、その價値を異にしてゐる。故に藝術は自然より獨立に存在し、獨立性を得る。

ここに寫生の意義は一層明になつて來たのである。而してこの經驗變容の原理は、藝術形體は自然の直寫でなくて、その發展した形體であると言ふ意味と同一である。變容しただけでは無價値である。價値を增加してはじめて、その形體は獨立性を得るのである。

七

この場合を少しく吟味する必要がある。作品の素材が、其の形で自然界に存在してゐる單純性對象の場合がある。また全く其の形では自然界に存在しない複雜性對象の場合がある。前者は雲であつたり木であつたりする場合であるが、後者は龍であつたり地獄であつたりする場合である。單純性對象の變容は、對象Nが直觀せられて、貯藏せらるる中にN′N″の如き更に新らしき直觀內容が加はり複雜豐富となつて來るものである。これはNの直觀をみても、既に自然のNとは異つてゐるが、それにその後豐富な直觀內容の加つた點で、一層Nとは異つてゐる。異つては居

るが、この作品はＮの發展であるから、依然として、Ｎの寫生である。そしてこれがＮの發展であるといふことは、必ずしも作品の形がＮよりも複雜精密であるといふ意味ではない。Ｎに基く現實性が生き生きとして保存せられ、作品の中心をなして居るといふ意味である。實現性の有無が寫生か非寫生かの區別の指標となるのである。「威力」とはこの實現性の緊張して迫り來る迫力の謂であらう。隨つて如何に自然に之と對應するものがあつても、實現性を有しない場合には、寫生とは言ひ難い。威力なきものは、寫生とは言ひ得ないのである。

後の場合、卽ち自然中に之と對應する對象を見出し難い場合はどうであるか。その例として龍の形體をとるに、龍の形體は蓋しそのはじめに於いては、蛇に對する直觀であつて、それが角や爪や鱗や其他の部分が、その他の直觀の中で發展し分化して來たものであらう。その形體は自然中には全く對應するものなくとも、例へば陳所翁の龍の如きは、その威力と緊張とによつて、其の存在を信ぜしめる。博物學的に存在しないといふことは、藝術的に存在しないことではない。隨つてそれが博物學的には誤であることを信じつつも、猶且それが存在すべきことを藝術的には肯定する。これも藝術の當然性の一種である。例へば「羽衣」の天人は、科學的知識としては肯定し得ないにも係らず、それを能として、日常觸目の事柄よりも以上に、切實なる存在として感ずると同一である。これを眞とする心は、また龍をも眞とする心である。科學上の眞とは別な根

據で之を眞と言ひ得ることとは、前述の通りである。故に博物學的に存在しない形體でも、その故を以つて直に非存在といふ事は出來ない。感情の上で當然とみられるならば、吾等はこれを何の躊躇もなく、藝術上の眞として感ずるのである。「日は西の山に落ちた」と言ふ直觀を、吾等は決して虛僞とは感じないのである。しかして複雜性の藝術構成にあたつて、常にその中心となるものは、何等かの單純性對象である。それを支點とするのでなくては、複雜性對象は、統一を保持し難い。此處にまた「美味求眞」の記載を引用する。

若し原生品の存在するあらば定めて佳味なるべけれども、多くは種切れとなり、比較的近代に農產物の內へ組入れられたる獨活、芹、山芋、百合、椎茸等の如きものの數十種が、野生のものとして存續するのみ。……同種類の農產物に比較すれば、外形の貧弱なるに係らず、香味に付ては比較を絶する程にすぐれたるは凡て人の知る處なり。現に西洋の注意深き園藝家は、バラの花の色と大小を改良するに從つて、其の香が段段減ずることに氣付きて、外容と內容の兩全を保ち得る方法に苦心しつつありといふ。

この香氣こそ自然の中にあるものである。第一に內生活は必ず外象に依據するを要し、且依據せざるべからずといふこと、第二にその依據する外象を藝術形體とする事が、內生活を活き活きと現すといふ事になる。自然によるものでなくては、香氣を有しないからである。されば單純性對象であつても、複雜性對象であつても、共にその香氣と威力とを有するものを、寫生とする。有せざるものを寫生を缺くもの、卽ち藝術上の眞を失ふものとするのである。故に藝術上の眞と

は、今や威力を有するや否やによつて定まるのである。換言すれば活き活きとして人に迫り來る力を有するや否やによつて定まるのである。

これ迄の先生の寫生論を要約すれば、次の如くである。

1、寫生は作者の特色ある內生活を示すものであるから、對象その儘の寫實ではない。

2、寫生の働は對象に深く潜み入つて、切實なる形體を作る働である。故にこの形體は感動の姿である。

3、感動は具體的事象との接觸によりて起るものであつて、感動は感動その者を示すと共に、感動せる者と感動の依據せる事象との姿をも示してゐる。そして寫生は對象の博物學的形態を直寫せずして、感動の姿を直寫するのである。

4、かくて外物は直に內生活の姿であるから、これを形體とする藝術の形體は象徵である。卽ち寫生の極は自らにして象徵となるのである。

5、其處に藝術としての威力を生ずる。

6、されば事象を離れては、內生活は表現し難い。

故にこの系として、

a、事象に深く潜む事を要す。

b、それを具象形で表す事を要す。

c、概念歌を排す。

これで先生の寫生に對する意見は明かである。田邊元氏が「歌道小見を讀む」で、先生の寫生論を評せられた中、次の如き部分は、よくこの點を明かにしてゐる。

我我の體驗は何等かの對象に對する體驗である。志向する所の對象なき體驗はあり得ない。體驗に純一に沈潛するのは、對象の個性を離れたる抽象的なる體驗に沈潛する事ではない。必ず一あつて二なき獨特の個性を有する對象に對して志向する體驗に沈潛することでなければならぬ。外に表現を求むる內なるものは、常に具體的なる對象を含む志向的體驗である。而して具體的なる志向的體驗は一般に直觀的なる表徵を終局的の基礎として、それに對する主觀の態度を高次の體驗ともいふべき感情に於いて動的に發展せしむることに成立する。意志といふことはこの感情が自然的に表現を求めて、直觀的表象の內容を變化せしむる過程に外ならない。卽ちそれは感情の具體的發展であつて、體驗の自己還元的過程を統一するものである。創作も明かにこの意味に於いて、意志の作用に屬する。否寧ろ一般に創作が意志の本質であるといふべきであらう。而してこの過程は直觀的なる表徵を基として、之より發し、更に飜つて新らしき直觀的表象を生ずるものとして之に還る。この圓環過程に意識の表現性が成立つ。意識の具體的本質が意志にあり、

それは藝術の創作を典型とする表現作用であると考へらるるのもこれが爲である。而してこれは直觀的表象から出て之に還るものであるから、この意味に於いては表象は意識の始をなし、又終をなすものであるともいはれる。感情といふのはこの表現の方向を示す意識の活動の機に相當する狀態であつて、それは必ず特定の表象を基とし、又特定の表象をその表現の方向として指すのである。具體的なる感情は必ず特定の直觀的表象を基とし、更に一定の表象に向ふ傾向を含み、それに由つて個性化せられた內容を持つのである。藝術が感情の表現であるといふのも、かかる個性的なる感情の自己表現であるといふ意味でなければならぬ。感動の姿をあらはすに、その對象たる事象の個性的なる姿を以つてするのが寫生である。これが田邊氏の意見であつて、寫生の基く所を詳かにしてゐる。

八

されば寫生歌を重ずる態度からは、概念歌を排しなくてはならぬのであるから、此處に問題は再び概念歌の問題にかへらねばならぬ。

6、感動は貯藏せられ、變容せられる。その變容の極に於いて、概念形をとる。しかもその概念形は、中に寫生衝動即ち具體形の衝動を有してゐるから、この概念形は依然として

寫生の系統である。

而してその變容は第一に自然であればよい。その變形が自然なりと認めらるるならばよい。第二にその變容形が、最初の對象と直接に相應ずることを主とするものでなくて、その立つ所以が同一であると信ぜらるればよいのである。

實朝は庭前に犬が己の子を愛する姿をみてゐる。承元二年三月十五日なら三月十五日に、鎌倉の邸の庭で、親犬がその子を愛してゐる具體的な形、經驗のままの形でその感動を表現する。これが寫生であることには疑ひない。それと同時に、その親犬の愛の中に、今迄常に見知つて來た様様の獸の親の愛が加へられて、そしてもつと一般的な、即ち概念的な「もの言はぬよもの獸」の歌となつてもよい。そこには實朝の感動が直接の形で現れてゐる。今迄貯藏せられた經驗が姿をあらはして、それ等の經驗の總和として、概念形の歌が生じたのである。故にここに永き蓄積の誠が緊張して現れて來てゐる。具體的なる感動が結晶して一つの法則的概括的なるものとなつても、しかもその結晶の中には、かかる變容を生じない以前の感動が、そのまま保存せられて居る。そして更に廣汎な感動が姿を現すのである。故にそこには具體的ならぬ形體があり、しかも具體的な感が伴はれる。然らばこの感力即ち具體感の故に是等の歌をも亦、寫生歌と言ひ得るではないか。即ち複雑性對象の場合における寫生と言ひ得るではないか。

かくて概念歌は貯藏による變容によつて、先の經驗を保存し、それを威力によつて表現するのである。「意義」と「意氣込」とは、決して空には生じない。直接經驗によつてのみ生ずる。卽ち寫生によつて生ずる。されば逆に威力はその直接經驗の存在を明示する形である。威力ある所に活きた經驗が存在するのである。

九

文學の上で具體の意味には自ら二つある。一つは文學形體の上の具體であり、他の一つは文學意味の上の具體である。吾等が文學から受ける具體感は、據る所がこの二つである。概念に於いても亦同一である。今この關係から次の四つの形が作られる。

1、具體的形體　　具體的意味
2、具體的形體　　概念的意味
3、概念的形體　　具體的意味
4、概念的形體　　概念的意味

1が具體感を有することは疑ない。之を今寫實的寫生歌と呼ぶとすれば、2は寫實的概念歌である。これには具體感がない。故に寫生的な外貌を有しつつ、空しき概念に過ぎない。博物學的な

繪畫や記載は之に屬する。そして普通寫生歌と稱せられるのはこの二者である。しかし1は寫生であるが、2は概念である。3はあらはれた形では一般的概念的であるが、具體的意味を有するために、活き活きした具體感を有つてゐる。これは概念的寫生歌である。前述の實朝宗武の歌の如きが之である。4は全く概念の歌であつて、名僧知識といはれてゐる宗教家特に禪僧などが、この種の歌を多く供給してゐる。全く概念的概念歌である。普通に概念歌といはるるのは3 4の兩者であるが、その中3は寫生歌であり、4は概念歌である。

されば吾等が寫生歌と稱し得るものは、第一種は形の上でも意味の上でも具體的であること、卽ち1、第二種は形の上では具體的でないが、意味の上で具體的であるもの、卽ち3である。そしてこの第一第二に通じて共有せらるる性質は、意味が具體的であるといふ點である。概念歌も亦同一であつて、第一種は形の上でも意味の上でも共に概念的なるもの、卽ち4、第二種は形の上では具體的で、意味の上では概念的なもの、卽ち2であつて、兩者通有の性質は意味が抽象的な點にある。

十

この吟味にして誤がないとすれば、寫生とは現れた形でなくて、現れんとする傾向、卽ち具體

的ならんとする意向にあるのである。如何に現されたかでなくて、如何に現れ出でんとするかにある。もしこの意向を缺く時は、それが如何に具體的に書かれてあつても、直に概念となり終る事、2の如くである。然して具體的ならんとする意向は、感動の姿の中に最もよく保有せられ、感動はその集中の極に於いて、威力の一點に集中する。威力の一點に集中すれば、既に其の何によりて感動したるかは、說明的には明かでなくても、しかも吾等に迫つてそれを根强く動かす力卽ち具體性、現實性がある。かくてその形として現されたるものが如何に概念的であつても、それは活き活きとして吾等に迫つて來るのである。然らばこれは觀照の世界に於いて、明かに寫生歌である。

かくの如く考察して來ると、先生が概念歌にしてしかも威力ありといはれた歌は、精しく言へば寫生歌に屬するものであり、且寫生集中の極を示したるものである。例へば先生の「太虛集」中

冬と思ふ空のいろ深しこれの世に淸らかにして人は終らむ（長子政彥の逝きしは十二月十八日なりき）

ひとつ日のもとにありとし思ひつついく年久にわれはたのまむ（齋藤茂吉西歐に向ふ）

の如き歌は何れも、この概念的寫生歌に屬するものである。そして澄みに澄む心の自らにして到る所は、形に非ずしてしかも形と感ぜらるる境地である。芭蕉の句に於いて、その形をひたして

ゐる。背後の澄みとほりて深きものは、既に形と言ふべからざるものであつて、しかも刻刻に形をとるものである。藝術の深さとは、この形ならざるものが、刻刻に形を取り來る面目を指すものに外ならぬ。

對象の中核に觸れるといふことは、對象に感動する事に外ならない。最も强く最も深しと感ぜらるる感動が、その對象の中核と感ぜらるるのである。されば中核は個人個人で差異がある。幾何學的中心、物理學的重心は各一つであるが、觀照の對象たるものの中心は、個人差を持つてゐる。そして深く潜むとは、最も深き感動によつて、中核に觸るることである。感動を切實にする事である。そしてこの感動の集中が威力であるから、威力とは再びもとの感動を觀照の中で復活せしむる力である。卽ち文學の具象性、現實性に外ならない。故に藝術上で概念歌と言はるべきは、この威力を有せざるものの謂でなくてはならぬ。隨つて先生が先に概念歌といはれたものはこの意味で、完全に寫生歌である。創作過程からみて寫生でなく、作品の成績からみて象徴でないものは、もとより寫生でないと共に、藝術でもない。藝術と言はるる爲には、寫生であると共に象徴でなくてはならぬ。寫生でもなく象徴でもないとは、結局藝術でないといふことと同じ意味である。

寫實形のものを寫生歌とよぶのに疑はないが、概念形のものをも、何故に寫生とよぶか。寫生

とはもともと態度の問題である。作者の態度とは、作者の經驗に對する感動であり、その感動は作品に直接してゐる。故に感動の色調と陰影とをそのままその作品は持つて居、威力となつて觀照の世界で活きて働くのである。威力が重要である。形體が具體であるか概念であるかは、左程重要ではない。其の作品の與へる感が、現實性を有するか否かが重要である。これが藝術をして藝術たらしむる性質であるから、之を缺けば、藝術たる性質を消失する。故に藝術たらんが爲には、感動を基礎としなくてはならぬし、感動を基礎とする態度は寫生であり、感動を威力として感ずるのは觀照である。かくの如く感動を中心とする以上は、これを寫生と呼ぶのが適當である。且寫生の語は藝術の初期より、究極まで、それぞれ包含し得て便宜である。外容の異るものでも、寫生の展開のそれぞれの階級中に攝取し得るが故に、この語は捨て難いものである。

次に寫生を對象摸倣、卽ち寫眞の意味と區別しつつ、しかもその區別に一見ふさはしく見ゆる寫意の語を用ひぬのは何故であるか。第一に寫實とは對象の摸倣である。しかるに寫實の進むと共に、對象の形は勿論、更にその形を成立たしめた背景や、基礎をも寫實しなくてはならぬ。對象の行動を寫實するならば、その行動をおこさしめた心意、卽ち行爲者の性格をも寫實しなくてはならぬ。次にはその寫實しつつある作者の態度、見地もその中に何時か入つて來るのを拒否することが出來ない。かくの如くにして對象の全體並びに作者の性格をも加へて、之を寫實する事

は、寫實といふ普通の意味では、深く且廣すぎる。寫實といへば、對象の形體摸倣の意味である。かかる寫實の意味が何時か、更に高い寫實の意味となつて來てゐる。即ち寫生となつて來て居る。故に寫實の深化は必然に寫生となるのである。隨つて寫生といふ語は、それが出發に於いて寫實に立てる意味を示すと共に、寫實が如何に深まり得るものなるかをも示してゐる。然るに寫意といふ語は、形體から分離した意味、即ち形體を輕んじた感銘を意味する。寫意は形體を感銘の單なる一方便であり、一因緣であるかの如くに、輕く考へやすい。或は形體を輕蔑し且除去すればする程、意味は自由になり深まり得るが如くにも考へられやすい。かかる誤解は形體と意味との關係を偶然と見る事から起るのである。形體から離るることは、作品を藝術たらしめぬ事であり、「意」をも併せて失はしむる事である。故に寫意といふ語は、藝術にその頽廢と誤謬とを誘致しやすい。故に今之を採らない。寫生の語は寫實と寫意との間にあつて、最も具體的に制作の消息を示してゐる。換言すれば寫眞と法則との間にあつて、藝術を示してゐる。故に寫實或は寫意の如きかたよつた語を用ひずして、寫生といふ一般的なる語を用ひねばならぬ。

かくの如くして、今や概念形と見らるるものに三種ある。第一は具體的に生き生きと働きかける力のない空き概念形であり、第二は概念形らしからず、むしろ寫生形らしくて、しかも概念に外ならぬものである。是等は共に藝術の範圍外のものである。然るに第三は形體には何等具體的

なる形、即ち寫實形體を示さずして、しかも具體感を以つて活き活きと働きかけるものである。これは藝術の範圍中に入るべき概念形であつて、前二者と全く生因を異にして居る。概念形でありながら、しかも概念形ではなく、寫生の働の究極を示したものである。故にかかる概念形の存在を明瞭にする事は、はじめに寫生以外に、更に一つの價値ある別種の道のあるが如くに見えた混亂を除去する。即ち概念にして猶且一つの價値ある道を、寫生以外に別立し得るかの如くに見えた誤を訂正する。はじめ概念とみえたものは、此處に完全に寫生の大道中にあるものと認められ、隨つて寫生の道のみが、唯一の道なりと確認せらるるに到つたのである。

第三章　言葉の幅とその定位

一

尋常小學校の國語教科書に「大蛇たいぢ」の課がある。この課を學校で習つて來て、私の子供は私に、この話の眞僞を尋ねた。背中に杉檜の樣な大木が生えてゐる大蛇が不思議に思はれるのかと思つたら、さうではない。怪物だといふから、そんな大きな蛇もあつたかもしれないから不思議はない。ただ不思議なのは、その大變な怪物をずたずたに切つたといふ點である。子供はチランノサウルス等といふ樣な前世期の兩棲動物を考へてゐるから、昔のことではあり、まだそんな大蛇も居たのであらうと思つてゐる。ただ素盞鳴命は一本の刀で、谿峽八つにわたる程の大蛇をずたずたに切つた。一つ二つに切り離すことは出來たとしても、ずたずたに切つたのが不思議だといふのである。「教授原案、讀方と綴方」にはかう書いてある。

ある人はこれを「この現實離れのしてある所に詩趣があるので、之を考證だてして理窟詰めに吟味してしまうと此の味は

全くなくなります」と言つてゐる。しかしこれは吾等成人の考へることである。現實離れのしてゐる處に詩趣があるといふならば、これはこの程度の子供に對しては、不適當の教材である。この現實離れのしてゐる處に詩趣をみつける様になるのには、もつと上級になつて、或は中學生位になつて來なくてはならぬ。神話が神話として面白いのは、それが虚僞であるからではなくて、それを非常に珍らしくて、しかも非常な眞實だと感ずるからである。

そこでまた、

「神話に對してほんとですかと聞く兒童がある。さういふ時には大昔の話でこんな風に本に書いてある。恐ろしい賊をこんなに思つたのであらう位にいつて置けばよいと思ふ」といつてゐる人もある。しかしそれでは生徒の切實な疑惑を解くことは出來ない。生徒のかういふ探求心を、ごまかして通つては、生徒を重ずることにはなりにくい。且その昔の本にかいてあるこの事が、本當かどうかと問ひかへされるとこんどは、それを輕くそらしてしまふ譯にはゆかないのである。

然らばこの問題は如何に解釋すべきであるか。これは一方に於いて虚僞であり、この點は既に兒童自らも氣がついてゐる。しかし同時に之を虚僞であると言ひきることは困難である。その中には眞實として、兒童の心に直接に訴へるものがあるからである。卽ち一方には虚僞であり、他方には眞實である。

而してこの問題は、産出と被産出との關係を考へれば自然に理解せられる。吾等が本質と呼ぶのは、過去を成り立たしむると共に、また未來をも成り立たしむるものの意味である。卽ち過去

に於いて然りしと共に、未來に於いても亦然るべきものの意味である。故に本質は、過去におけ
る產出であつたと共に、未來に於いてもまた產出するものでなくてはならぬ。過去より未來にわ
たつての絕えざる產出でなくてはならぬ。されば本質とは常に產出するものの意味である。產出
の絕えざる持續である。卽ち產出の無限の傾向である。產出の當然である。隨つて被產出を觀る
ことによつて、吾等は產出するものを知り得る。卽ち本質を知り得る。被產出は產出するものを
語るからである。被產出は產出者の當然だからである。產出の當然を考へれば、被產出の樣狀を
知り得るのみならず、被產出を考へるには常に產出の樣狀を考へなくては、之を明かにすること
が不可能である。故に被產出を考へるのに、これを產出によつてすること、產出を考へるのに、
被產出を以つてすることが、本質による考へ方である。產出と被產出とを連續せる體系として考
へることによつて、はじめて被產出が理解せられる。

ここに於いて文章は、その中に必ずその文章を書く働をふくんで居る。故に文章を書く働に卽
して、文章を讀まなくてはならぬ。讀みが、文意を重ずる所以である。文章は被產出である。こ
の被產出を產出の展開とみること、卽ち產出と被產出とを一貫した系統として見ることが、讀み
の力である。

故に「在るがまま」とは、その實、それをしてあらしめたものに基くが故に、「在るべきまま」

である。存在は必ずそれの悉く、あらしむるものの連續として見られなくてはならぬ。されば「在るがまま」にみんとする努力は、「在るべき」ものを見る處まで進まなくてはならぬ。「在るべきまま」に見る處まで進むのである。隨つて「現實」とは單に、今あるものに止らず、それをしてあらしめしもの、卽ちあるべきものをふくむのである。卽ち在るべきものと在るものとの一致である。故に本質は一つの可能狀態である。決して事物そのものを可能ならしむる條件でもなければ、また原因でもない。可能狀態が産出によつて被産出となることである。この故に本質とは單なる存在でなくて當然による存在である。本質とは當然による被産出である。被産出によりて産出を觀、産出によりて被産出を觀るものである。かかる態度、卽ち本質的態度から見れば、産出と被産出とは同一である。かく産出と被産出とを同一とみるのが、象徵的な觀方である。

精神現象は、ブレンタノによれば、現象中に意味をふくむことである。對象に意味の內在を見ることである。對象を意味化することである。對象はもとより吾等の作れる被産出物のみとは限られない。自然の萬象は多く吾等の産出せるものではない。しかしその對象の中に、意味をみるならば、對象はその人に對しては被産出物である。これが對象を當然化する働であつて、東洋で

はこの働を「敬」をとして言ひあらはしてゐる。自然に對してこの考が立ち得るならば、文章に於いては言ふ迄もない。

この態度から「大蛇たいぢ」は解釋せられなくてはならぬ。故に「教授原案、讀方と綴方」は之に對して、

教師は神話から、その神話に對して生徒に眞實をうたがはせる樣な心を摘發する態度を避くべきであるが、生徒から自發的にさういふ疑が生じたならば、教師はそれを通して生徒の要求を認め、生徒をして討究せしめ、その神話の中から眞實性を求むることに誘導し、この神話が示す勇氣、愛、知の三つの眞實性を發見せしめたい。これを生徒自身の問題として考へしめればよい。生徒が之を以つてすべて虛僞とするならば、そしてその虛僞の故に興味を失ふならば、ここに於いて初めて神話の提出をもつと下級にするか、上級にするかの問題が切實に生じてくる。

と言つてゐる。この眞實性を發見せしむるには、これを單なる被產出物として見ず、產出卽ち被產出としての展開とみるのでなくてはならない。旣に作り終られたるものと見ずして、作らるるものとして見るべきである。被產出の中から、產出を見出すことによつて、はじめて眞實性が發見されるのである。文の眞實は、文意に見出すの外はない。文意とは要するに產出を言ふに外ならぬからである。

これを綴方の方面に向ければ推敲が生ずる。推敲とは、自己の文章を、常に產出の關係に於い

てみることである。卽ち被産出たる文章を、産出の立場から見なほし書きなほすことの繼續である。

もと言葉は被産出物である。故に言葉をば常に産出關係、卽ち語らんとする要求に基いてみなくてはならぬ。換言すれば言葉になるべき當然の立場からみなくてはならぬ。然るにこれを單に被産出物としてのみ取扱へば、卽ち産出の關係から剝離して取扱へば、これは完全に符號となつて來る。完全なる道具となつてくる。故に道具を先づ與へて、それから語らせるのが一般の順序であるかの如くに考へやすい。しかし言語が語られる前に、言葉を語るべき要求がある。言葉をおぼへることとそのことが、既に言葉をかたらうとする要求におくれてゐる。子供は、三歳にして語らうとする。しかしそれが語る言語となるものは一二であつて、大部分は意味をなさない音の連續である。私の家の滿二歳の女の子が、私が學校からかへつてゆくと「それからねえ」とはつきりいふ。それにつづけて、何かしきりに語るけれども、あとはわからない。語らんとする要求は完全であるが、まだそれは言葉にまで展開してゐないのである。けれどもその不可解な音の連續の間に、だんだんに理解せらるべき言葉があらはれて、ある場合には意味が通じてくる。この女の子もやがてそれを理解せらるる言葉の系統として産出し得る時がくるであらう。故に言葉を知り得て語るのでなくて、語らんとして言葉を知り得るのである。語らんとする要求なき處、産

出せんとする要求なき所には、言葉の習得さへもあり得ないのである。描かんとする要求があつてはじめて描く働が出てくる。

二

被産出物たる言葉が、産出の要求に基礎づけられてゐるならば、言葉を理解するためには、産出の立場に立たなくてはならぬ。産出の立場に立つて、はじめてその言葉は理解せられる。東京日暮里の七面坂の某店では、その店頭に「ないものはない」と大書してゐる。無いものは無いとは、一體何を意味してゐるか。言葉そのものとしては、無いものは無く有るもののみあることを言ひあらはしてゐるに相違ない。しかしかかる理解では、決して吾等を滿足せしめない。更に進んでその言葉の語らんとする處のものを理解せしめんとする。そこに廣告としての效果も生ずるのである。おそらく店主のねらつてゐる處も亦そこにあるに相違ない。この標語は次の如く兩樣に解釋せられる。

第一、この店には如何なる商品でも無いといふものはなく、すべてが完備してゐる。即ち商品一として備らざるものなしといふ意味。

第二、この店には、有る物だけがあつて、無いものは無いのである。即ち商品はすべてを完

備してゐるのではないといふ意味。

而してこの二つの意味は正反對である。店の様子をみると、萬物全備の百貨店ではなくて、比較的派手派手しくない靴店である。この店の様子から考へると、この店主の意向は、おそらくその何れの意味でもなくて、次の意味であるらしい。

第三、この店は表面萬般の商品を完備せざるが如くに見えるが、靴に關しては一切を完備してゐるつもりである。ただそれだからといつて、やはりないものは無いのであるから有るものを買つてほしい。

これでは第一の意味を要求として持ち、第二の意味を事實として持つてゐるのである。ここに店主が自己の店舗に對する要求と實現との態度をみることが出來る。かかる多義なる語を、一つの意味に確定するのは、讀みの力である。

私はここにも一つの例をあげる。それは數年前の秋のことである。上野で美術展覽會をみて、そこで久しぶりにあつた友達と山下の一茶店に茶のみによつた。丁度そこはすいてゐて、私達の前に二人の青年がゐるばかりである。紺飛白の羽織と着物とを着た堅實な青年である。その青年の一人の言葉がひよつと聞えた。

「靜物を食はないか」

といふのである。そして卓上の林檎を取り上げた。すると外の青年も「うん」と輕くうなづいて、また林檎を取り上げた。この時私はこの言葉に二つの意味が感ぜられた。

第一、林檎を靜物といふのは、今日の展覽會のどの畫も、靜物とあるものは、何れも申し合せた樣に、林檎とバナナであることを諷刺する意味。

第二、林檎の一名を美術の方では靜物と言ふのだと思ひこんで、それを正直に言つてゐる意味。

この二つを決定するのには、その語る人の、卽ち產出の態度による外はない。この青年達は田舍の靑年である。決して第一の如くに都會風の氣のきいたことが言へる靑年ではない。田舍らしい朴實な青年である。そしてそれが眞顏で笑もせずに言はれてゐる。故に諷刺でなくて、確信である。林檎は靜物と言はれるといふ確信である。これはその一般的な態度からも、それを言ひ終つた後の態度からも、またそれを理解する對者の態度からも、私は少しも第一の意味を見出さなかつた。この二つの間の幅を、一つに決定するものは、その語る働にある。產出の働にある。產出の働によつて同一の言語が全然相違せる意味としてあらはれる。

「論語」の泰伯第八にある有名な句

子曰く、民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず。

は、二つの解釋が可能である。

一、民をして命に從はしめよ。その理由を理解せしむるな。

この解釋によれば、無上絶對命令として從はしめよ、民は愚ならしめよといふ政策的の立場である。故にこの「べし」或は「べからず」は命令である。

二、民をして命に從はしむる事は可能である。しかしその理由を一一理解せしむる事は不可能である。

この解釋によれば强壓的に服從せしむる事は可能である。けれども一一その理由を理解せしめて、理解によつて行動せしむることは困難であるといふ、教育の微力を嘆く立場をとつてゐるのである。故にこの「べし」或は「べからず」は可能、不可能の意味である。

而してこの兩者は共に文法的には可能である。隨つてこの語の眞意は、孔子の語らんとする働に依據しなくてはならぬ。換言すれば「べし」の被産出を解釋するものは、その産出の働でなくてはならぬ。故にこの二解釋中何れが正しいかを定めるには、孔子の産出の働を見なくてはならぬ。孔子は教育を重じ、教育を使命とした人で、教へて倦まざりし人である。故に孔子は民に對

するに、强壓的態度をとり之を强要することを正當だとしてはゐない。のみならず民をして知らしめず、民をして愚ならしむることを望む譯はない。民をして理解の上に立ちて、進んで事をせんことを望んだのである。しかし敎育の設備十分ならず、その及び得る範圍の狹少なる時代にあつては、敎育の與へ得る理解力は、到底政治の强制力に及ばない。孔子の嘆はここにあつたのである。民に對する政事的强制力の大に比べて、敎育の與へ得る理解力の甚だ弱少なるを嘆いたのである。民をして愚ならしめんとしたのではなくて、民をして賢ならしめんとするも、その不可能なるを嘆いたのである。これは政事的强壓力を主張する語ではなくて、敎育的理解力を與へ得ることの難きを嘆いた語である。敎育家としての立場を語る語である。隨つて孔子のこの語に對する解釋は、孔子の產出作用に立つ際、之を第二の意味、敎育の可能限界の認識の意味に解すべきである。

今玆に「さう」といふ言葉がある。「さう」のはじめに力を入れる時には、「さう」だといふ肯定の意味を表す。然るにその語の終に力を入れる時には、「さうではない」といふ、全否定の意味を表す樣になるのである。それに表情が伴つてくると、その肯定否定の兩者に同情を附加したり、嫌惡を附加したりする。そして靜かにとどまつて言ふ場合には、反省の意味になる。更に「さうか

しら」といふ疑、「さうでしたか」といふ驚、その樣樣の心の働きを示してゐる。かくの如く肯定から否定に及ぶひろい幅の上で、同情、嫌惡、反省、疑惑、驚愕等の各種の段階を通つて來るのであるから、この「さう」といふ一語は、人間生活のほとんどすべての精神生活の側面を示すものと言ひ得るのである。

ここにまた「奴」といふ如き言葉がある。この言葉の意味は、一般には價値少きものを呼ぶのであるから、この言葉には輕蔑或は憎惡の意味を持つてゐる。然るにこの言葉が、自分の可愛ゆき者に對しても用ひられる。そしてそれが擴大せられて、心安い者同志の談話にも、度度あらはれて來る。さればこの言葉にも亦、輕蔑、憎惡の意味と共に、是等と正反對なる親愛の意味があつて、この幅も可成り廣いのである。

かくの如くに言葉そのものの幅が廣いといふことは、それだけ言葉が論理的に不確定であり、曖昧であることを示すものではあるまいか。一言が一意のみを表すならば、言葉の意味は明確である。然るに言葉がかくの如くに漠然たるものであつては、言葉によつては意味が通じ難いではないか。卽ち言葉を明かにするためには、出來る限り、言葉の幅を限定し、狹少にして來なくて

はならないのではないか。この言葉の幅を限定するものは、産出である。言葉なる被産出は、この被産出の基礎たる産出によつて定位される。この廣い幅のある言葉が、今何を意味するかは、言葉そのものの吟味では決定出來ない。卽ち辭書的或は文法的には決定出來ない。これを決定するものは産出の狀態である。その時その時の意味は、産出の方向がこれを決定する。こんなに廣い幅を持つから、言葉の論理的意味は不明である筈なのに、産出の傾向が之を決定するから、そこでかへつて狹少な幅の言葉では示し得なかつた言葉の明暗と陰影とがあらはれる。幅は依然として幅であつて、しかもこの幅が一つに決定し集中する所に、産出の味がある。細かい心の起伏が明瞭に表示される。

故に言葉の意味は、今ある言葉の形を現すだけではない。今の存在の狀態、卽ち被産出の狀態と共に、かかる存在をとるに到つた産出の働をもあらはすのである。言葉の意味を解釋するとは、存在の言葉、被産出の言葉を、傾向の言葉、産出の言葉に化して行く働である。卽ち在るものと在らんとするものとの一致である。象徵の上にある。在るものを表すと共に、それをして在らしめしもの、在らしめつつあるもの、並びに將來に於いても常に在らしむるものを象徵といふのである。故に言葉は象徵でありて、道具ではない。道具はそれが産出をふくむこと勿論であるが、道具としての價値は、それが如何にあるかで決定せられる。存在によつて決定せられる。そ

の道具が如何に使用されても、誰に使用されても、それは存在で決定されて、幅は著しく狭少である。産出狀態、傾向狀態とは連關することがない。

言葉が斯樣に極端から極端の意味をあらはすことは、決して道具や符號の持ち得る性質ではない。道具や符號も被產出物であつて、これが產出の過程から考へられなくてはならぬこと勿論であるが、その被產出物の持つ性質の幅は狹少である。隨つて之を狹少にし、集中せしむることは、道具や符號には重要でない。符號の符號たる性質は、それが唯一つの意味だけを表す點にある。符號が多義であつては、符號としての確かさがない。符號も道具もそれが狹少で結晶してゐる處に存在の價値がある。この故に道具や符號にあつては、產出は限定として働いてゐる。定位の姿をとつて働いてゐる。定位の姿の確かなもの程、道具は銳く、符號は確かである。限定し盡し、確定し終つたものが被產出として存するのである。道具や符號を使ふ働は、その確定し限定したものを、そのまゝの形で使へばよい。しかるに言葉は產出の狀態に應じて幅を有つてゐる。その幅のある言葉を、確かなものに定位するのが語る働であり、同時に聞く働である。語り或は聞くとは、幅を限定する働である。幅なきものを、そのまゝに使ふのとは、自ら相違する。幅あるものを幅なく用ふるのである。

先づ内に育てられたものが、外にあらはれて形となるといふ點では、被產出物は正に同一である。育まれた時の面影が必然にその形の中にも、その有つ意味の中にも保たれてゐることは、同一である。道具は尖鋭に定位せられ、言語は緩漫に定位せられてゐる。それを尖鋭のまゝに使ふのは道具と符號であるし、尖鋭化して使ふのは言葉である。これが兩者の相違である。道具はそのまゝ使ひうるやうに作られ、言葉は更に之を規定してでなくては使はれぬ樣に作られてゐる。道具は直接に使用に結合するが、言語は使用する爲には、(重ねて)規定せられなくてはならぬ。言語は語る人によつて再び規定することを要求する。道具がただ一回の產出である時に、言語を語り或は聞くことは、產出の產出である。重ねられたる產出である。ここに言葉の未決定性卽ち可變性がある。道具もともとより使用前においては、之を磨いで鋭くしなくてはならぬのであるから、また一つの規定である。この點に於いて道具も言語の作用と變らぬではないかといふ異論が出る。しかし道具が尖鋭なるべき事は、これ道具の存在樣態であつて、それが遲鈍になつたのは道具としての頽廢である。之をもとの形にするのは、道具の使用を規定したのではなくて、先づ道具たるべき性質を規定したことである。道具の使用の問題でなくて、使用さるべき道具の問題である。言語に於いて、その發音が正され語脈が正されるのと同一である。語ることとその事ではない。語る前の事情である。言語そのもの卽ち被產出としての形の產出である。この點以後を比

較しなくてはならぬ。

三

言語はかく幅の廣いものであつて、産出に産出を重ねねばならぬものである。随つてここには産出の力が特に大きい。そこで産出は時に言葉としてではなくて、身振りや表情にも現れる。むしろ表情や身振りは言語の一層原始形である。表情や身振はもつと未決定であり、言葉よりも更に産出を重ねねばならぬからである。かくて原始的な言葉ほど未決定である。これはまだ言葉の組織そのものとして、獨立し得るまでに精しく分化してゐないからである。卽ち産出が萠芽的である。然し現さんとする要求が複雜になればなる程、言葉の産出が精緻になる。この點で言葉は漸次に尖鋭になつて來る。然らば言葉はいつか尖鋭になり盡して、道具となり符號となり終る時があるであらうか。

限定性の最も大きいと思はれるもの、卽ち尖鋭性の大きいものは、名辭である。そこで花といふ語をとつてみる。花には櫻もあり、梅もあり、百合もあり、桔梗もある。「花」は花ならざる他の葉や岩や犬から自己を區別し限定するが、その中に花によつて示さるるすべてをふくんでゐ

る。花の概念のふくむもの一切を、「花」の言葉の中にふくんでゐる。この關係は花を更に狹少にして「櫻花」といふ言葉をとつても同樣に殘る。數十種の櫻の種類をふくむと共に、隣の櫻の花があり、去年の櫻の花があり、上野の櫻の花がある。故に名辭の中で最も限定性のあるのは、普通名辭その他ではなくて、固有名辭である。固有名辭は言葉の中で最も限定性を有し、隨つて尖銳性を有する。しかし固有名辭は言葉の中のほんの一部であつて、他の凡ては未決定性の中にあつて、それが再び決定せらるることを要求してゐる。即ち定位を要求してゐる。故に言葉は道具になり終ることはない。

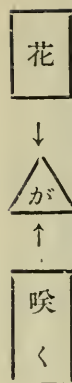
言葉の最初の時期にあつては、主辭と賓辭とは直接に接續して構成せられてゐた。「花咲く」の如くである。「花咲く」とは、力の中心たる「花」が、その力の產出としての「咲く」を發生したのである。花の中にあつた當然が、咲くとして產出せられたのである。しかし花が、咲くに向つて展開する場合に、それを更に精しく見れば、

花が咲く。　　花は咲く。　　花も咲く。

花に咲く。　　花と咲く。　　花さへ咲く。

其他樣樣ある。產出が一層精細を求めて來ると共に、「花咲く」だけでは、不滿足である。花は

咲くに向つて産出すると共に、「咲く」を更に完全に花に還元しようとする。花の産出は、ここに於いてまた「咲く」の産出を刺戟する。しかも「咲く」の産出はもと花の産出に基くものであるから、その「花」と「咲く」との兩者の産出は、一つの系統的展開をなして來るのである。咲くに對しては産出であるが、花に對しては産出の産出である。ここに於いて、この第二の産出は「花」と「咲く」とにさしはさまれ、「花」と「咲く」との兩者に直接する。これが「てには」である。第一の「が」をとつて、「が」と「花」との關係について考へてみる。「花咲く」では、ここに咲いてゐるのは花である、花が咲いたのであるといふ程の漠然とした認識である。それが認識の分化によつて、ここに咲いてゐるものは花であり、花以外の何者でもないと言ふ展開になれば、その被産出は「が」である。しかしこの判別作用は、「は」程に大ではない。次に之を「咲く」の關係についてみれば、「が」は咲く働を花に向つて還元せしめる。咲く働の定立に向つて展開するのである。

「花」は存在である。しかし「花」といふ言葉はその當然として次の展開に向つてゐる。「咲く」も存在である。この「咲く」といふ言葉もその當然として、「花」の方に向つて展開しようとしてゐる。その當然と當然との定位の上にあらはるるのが、「が」である。

ここに「花」と「咲く」とは一つの系統となる。この系統の統一點は「が」である。かくて「が」はこの「花が咲く」の文の形象となるのである。されば日本語の中で最も重要な位置をしめるのは、「てには」である。かかる位置にあるために、その發達もおくれてゐ、「が」の如きは、足利時代の發生だといはれてゐる。子供にあつても、「てには」は最後になつてはじめて言葉にあらはれてゐる。

かくの如くして、花の中に、又咲くの中に漠然とふくまれてゐたものが、明瞭にあらはれて、そこに「が」が産出する。無から生じた有でもなく、他から附加された混入でもなく、また偶然に兩者を結びつけた接合でもない。「が」によつて花の産出は一層明瞭になり、咲くの産出は集中する。他のものを撤去して、花自身をいよいよ鮮明にし、咲く働をいよいよ集中せしむる働を考へてみると、この鮮明と集中とは、「が」に集中してゐることを知り得る。故にこの意味に於いて「が」はこの文の象徴である。象徴とは産出と被産出とを一致せる點からみるもの、即ち産出即被産出たらしむるものである。換言すれば存在を當然化するのである。當然の働の中で所在を定位

するのである。かく考へれば、文の形象は主辭と賓辭とにみらるるよりも、「てには」にみられなくてはならぬ。「が」は「文法」の考へる如く、外部から附加せられたものでなく、内部から發生したものに外ならない。だから島崎藤村氏の、「文章を正すのは、心を正すのである」といふ言葉には、非常に深い意味がある。

四

日本の言葉の中で、最も未決定であり、限定を要求するものは「てには」である。故に言葉の幅を考へるには、先づこれを考へなくてはならぬ。そして限定の要求の最も大きいといふ事は、それはこの被産出を考へねばならぬことを示すものである。故に言葉の幅の廣いことは、それだけ言葉の象徴的性質の豐かなことを示すのである。その例として「や」をとつてみる。

「奥の細道」にある二つの句

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

よもすがら秋風きくや裏の山

についてみるに、蟬の聲の句は、

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて殊に清閑の地也。一見すべきよし人人のすすむるによりて、尾花澤

よりとつてかへし、其の間七里斗也。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院に扉を閉て物音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて、佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ。

とあるのであるから、この句の生じた事情は明瞭である。杉木立の中で蟬がないてゐる。その中に苔の間からしみ出る泉がある。岩もぬれてゐる。蟬の聲がそのぬれてゐる岩にしみ入る。これがこの句の景觀である。そして「や」は非常な重壓を以つて、その蟬聲岩に徹る思を定位してゐる。卽ち內省してこれを體驗の形でしみこませるのである。よもすがらの句は、次の事情によりて生じてゐる。

曾良は腹を病みて伊勢の國長島と云ふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

ゆきゆきてたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書き置きたり。行くものの悲しみ、殘るもののうらみ、隻鳬のわかれて雲にまよふが如し。予も又

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺に泊りて、

よもすがら秋風きくや裏の山

と殘す。一夜の隔、千里に同じ。

終夜秋風が裏山を吹いてゐる。その秋風をきいてゐれば、わかれて來た師の事が思ひ出さるるのである。「や」にはここにも前の句と同樣に、內省せるものが、體驗の形でしみ入る深さがある。

然らば「や」は常にかかる性質を有するのである。「や」が意味しうる可能性は、可成り幅の廣いものである。

一、「有りや」の如く、疑惑の下において內省する性質。

二、「三郎や」の如く、對者に向つて呼びかける性質。

三、「赤や白や色色の花がある」の如く、存在を重ねて行く性質。

四、「行かざらんや」の如く、言ふ處を一擧にして飜へして、斷然たる決定を示す性質。

故に「や」がその當然として實現し得るものは、疑惑と認定と最高度の肯定との三つの段階にわたつてゐる。疑惑はもとより認定の不活潑、躊躇である。然るに「や」は、この疑惑から、卽ち認定の不活潑或は躊躇から、認定に入り、或は普通の肯定ではなし得ない、最高度の肯定をなしてゐる。疑惑と最高度の肯定との間の幅は、人間認識の全範圍にわたるものである。認定をうたがはねばならぬものが、如何にして認定の斷然たる認定、何者も之を妨ぐること能はざる高度の認定をなし得たのであらうか。これは人間の認識としては困難である。この困難をあへてしてゐるのが「や」である。疑惑ならば認定ではない。認定ならば疑惑ではない。この論理的性質を容易に破棄する非論理性の上に成立してゐるのは「や」である。

もし產出がかかる矛盾を容易に超越するならば、その被產出物は最も不確定なる、そして最も

高度なる幅を有たねばならない。疑惑と共に最高の肯定を有つことは、同時には成立し得ない。この幅を背後に有しつつ、ある一點に集中しなくてはならない。卽ち幅あるものの決定である。幅を有しつつ、幅なからんとする決定である。かく幅あるものを幅なきにいたらしむる決定は、不確實なる確實、不安定なる安定である。その意は論理的には把持しがたきが如くにしてしかも、情感の上の把持は明かである。ここに先にあげた「奥の細道」の兩句の「や」を生ずる。疑惑から低度の肯定をとほつて、高度の肯定にいたる論理は、これ否定による肯定である。この肯定こそ「や」の全幅の論理である。しかしこれは同時にその幅の全部を反省し、深むる重壓を有する。最高の肯定でも猶、最低の肯定をすて得ないものがある。ここに感慨がある。感嘆はかくて成立する。うたがひを持ちながら肯定する。肯定しながら猶疑を捨て得ない。その幅の間を振動しつつ、しかもそれを正しく定位する。幅の廣いもの程振動多く、振動の多いもの程定位も複雜である。かかる複雜なる定位作用を基礎として「てには」は成立し、「てには」をこの象徵とするが故に、短歌或は俳句の如き短詩形を生じたのである。おそらく日本の詩形は世界でも最も短かい形であらうが、この短かい形が成立し得たのは、この「てには」の持つ大なる幅と、その複雜なる定位作用を中心とするからである。

五

かかる幅とその定位とは、わが言葉の上にあらはるる特色であるばかりでなくて、すべての方面にあらはれて、廣くは東洋の生活の特色をなしてゐる。

巴利語「法句經」の最初の二節は次の如くである。

總ての心の働きは思慮これが先達にして、
思慮之が長となり、思慮より成立す。
もし人、惡しき思慮もて、或は語り、或は身に行はば、
その故に苦惱彼に隨ふべし、
車を引く者（牛）の足に車輪の隨ふが如くに。

總ての心の働は思慮これが先達にして、
思慮之が長となり、思慮より成立す。
もし人、善き思慮もて、或は身に行はば、
その故に安樂彼に隨ふべし、
影の形を離れざるが如くに。（長井眞琴氏譯）

然るに一千七百年前に維祇難（ユヰキナン）（Yighna）によつて譯されたものは

心爲法本　心尊心使
中心念惡　卽言卽行
罪苦自追　車轢於轍

心爲法本　心尊心使
中心念善　卽言卽行
福樂自追　如影隨形

である。この兩者を比較すれば、支那の譯經が如何に純粹であるかを知ることが出來る。純粹であるといふのは、その形を壓縮して、附加的のものを除去し、基本的なるもの、根源的なるものを明かにしたことを言ふのである。故に純粹とは、この形が緊密であるばかりでなく、根源的なることを意味してゐる。換言すれば緊密にして短省なる形の中に、無限に複雜となるべき可能性をふくむことである。形が最も單純にして、意が最も豐富なる形である。この純粹を念とすることは、東洋古來からの精神である。研鑽が形を複雜にして行けば、この後には必ず單純化が行はれる。あの唐代の精緻な畫風のあとから來たものは、宋代の草草たる減筆描法である。五色を捨て去つた水墨の減筆描である。そしてこの減筆描を支持するものは、唐によつて複雜にされ、その後も續いて來てゐる精緻である。卽ち一方に徽宗皇帝の精緻があつて、ここに梁楷の減筆描が

成立する。そしてこの精緻を減筆描にまで進めて來なくては、完結した畫面だと感じ得ない處に、東洋の精神がみられる。

東洋の器具は、完成した形で與へられてゐない。それが使はれて、ふきこまれて、そしてはじめて完成する。家屋でも住んで、住む人の手にみがかれて、はじめて完成する。西洋の器具は木器でも陶器でも完成した形で與へられるから、使用することはその完成を崩壞させる場合が多い。然るに東洋では使用されない以前のものは、これを未完成のものと感じ易い。故に東洋の器具は作者と使用者との共力によつて完成する。

このことは器具ばかりでなくて、美術に於いても同一である。梁楷の如き減筆描は、精緻な畫面に比較すれば、觀る働に一層多く依據してゐることを告げる。すぐれた觀る働なしには、かかる畫面は全く無意味だからである。故に觀る働の共働なくしては、この畫面は成立しない。作者は直に觀者と接續する。かかる接續の働を示すものに「祕傳」がある。普通には、ある極限された世界を、ことさらに作つて、自分等の特殊の位置を守らうとするのが祕傳であるかの如くにみられるのであるが、しかし私はその外に、もつと重要な意味があると思つてゐる。卽ち藝術が純粹化されるに隨つて、作者と觀賞者とはより一層直接に接續し連結されなくてはならぬ。そして

その接續の鍵がこの祕傳である。故に祕傳は、作者の側より言へば、觀賞者を選ぶことであり、觀賞者の側から言へば、作者に接續することである。卽ち「祕傳」は作者と觀賞者との密接なる接續である。

かくて作品は觀る働をまつて完成し、使ふ働をまつて完成するのであるから、作品は製作せられると共に、使用者觀賞者に委任せられて、作者のなし殘した點が新らたに始められる。茶器は、如何に作られたかといふのみではなくて、如何に使用せられたか、如何に傳來せられたかが、常に問題となるのである。然らば作者の位置は、實に不安定であるといはねばならぬ。自分の作品をあげて次の人に委囑するからである。

しかし作者は、東洋では、古くから自已を獨立したものと考へるよりも、助成者として考へる樣に習慣づけられて居たやうである。支那の畫論は、畫家の位置を、造化の功に參し、天地の化育を助くるものとして定位してゐる。自然の育成し完成せんとする意志を助成するのが藝術家の意圖である。故に女郎花の畫を描く畫家は、女郎花の完成に參與するのである。故に自己はもともとその完成參與者であるから、更にその仕事の繼續を次の參與者、卽ち使用者、觀賞者に望む

ことも自然である。自分は肇め作るものでなくて、肇め作る働を助成するものであるから、助成者を自己一人と考へることは專斷である。されば東洋では作品が自然の意志から作者を通して、使用者、觀賞者にまで繼續するのである。かくて藝術は自然と人間とを一貫した繼續展開となる。ここに於いて東洋藝術には、著しい一つの傾向の動きを見るのである。

景德鎭は支那における最も大きい陶工地である。帝室の御用品の如き陶器の製作に當つては、常に數百人の手を通過したといふことを聞いてゐる。土をこねるものは、先祖代代默默として土ばかりこねてゐる。ろくろを廻すものは、また默默としてろくろを廻してゐる。赤をつけるものは赤、藍をつけるものは藍と、また代代の專業として、學び、傳へ、爲されてゐる。個個の人は如何なる陶器に燒き上るかを知らない位であつて、それでありながらその間に一貫した仕事が進んで、一箇の陶器としての完成に導かれてゐる。これを貫いてゐる力は、人人の中に生きてゐる基本的なるもの、卽ち純粹なるものである。この純粹なるものが、作者を通じて働いてくる。これは「自然の性に肇り、造化の功をなす」といふその力であつて、そして同時にそれが使用者を動かし、觀賞者を動かす處のものとなるのである。ここに自然から人間を貫いてゐる大きい力を感ずる。

東洋畫もはじめから今日の樣な描き方ではなかつたらしい。例へば正倉院の「鳥毛立女屛風」をみると、竪に三枚の紙をつなぎ、その上に厚く胡粉をぬつて、しつかりと地を作つて置き、その上に線がきをしてゐる。この地の作り方は、それを布地の上にも同樣に施しうるもので、細部を仕上げる精緻な仕事に適するのである。そしてこれは西洋畫の布地と可成り近い性質を持つてゐる。しかしかういふ下地の作り方は、畫面を精緻にはするが、畫面を東洋的の意味で純粹にはしない。東洋畫は減筆描に向ふと共に、漸く胡粉下地を離れて、生紙にかく樣になつた。生紙にかくことは、一本の墨線をも、畫面の存在とせずして、畫面の傾向とする。畫面は存在するものを示すよりも、傾向を示すものとなる。傾向とは在るものよりも、將にあらんとするものを示すのである。今を示すよりも、更に繼續し來る先のものを示すのである。

かういふ傾向化は、また特殊の工夫によつて導かれることがある。例へば下村觀山氏の「春雨」の屛風がその一例である。聞く處によればこの屛風は線描きの後、裏より礬水をひき、綠になるべき處は裏に藍をぬり、橙黃になるべき處は裏に赤をぬり、最後に全體にわたつて裏箔をした。裏箔で藍は綠になり、赤は橙黃になる。これは如何にも念の入つた畫法である。そこには畫面の全構成を金に繼續せしむるものがある。あるものは一つ一つの色でなくて、相續いて起つて來る

色の傾斜である。

先年戸張孤雁氏の遺作展覽會が谷中の美術院に開かれた時に、荻原守衛氏作の孤雁氏の像が出てゐた。この像で私を注意せしめたものは、眼であつた。眼は上まぶたが秀でてゐて、下まぶたがない。上まぶたは上からくる光によつて陰を作り、その陰によつて下まぶたを作る。故に眼は光の方向と强さとによつて常に變じ、その顏を曇らせ或ひは晴やかにした。表情を可變的にすること、卽ち眼を傾向的にする事によつて、顏をも傾向的にするのである。

これと共に私の思ひ出すのは、奈良中宮寺の觀音像である。この像にも亦下まぶたがない。しかもその眼が後世の像とちがつて、顏面とほぼ直角に始つて後傾斜してゐるから、一層光について可感的であり、その表情を著しく傾向的にする。かういふ形の中に、吾等は純粹なる東洋の心をみるのである。

以上の如くにて、東洋の藝術は形を純粹にすることから、作品そのものを傾向的にし、それと共に、作品を自然と人とに對して亦傾向的ならしめる。ただこの頃の作品は、明淨純粹ならんことを欲するよりも精緻ならんことを欲するが故に、畫面を非傾向的ならしめて、最初の胡粉下地時代の畫風と心とにかへしてゐる。

西洋畫では、畫布も繪之具もすべて出來上つたものとして與へられ、畫家は直にその材料を使つて描くことが出來る。卽ち西洋畫にはその畫布や繪之具に器具的な性質が多いのである。然るに東洋畫では、材料が完成して與へられてはゐない。描くには先づ紙や絹を自分で整へなくてはならぬ。その次に繪之具を作らなくてはならぬ。與へられたもので畫くのではなくて、畫き得る樣に整へてから畫かなくてはならぬ。先づ畫くためには、畫く基礎から作つて行かなくてはならぬ。材料の中にも、自分の態度を導き入れる。卽ち材料を先づ自分のものとして定位するのである。幅の廣い胡粉や紙を、塗り得る胡粉や描き得る紙に定位するのである。されば描く働は、その最初から作者によつて創められるものである。一切を幅の廣い狀態に置いて、それを定位してかかるのが、東洋の創作の態度である。言葉の幅廣く、その幅の定位が、語り或は書く働の基礎となることは、極めて當然であると言はねばならぬ。

六

ことに日本の言葉には、漢字が用ひられて、一層その幅を廣くしてゐる。例へば

彼は我が同級生中、最もトクイな生活をしてゐる。

といふ言葉を耳できいた時に、この「トクイ」は「特異」であるか、それとも「得意」であるか

を判定し得ない。同様に、

復讎と復習、　附加と賦課、　誘引と誘因、
彷徨と芳香、　微光と尾行、　店頭と點頭と點燈、
腐朽と不朽、　令兒と令聞、

と耳できいては、それを區別しがたい言葉の例である。このことはまた言葉の中の單語に限らず、句讀に關しても同樣である。

現在の組織では缺陷が多いと思ふので是非ともこの際は改革したいと思つて研究してゐるが出來得る限り缺陷の少い東京とぴつたり合つた組織にして永續的に實績の擧る方法をたて度いと思つてゐる。（昭和五年八月五日、東京朝日新聞、犯罪の進步に備へ刑事部の大改革、相川刑事部長談の一節）

この中、「出來得る限り缺陷の少い東京とぴつたり合つた組織にして」は、二つの句讀のつけ方がある。

一、出來得る限り、缺陷の少い東京とぴつたり合つた組織にして

として、「缺陷の少い」を東京の決定とする方法である。

二、出來得る限り缺陷の少い、東京とぴつたり合つた組織にして

として、「缺陷の少い」を組織の決定とする方法である。即ち、二によれば、

出來得る限り、東京とぴつたり合つた缺陷の少い組織にしての意味となるのである。その何れが正しいかは、この被產出が語るのでなくて、產出卽ち語らんとする意志が決定する。されぼこの場合は、一の句讀は正しくない。二が正しいのである。

これに似た話がある。ある狩のすきな殿樣があつて、明日は狩に出ようと思ふが天氣がどうか、これを家老にたづねた。しかし家老にも明日の天氣はわからぬ。色色考へた末に、「明日は雨ふる天氣にあらず」と言上して退出した。殿樣は大喜びで、翌日狩に出た。ところが大雨にあつて、皆びつしよりぬれてかへつて來た。殿樣はすつかり御機嫌をわるくしてゐる。家老をよんで、「今日の天氣はどうしたのだ」と叱りつける。家老は「されぼ昨日『明日は雨ふる。天氣に非ず』と申し上げました」と答へて退出した。「雨ふる」の下に句讀を入れるか、入れぬかで、文意は全然正反對になるのである。これを入れるか入れぬかは、產出の方向卽ち當然性のみが決定し得ることである。

金田一京助氏は、「鳥獸のコトバと人間のコトバとの相違」を論じてゐるが、そのはじめに、第一段から第二段迄の言葉の考察をして、その後に次の如く言つてゐる。

第三段には、更に今少し狹く、生物のそれに限定される用例——鳥聲、虫語などがある。もつとも虫には今日の學問の知識では、羽を磨る音だ、などいふのもあつて、音響ではあつてもまだ音聲とはいひ難いものもあるが、第四段に、本當に

發音器官に生ずる「音響」即ち「音聲」の表現である所の、鳥や蛙や牛や馬や、前にいつた猿や猫などの鳴き聲、叫び聲を、人間の物いふそれと一つにこめてこれを言語（コトバ）と見なす考がある。これは、古今東西極めて普通な用例で、まづこの邊からならば、修辭的比喩や換喩を脫した、常識の言語の概念と見てよからう。だが、よく觀てくると、この概念もまだ實は廣義な言語であつて、本當の意味の言語は、今少し狹い所にある。なぜなら、たれだつて、生れたばかりの赤子は、コトバを知らないといふであらう。（生れたばかりの赤子がコトバを知つてたら寧ろ恐いだらう）然し、どこの家の赤ちやんでも、生れたばつかりで、「音聲表現」はやるものである。泣いて苦痛を訴へることをもするし、おつぱいを要請することをもするのである。そのうちに、お誕生前後から、そろそろいはゆるカタコトを覺える。

カタコト（片言）とは即ち半言語、不完全言語の意であらう。一度はたれでもこの時代を經過して、始めて普通なみの言語をはなすやうになる。この普通なみの言語の概念こそは、即ち狹義の言語である。

普通なみの言語の概念には、かうして、泣聲などは排除してゐるものである。これは無論當然である。泣聲をもコトバだとしたら、笑聲もコトバとしなきやならないし、うなり聲も、あくびも、ため息も、咳拂も、同程度の表現をいとなむから、やつぱりコトバとしなきやならないが、それでは如何にも可笑しい。なぜそれが可笑しいか。それは泣聲、笑聲、あくび、咳拂の類は、コトバといつしよにならないハツキリした相違があるからである。

第一の相違は、形式上の相違である。泣聲、笑聲、あくび、咳拂の類は、全く生理的な、本能的な、發音であるのに、普通のコトバの方は、幼い時から、一つ一つ、周圍の發音をまねて出來上る有意的鍛練を經た、全く人工的な發音だからである。專門的にいへば、前者は自然聲（natural sound）であるのに、後者は分節音（articulate sound）である。だから前者は世界共通で、どこの國へ行つても同じやうで、通辯なしにそれとわかるが、後者はさうは行かない所以である。第二の相違は、內容上の、即ち表はし方の手續の上の大きな相違である。普通の言語には一つ一つの表象を表はす單語と、一つにまとまつた表象群（即ち總表象）を表はす句（センテンス――「文」と譯すのが常であるが、ここには句と譯して置

く）との分化が出來上つて居て、我我が心をコトバに述べようとする時には、いやでもその心にある總表象をば、それを組立ててゐる一つ一つの表象に一度分析をし、その一つ一つの表象を表はす單語を取だして來て、何といふ形に組み立てて述べる。幼い時からの反復で圓滑に營まれるときには一一さうと意識しないが、考をつかへつかへ述べるやうな際にはよくそれがわかる。さて聽者の方では、與へられた句に由つて、まづその頭に一つ一つの表象が浮び出るが、聽者自身の力で以てそれを資料に一つの總表象を自分の頭の中へ組み立てる。この時話者、聽者、兩方の總表象が全く相近い物だつたら、コトバが使命を果したのである。卽ち、話者の意がよく通じたのであるが、兩者の總表象に開きがあつたら、それは誤解である。もし聽者が一つ一つの單語から一つ一つの表象は思ひ浮べられても、これを總合して一つの總表象を組み立て得なかつたら、無理解といふことになるのである。

だから、コトバを聞いて了解するといふ事は、音聲を耳で受取るだけのことではなくして、聽者の大きな精神活動を要することなのである。まづ一つ一つの表象を作つて、次には、それを一つのまとまつた考に、自己の力で構成しあげる。つまり、統覺作用をはたらかして、表象群を統一し、新しい統一體を自身に創造することなのである。了解は、實は創造である。

だから發する言葉は同じでも、聞く人人に由つて了解する程度が樣樣なわけである。「道をまちがへた」といつたら、前後の關係では、履行すべき道を誤つたといふ意味にも大人は理解しようが、子供なら簡單に迷ひ子になつたらうと思つてしまふやうなものである。私がある時子供を膝に載せて「ぜんという望だな坊やは！」と獨語したら、膝の子は「ウウン春ちやんといふ坊だい、坊やは」とやり返して來た。

所が、泣聲、笑聲、その外、お！　あ！　や！　などいふ感聲（文法家の間投詞と呼ぶもの）の類では、かかる分析總合の手續が無い。發する方では、その時の心を唯唯そのまま全的に、その聲に託するだけであり、聽く方でもまた、統覺作用の發動までも無く、單に記憶で、卽ち、曾つてその聲と共に經驗した情緒が、機械的な聯合作用で喚起されてくるだけ

である。

以上、形式、内容共に相違がある内、殊に後の方の、内容上の相違がやかましい。そこが普通の言語と、泣聲、笑聲、乃至一切の感聲との重大な差異である。單に形式上の方のことならば、感聲にも自然聲を脱したものがある。のみならず、隨分鳥獸でも、純然たる自然聲でなしに鍛錬を經た聲をだす。オームの如きがそのもつとも顯著な場合である。けれどもそれは、意味を伴はない單なる聲である。分析された個別的表象の表示ではないから單語ではない。從つてコトバの形はしてゐるもののコトバそのものではなしに、コトバのいはば寫眞に過ぎない。分析綜合の手續きを經ることは、これを專門的には意義上の分節作用（articulation）といひ、この分節的表現（articulate expression）が我我の言語表現の見逃すべからざる特徴である。これがために、言語に單語と句との分化も生じたのであり、單語と句との分化があつて、始めて心をば委曲を盡して敍述し得るのである。

聲はひつきやう單語と句との分化以前の原始的表現形式だつたのである。單語と句との分化が生じても、尙あたかも言語の間へ、身振手眞似が混じるやうに、混じて用ひられるのに過ぎないのであつて、感聲は廣義の言語ではあるが、嚴密なる狹義の言語へは、はいらないものなのである。（東京朝日新聞、昭和五年七月二十八日よりの學界餘談）

されば金田一氏の言へる如く、「コトバを聞いて了解するといふ事は、音聲を耳で受取るだけのことではなくして、聽者の大きな精神活動を要することなのである」。ここに於いて、文を讀むにも、文を綴るにも、言葉を語るにも、共に次のことがその根本の問題となつて來るのである。

文の成立の最初に於いて、文の完成の最後に於いて、常に文を統率する作用は文意である。文意は要旨とか大意とかいふ樣に、知的に概括されたものではない。文が文として成立しない最初に、先づ作者の中にあらはれたもので無限に繼續的に展開する可能性を持つ作用である。この表現層を通して文の形象が展開する。故に文の形象は文意が表現層を重ねて完

成したる表現面である。表現層が節意であり、節意の細部が句意・語意・文字である。この文意・節意・句意・語意・文字は一貫した展開であるから、その何れの一つをも缺いてはならない。指導の實際では、その順序は必ずしも一定しないが、研究の綱目としては、文の形象の成立順序の一つをも缺いてはならぬ。綴る力は文の形象の展開順序を進むことであり、讀む力は文意に卽して展開の層をたどることである。故にここに國語教育研究の方針が確立するのである。

隨つて文章に於いても、言語に於いても、それぞれの部分まで、すべてその背後の語らんとする意志の象徴である。文と語の考察は、かくて自然に象徴の問題に進むのである。言葉の幅の決定は、言葉が語る意志の方向によるものであり、語る意志と言葉とは象徴の關係にあることを承認することから起るのである。

であるから言葉は最もよく、語る意志を象徴してゐる。今これを競技の用語でみる。わが國に運動競技會の行はれた最初は、明治七年三月の海軍兵學校でした「競闘戲遊」であらうかと思ふ。これは西洋式の陸上競技で、生徒にやらせたのである。その様子が「新聞雜誌」の第百十一號に載つてゐて、大要を知ることが出來る。

十月十六日勝海軍卿の許可を得て、九場十八般の競闘戲遊を爲さしむ。本日午後一時より興行ありて衆庶の縱覽を許されたり。右興行の時に當つて海軍樂隊樂を奏し、以て競場の色を添ふ。英國中等士官シントジョン氏、下等士官シブソン氏、ナップ氏の三名競闘の行司を爲せりといふ。
○一場、△第一般、「雀雛出巢(すゞめのすだち)」、十二歳以下の生徒をして百五十ヤードの地を疾驅せしむ。△第二般、「燕子學飛(つばめのとびならひ)」、十六

歳以下の生徒をして三百ヤードの地を疾驅せしむ。

景物、一番第一號、二番第二號、三番第三號（以下略）

○二場、△第三般、「秋雁群翔」、十六歳以下の生徒をして六百ヤードの地を疾驅せしむ。△第四般「曉鴉亂飛」、看客をして三百ヤードの地を速驅し、且つ諸般の遊戯を競闘せしむ。但本寮管轄に在る者の外を許さず。

○三場△第五段、「文魚閃浪」、距離を限らずして前に跳躍し少しも遠く踰越するを務めしむ。（幅飛び）△第六般「大魚跋扈」、高點を定めずして上に飛躍し少しも高く地を離るるを務めしむ。（高飛び）

○四場、△第七般、「老狸打礫」、距離を定めずして毬を投擲し、少しも遠く達するを務めしむ。（砲丸投げ）△第八般「乳猿遊獵」、十五歳以上の生徒をして十歳以上の生徒を背に負ひ二百ヤードの地を疾驅せしむ。

○五場、△第九般、「狂蝶趁花」、二人を並べて左者の右脚と右者の左脚と緊縛し、二頭三脚にして疾驅せしむ。（二人三脚）△第十般、「青蛉飄風」、竿を以て地を撥し旋轉飛躍して以て早驅せしむ。

○六場、△第十一般、「野鶴出籠」、△第十二般、「捷馬脫韁」、

○七場、△第十三般、「白鷺探魚」、△第十四般、「神鷹捉魚」、

○八場、△第十五般、「玉兎躍月」、△第十六般、「獼猿偸桃」、

○九場、△第十七般、「須浦汲潮」、△第十八般、「中原逐鹿」、

これでみると十種競技乃至五種競技と稱せらるる種類のものが、支那趣味の表現で名づけられてゐる。當時の意向は、支那的趣味の中にあつたことが知られる。然るに今日の競技は、その多くが西洋語で呼ばれ西洋語で進行せしめられてゐる。ここにも時代の好尙が言葉に象徵せらるる消息を知り得るのである。

七

昭和四年の十二月に私は淺草に芝居を見に行つた。明石潮一座の「表裏忠臣藏」である。神崎彌五郎の兄が、鄕里の郡代から弟を養子に所望せられ、獨斷で承引して彌五郎の反對にあひ、弟と郡代との中間にはさまつて苦惱し、郡代を銃殺して自殺する場面がある。自殺の方式を侍自殺の樣式にとりながら、鎌腹を切つてゐる。その鎌腹を切る迄にも激發する感情の中で苦しんでゐる。それを見て見物人はどつと笑ふのである。自殺者の心になれば決して笑へる筈ではない。その笑ひ得ない事情の中でそれを笑ふ。笑ふ人達は笑はれる人の心を度外して、その行動の表面のみを見てゐるのである。行爲と行爲との間の矛盾、行爲と行爲との間の混亂、さういふものを見てそれを笑つてゐるのである。その行爲の背後にある内面的な生活は全く顧みられてゐない。

然らばこれは淺草に集まる人達が程度の低い、省察の少い大衆なるが故であらうか。しかしさう一概に言つてしまふことは困難である。何故かといへば私はこれとおなじことに、他の場合にも度度逢つてゐるからである。假へば同年の春神田の日本大學講堂で東京市の或教育者の會合があつて、その餘興として映畫をしたことがある。私も丁度その席に出てゐてその映畫を見た一人であるが、その折もこれと同樣な經驗をしてゐる。その映畫の老婦人が人達の疑ひをうけ、一枚

の板に縛りつけられ、池に浸されるのである。池に浸してはそれを持ち上げる。水から出てくる老婦は苦しみもがく。それを見て人達はわつと笑ふ。老婦の苦悶は無實の疑ひから來てゐる。もともと笑ふことは出來ない譯だ。その笑ふことの出來ない事情の中で、人達はわつと笑ふのである。實に無理である。そして此の笑ふ人達はいづれも皆教育者である。さういふことには最も同情のあるべき人達が平氣で笑つてゐる。水をのみ水にむせてもがくのを見て笑ふのである。

ドイツ哲學者で、日本をも訪ねたカイザリンクはあとで旅行印象記をかいてゐるが、その中に日本人は悲しみの中でも笑ふと言つてゐる。西洋人は人のころんだ處をみては決して笑はぬといふことである。日本人は朗かに笑ふのである。しかしこれもころんだ人が損害を受ぬ場合に限つてゐる。足を傷つけ、手を傷つけては笑ふことは出來ない。笑へるのは笑つてすませる程度の顚倒でなくてはならぬ。故に悲しみの中で笑ふといふことはこの心理では說明は出來ない。悲しみを一圖に悲しみとしてしまはずに、笑ふことが出來るのは、そこにはそれだけの理由がなくてはならぬ。

これはおそらく日本の國民生活の長い歷史から來て居るのであらう。日本民族は侵略的の民族ではない。石器時代からこの地に住み平和なる生活をしてゐたことが明かになつた。アイヌ等を

侵略して土地を擴張したのでなくて、かへつてアイヌは後から日本の地にひろがり、日本民族と接觸したのである。日本民族が平和にその生活をたのしんだことは古墳から發見される土製の副葬品等によつても知られる。埴輪人形の面は平和そのものである。此の顏には殘忍なる殺伐なるものの片影もない。

多くの日本の家庭ほど、共益共用の完全に行はれた處はあるまい。收入をすべて合一して、それぞれその家族全員の必要に應じて之を用益してゐる。そこに固定性の所有はない。家庭の成員の間をすべての財産が流動してゐる。このすべての財産が家族の間に共有され流動する形勢を持つことは、これは與へることを喜びとするからである。もし與へらるることの方を喜びとすれば、人人は一樣に與へらるる方に廻るであらうし、それであつては、その家庭の共益共用の流動態は破壞される。

愛情を中心とするが故にこの共用制は喜びの中で成立する。これがもしも規約によつてなさるるならば、怠惰の形勢を生ずる。日本の家族は愛情によるが故に、他にみられぬ犧牲の精神があり、この精神によつて長い國民生活を支持して來た。

農民史は實に貧困の歴史である。私は日本の農民史をかいて、この事實に驚いてゐる。如何なる世にも貧しいことが常態であり、苦しいことこそ、その常態である。この貧苦の中にあつて、なほかつ平和であつた處に、殘忍になり得ざりし處に、日本の生活がある。是に於いてその苦痛の中でさへも、笑ひほほえむことが出來る。

笑ふことは日本民族の輕卒を示さずして、日本民族の長い生活の様狀を示すのである。吾吾はかかる特色を日本の藝術、例へば繪卷物などの中にも常にみるのである。

しかし芝居において私の見た笑ひは決してその國民的の笑ひではない。悲しみの中で笑つたのではなくて、悲しみを笑つたのである。悲しみの中にあつても笑ふのは、これは我國民性である。しかし他の人の悲しみに對して笑ふのは反對である。他の痛苦を自己の笑の對象とするのである。

そこには愛情はない。そこには平和はない。かへつてそこに國民的精神の頽廢がある。教師の中にも之を見、一般の民衆の中にも之を見たのである。

それと同時に私は悲劇並びに喜劇の性質に對する問題にも、また一つの疑ひをおこした。悲劇とは劇の性質がその結末に於いて破壞に終るものであり、喜劇とはその結末に於いて建設に終る

ものである。しかしそれを喜ぶか悲しむかは、むしろ見物人の態度によるものとすれば、悲劇もまた喜劇笑劇になる。然らば劇の分類の問題は、劇そのものよりも、見物そのものに依存することになる。見物の觀る態度及び解する態度が、これを如何に受納するかの問題になるのである。故にそこには笑はるべきものが客觀的に存在するのでなくて、笑ふ態度が主觀的に存在するのである。

されぱこの劇にももし「文意」を考へるならば、そして劇を見る人が、その劇の「文意」を感じ得るならば、悲劇に笑ふ筈もなく、喜劇に泣く筈もない。この事柄を事柄として獨立に見ず、その事柄が何を象徴してゐるかを見るならば、卽ちこれを文意に於いてみるならば、悲劇は絶對に笑ひ得ざる譯である。故に輕卒なるが故に、或は理解力小なるが故に、笑ふべからざるものをも笑ふのである。

八

然らば象徴とは何か。

象徴は無形なるもの、卽ち見得ざるものを、形を以つてあらはすこと、見得る形としてあらはす事である。換言すれば感覺的なる事物によつて、精神的であり、超感覺的である意味をあらは

さうとするのである。そしてそれが一層高度になつた場合には、特殊的なる事物によつて、普遍的なる意味を現はすことになる。故に象徴には自ら二種の要素がある。第一は形體的要素であつて、これは形式と稱せらるるもの、對象と稱せらるるものである。第二は意味的要素であつて、内容と稱せられ、意味と稱せらるるものである。そしてこの兩者は本來的には獨立の意味を持ち、隨つて兩者は本來は不合一のものである。然るに本來的には不合一なる兩者が、比較點 Vergleichungspunkt と稱せらるる接觸點によつて、部分的、外部的に合一する。例へばめでたさには形がない。めでたいことは三角でもなければまた四角でもない。然るに人人は、めでたき事には、ことに永續せんことを要求する。今日めでたくして明日は既にめでたからざることは、今日と雖もめでたしと感ずることは出來ないのである。今日目出たく、明日また目出たく、來月、來年、永久に目出たくなくては困るのである。ここに於いて目出たさには永續性が重要な要求となつてゐる。永續性の基礎に立つめでたさでなくてはならぬのである。さればこの永續性がめでたさをあらはす比較點になる。そこで永續を示すものとして、吾等は自分の周圍をみる時に、龜があり、松があり、鶴がある。龜や鶴はその生命が長いと信ぜられて居り、松は四季にわたつて色を變へぬと信ぜられてゐる。松の葉にも枯れて落ちる時期があり、一度出た葉が永久についてゐる譯ではないが、しかし松は見た目には一年中綠である。隨つて人達は是等の松鶴龜を以つて目出

たさをあらはすのである。これが無形なる目出たさを、有形なる動植物であらはす働であつて、後者は前者の象徵である。松の姿、鶴の姿、龜の姿に、何等「めでたさ」を見出すことはないにも係らず、是等を以つて「めでたさ」をあらはすのは、その永續性の故である。「めでたさ」は松の葉の如く二本にわかれた針の形でもなく、鶴の如く勁長く足長き形でもなく、龜の如く堅くして遲鈍なる形でもない。めでたさに對する要求の一致である。故にめでたさと、松や鶴龜との一致は部分的の一致である。部分的の一致であるから、そこには部分を以つて全體とするを要する規約がある。松や鶴龜がめでたさの象徵となるといふことの根柢には、部分的一致を以つて、全體的一致とする規約がある。一部の一致を以つて、他の多くの不一致を覆ふべき跳躍がある。さればこの規約とこの跳躍とを信ぜざるものには、この象徵は無意味である。西洋に於いて鶴が不吉とせられ、支那においてスツポンが不吉とせらるるはその例である。されば泥中に尾をひく遲鈍なる龜をみて、これを目出たしと思ふ人あらば、その人こそ實に「おめでたき」人であると言はねばならない。

そしてこの本來的に不合一なるものの、部分的合一には、自ら一つの關係がある。卽ちこの形體的方面は狹少であつて、意味的方面が廣大である。換言すれば形體的方面は、意味の符號である。意味を擔へる假の形である。形に完全の意味があるのではない。この形式的方面の過少と、

意味的方面の過大との均衡の上に、象徴が成立つ。故に象徴はその一部分の合一と共に、多部分の不合一を明かに意識せしめる。卽ち象徴はより多く不合一なりと思ふと共に、合一なりと思はれなくてはならぬ。隨つて象徴の成立するためには、次の性質を必要とする。

一、形體的要素と意味的要素との對立。

二、この兩者は性質的には本來不調和である。

三、その不調和なるものが、一部の共通點、卽ち比較點によつて、部分的に結合する。

四、しかもこの比較點は、意味的要素に對しては重大なる價値を有するけれども、形體的要素に對しては必ずしも重大なる價値を有しない。

五、故に兩者の結合は、意味的方面の必要からであつて、形體的方面はそれに引きずられてゐるのである。

六、かくてこの結合は、その根柢に永久に合一し能はざる重大なる性質的相違を有つてゐる。隨つて象徴とは永久の不合一を前提とする、一時的の結合に外ならない。

されぱかかる象徴は、寓意或は比喩である。比喩の示す意味は、知的に理解せらるるものか、連想的に理解せらるるものか、或は習慣的に理解せらるるものかである。何れも理解に導かれ

て、二要素間にある溝渠を跳躍するのである。

上野陽一氏は、その著「教育能率ノ根本問題」で、「學問ト學問ノ道具トノ區別」を論じて、

1 ヒトツノ學問ハ各種ノ言葉文字デアラハスコトガデキル。

2 學問ハ言葉ヤ文字ヲモツテアラハスコトガデキルガ、學問ソノモノト言葉ヤ文字トハ別ノモノデアル。

3 學問ヲサズケル手段トシテ言葉ヤ文字ヲオシエナケレバナラナイ。シカシ文字ヤ言葉ヲサズケルコトハ學問デハナイ。學問ヲ食物ニタトエルナラバ言葉ヤ文字ハ食物ヲ入レルタメノ食器ニ過ギナイ。

4 學問ヲ與エル目的ノタメノ手段タル言葉ヤ文字ハナルベクヤサシイモノデナケレバナラナイ。ソレニ拂ワレル勞力ハ目的ヲハタスノニサシツカヘナイカギリ、少イモノデナケレバナラナイ。

と言つてゐる。これが氏の國字改良の根本意見と見ることが出來る。かくの如くに言葉は意味をあらはす符號であると見るのは、言葉と意味との間の不一致を、理解と習慣とに於いて跳躍するものであつて、言葉をこの種の象徴とみるものである。この觀方は同時に文章を内容と形式とに分離する態度と一致するもので、文字を符號として内容から隔離し、この間の不一致を理解によ

つて跳躍せしめんとするものである。また文學美術を以つて修身或は政治或は社會改善の方便とみる観方は、文學美術を修身、政治、社會の象徴とみるものである。更に文學美術を所謂「イデオロギイ」を擔ふものとみれば、これもまた文學美術をイデオロギイの象徴として観るものである。その何れも理解による跳躍のある點では同一である。

九

ここに「舌切雀」の話がある。このお爺さんお婆さん二人の中無慈悲で慾深の方が失敗する比喩が、この話の中心である。無慈悲で慾深の失敗する例は、如何なる時代にもある。しかしこの話は、「昔昔ある處に」といふ實に漠然たるある時代と地理とのことになつてゐて、時代と環境とに正確なる具體性がない。そこには概念的な一般的關係があるばかりである。随つてこの話は平面的であつて、立體性を缺いてゐる。

比喩に似た象徴の一つに諷刺がある。諷刺も比較點を接合位置において跳躍するものである。しかし比喩に比すると具體的である。諷刺せんとする目的が明瞭であるから、具體的である。そしてその諷刺は諷刺の目的が明瞭なるだけに、他に通用し難い特殊具體性を持つてゐる。けれどもこれは比較點を跳躍するのに、理解作用を以つてするのであるから、時代を過ぎれば理解しが

たくなることが多い。例へば傳鳥羽僧正の「鳥獸戲畫」の如きは、かかれた當時にあつては、明確に諷刺の意味が理解されたものに相違ない。しかし今日になつては鹿は春日神社關係、猿は叡山關係だらうといふ程のことはほぼ想像がつくとしても、蛙になると園城寺關係かどうかがもう明瞭ではない。そして其れ等の動物の活動が、何の諷刺であるかは勿論わからない。その中でわかるのは、僧徒の安佚腐敗と、善男善女の善良にして愚直なることとである。この程度の意味ならば、時代と境域とを明に持たずして、何時何處にもあり得るものである。それならば完全に比喩である。諷刺ならば在る時と所とが明示せられなくてはならぬ。「鳥獸戲畫」は今日はむしろ純粹藝術として見られて居る。

もと諷刺の形體と、諷刺せらるるものの形體とは明かに異つてゐる。この間の關係の大きい程諷刺は鋭い。この鋭い對立があつて、しかもこの間を比較點を中間位置として跳躍する。跳躍し得た幅の大さが大きい程、效果を深刻にする。しかもその跳躍は理解的であるから、跳躍の效果は評價の趣を持つてゐる。そして評價の結果は嘲笑となる。比喩には跳躍の幅も少く、理解作用も低度で十分であり、結論の評價作用が少量で十分である。

かかる比喩程度の象徵は、今日も猶一般生活の中に深く入りこんでゐる。例へば相性、相尅を

はじめ、十干、十二支の如きものがある。相性は古代の素樸なる物理學に源を發してゐる。丹波康頼の「醫方心」は圓融天皇の永觀二年に出來た著述であるが、支那の所説を傳へて、體內の五臟卽ち肝、心、脾、肺、腎を、五行卽ち木、火、土、金、水の精に比してゐる。五行は宇宙一切の原素であり、隨つて宇宙一切を支配する。人體も亦その支配內にあると考へて、五行説から比喩的に醫術を解いてゐる。低度の象徵主義である。そして火の星と土の星は性が合ふから、相性であり、水の星と火の星は性が合はぬから、緣談を避けよと敎へてゐる。相性はかくて人と人との關係を、固定的に見てしまつてゐる。

相尅も亦五行説から由來したもので、相勝と呼ばれる。水、火、金、木、土の順序に勢が强く、水と火、火と金との如き關係によつて相扶くべきものであるとした。それが後には相勝が相克となり、更に相尅となり、最初の意味とは全く反對になつて、相扶くる關係が、尅し合ふ關係になるとされたのである。

十干の甲はヨロヒであつて、草木の種子を被ふ厚皮で、植物が猶厚皮の種子中にねむつてゐる狀態、乙は軋るのであつて、植物の芽が伸びられず屈曲してゐる狀態、丙は炳(あきらか)であつて、植物が明かに植物の形體をとつた狀態、丁は壯と同義で、植物の形體が充實した狀態、戊は茂であつて、繁茂の狀態といふ樣に萬物生育に順序づけたもので、だんだんに進んで辛になると、新の意味

で、枯死して更に次の新らしき時代を將來しようとする狀態である。壬は姙むで內部に新生命の姙まれてゐる狀態、癸は揆るで內藏の新生命が知り得る程に伸びた狀態である。卽ち十干は萬物の發生、繁茂、成熟、伏藏の十過程である。それを生の五行に配當して、木兄、木弟の如くにしてゐるのである。

十二支も十干と同一思想から出た象徵である。子は孳えるであつて、新生命の萌し始むる狀態、丑は紐であつて、からむの意を有ち、生命の充分に伸び得ぬ狀態、寅は螾くであつて發生の狀態である。戌は切る意味で、生命の滅亡の狀態、亥は閡るであつて、萬物凋落して生命の力が種子の內部に閉藏され終る狀態である。生命の發生、繁茂、成熟、伏藏の過程を十二段階にわけたものである。故に丙午を以つて、火の馬とする如きは、實に無意味なる比喩である。丙午の起源は明かでないが、一說には享保十一年と天明六年の丙午の年に懷胎した女の中、流產の藥を服して死せるものが多數にあつた處からはじまるといひ、一說には丙午共に陽火であるから、火災ありと忌まれてゐたのが、いつか丙午生れの女子は嫁して七人の夫を殺すといふ流言をなしたのだとも言はれる。何れにしても低度の比喩的象徵主義である。然るにも係らず、これが一般の間に深く信ぜられて、丙午生れの女子を致命的に苦しめてゐるのは、怖ろしいことである。

十

象徴はその結果としては、形體に獨立の意味がある樣にみえる發達もしてゐる。しかしその意味は、もともと性質的には一致しがたい意味的要素の方から乘り移つて來たものであるから、その必然性は可成り稀薄である。そしてその間の論理的關係は次の如くである。

1　兩要素間の論理的關係は、本來一部的接合の關係であるのを、暫く全部的一致の形にみたものであつて、そこには必然性はない。

2　しかも必然性の乏しいものを、必然性あるかの如くに見るのは、習慣的の知的連關によるか、それとも類型的の知的連關によるかである。

3　隨つてその知的連關は最も低度であるから、それはむしろ情意的連關とみゆるか、情意的連關に轉向するかである。

ここにこの比喩的にして知的なる象徴を、更に高度なる象徴に高める道がある。比喩的象徴では、形體の中の一要素と、意味の中の一要素とが結合するのみで、他の要素は性質的に無關係であり、且形體の自然的性質が輕ぜられて、意味のみが重ぜられる。かくては、內容と形式とは截然と區別せられ、その關係が偶然的、人爲的、抽象的になる。しかし形體に意味

の重いことは、これ藝術の一般的意味である。もともと意味を有てる形體が、藝術形體である。故に形體が意味を有つといふこの性質は、一層發展して行くことが可能である。そのためにはその形體の自然的性質を濃厚にし、且その自然的性質が意味を有つことにならなくてはならぬ。換言すれば形體と意味との關係において、

1　形體の自然的性質の增大せらるること。

2　形體と意味との比較點が增大せらるること。

3　この兩者の增大によつて、形體と意味との兩要素が、自然的性質によつて覆はれ、且形體と意味との兩要素が比較點によつて覆はれること。

かくすれば形體の全部は意味となり、意味の全部は形體となり、兩者の關係は先の如く不十分にして且分割し得る如きものではなくなるのである。

されば形體と意味との論理關係は、この象徵にあつては、

1　假に全部的關係であるかの如く見えた先の論理的關係は、完全なる全部的關係になる。

2　習慣的或は類型的なる低度の知的連關が、完全なる情意的連關となる。

3　比較點は消失して、習慣的、類型的なる性質が除去される。換言すればそこには全く外部のである。この狀態では

的一致或は謎語的統一はなくなつて、形體の各部は悉く意味を具備し、意味の各部は悉く形體を具備する。

のであるから、

4　象徵の自然的意義に卽して、象徵的意味を求め、自然的、具體的關係を成立せしむるに到るのである。

かくてこの關係では、形體と意味との間に合一があつて、不合一はない。のみならずこの合一によつて形體は完全なる意味を得、意味は完全なる形を得たのであるから、兩者は渾一して一層深く高き高次の展開をなしたのである。この故に不合一は形體と意味との關係から求められるのでなくて、前の形體と意味とが、今度の形體と意味とに比較して求められるのである。卽ち前の形體と意味との關係は、今度の形體と意味との關係とは不合一であると言ふに外ならない。「不合一」の意味も、前には兩要素間の比較に生じたのであるが、今度は、前の層位と今の層位との比較によつて生じたのである。ここに著しい發展がある。「不合一」の性質は、展開によつて層を異にする兩層の間に認めらるるのである。

かくの如くにして、形體の方面よりいふも、また意味の方面よりいふも、共に部分的關係による象徵、卽ち結合性象徵は、この全部的關係による象徵、卽ち展開性象徵の低位に位するものである

ある。

されば結合的象徴關係が、展開的象徴關係となり、跳躍を不必要とするに到れば、ここにはじて完全なる作品となる。例へば先に述べた

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

よもすがら秋風きくや裏の山

の如き、何れも完全なる象徴である。「閑さ」は形なきものである。「岩」と「蟬の聲」とは形あるものである。而して岩にしみ入る蟬の聲は、この形の展開の中で、閑さと一致する。閑さは岩にしみ入る蟬の聲にみられ、岩にしみ入る蟬の聲は閑さそのものとしてみられる。兩者はその展開に於いて完全に一致する。兩者には不一致の點は全然ない。完全に合一したる意味と形とである。蟬の聲の展開は閑寂であり、閑寂の展開は蟬の聲である。岩にしみ入る蟬の聲をみれば、これそのまゝ閑寂であり、閑寂はそのまゝ、岩にしみ入る蟬の聲になり切つてゐる。兩者の間には何等の中間媒介もなく、何等の跳躍もない。完全なる相卽關係である。かくて一方は他方の符號ではなく、規約でもない。この完全なる象徴關係の成立する形には、內容と形式との區別のない世界があり、これがはじめて文學の世界である。ここまで言葉が來て、はじめて產出と被產出とが

斷絶しない系統となり、被産出によつて産出を見、産出によつて被産出を見る系統が完成するのである。

裏山に秋風を聞く心は、別れて來た師を思ふ心である。師を思ひて終夜、裏山をふく秋風をきくのである。秋風は裏山をふくと共に、曾良の心をもふいてゐる。秋風にふかれてゐるのは裏山であるが、同時に曾良の心もその秋風にふかれてゐる。秋風にふかれてゐる曾良の心と、裏山とは、今は同じものである。心と裏山とはもともと同じものではない。しかしわが心は秋風にふかるる裏山に感ぜられ、秋風にふかるる裏山を、わが心に感ずる。その秋風の山と心との一致は、「よもすがら」で一層具體的になり、「聞くや」の「や」に結晶する。これがこの句の形象である。故に形象は象徴の中心である。換言すれば象徴の象徴である。そして象徴並びに形象は存在の上での一致でなくて、當然性の上の一致である。この象徴は形象を形成するに到つて完全である。言葉はこの象徴の意味に於いて考へられなくてはならない。

先に述べた表面の事實によつて、笑ふべからざるに笑つてゐるのは、その事實を以つて結合性象徴としか見得ない處に生ずる。結合性象徴の世界は藝術の世界ではない。故にその人達は映畫を見つつ、劇を見つつ、それを事實としてゐて、藝術としてはゐない。展開性象徴として觀るこ

と或は學ぶことは、文をよんで文意に學ぶことに外ならない。文意によつて文をよまないことは、文を形式と內容とに剝離することであり、比喩の世界に低落することである。

十一

このことは全體の構成に於いてのみならず、部分の存在に於いても同一である。

今「萬葉集」卷三の柿本人麿の旅の歌に、

稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の島見ゆ

天ざかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ

がある、また

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ

の歌がある。是等の歌は、何れも共通した性質として、第三句の終りが「ば」であつて、そしてその「ば」が一首の中心をなしてゐる。この「ば」は現在の經驗をのべて、その經驗を反省し、そしてその經驗を機緣として、展開して行く次の生活に推移する表現である。第一の歌では、稻日野も行き過ぎがたく思ふ、その現在の經驗とその反省との中に、心戀しき可古の島のみゆる推移を深い感慨で眺めてゐるのである。そしてこの二つの經驗を接續せしむるものは「ば」であ

る。「ば」は反省によつて次に展開する生活である。第二の歌は「夷の長道ゆ戀ひくれば」といふ經驗と反省とによつて、直に次に展開して行く「明石の門より大和島見ゆ」が出て來る。この展開の節は、「ば」を産出し形成してゐる。第三の歌も全く同じである。夕浪に千鳥の鳴くのを聞いて、この心に「心もしぬにいにしへ思ほゆ」と展開して行く。この展開の節は、「ば」である。かくの如くして「ば」は推移の中心であるから、自然にこの歌の中心となつてゐる。この「ば」あつて是等の歌は中心の壓を得てゐる。故に「ば」はこの歌の象徴の頂點である。文の語意は文の象徴であるが、この「ば」といふ語は、この歌の最も中心をなす語であり、即ちこの歌の形象である。それから人麿の少しあとにある高市連黑人の旅の歌

旅にして物戀しきに山下の赤のそほ船沖に榜ぐ見ゆ

では、その中心をなすものは、即ちその象徴的位置の頂點をしめるものは、「赤のそほ船」である。旅にて物戀しき心を持つて向ふ時、山下にみゆる「赤のそほ船」は、ことにその赤い色は、旅の戀しき心そのものになつてゐる。赤と旅の戀しき心とは完全に象徴―展開性象徴關係をなしてゐる。故にこの歌では象徴的位置の頂點はここにある。この象徴的位置の頂點が形象である。

み食向ふ南淵山の巖には降れるはだれか消えのこりたる　　卷九

これも人麿歌集中の歌であるが、歌柄が人麿らしく、高邁雄渾の姿が他の作者では到達至り難い感があるので、同じく人麿作と推測してゐるのである。「みけ向ふ」は南淵山の枕詞、南淵山は明日香つづきの地にある山、はだれは古義等に「雪」と解されてゐるが、淡雪若くは斑雪等であらう。これは作者が明日香より遠く南淵山を望み見て、そこに殘れる淡雪の光を寂しみつつ詠んだのであつて、特に、巖を捉へたる所、寫生の機微に入れる心地がし、古く南畫の秀品に接する如き感がある。材料は只巖に殘る雪である。それが斯の如き氣品を生み來るのは、作者の自然に參する心が深く至り得てゐるからであつて、この邊になると、もう堂堂として藝術の高所に入り得てゐるといふ感がする。第一二三句を受けた「には」が遠く第五句の「たる」に至つて結ばれてゐる勢に、高く踏み、遠く目を鶩せてゐる姿が見える。「降れるはだれか」の「か」は、一面に疑ひ一面に感嘆の聲を强めたのであつて、聲調の山を成し得てゐる。非常にいい。

これは島木赤彦先生の「萬葉集の鑑賞及び其批評」の一節である。歌の象徵關係が明かにされてゐる。

かくて讀む働は、その文の象徵的位置を定位することである。描く働も形體の象徵的位置を定位することである。この象徵關係が明かになり、定位せられた時は、その文は既に構成せられた時である。構想の問題は結局定位問題である。

第四章　構　想

一

觀る働は決して簡單ではない。觀る働が簡單であり、且容易である樣に見えるのは、觀る働が最も直接なる働の一つだからである。觀る働が直接だといふことは、何等の媒介をもまたずに成され、且展開するといふ意味である。この觀る働の直接性に立つのが描く働である。これが正岡子規氏の言へる「寫生とはありのまゝに寫す」といふ意味に外ならない。

かく觀る働が直接であるといふ意味は、觀る働は單に受動的な態度に過ぎぬといふ意味ではない。觀る働は單に與へられたものを觀るに過ぎないといふ意味ではない。卽ち强要せられて「である」といふのではなくて、「でなくてはならぬ」とする當然なる積極的なる態度である。「でなくてはならぬ」といふ當然の感は、現在を規定するに留まらず、更に未來に展開する働である。この積極的の態度の展開があつて、はじめて存在が確定するのである。うたがひなき存在が確立するのである。「在る」ことは、この「あるべき」事に支持せられて、はじめて確かである。かく

の如き性質があつて、觀る働は展開するのであるから、この觀る働は、一目にして行きづまる樣な平面ではなくて、觀るに從つて深さを增す立體である。

ここに於いて觀る通りにかくといふ寫生の問題が、限りなき深さを示して來るのである。

酸水素混合氣體をサボニン溶液中を潜らせて直徑〇・三ミリメートル程度のアワにすると、この恐るべき爆鳴ガスは熱鐵板に觸れても、ガス焰を近づけても爆發性が失くなる。溶接に使ふ酸素アセチリン混合ガスでも同樣な事が經驗されてゐる。爆發性ガスの輸送に對する一つのヒントであらう。

近頃問題になつてゐるいはゆる泡沫消火法といふものも、これに類したアワの一應用である。ガソリンやベンヂンのやうな水で始末出來ないものの失火に對して、ある裝置で炭酸ガスか空氣のアワを吹きかけて、火焰をアワの廣い面で包んで、外氣から火焰を隔離して消火させる考案である。

アメリカでガソリン貯藏槽からのガソリンの揮發量が一ケ年約八パーセントと稱せられ、損失價格は五千萬ドル以上と見積られてゐる。その防止に特殊な持續性のアワを利用しようといふ試みがある。

これ等の場合とは反對に、例へば酸素と水素とがパラヂウムの接觸作用で、低溫で化合して水となる事は周知の經驗であるが、この種の色色な氣體の接觸反應に、觸媒を含んだ適當な起泡性の液體をメヂウムとして、アワの狀態を應用すると、反應の活性面が非常に擴大されるので反應速度が著しく進行する。

以上は一例であり、實用されてゐるものは未だ少いが、アワは將來十分多方面に應用のヒントを藏してゐると考へられる。

（あわのヒント、三雲次郎氏、昭和五年六月九日　東京朝日新聞　學藝餘談）

故に觀る働が直接であるといふことは、働が單純だといふことではない。對象を觀得たといふことは、これは一つの解釋であり、構成である。この消息を榊原紫峰氏の「靑草の上にて」に見る

ことが出來る。

青空、――間近い土手の上に立つてゐる大きなモチの木の若葉の間を透して見える青空の色の鮮かな美しさ。それは鳥渡他に比較するものがない。

空の美しさといへば普通に初秋のそれを擧げられるやうだが、同じすんだ青空でもすみ方が違ふ。初秋には媚び難い沈靜さがあり、青葉の頃には精力的な動きが感じられる。

その透き通る青空に薄い練絹のやうな浮雲が浮かんでゐるのも初夏らしい氣持だ。それが段段手厚くなつて、雲の峰を積みあげると、ハッキリ眞夏が近づいてくる。その頃は毎年海岸へ出かけるゆゑか、雲といふと私は廣廣とした海の上の雲の峰を思ひだす。

肉體的にも精神的にも健全な人程、初夏を愛することになりはしないだらうか。私は新綠の頃が一番好きだ。私の性格からいへば初秋の方が私の氣持にピッタリするやうに思へるが、然し仕事に對する希望に滿ちた時なぞには新綠の自然から受ける喜びの方がより強く私を動かす。氣持――精神の健康は肉體の健全さから得られるものだと思ふ。肉體がハッキリしなければ頭もハッキリしない。たまにはからだの不健全な時に反つて頭腦の明晰な場合もあるが、もう一應それを反省してみると、矢張りそこにはある一方に偏した、病的なものを伴つてゐることを見つけだす。

よく熟睡した後、朝早く目覺める。そして晴れやかな空を見、淸らかな冷めたい空氣を呼吸する。内部に力強い感激が滿ち溢れて、仕事に對する熱情が猛然と起つてくる。そんな氣持も初夏、新綠といふものにピッタリする。朝の畫室に入る前のさうした喜びは四季を通じて變りはないはずだが、特別にそれが青葉の頃の季節に深い。そんな時こそ如何にも自分の生長といふことが感じられるやうな氣がする。

初夏の微風は實に輕やかだ。青草の上に兩足を投げだして眺めてゐる、その私の目の前の大空にくつきり浮きだしてゐる色さまざまのヒナゲシやスヰートピイがサラサラと動き搖れ、空の青に對照を作つて一層美しい。この美しさが私の制作欲をそそる。美は私の精神を醉はす喜びだ。私の內部的外部的の總てのものが完全に調和して統一されてゐる時程その喜びは强く大きい。仕事に對する感激もまたそこにある。反對に私の總てのものが調子惡く、心持がさびしく憂鬱になつてゐる時には、仕事に對する感動も消極的で、美しいと感じるその感じ方にもまるで力がない。

然しながら感動から直に制作に移るとは限らない。繪を創作するといふことには、卽ち感動からこれを表現する具體的な活動に移るのには、そこに構成といふ別の働きが必要であるが、その點に到達する道程として、自然から受ける感動は仕事に對する一つの契機であるといふことが出來ると思ふ。第一に感動を受けることはものが見えるといふことであり、ものが見えることは私の仕事に踏みこんでゆく氣持を刺激する。かういふことをくり返してゐながら、私は螺旋狀に高く上つてゆくことが出來るのだと信じてゐる。私はお芽出たい人間かも知れない。

然し純粹な自然の美に對する感動がその人のなかに善きものを蓄積してゆく、といふことを信ずるのは間違ひだらうか。それがほんとうにものを見る眼を開き、同時に繪を構成する力となつて働くのだといひたい。

道を步いてゐても何かにぶつかつて直ぐ制作したくなる場合と、見るもののすべてが自分を喜ばしてくれるがその喜びが直ぐ制作として現れない場合とがある。私は後の場合の方が多いが、この直接に現れないものが私に多くの善きものを與へ、間接的ではあつてもより深いものを私の制作の上に投げかけて居る。花鳥畫家だといはれる私が緣のなささうな宗敎畫にも、又音樂にも芝居にも能樂にも無限の喜びを感じるのは矢張り同じ意味からである。

可なり强い風がモチの木にあたつて、葉の茂りがサツと銀色に輝く。風が去ると、茂りはまたもとのこんもりした一塊の綠。その片側に日光が照りつけて燃えるやうに明かるい。反對の側はかげつて暗く、重厚だ。この明暗の對照が背景の青

空に結びつくと、實に力强い色の關係を見せてくる。

しま鷺が水にうつつて、その影と波紋とのいり亂れが作りだす線の面白さはまた格別だ。この淺い池には小さな川雜魚を澤山いれておいた。賢い鷺やかはせみがいつの間にかやつて來てそれをねらふやうになつた。だが私は小鳥が好きなのでたれにもそれを追はないやうにさせてゐる。

夕方庭へくる時なぞ、偶然その巧な漁師が捕へた小魚をくはへて、水の上の枝にとまつてゐるのを見かけることがある。彼の口ばしに銀色に光つた魚がピチピチ跳ねてゐる。かはせみが口ばしを左右に振りながらそれを食つてゐる。何のもの音もしない。魚も鳥も動いてゐるが、新綠の自然のなかで總てがしんと靜かだ。實に美しいと思ふ。人はそれを殘酷だというかも知れない。だがそれは見方が違ふのだ。この時の私の心はいはゆる明鏡止水といふか、泉のやうに澄み切つて、いささかの主觀も想念もさしはさまない。ただそこにあるままをうつして、それの美しさに感動してゐる。そこは色と形と線の美しさがあるだけ、私といふものすらなくなつて、私は自然のなかへ融けこみ、私の生命と大きな自然そのものの生命とが一つになつてしまつてゐる。藝術が生れてくるのも實はそこからだと思ふ。

蝶が二三羽もつれ合つて飛んでゆく。それを種族保存の本能の現れだと見るのは科學者の立場だらう。然しあの蝶が花の上へかかり、空へかかりして空間を縫ひながら飛んでゆくのを、そのあるがままに見てゐれば實に美しいではないか。線と光とのリズム、色の對照、總てが美でなくてなんだらう。

一日のうちの空氣や光、色合ひの變化のリズムの美しいのもこの頃だ。

朝早く、戸外が漸く白みかける頃一番に耳に入るのは雀の聲、それから家に飼つてある樣樣な小鳥の聲だ。人はいまだ起きてゐない。この瞬間雨戸やよろひ戸の隙間から差しこんでくる白白した光り程、童話的な美しさを感じさせるものはない。童話は私達の時代になつてもいまだ死んでゐない。それは私達の心の奥底に潜んでゐて、こんな靜寂な境地には突然

目覺めたやうに活き活きと動きだしてくる。童話は永久に變らない私達の生命の源泉につながつてゐる。花苑の方へ下りて見る。虫共もまだどこかの葉かげに潛んでゐるのだ。すべての葉つぱや花びらが露にうるほうて居る。私の心までがうるほひを持つのを感じる。水草類が美しい。中でも特別に朝の淸らかに澄んで美しさを見せるのは蓮の葉にたまつてゐる露だ。世界のどの寶石よりも立派で見事だと思ふ。

少し日の光が空にうつつてくる。人が起きて働き始める。同時に蝶、虻、雀、蜂、熊蜂、蜻蛉なぞが飛びだしてくる。睡蓮や蓮が花を開く。昨日からさいてゐた他の花なぞも、夜中少しすぼめてゐた花瓣をまたはつきりと開き直す。この時間の自然のしつとりした氣持は全くいひ現せない。自然そのものが愛だとすらいひたい程である。それは夕方日が沈んだ後の和やかな氣持とも違ふ。丁度、初夏と初秋との空の美しさが違ふやうに。そして秋は可なり朝早くから空がすむが、春から初夏へかけては、空のすみ切るまでに少し時間がかかる。日が段段高くなる。

正午。太陽の言葉のやうに蝶や虻が盛んに活動する。とりわけこれからは蟬の活躍振りが目立つてくる。小鳥共は朝が一番元氣にさへづり、正午頃になると熱心に餌を求める。

日中、午後一時頃から暑くなるに從つて小鳥は少し衰へかける。そして夕方には再び元氣を取り戻して、さへづり交はし、餌を漁り回る。

池の魚は、夜間深いところに沈んで大抵眠つてゐるが、夜明けと共に浮きだして活動する。然し雜魚類は午後三時から夕方へかけてもつとも元氣で、頻に跳ね上る。黃昏れ頃にそれが頂點に達する。水面に銀の腹がチカチカして、盛んな時はまるで夕立が池をたたいてゐるやうに見える。これは夜に近づくと彼等の好物の羽虫共が暗い茂りや葉裏から水面へ移動して群遊するからだ。鯉になると如何にもどつしりしてゐて、いらいらとして落ちつきをいつも見せてゐるが、それでも天候の工合で跳躍振りが違ふので、その道の玄人は彼の跳ね方で明日の天氣を豫知するといふ位に、氣象の變化に敏感さ

を持つてゐるのには驚く。

夕方になると、そろそろ森の隱れ家から出て、夜の世界の梟木兎なぞが活動し始める。私の庭にはよく子をつれた梟がやつてくる。親が餌をさがしてゐる間子は枝に待つてゐて、自分の居所を知らすやうにピイピイ鳴く。それが非常に可愛い氣持を抱かせた。昆虫でも小鳥にねらはれる連中は晝間はかくれてゐて、餘り出ない。かういふ虫共に限つて、夕方燈を慕つて家のなかまで飛びこんでくるのだ。それから蜘蛛——こいつが網を張つて犧牲の虫のかかるのを待つてゐる所を、行水を使ひながらぼんやり見てゐるのも面白い。卑怯な奴だと思ふが、どこかに愛嬌があつてにくめないのもこの虫だ。

エガラがやつて來た。一番小さな鳥だが、群をなして、樹から樹へ移る。美しい聲だ。それが如何にも初夏の感じに似てゐる。青葉の頃になるときまつて彼等は東山の峰つづきから澤山下りてくる。それから頰白、四十雀、小雀、瑠璃鳥がくる。瑠璃は美しい羽根を持つて、流れるやうな鈴の聲を響かす。氣持のさわやかな鳥だ。

もう苺が熟した。青い葉かげからチラチラと赤い實がのぞいてゐる。畑で摘んだのを口に入れると香りが芳醇で、味が細やかだ。朝早く露の下りてゐる冷めたいのが、殊によささうに思ふが、通の話では午後日光をカツと受けてゐる時が一番いいさうだ。苺につづいて梅、枇杷、水蜜桃が出てくるともう眞夏が近い。やがて天津桃や瓜類が顏を見せ始める。

花では立葵にヂキタリス、ひなげし、ロベリヤが初夏の景物として如何にも適はしい。それに日本的なものでは山吹、木蓮、百合、矢車なぞも捨て難い。春の花は柔かく官能的だが、初夏の花は淸楚で活動的だ。淸楚といふ感じは初秋の花にもあるが、これにはやや鋭さと冷めたさ、沈靜的なものが含まれてゐる。それから眞夏近くになるに從つて紫陽花・柘榴なぞがさく。全く夏になり切つたといふ氣持がもつとも強く出るのはあの赤い、南國的な夾竹桃だらう。

燕だ。なんと輕快な飛び方だらう。水面でヒラリとつばさを返す巧さ。心にくい程美しい。地上の廣さといふものを感じさせるのはこの鳥だ。鶺鴒が來た。彼が水の流れの岩から岩へ點點と飛び移るのを見てゐると、これもまたある廣さを連

つた意味で十分に見せる。

いつのまにか鳶が一羽、眞上の青空にゆつくりと輪をゑがいてゐる。これはまた空の廣さだ。限りない空間の大きさ。そして天と地との關係を深く感じさせるその飛翔振りは、永遠といふものにさへつながりを持つてゐるやうではないか。それが大きな宇宙の意志の現れとはいへぬだらうか。

あの木立の葉かげを縫うてゆく木葉蝶、日光のなかを飛び過ぎる白い蝶、それはその昆虫の各の生活に伴つてゐる。天眞爛熳と憂鬱、太陽を喜ぶものと陰を好むもの、色も線も形も皆それに從つて生みだされてくる。自然はそのいづれをも捨てずに、各に完全な調和を與へてゐる。ぬきさしならぬ必然さ、動かすことの出來ぬ至當さを以て、宇宙の意志がそこに働いてゐる。そしてそれは實に宇宙が緊密に結合して、どれ一つとして絶對に離すことの出來ぬ存在であることを示してゐる。

二

かくて觀る働が既に一つの解釋であり、一つの構成であるならば、この觀る働は更にその先に一層深い觀方を要求することになる。觀得たといふ解釋は、同時に更に進んで次の解釋を要求する。觀得たといふ構成は更に、進んで次の構成を要求する。觀る働によつて、その解釋と構成とは、觀ざる前には達し得なかつた高さに達してゐる。そしてこの觀る働を通して、解釋と構成とが漸次に成し遂げられる。この生長こそ觀る働の中心をなすものである。「ぬきさしならぬ必然さ、動かすことの出來ぬ至當さを以つて宇宙の意志がそこに働いてゐる」ことを觀出すのは、觀

る人にとつては實に深い歡びである。しかし今到達しただけの發見と構成とは、今到達し得た發見と構成とである。永久のしかも不變の發見と構成とではない。「純粹な自然の美に對する感動が、その人のなかに善きものを蓄積してゆくといふことを信ずるのは間違ひだらうか。それがほんとうのものを見る眼を開き、同時に繪を構成する力となつて働くのだといひたい」と紫峰氏は言つてゐる。觀る働によつて、一層觀る働が進められる。一つの働は更に次の働を進める。今見た働は、更に次の働を進める。觀るに隨つて深く、觀るに隨つて高き發達がそこにある。觀る働は決して一點に靜止する働ではない。そこに永久に進む可能と必然とがある。故にこの解決は更に深い次の疑問を産出するものである。觀得たことは、更に觀るべき要求と、可能とをふくむものである。卽ち對象に對する理解と、更に深き疑惑とを意味し、疑惑の深さを示すのである。

されば、文を綴る注意としては、

1　注意深く觀察すること。

2　觀察に秩序を與へること。

3　表現の立場に立つて觀察すること。

の三つになる。注意深き觀察と、その觀察の系統とがなくてはならぬことは言ふ迄もないが、更に表現の工夫によつて觀察することは必要である。何となれば言葉はそれ自身において、廣い幅

を有つものだからである。或る確定的な意味を持つためには、それが傾向の上で決定されなくてはならない。傾向の上で決定されるといふことは、即ち言葉が完全に象徴化せらるることである。言葉は象徴化せられて、はじめて定立する。言葉が定立したといふことは、觀る働が定立したといふことであつて、觀る働がここに、象徴としての言葉を獲得してくるのである。故に描く働の基礎は第三の條件にある。この基礎に立つて言葉は、符號でもなければ、道具でもない。その人の姿となつてくる。故に觀られたものは、言葉となつて初めて、我と對立する外界のものではなく、我の中に成立した新らしい所産となるのである。島木赤彥先生はいつも「歌心を以つて景色を觀よ。歌の心を以つて寂しさをきけ」といはれた。畫家は繪之具を以つて、自然を觀るのである。文學の作家は言葉を以つて觀るのである。

かくの如く、描く觀に立つて觀る働を進めるならば、觀る働の終つた時は、描く働が必然に生起する時である。描く間に觀る働の不十分さが明瞭になつて、猶注視の必要が生じて來る。この描く働と、描く働によつて起つてくる省察とが推敲である。言葉をかへていへば、推敲とは構想の展開と、展開の働の中で鍛錬することとである。

三

然らば描く働は如何。この描く働の推移を吟味しなくてはならぬ。

描く働には、描かるるものがなくてはならぬ。それは第一内容即ち對象である。第一内容は今存在の形で與へられてゐる。しかしそれだけでは博物學的形體としては十分であるが、まだ描くべき形とはなつてゐない。それは當然性の形をとらないからである。即ち形が、その存在の形が更に當然性によつて實現された形とならなくてはならぬ。即ち個性化されたものでなくてはならぬ。つまりその第一内容を貫くに當然性があつて、はじめて描くべき對象は成り立つのである。これを對象性といふ。この當然性を此處では第一形式と呼ぶことが出來る。第一内容が、第一形式によつて貫かれた時に、初めて描かるるものの基礎の形、即ち對象性が定位さるるのである。これが文意である。文意とは、文の成立の最初に於いて先づ成り立ち、しかも文の完成の最後に於いて、一層完全になるものである。常に文章を貫いてゐるこころの働である。であるから、文意は要旨或は大意の如く、決して智識的に要約せられたものではない。文が文として成立しない前にも、先づ作者の中にあらはれたものであり、それは無限に且繼續的に展開する可能性をもつものである。卽ち存在は當然性によつて、其の形を更に高次的に完成する可能にみちてゐる。であるから文意は、既に内容と形式とに區別することの出來ない鮮明な形を持つてゐる。博物學的記載に於いては、存在は存在として記述せられ、其の存在は内容である。記述された語句、文字

は單なる符號に過ぎない。例へば「尋常小學理科書」第四學年兒童用の「はなしやうぶ」の課には、

花の外がはの大きい美しい三枚は「がく」である。「はなびら」は三枚あつて、たいていは「がく」よりも小さい。「をしべ」は三本ある。「めしべ」は一本あつて、上の方は三枚に分れて、「をしべ」の上にかぶさつてゐる。「めしべ」のもとは花の「え」のやうに見えて、その中は三室に分れてゐる。「をしべ」の「ふくろ」から出た「こな」は虫に着いて運ばれる。

と書いてある。この形は現在あるそのままの機械的な形で、その形は自然科學的に整理せられ、靜止せられて固定し、未來に延びる形態を有たない。そこには現在以上の何者もない。何の傾向もない。故にかかる記載では、內容はあるけれども形式はない。內容と形式とが分離するのである。

然るに、正岡子規氏の

いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春ゆかんとす

の歌にあつては、まるで別な世界を作り出してゐる。この歌でまづあらはれたものは、咲いてゐるいちはつの花である。しかしその咲いてゐるいちはつの花は、咲いてゐるままの存在の形ではない。理科書にあらはれた存在の形ではない。理科書にあらはれた存在の形ではなくて、形式によつて貫かれてゐる形である。いちはつの花は存在の形が分解し吟味されるのでなくて、この花

が直ちに子規氏の觀る働の中で未來の形になつて來る。いちはつの花が咲きだしたといふ觀る働は、すでに來年はおそらくこの花を再び見る事は出來ないであらうといふ當然性が、之を支へてゐる。今目の前に咲いてゐる花は、花として觀らるるばかりでなく、その花の中に、自分の命の嘆きをも見るのである。卽ち觀る働の中で、對象はその色や、形や、香や、其の他の性質が、觀る人の形式に色づけられて、具體的であるばかりでなく、更に深い展開に向ふ形となつて來る。故にここに生じた對象性は、對象以上の高次的形體である。しかも描く働の中では、必ずそれが言葉の形であらはれてくるのである。であるから文意は言葉の形をとつた最初の視覺である。もしこの歌を、來年迄自分の命は保てないといふ意味であるとせんじつめるならば、これは智識的の要約である。卽ち大意であつて文意ではない。當然性が理知の形で概括せられたからである。文意ではあく迄、今咲いてゐるこのいちはつの花の姿の中に、來年再びこの花にあひ得る事は不可能であらうといふ自己の命を觀且感ずるのでなくてはならぬ。かくて花に命をみる感動が文意である。文意にまで達しなくては、觀る働は完成しない。隨つて描く働の出發は、この觀方が言葉の形をとり出す處に觀點を置かねばならない。

これを更に別の例でみたい。ここに瀧井孝作氏のけやきの若葉がある。けやきの若葉の觀察であつて、それが「遲速を愛す」一形に定位してゐる。

近所の路傍に大木のけやきの木が三本並んで立つて、いまはこのけやきの若葉が美しい。――先日四月の十七八日ごろ、日中六十度位の氣溫がたちまち八十度の高氣溫に上つて、日射しが急に夏めいてみえた日があつたが、この日からここのけやきの一方の枝は、虫の羽に似た光のあるやはらかい芽吹きをみせた。萠黄のこまかい若葉は片枝にだけついてゐたから、たつた一日の高氣溫にだまされて吹出た若葉のやうにみえて僕は仰向いてみたりした。

ここの三本のけやきは三本とも根元の回り凡そ三抱へ二抱への大木で、路傍に並んで立つて中央のけやきの東向の下枝がかく眞先きに若葉を見せたのだつた。それから日を追つて、この中央のけやきに欺かれたやうに吹出た片枝の若葉につづいて、ほかの枝枝も皆んな若葉をつけて來た。けれど兩隣のけやきはいまだ裸木の枝を張つて眠つたままだつたから、中央のけやきだけひとり眞先きがけの形に見えた。二番目に四月の下旬北隣の方のけやきの枝枝が芽吹いて來た。

僕は同じけやきに芽吹きの遲速のあることを知つた。近所の路の上で、みずみずしい若葉をつけたこずゑと、二番目に芽吹いた方の枝枝と、色合の段落のある風景が目に映つたりした。しかし南寄りのもつとも大木の三抱への老けやきは、いまだゆつくり閑としてなかなか芽吹かなんだ。となりに並んだ二本共こずえに新綠の葉の房房とついたのに比べて、こちらは枯れたかと思はれて、高い枝枝がみえるのだつた。

四月ぢゆう一と月病臥してやつと起きられるやうになつて緣側に立つた妻は、隣家の屋根ごしのこの近所のけやきのこずゑをながめ「あれは一本枯れましたわネ」と、新綠の所に枯枝のみえるのをさしたので「うゝん、あれは枯れたんではない、こつちの方はまだ芽を吹かんのだヨ」と僕はいつたりした。かく枯れた如く見えた南寄りの大木のけやきは、五月に入つてやつと色めいて、まづ下枝の方がぽつぽつ若葉をつけて來た。そして段段に枝枝全部新綠の色が出た。さきの二本

に比べて凡そ遲れた形だつた。それで三本のけやきは各各色合のちがつた若葉のいろを何日か見せてゐたりした。これがなかなか美しかつた。それから何日かたつて三本共略一樣の若葉の色にそろつたが、しかし一ばん遲れた大木の頂のこづゑだけは、尙五月の中旬までもかば色の葉が目立つのだつた。

　二もとの梅に遲速を愛すかな　　　蕪　村

こんなに詠れた梅の花などのことは知つてゐたが、けやきの木の若葉に遲速のあることは僕初めて知つた。三本同じ場所に在りながらなぜかしらと、幹のまはりを見たりして、樹齡の老若によるかとも考へた。中央のは二抱へ位だがまつ直ぐに立つてゐる。北隣のは同じ二抱へ位で幹の枝分れの所にこぶがある。南寄りのは三抱への大木でもつとも老樹だ。老樹はゆつくり落付があるのか精が弱いか若葉が遲いのだ。

この定位に於いて、けやきの若葉は對象である。第一內容である。そのけやきの若葉に對して、作者は作者の立場から、「けやきの木の若葉に遲速のあることを僕初めて知つた」と之を定位してゐる。これが對象性である。換言すれば形象である。故に他の作者はこの同じ若葉に對して、更に他の定位をするに相違ない。この定位が觀る働である。故に觀る働は、

　第一內容（對象）×第一形式（作者が第一內容を通して働く）→對象性

である。かくてこの對象性は意味を持つ形體、卽ち象徵形體である。

猶かかる定位のも一つの例を、やはり瀧井孝作氏の「自分の仕事」に見ることが出來る。この文の對象性はその頂點が、芭蕉の「秋深し隣は何をする人ぞ」にある。第一內容は仕事の問題で

ある。そして仕事の問題が、この芭蕉の句に集中して、仕事よりも一層深く廣い人生の感慨に達してゐる。

十ほど年下のS君は、日向の新しき村に二年ほど住み、勞働の傍ら作家になる勉强をしてゐたが、現在は、東京に出て來てはたらいてゐる。上京する前に一寸奈良にゐて僕と語合つた。「東京で勉强して作家生活もよからうけれど、何をおいても活計が大事だネ」と僕はいつたりした。S君は、村で世話になつた關係で武者小路さんをたよつて上京した。上京したら武者さんは「食ふことよりも、何かやらうと思ふ仕事の方は一層大切だ、自分の仕事はやめてはいかぬ」といはれたとS君は手紙を寄越した。僕は活計の不安の方を考へてゐた當時だつたから「さうかな」と思つた。それから二年程たつた。S君は働きながら勉强して筆も確かりして來たやうだ。上京してよかつたと思ふ。(中略)

秋深し隣は何をする人ぞ　芭蕉

芭蕉は自分で道を開拓して歩いた人だから、何かやらうといふ者に出逢つたら、深い關心を持てたにちがひない。僕、某所に住んだ折、隣の人の何もやらぬ生活をながめて何かへんに思つた氣持の經驗がある。自分は仕事を持つてゐるからとて誇り高い嘲慢な心はがうも持たないが、何もしないくらしの隣を眺めることは妙にさびしいへんな氣がされた。

この對象性を第二内容とよぶ。この第二内容は作品となる傾向にあるもので、この傾向の成熟の方向が描く働である。描く働はここからはじまるのである。もとこの第二内容は文意の性質として自然言葉になる意向を持つてゐるのであるから、此の言語化の傾向が益濃くなつていつて、一層明瞭に定位されんことを要求する。

またこんな事もあつた。ある日のこと、庭の青梅の實をもいで、笊に一ぱい盛りあげて、皆して鹽をつけて食べてゐると、父もやつて來て、「やあ、きれいな梅だな。いい梅が生つたな。よくこんな酸いものが食べられるな」と云ひ云ひ、自分でも大きい噛めば齒莖の痛くなるやうなのを取りあげて喰べたところが、おそろしく酸つぱいやうな顔したので、皆が「閻魔さまだ」と云つて笑ひました。さうして二三日して、「閻魔さま」の童謡を作りました。（久保田夏樹氏、童謡と父の思ひ出）

この父といふのは嶋木赤彦先生である。そして「閻魔さま」の童謡は次の如くである。

子どもの食べる梅の果(み)を
睨んでござる閻魔大王
えんまさま　えんまさま
お前も梅を食べたかろ
閻魔さまの口へ
梅の果一つ投げこんだ

閻魔さまが怒(おこ)らつしやつて
一口に噛みつぶし申したら
顔中の皺が
みんな口ばたへ集つた
大きな目から涙を落して
大酸(おほす)い小酸(こす)いと申された

涙落すはよいけれど
あんまり大きな目をあいて
目玉を落し申された
閻魔さまの言ふことに
梅の果は要らぬ
目玉をかへせ子どもたち　（赤彦童謡集）

この二つを比べてみれば梅の果からこの童謠の定位された消息がよくわかる。

私たちの幼い時、よく越後獅子が參りました。これは大抵幼ない五六歳の女の子で、寒さうな赤い着物を着て、春寒い甲州街道を通るのをよく見かけました。それは色の黑い、邪慳な顔の親方が太皷を叩いて女の子の後から行く。女の子は赤い足袋跣で、泣き出しさうな顔付で、親方の叩く太皷で家毎に「舞ひませうか」と云つて來る。私たちもその頃幼い子供で、よく見に行つた。そして後からぞろぞろついて歩いたものです。人通りのない所で遲れさうになる子を時時振り返つて、恐い顔をして、親方は柳の鞭で打つて泣かせながら步かせてゐるのを見かけたことがある。そんな時はどんなに女の子を可愛相に思つたか。どんなに恐ろしげにその親方が見えたか……。

私たちが大きくなると自然猿廻しとかそんなものの顔を見なくなりました。これはある日、父が私たちに話して呉れた話です。

「お父さんがね、遲くなつて學校から歸つて來ると（その時分、父は敎員でした）こんな越後獅子を見たよ。それは丁度冬の最中一月か二月の始めだつた。雪が所所殘つてゐて、湖水から吹く風は身を切るやうに寒かつた。その時、村端の暗い所で、太皷の音がどんどん聞えたので行つて見ると、小さい女の子が赤い薄い着物を着て、足袋はだしで家の門に立つ

て目に一ぱい涙を溜めて『舞ひませうか』と云ひ乍ら、凍つた土の上で倒立をしてゐた。お父さんもこれを見るとつくづく可愛相に思つた」

と云ふ話をしました。

そんなことで其時は皆で色色越後獅子のことを話しました。その後、父は「越後獅子」といふ童謡をつくり、一番終ひに「舞ひませうかと眼に涙」とありました。（久保田夏樹氏、童謡と父の思ひ出）

越後獅子

逆さ立ちした
越後獅子
兩手が足に
なりました

兩手で歩く
越後獅子
お尻があたまに
なりました

兩手離した
越後獅子
くるり廻つて

水車(みづぐるま)
くるりまはつて
可愛や子獅子(こじし)
舞ひませうかと
目に涙　（第三赤彦童謠集）

これにも亦その定位の消息が明かである。

かくの如くして第二內容卽ち對象性は、適確なる言葉となつて定位してゆく。この定位の働が描く働である。定位とは對象性が言葉になる働である。言葉にならないのは、言葉になる迄に確立してゐないのである。そしてこの言葉になる働によつて、表現層があらはれて來る。この表現層の中心が形象である。故に形象を形成してはじめて文意も確立し、言葉も確立する。

四

文の表現層に於いては、二つの樣狀がある。全一のもの、根本的のものが、各部に分化して行くのが一つ。各部が存在してゐて、その各部を貫く全一なるものが、新たに發見せらるるのが一つ。これは定位の二つの樣式である。第一の定位形式では、其の文意卽ち內容が數個の核に分化

じ、その核はそれぞれの節となり、節意が現れてくる。これは對象性が、そのままに持つてゐる側面である。此れが言葉になる働の中で、更にその進行をすゝめて、精緻になる。其處に句を生じ、更に語を生じ、更に書寫されるに當つて文字となる。此の句、語、文字が常に文意の當然なる表現である。この表現の經過に表現の層が生じて來る。

これを前の子規氏の歌でいふならば、今いちはつの花が咲いてゐるといふのは、第一內容である。それが來年は見られないといふ當然の感、卽ち第一形式に貫かれて、前述の如く對象性、卽ち文意となつて定位したのである。そして更に分化してそこに表現層を作る。卽ち「今年ばかりのいちはつの花」を観るは、其の花の色にも形にも、また葉にも、鮮かな輝がある。博物學的記述による「いちはつ」とは全く別個な「いちはつ」として、强く迫つて來るのである。そこで「咲きいでて」と言ふ言葉になつて、花によせる愛惜の心が現れ、「我が目には」となつて花の中に、自分を深く凝視して居る。「今年ばかり」の中で、花の存存が當然性を持つてゐる。去るものは去り、春は再び訪れて、「いちはつ」はこのままのにほひに咲く。永久に去らねばならぬ自分のいのちを思ふ時、そこにおこる深い愛惜の情が「ゆかんとす」である。心がその去りゆく春に集中してゐるのである。此等の語、句、文字は第二形式である。第二形式は象徵並びに形象である。ここに文字が符號ではなく、象徵としての地位に定立する。かくて形式は此の展開の最上層を示す

ものであつて、これを表現面とする。此の表現面は、當然に侵されたる存在、存在に侵されたる當然、卽ち形式と内容との完全なる一致であるから、これは符號ではないといふ意味である。それでこの描く働は、前の第一内容よりも、更に高次の形式、卽ち形式の形式によつて展開したゝのであつて、これが文意である。ここに對象性が言語化せんとする運動が完成するのである。この完成が「文」である。

この第一の定位形式は、開發性定位であるが、第二の定位形式は、收約性定位である。

そこはもう眼下になつて見える。僕等はそこに暫時佇立してゐた時に、雉子がけたたましく飛立つた。僕等はその場所あたりに行つて見たが、何も見付けることが出來なかつた。併し、僕等はその林中(りんちゆう)の道のところに腰を下ろして休むことにした。初冬の午前の日光が林中の小道(こみち)をも照らしてゐる。小鳥が啼き、風の音が幽かにするのみで、萬事がすべて靜かである。僕が東京で忙しく張つめた暮しをしてゐることを思ふと、ここの場面はいかにも不思議に思はれる。二人は無言で何か恣な聯想にふけつてゐたけれども、その障礙になるやうなものはない。僕の官能はいつか小さい蚯蚓が一つ道の上に出て來てゐるのを見つけてゐた。この蚯蚓は日に照らされると體を轉(ころ)がす。しばらく匍ふうちにまた體を轉がす。さういふ工合であるから、蚯蚓の行かうとする方向が少しも分からない。僕は土中に住む蚯蚓なら日に照らされれば苦しからう。そんなら本能的に濕り氣のある物蔭にでも這入ればいいと思ふが、なかなかさういふことをしない。蚯蚓は體を延ばせるだけ延ばして一寸ばかり匍うたかと思ふとまた體を轉がすし、折よく礫のかげなどになつたかと思ふとまた日向に出てしまふので、さういふ工合で、三十分位も經つた。そのうち加減で蚯蚓は小さい朽葉(くちば)の下に潜つて行つた。そこは日の光も射(さ)さず、濕り氣もあつたので蚯蚓はそこに潜みかくれるだらうと僕は思つた。さうすれば、あんなに體を轉轉反側し

なくとも濟むだらう、さう思つて見てゐると、蚯蚓は再び朽葉から體を出して日向へ匍ひ出した。そして日に照らされるとまた體を轉がしはじめた。僕は急に身を起して、「いまいましい畜生だ」といつて靴で蚯蚓を踏みつぶした。蚯蚓は僕にはひとごとではなかつたゞらう。（齋藤茂吉氏、念珠集中の續山峽小記）

この文で、「いまいましい畜生だ」といふ點と、「蚯蚓は僕にはひとごとではなかつたゞらう」といふ點との二點において定位する。これが文の形象である。この文の層位はこの定位に達するために展開して來たものである。故にこの文はこの定位を得てはじめて系統が定まつて來る。ここに文の收約性定位がある。

その何れにしても、描く働は、

對象性 × 作者（言葉を用ひて）→ 作品

となるものである。この場合對象性は、第二内容であり、文の意味である。言語は第二形式であり、文の表現面である。故に描く働は、意味が形式化する事に外ならない。されば「觀る働」と「描く働」とを連續して一連の展開とすれば次の如き形が出來る。

觀る働　對象（第一内容） × 作者（第一形式）（對象を通して働く） → 對象性

描く働　對象性（第二内容）（意味） × 作者（第二形式）（言語を用ひて働く）（表現面） → 作品

故にこの兩者を連續的にみて、

（對象×作者）×作者→作品

であつて、作者の必要が重大なる價値を有つてくる。作者に作者が重なることが、卽ち定位である。（小著、繪畫に於ける線の研究、參照）

五

以上によつてほぼ定位の問題は明かであるが、この定位卽ち創作の過程について、マックス・デッソアルは四つの階段を立ててゐる。

第一階段は感激である。感激とは第一內容が一擧にして當然化されたことである。卽ち精神化された內面的興奮のその最初の狀態である。之は來るべき作品の最初の形であり、然かも作品に向つて進まんとする要求に滿ちたものである。これは言葉や、文字にならないでは居られない狀態である。

第二は構想の階段である。これは來るべき作品の最初の形、卽ち形式化の最初の姿である。そ

こで文意は節意になる。
第三の階段は迅速なるスケッチで、これは當然化の働が進んで來て、かなり豐富な語、句が産出される段階である。
第四は最後の實現、即ち完成の段階である。ここに於いて文字が定位される。即ち表現面の成立した時であつて、ここに形式化、當然化が完全に成立する。
以上の四階段は、之を前の創作の推移にあてれば、第一階段の感激と、第二階段の構想とは、觀る働に屬する。構想は對象性の定位である。第三階段の迅速なるスケッチと、第四階段の最後の實現とは、描く働に屬する。この關係を更に精しく吾等の態度より考究すれば、次の如くなる。

六

第一階段の感激。先のいちはつの歌の例でいふならば、之を傍から見ると、このいちはつの花の感激は、花を貫く當然の結果である。しかし感激した人自身の意義、心持から言へば、當然に感激したのでなくて、いちはつの花に感激したのである。いちはつの花をとほして作者が働いたと感ぜずして、いちはつの花に卽したと感ずるのである。卽ち感激は自分を感動させた方向にお

いて、感激させたものと結合するのである。故にこのいちはつの花は、理科學的ないちはつの花と異つて、著しい輝を持つて來る。であるから、感激の狀態は主觀的であつてはならない。客觀的な面目を持つてゐなくてはならない。强く感動したものである以上、其の形態はそれに對する人を、必ず深く感激せしむるに相違ない。故に客觀的態度のとれないものには、推敲してもそのままの形では展開することが出來ない。

そこで感激は感激の形でなくて、感激させたものの形として、卽ち對象の形として現されなくてはならぬ。それは博物學の形をとるかとも考へられるが、しかし博物學の形は感激を除去した形である。つまり感激以前の形である。これは感激があらはになつてゐない形である。ただこの博物學の形には感激がないといふまでであつて、その形の基礎にも猶感激がないといふ意味ではない。すべてよい仕事といはるるものには感激があり、背後を貫いてゐる激しい熱意がある。激しい感動と熱意なくしては、たしかな仕事は出來ないのである。藝術だけに感激があるのでないことは勿論であるが、藝術はこの感激の形をそのままに取り、科學は感激を一度表現層の最低位に沈澱させてから、はじめて形となるのである。そして藝術でさへも、その感激が最上位、卽ち表現面になくて、その下にあり、各層を貫いてゐる支持の傾向となつてゐる。ただその形は感激によつて變形せられてゐても、之を歪とは感じない。これを歪と感ずるのは、博物學的吟味の結

果である。ここに藝術的形體と博物學的形體との相違がある。

本居宣長はその自筆の覺書によれば、寶暦八年、二十九歳の夏に「源氏物語」全講の講義をはじめ、三十七歳の明和三年六月六日の夜に終つてゐる。滿八年で、聽講者は九人であつた。長い講義である。今ならばこの間に中學二年生が大學を卒業してしまつてゐる。その講義が一先づ終へてほつとしたと思ふと、その翌月の七月廿六日には、また第二回の全講をはじめた。今度も講義は夜で、聽講者が一人ふへて十人である。その第二回の講義の終つたのは、それから八年五ヶ月を經た安永三年十月十日である。宣長はこの時四十五歳になつてゐる。二十九歳ではじめた「源氏物語」の全講が、第二回目を終つた時には、もう四十五歳になつてゐるのである。四十五歳になつてゐるから、これでもうやめたのかと思ふと、また第三回をはじめた。しか第二回は十月十日夜に終つたので、それから年末迄休んでゐる。けれども第二回をはじめた時とは違つて、すぐに翌月から次を始める程に、英氣に滿ちてはゐなかつた。年が明けて、翌安永四年の正月になると、その廿六日夜からいよいよ第三回をはじめた。聽講者は前回と同じに十人である。この第三回の終つたのは天明八年の五月十日である。第一回の八年、第二回の八年五ヶ月よりは、ずつと年數がのびて、十三年かかつてゐる。四十六歳から五十九歳迄である。やうやく年をとつて、氣

もゆるやかになり、その上講義の材料も豐富になつたものと思はれる。とにかく二十九歳から五十九歳迄、人間の盛の滿三十年間を、「源氏物語」の講義につかつたのは、實に根强い根氣である。宣長は年七十二歳で死んだのであるから、第三回の講義の終つてから十三年後である。

ここに生活を一貫して持續せしめてゐる大きい力を感ずる。人の一生を文章とすれば、これはその文意である。身を以つて描いてゐる大きい文章を讀む心がする。

七

前に引用した樣に、榊原紫峰氏は、

然しながら感動から直に制作に移るとは限らない。繪を創作するといふことには、卽ち感動からこれを表現する具體的な活動に移るのには、そこに構成といふ別の働きが心要であるが、その點に到達する道程として、自然から受ける感動は仕事に對する一つの契機であるといふことが出來ると思ふ。第一に感動を受けることはものが見えるといふことであり、ものが見えることは、私の仕事に踏みこんでゆく氣持を刺戟する。かういふことをくり返してゐながら、私は螺旋狀に高く上つてゆくことが出來るのだと信じてゐる。(靑草の上にて)

と言つてゐるが、この感動から移つて行く構成がなくてはならぬ。これデッソアルがその第二階段で構想を考へる所以である。この構想は來るべき文章の最初の形である。感激の階段では省察がなかつたのに、また隨つて系統がなかつたのに、ここに於いて當然なるものの性質を明かにし

て來て、全構成が形をなしはじめる。この構想の中に於いて、あらはに見ゆるものが、見えざるものによつて支持せられてくる。この支持が卽ち構想である。

當然なるものの働が明らかになつてくると、ここで感激は靜かになつてくる。卽ち描く働はおつと落ちついてゐる時である。感激の狀態は落ちつきかねる狀態である。生徒の場合では、この時提出された存在の前で騷しくなるのであるが、この狀態に來て、落ちついてくる。受身の態度から、作るものの積極的の態度に定立したのである。ここにおいて混亂より靜止の方向をとつて來るし、散漫より集中の方向をとつて來る。

もともと形となる爲には、秩序がなくてはならぬ。對象がこの秩序を得たものが、對象性である。對象性は秩序によつて、對象性たり得る。この秩序が文の文體である。言葉はこの秩序の繼續である。文の力は、この構想の秩序から生じたものである。文意の秩序が力である。その秩序が不明であり明確である時には、文を品位ありとする。文の調子はこの秩序の進行の姿である。言葉は內部的に、この秩序の自らなる姿として分泌せられる。

更にもつと意識的に構成する例を二つここに擧げる。昭和五年の十二月に「東京朝日新聞」に載せられた「爐邊物語」中の二篇で、何れも五回續であつたが、ここに引用したのは、前者はその一と二、後者は一と四と五とである。

筆の犯罪

一

探偵小說が他の文學と違ふ點についてよく次のやうな事がいはれる。

通常の小說は「何が起るだらうか」といふ事を描寫して行くに反し、探偵小說では「何が起つたか」を描寫して行く。その結果として通常の小說の最後の章に當るものは、探偵小說では第一章に出て來なければならない。

今、一つの例をとつていふと、ここに甲乙といふ若い男女が、十二月一日に偶然に途上で相會した。同月五日に仲がよくなつた。十日に丙といふ邪魔者がはいつて來て二人はそのために仲が惡くなる。二十日に丙が死んで遺言に自分の惡かつた事が書いてあつてそれが甲乙に分り、大晦日に二人は目出度く結婚した、といふ話があつたとする。通常の小說では十二月一日から筆をおこして行つても少しも差支がないのである。

ところが探偵小說だと趣が甚だ違ふ。甲乙が十二月一日に相會つた。五日に戀し合つた。十日に丙といふ人間が出て來て二人の仲をさからうとする。うまく行かない。いろいろ惡計をめぐらした末、大晦日になつて甲乙のいづれかを慘殺した、といふ話があつたとして、このままの順序で行つてはいはゆる探偵小說にはならない。この探偵小說の第一章は大晦日の事件の描寫でなければならないのである。

「大晦日の深夜、突如鳴りひびくピストルの音、かけつけて見れば甲の慘死體――そも犯人は何者ぞ」

といふ所から出かけなければならない。卽ち順序が全く逆になつて行くのだ。

だから探偵小說家が第一に頭に浮べる所はその小說の結末である。その結末が卽ち彼の作の第一章になつてくる。

どんな小說だとて「出た所勝負」では書けはしまい。いくら作者でもさう自由に作中の人物を結婚させたり別れさせたり

は出來ないだらう。然し探偵小説になるとこれが絶對的なものになつてしまふ。なぜなら事件の結末を、いきなり冒頭に書いてしまふからである。

第一章に死體にしてしまつた人體を、途中で生かすわけにはいかない。無論生かす法もあるけれ共、それならそれでちやんと伏線を書き込んでおかなければならない。都合によつて生かしたり殺したり出來ない所に探偵小說の不幸がある。

だから探偵小說家がストーリーを考へてまづ頭に浮べるのはその結末であり、まづそれから書きだすのである。

二

結末を第一に考へて逆に事件をもどしてくる。さうして書きだす時はやつぱり結末から出て行く。

そこでかういふ事がいへる。探偵小說ではその第一章若くは序曲をいれたはじめの部分がもつとも重大なものである。ところで下手にまごついたが最後、ぬきさしならない苦境に陷らなければならぬ。

ところで第一章以前にあるもの卽ち題名はどうだらう。

これがまた重要な役目をしてゐる事は爭へない。

この點に關して歐米の作家は、わりに平凡な題をえらんで居るやうに見える。その平凡さが却て何ものかを豫期させる役に立つてゐるやうだが、ともかく比較的簡單である。

我國の作者を見ると、實にこれが又うまい人が多いので驚く。僕なんか、題から思ひついた事はないのだが、まづ素ばらしい題を頭に浮べると、自然にストーリーが出來るなんていふ作家がゐるのは、實にうらやましいとも何ともいひやうがない。

通常の小說の作家には隨分さういふ人が居るといふ事を聞いて居るが、探偵小說家にも居る。題のつけ方なんかもたしかにその人の腕である。……題は探偵小說でも他の小說でも同樣大切だが、探偵小說家が特に苦心するものに作中の人名

がある。
通常の小說でも、いい役とわるい役と出てくるものだが、探偵小說ではそれが一層はつきりしてゐるだけに、うつかり實在の人と符合するとまことに困るのである。
シヤーロックホームズといふ人が實際居たとしても、決して大してくさりはしないだらう。しかし人殺だの、殺される役にまはる人物と同じ名の人がゐたら餘りいい氣もちはしないに違ひない。……もちろんひどい惡漢を書く時は有りさうもない突飛な名をつけるのも一つの方法ではある。たとへば蛇島だとか、蛭峰だとかいふのがいいかも知れないが、これではじめから讀者にこれは惡人に違ひない、と底を割つて見せるやうな事になり易い。
のみならず、探偵小說はリヤリズムの文學であるといふ以上、餘り出たらめの名を書いたんでは讀者は馬鹿馬鹿しいと思ふ。そこでどうしても平凡な名をもつてくる事になるのだ。
ここで一寸內輪の話をすると、ある作家は電話帳をパラパラとひつくり返しながら名を探す。ある作家は××會名簿といふやうなものを名の種本に使ふ。もちろん、電話帳なり名簿なりの姓名をそのまま使つては、明かに實在の人の姓名になるから、右のページの姓と左のページの名をくつつける。かやうにして得たコンビネーションも、どこかに實在の人となつてをるだらうけれども、それは作者の知らない事だから少しも氣にはならない。
しかし一番危險なのは無意識にひよいと知人の名を書く事である。これは何も探偵小說に限つた事ではないけれども、探偵小說ではとかく殺したり殺されたりするのでどうも工合がわるいのである。(濱尾四郞氏)

「種」をひろふ

一

不氣味な人殺しの話だの、風變りな泥棒の話だのを、どこから種を拾つてくるのかと、私はよく人から訊ねられる。大體のところをいへば、日常の新聞で報ぜられる各種の犯罪、あれは、案外小說の材料にはなり難く、例へば、散步してゐる途中でどこかの曲り角をひよいつと曲つた拍子に、突然、何の前觸れもなくある着想をつかんだり、または何かの本を讀んでゐる時に、その中からヒントを獲るといふ場合の方が多いのである。作家の素質の問題にもあることだが、場合によつては、極めて合理的に、最初、人殺しなら人殺しといふケルンを置き、次に動機、人物、配合といふやうに、ほとんど建築家的組立て方をすることもある。……

着想のうちで、何しろズバ拔けて變つてゐるのは江戶川亂步氏である。氏の如くへんてこな事を考へだす人は、外國にだつてさう多くはゐない事と思ふが、氏自身の口から語られた事で、私がたつた一つだけ知つてゐるものは「鏡地獄」といふ作品の種である。

筋の大體をいふと、ここにあるレンズ狂がある。彼は各種のあらゆるレンズを愛好し、また凸面鏡凹面鏡等、變つた種類の鏡を集めて、極めて變態的な興味に醉つてゐるのであるが、ある時巨大な球體の鏡を作つた。球の內面壁が鏡になつてゐて、大きさは、人が入れるだけの大きさを有つたものである。彼はその鏡の中へ入る。さうして、鏡に映つた、あらゆる想像を絕して奇體な映像のため、ゲラゲラ笑つてゐるうちに發狂する。さうして、家人が驚いて驅けつけて見ると、室內には彼の身をいれた鏡だけが、ゴロンゴロンと轉がつてゐる、といふ筋なのである。

亂步氏傑作中の一つであるが、氏はこれを雜誌「科學畫報」の中から種を拾つたさうである。卽ち「科學畫報」には質疑欄といふものがあつて、科學上の問題を讀者から訊ね、これをこの學界の權威者が說明し回答するといふ仕組になつてゐるのであるが、その中に「球體の內面を全部鏡張りとしてその中心に物體を置いた場合には、鏡面に如何なる像が結ばれるか」といふ質問があつた。亂步氏は、この質問をふと見付て、それからあの名作「鏡地獄」を生んだのだつた。……

四

最後に、筆者自身のものについて。

子供の頃、私は信州の山奥で育つた。さうして山や川へよく遊びに行つた。ところが、ある日のこと、友達の惡太郎達と一緒に、村境を流れてゐる天龍川を越して隣村の山へ遊びに行き、その歸り、天龍川の橋の上で、非常に氣味の惡いものを見た。

橋の上からのぞくと、川の水が薄い綠色に濁つてゐて、それが岸をチャブチャブと洗ひながら流れてゐる。岸には、沈床といつて、木のわくに石を詰め込んだ防水工事が施されてゐるのであつたが、ふと見ると、この沈床に、白い籠のやうなものが引つかかり、それが水の中で、ユラユラと搖れてゐたのである。

最初私は、それがどういふものだか分らなかつたが、ひとみを定めて見てゐるうち、人間のあばら骨であるといふことに氣がついた。さうしてそのことを友達にも告げた。が、友達は、人間のあらば骨ではない、大きな犬のあばら骨だらうといつた。結局、水際まで降りて行つて確めるといふほどのことをせず、そのまま村へ歸つてしまつたのだが、するとそれから暫く時日が經過して、恐るべき犯罪事實が發覺したのだつた。

私の村からは約二里ばかりの北に當る、しかし、同じ天龍川の上流に沿つた朝日村といふ村の出來事であるが、そこの水車精米業を營んでゐた勝太郎といふ男が、數名の女を慘殺して、その生膽を奪つたといふのである。

大體をいふと、勝太郎は、夜になると村のさびしい場所に待ち構へてゐて、そこを通りかかる女があると、その女の首を絞めて殺し、自宅水車小屋の中で生膽をえぐり取つた上、死體は發覺を怖れてバラ〳〵に切り離し、天龍川へ投げ込んでしまつたのである。

私はこの事件と、前に見た妙なものと照り合せて、あれこそ、勝太郎に殺された女のあばら骨であらうと、實は今に至る

もさう思つてゐるのであるが、當時は何しろ子供だつたし、大人達は、たれも私の話を取あげて吳れず、一方問題のあばら骨も、それから後どうなつたのか、私自身でさへ再び調べに行くほどの元氣もなく、そのままになつてしまつた。多分川下へ流れ去つたことなのだらう。

が、そこでかうした勝太郞が捕縛された時、子供心にも私の頭へ、一番强く印象を殘したのが、當時勝太郞は自分の犯行を自白しながら、奪つた生膽の處分について、何一つしやべらなかつたといふ一事である。生膽は、多分癩病かあるひは何かその他の不治の病の、迷信的な藥とされたものだといふことは考へられる。だが勝太郞は、その藥を依賴した人間の迷惑を思つたのか、生膽をやつたもしくは賣り渡した對手の人間について、斷固として口を閉ぢてゐたといふ。私にはそれが非常に面白く感じられた。さうしてそれからほとんど卅年近く經つた去年の春、それを種にして「宙に浮く首」をものして發表したのだつた。

五

實在の事件以外のものでは、例へば「情獄」といふ一篇で、その中に、風呂場で人を殺す場面を描いた。あれは一昨年の夏を平塚で過ごし、その終り際に箱根に行つて、姥子溫泉の秀明館へ一泊した夜、ふつと思ひついたものだつた。

秀明館のふろは、多くの溫泉中で私の大好きな奴の一つであるが、元來が、相當グロテスクな感じのある風呂である。不便な場所だから電燈の設備がなく、古風な石油ランプを使つてゐて、そのランプのおどろおどろしい光の中に、巨大な岩が突きだしたかげになつて、深い淵のやうな溫泉があるのである。

浴槽が三つあるので、そのうちの一番深いのに入つてゐた時、私は、一人の子供が、湯の中を潜つて、隣の浴槽へツーツと拔け出して行くのを見た。二つの浴槽の間仕切りが、厚い石の壁になつてゐる。ところが、この石の間仕切りには、水面より下のところに、相當大きな穴がくり拔いてあり、二つの浴槽の湯が、その穴に通ずるやうに出來てゐる。子供は湯

の中で、その穴を潜つて行つたのだ。
私は面白いことに思つた。さうして、子供の眞似をして、ブクブクツと湯の中へ頭ごと浸けて、穴の口へ顔を近づけた。が、この時、ハツと思つて、周章て、逆戻りしてしまつた。何故といふに、私は、身長が五尺二寸しかないけれど、體重は二十貫ある。それで、非常に肥つてゐる。穴の幅が、子供には通り拔けられても、もし私にはせま過ぎて、例へば首と肩とだけ突つ込んだ時に、ぐいつとそこでつかへてしまひ、穴を拔けて向ふへ行くことも、こちらへ戻ることも、兩方とも出來なくなつたらどうするか、それを考へると、ゾーツとして來たのだつた。
湯の中に顔も何も入つてゐるので、助けを叫ぶことは出來ないし、さうしてゐるうちには死んでしまふ、とさう考へると、つくづく怖くなつて、時も時、その時には、子供きり湯の中にゐたのではあるし、生命拾ひをしたやうに思つた。
半年の後、私は、ふとその時のことを思ひだして、「情獄」の中に使つたのである。亂歩氏が、「あいつはいい」といつて賞めてくれたが、多分、實感がかなり強く手傳つて書けたのであらう。目下手元には、思ひつきだけを書いたノートがある。だが、これ等の思ひつきが、どれだけ、ほんとうの種として役立つことやら。(大下宇陀兒氏)

觀る働が解釋であり構成であるから、觀られたるものは、觀られたるままの形では居ない。觀られたるもの、感ぜられたるものは、考へらるるものと直に接續し融合して一つの新らしい形を構成する。構成は積極的である。かくて感じたるものは、感ずることと、考へることとの一致である。それが秩序を得て、論理的關係が明かになるのが、考へる働である。これが言葉となり文字となることは、表はされることであり、これは感じ考へられることであつて、最初の感じたる

ものの定位である。ここに感じたるものが決定して、形を得るのである。

觀る働　　　　描く働

感じたるもの――整へられ秩序を得て――表はされる。

（感ずること・考へること）の一致　　考へられる　　感じ考へられる定位（感ずること・考へること）の高度の一致

この關係の中樞にあるのが、この構想である。かかる構想を通ずることによつて、感じたるものは全部的展開を遂げ、部分は常にその基本的なるものの展開となる。これから得る秩序は平明である。平明とは秩序の自然なる姿である。

かくの如くにしてここに現れた形は、今作り出された新らしい形である。それは具體的な形で保たれて居るから、概念的ではない。其の具體的なるものは、感ぜられたるものの象徴であるから、決して符號ではない。常に生生として居、且存在以上の形である。で此の形は觀る働によつて作られるものであるが、それは同時に描く働によつて養はれるものである。如何となれば其の感動は言葉にならうとする傾向を持つて居、描く働によつて形を成し遂げるからである。故にそれが描く働の方向に向つて進むといふことは、展開の第三の過程となるものであり、最初の迅速

なるスケッチにあたるものである。これは構想の働が定位しつつ僅かに形をあらはしだしたものである。このスケッチの中で、構想は猶進行を續ける。そしてこの階段は文章の形では節意をなすものである。隨つて常に觀ないでは書かないこと、同時に觀たならば書くことを原則にしなくてはならぬ。ここに概念の混入を防ぐことが出來るであらう。

八

第四にデッアルは、最後の實現といふことを言つてゐるが、迅速なるスケッチから最後の實現までには、なほ多くの段階が必要であつて、迅速に且容易に進行し得るものではない。先づ簡單迅速なスケッチの後に力點附加の段階が生ずる。力點附加とは節の間に價値の相違を附加することである。「いちはつ」の例によれば、花の形色、葉の形色、樣樣であるが、その中心となつたもの、卽ち秩序となつたものは、いちはつの花の咲いた點である。そして其のいちはつの花が、來年を待ち得ない自分の命と關係し結合せらるる所に力點がある。これが象徵の比較點である。そして他の一切はこの基礎から展開する。

この力點附加によつて、節の定位が完全となり、はじめて文の構想がはつきりして來る。故にこの心構へは、深さに達しようとする物の觀方には、必ず現れて來るのである。例へば日本の茶

室に於いては、庭に花草を植ゑず、只床に一莖の花を活けてゐる。此の花は茶室の庭の全部の草木を象徴するものであつて、この一莖の花があつて、庭の植物の全部が生生として生きて來る。この床の花に力點を附加することによつて、庭の一切の植物は生きてくる。卽ち庭の樹も草も、此の花によつて象徴せられる。かくて力點附加の問題は、文を形象に集中する決定を意味するのである。

ここに一例をあげる。

夕顔に大いなる蛾のめぐりけり

といふ俳句がある。これを「夕顔を」と變へてみる。

夕顔を大いなる蛾のめぐりけり

この兩者の相違は單に一つの言葉、「に」と「を」との相違にとどまらず、全然ちがつた定位をなして來る。卽ち「夕顔に」と言つた場合には、夕顔棚附近の景觀である。ほの白く咲いた夕顔の花があり、猶もろこしや、ささげの丈高い茂りも見える。それが夕ぐれであつて、大きい蛾が夕顔を、或はその夕顔のあたりをめぐつてゐる。ここに「に」によりて示されるものは、夕顔棚を中心にした農家の夕の景觀である。然るに「を」によつて示されるものは、それ程に廣いものではなしに、青く太く垂れてゐる夕顔の太い實をめぐつて飛ぶ大きい蛾である。故に「を」の示すも

のは、夕顔棚の景觀ではなくて、一つの夕顔とそれをめぐつてゐる一つの蛾とである。されば「に」にありては風景を示し、「を」にあつては靜物を示すのである。

同樣のことが

物洗ふ前に螢の二つ三つ

物洗ふ前を螢の二つ三つ

の上にも言ひ得る。「前に」は物洗ふ川邊の景觀であり、「前を」は物洗ふ女の周圍である。故に「を」と「に」との相違は、單なる一語の相違ではなくて、實に文の全體の相違になる。「に」と「を」とは文の象徵の中心だからである。これを「形象」とよぶのである。文にこの形象を徹せしむること、卽ち文を形象化することが、力點附加である。

夏目漱石氏の「三四郎」の中で、三四郎が先生の新らしい轉居先に行つて掃除をする處は、あの小說の中でも特色のある一つの場面である。この「三四郎」の家に或は關係を持つかと思はれる、漱石氏が一時居られた本鄉臺の家は、今でも殘つてゐるといふことである。その庭は平な何の工夫もない庭である。白水でもまいて土を養つたかと思はれて、四五月頃になると、一面に苔ともつかず、地の黴ともつかぬやうな青いものが、土の上にうかび出して來る。この土の先に樹立がある。座敷の中ではその樹立がよく見えない。みえるのは地の上に落ちてゐる樹の蔭である。土と樹の蔭とでこの庭は作られ、日影が移るにつれて、樹の蔭も亦移る。青い土の上に落ちる、そして變化して行く樹の蔭をみるのは實に樂しいと

いふことである。この庭で觀るものは第一に土である。どんな庭でも土を見ないことはない。土は庭の存在としては最小限度の存在である。土をとつたら庭はない。芝生があつたり、コンクリートで堅められたりしてゐるのは、これはまた別の「土」を感じさせるが、とにかく何等かの形で土を感ぜぬ庭は、私達には想像が出來ない。この土を除くとあとに樹の蔭がある。有るものは樹でなくて、樹の蔭である。かういふ閑寂な庭は、心に思ひうかべてみるだけでもたのしい。

庭のことでまた思ひ浮べるものは、利休の庭である。利休の泉州境の庭は、海岸ではあるが、この庭の周圍を木で圍んで、すつかり海を隔ててしまつた。庭のどこからも海は見えないが、ただ一所、手洗の所からだけ海が見える。冷たい清い水で手を洗ふ。そして顏をあげると、庭の繁つた樹立が少しきれてゐて、そこから海がみえる。海を見ずして、海を感ぜしめるのである。清涼な心持である。漱石氏の庭で、樹を見ずに、木の蔭を觀る心持と相通じてゐる。ここでまた小川芋錢氏の庭をも、思ひ出すのである。芋錢氏の庭は、常陸の國牛久沼の畔の丘の上にある。庭の下はすでに沼である。沼の方には栗の大きい樹が立ち並んでゐて、私の訪ねて行つた時には、沼の水は見えなかつた。冬になつて木の葉が落ちて、枝がまばらになつたならば、或はその間から、水が見えるかもしれないが、道傍の土手の上に蕗の白い綿毛などの風にふかれてゐる晩春の季節には、綠の蔭も深くて、沼の水は全く見えなかつた。疊の上にすはつてゐると風がくる。この風が沼の水のにほひをもつてくる。風をかぐと、沼の近くだと思ふ。水鳥の羽音がする。それから蛙のぐつぐつといふ聲がする。私の鄕國の信濃では、蛙の聲はもつと細く鋭くて、天から聞えるのであるが、ここの蛙は、如何にも沼の蛙らしく、ぐつぐつと水の中で鳴いてゐる。そのぐつぐつといふにぶい聲が、きこえてくる。此の風のにほひと、蛙の聲とを聞くと、この庭を沼續きだと思ふ。私は話の間間に、ぢつと沼のけはひに感じ入つて、全身沼であるが如くに感じたのである。沼を全くけはひで感ずるのである。（小著、東洋美論）

この「けはひ」で感ずるといふことは、存在を存在として感ずるのでなくて、存在を當然なるものの中で感ずるのである。存在を象徴として感ずるのである。即ちこのけはひこそ文の「格」で

ある。形象である。文の構造はけはひに達してはじめて完成したものと言ふべきである。漱石氏の庭は、その庭の木と土と太陽との關係を、木の蔭によつて象徴したものである。故に此の形象は蔭にある。利休の庭も、芋錢氏の庭も、何れもこれと同じに、けはひを明らかにすることによつて、庭の形象が明瞭にされてゐる。

ここに於いてはじめて、最後の實現に近づくことが出來る。この構想の展開を通して寫す働が展開して來る。言葉が構想の出發であり、同時にその完成である。文章は言葉になる傾を持つてゐたから、文章が展開するにつれて、言葉が完成するのである。であるから描く働は觀る働と共に、進行してゐる。"Lope De vege" に、「わが胸に感ずることを、頭でも明瞭に感じてこそ、ほんとの愛である」といふところがある。胸に感じたことが、頭にも感じられるやうに、はつきりした形をとつて來て、卽ち秩序を得て來て、初めて愛も實現の姿となるのである。感じ得ることが、考へ得ることになつて、觀る働が初めて如實であるといひ得るのである。如實であり得ることによつて、觀る働がなり立つのである。

私は寫生帳を作つて日記風につけて見た。かうして物を觀る稽古をするうちに幾度か念頭に浮んだ疑問は、自分は果して物の自然を寫してゐるであらうかといふことであつた。ある時はあまり教訓的になり過ぎて、活きたものを死物のやうに

扱つて居たやうな場合もあつた。ミレェは「物事は常にその根本から觀ねばなりません。ここが唯一眞正の地盤である」と言つてゐるが、物を根本から觀て、それから自由に其の枝葉に渉ることができるやうになれば、これが寫生の極致だらう。

（島崎藤村氏）

物を「根本から觀る」ことには、二つの意味がある。第一は節の上に力點の附加がされることであり、第二は感ぜられたものが自覺されることである。この觀得たものが根本のものであるかどうかは、この自覺に力點が附加されて居るかどうかできまる事である。しかしこれは觀る働の上からすれば、故意になされる事でなくて、自然になされることである。故にそこには自分が自然を觀るのでなくて、自然から學ぶのであるといふ心持がある。「自然を會得しようと學ぶより外にはありません。私達が常により明かに自然を啓き現はさうといそしむ時に、私達は益發見することが出來るのです」とロダンが語つた樣に、自然に對して忠實になる外はない。これが根本的にみることの意味である。この寫生が深まると共に、自らにして形象の定立が行はれ、その定立によつて、描く働くが定立するのである。故に構想とは此の描く働を、觀る働によつて展開せしめることである。この觀る働に集中して、描く働を深めるのが構想である。故に文章を正すといふことは、先づ心を正すことになる。この消息を藤村氏は「飯倉だより」の中でいみじくも記してゐる。

十七八歳の頃私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中程までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場へ通ふうちには、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更に復た一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飮んで居た次によく分らなかつた水瀬の急い遲いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷い溫いも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出來た。板子なしには溺れるの外なかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところ迄は自分も到達し得たやうに感じた。けれどもそれ以上に進むことはなかなか容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人なぞを見た時は全く感嘆してしまつた。文章の道にも誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州小諸に居た頃私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを必掛ける。唯當りさへすればいい。左様いふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へとんで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は高慢で煩い「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正すことを私達に敎へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。これは文章の道にも宛筬めて見ることが出來る。唯好き文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道ではない。眞に好き文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ自己から正してかからねばならない。

この事は古くから考へられたことで、例へば田能村竹田の「山中人饒舌」にも

同一の山水、靜かなる者之を作れば卽ち觀者をして自ら靜かならしめ、躁しき者之を作れば卽ち觀者をして自ら躁しからしむ。同一の花鳥も、之を筆端に寓化する者此を作れば、卽ち觀者をして時を撫し、興を寄せ、以つて天機を樂しましむ。形似を專らにし、利を圖るもの此を作れば、卽ち觀者をして目悅び情淫し、其の心自から蕩らしむ。蓋し作る者斯の心を以つて寫し、觀る者斯の心を以つて符す。

といひ、作者と作品と觀者との間には、完全なる連結のあることを明かにしてゐる。それは「萬里の外千載の後、其の間毫髮を容れず。譬へば猶ほ射の此に發して、聲の彼に應ずるが如し」である。

この作者、作品、觀者の關係は、之を更に細かにして作者の心と表現との關係にすることが出來る。これが「心と筆」との關係である。これが製作の「法」である。「法」は外にはない。

柳公權云く、心正しければ卽ち筆正しく、筆正しければ卽ち人を正しからしむと。故に作る者宜しく法を以つて作るべく、觀る者宜しく法を以つて觀るべきなり。

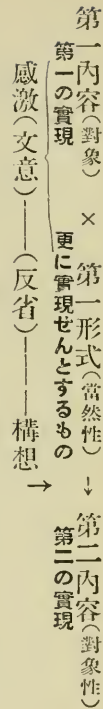
といふ竹田の結論が出て來る。

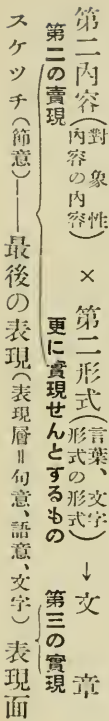
九

以上の考究に基いて、觀る働と描く働とを總括すれば、次の如くになる。

對象卽ち第一內容は存在の形である。この存在は一つの實現であるが、これは更に作品となつ

てより高い實現に達せんとする。この要求を實現するものが、第一形式である。第一形式は當然なるものの形である。この兩者の結合が感激である。感激が更に第一形式によつて當然化される働の中に、反省があらはれ、構想の形に向つて進んでゆく。そして構想のほぼ成立したこと、卽ち次の迅速なるスケッチに進むことが、觀る働の成立である。故に觀る働は次の如くである。

第一內容（對象） × 第一形式（當然性） ↓ 第二內容（對象性）
第一の實現　**更に實現せんとするもの**　**第二の實現**
感激（文意）――（反省）――構想 →

この第二內容卽ち對象性は、「內容の內容」であつて、第一內容に比して一層高次の內容である。これが筋である。それに第二形式が働く。この第二形式は、「形式の形式」であつて、第一形式に比して、一層高次の形式である。そしてそこに最後の實現たる文の表現面がある。表現面にはその象徵の中心卽ち形象があつて、その文の實現の中樞的地位を占める。故に描く働は、

第二內容（對象性 內容の內容） × 第二形式（言葉、文字 形式の形式） ↓ 文章
第二の實現　**更に實現せんとするもの**　**第三の實現**
スケッチ（節意）――最後の表現（表現層＝句意、語意、文字） 表現面

象徵と形象

である。

かかる文の發生は、生物の發生によく似てゐる。全體的なる或るものが基礎にある。その全體的、基礎的なるものか、部分を分泌する。全體をなすものは感激である。部分が先にあつて、そして結合して後に、全體を生ずるのではない。芽の發達と同一である。故に文の觀察は、發生學的の見地からしなくてはならない。かかる發生的見地から文の作らるる働、卽ち構想の展開が吟味せられなくてはならぬ。

第五章　構想の展開形式

一

ここで發表する材料は、東京市下町の某小學校尋常六年の甲乙二組について得たもので、昭和三年一月中旬より二月上旬における作業に屬する。この「雪」は第一回を豫告なしに出題して一月十六日にかかせ、それから廿一日たつた二月六日に之を推敲し、その三日後の二月九日に再び推敲し、この三回で終らせてゐる。これが甲組である。乙組の方は一月十七日、二月四日、二月七日の三回に、甲組と同樣の順序で續けられた。この授業者は甲組の受持訓導であつて、乙組の方は綴方だけを擔任して居る。余はその教室を一度も見てゐないので、この成績の處理は、この受持訓導の言を參考とし、成績そのものについてした。甲組は女ばかりで四十五名、乙組は男女混合で三十九名である。この通學區域には震災後のバラック建が多いので、この事情が、文の中にあらはれて來る。

この觀察の目的は、推敲の間にどの樣な構想の展開を示すかを知りたいことが第一である。隨つて第一回と第二回との間に、可成り長い日時を置き、第三回は第二回の直後にした。第一回と第二回との間の長いのは、それだけの間がなくては第一回の成績を訂正することが困難であらうと思つたからであるが、三週間といふ、その日數には別に根據がない。この間隙をどの位にすべきかは、今後の觀察を待たねばならぬ。第一回にかいた記憶がほぼうすらいで、再び新らしい心組で、自分の綴方に向ひ得るには、この位の日數を要するかと憶測したのである。第二回と第三回との間の短かいのは、第一回と第二回との間に展開したものを、第二回にかいて、猶不十分であるのを反省させて、その觀察と興味との消えぬ中に、一擧にして爲しとげてしまはうとするのである。故に第一——二回は主として觀る働の展開である。第二——三回は主として描く働きの展開である。かういふ成績をこれからみたいと思つたのである。ただし生徒には二回迄推敲することはいつてあるが、何の目的であるかは、知らせてない。生徒の意識ではよく書くためだとのみ思つてゐ、教授者にもこの旨は通じてなかつた。

これが主目的であるが、副次的目的は、綴る力と讀む力との連絡である。この連絡では讀む力を先として、綴る力を後とするのが、是迄一般の傾向である。讀方と綴方とを連絡させる場合には、必ず讀方を先にしてそれから綴方を導かうとする。讀方は模範文の位置、少くとも出發とし

て、生徒の綴る力の全方向を傾向づけるものとして用ひられて居る。しかしこれについては久しく疑を持つて居た。むしろ反對に讀む働の基礎として綴る力があり、綴る力の歸結として讀む働が來、それからまた新らしく綴る力が展開して讀む力に向ふのだと思つて居る。この「雪」は東京市で當時使用してゐた「尋常小學讀本」卷十二第十九課の「雪」に連絡するものであり、甲組ではこの連絡で讀方の研究授業が行はれた。

この文をかくについて、文題を豫め告ぐることをせず、第一時の始に初めて之を出題した。それも第一時には時間のはじめに簡單に雪を觀察の形でかくことを注意したに止まり、第二回の始にはその生徒の成績の數種について、之を教師が讀んで共同研究をした、第三回のはじめには、次の文を印刷して生徒にわたして共同研究をした。この文は長野縣の某小學校尋常六年女生徒の成績である。これは生徒にもすぐわかる程の缺點があつて、之に支配される心配なく、他山の石として對し得るものと考へたからである。

「雪やこんこ、あられやこんこ」えんがはから弟の聲……つと起上つて見ると、ガラス越しにちらつと眞白な雪。「まあ雪」と私は思はず叫んだ。「姉ちやん、雪が降つたよ。早く出てごらん」と奥から妹がかけて來た。寢卷のままえんがはへ

出て見る。家も木も皆眞白で、丁度銀世界のやうだ。朝顔を作つた植木鉢の上にも、お父さんの大じにしてゐた菊の上にも、眞白な雪が說いてゐる。ふと向ふを見ると一羽の雀が寒さうに柿の木の枝にとまつてゐる。近所の小さな子供たちがうれしさうに「わつわつ」とさわいでゐる。向ふ隣の一郎さんが面白さうに雪をかいてゐる。「さうだ雪をかこう」。私は家の中へ入つた。着物を着て顏を洗ふのもそこそこに外へ出ると、もう妹がかいてゐる。雪の上へ「雪」と云ふ字を書いて見た。手の先が切れる樣につめたい。二寸も積つてゐる。車の跡が二すぢ長長とついてゐる。二の字二の字の下駄の跡が七つ八つ。「まあきれいだ」ととつぜん妹の聲がして上を見てゐる。見ると柿の木の枝が眞白になつて丁度おとぎ話の枯木に花をさかせたやうに白い花が咲いてゐる。しばらくはじつと見とれてゐると、「姉ちやん、早く雪かかない」と妹にいはれて、又雪かきを持ち直す。「早くして。兎をこしらへるから」。妹は白い息を出しながらごしたさうにせつせつとかいてゐる。私もかき初めた。向ふのおばさんが笑つて「たんとおたのしみな」といつた。お母さんが出てきて「そんなに面白いの。冷たくないかネ。もうおこたはいい火だから早くしてきておあたり」「もう少しで終へるから今直ぐ行くわ」又かき初めた。「とうふう。とうふう」と、とうふ屋が寒むさうな聲を出して、白い息を出しながら通つた。向ふの酒倉から大きな酒だるを洗ふ音かごとごとと響いてくる。そしてもうもうと暖かさうなゆげが上つて、若い衆の歌聲も元氣よく聞える。やつとすむ。雪で眞白になつた柿の木の間から、うちのかまどの煙突から上る煙がちらちらと見えた。

二

以下成績について、甲組から漸次に考察する。一ノ一、一ノ二、一ノ三は第一の生徒の第一回、第二回、第三回の成績なることを示す。二ノ一、二ノ二、二ノ三、以下同一である。

一ノ一　「ぼたんぼたん」と、雨だれになつて落ちる雪のとけた水。今まで、眞白に積つてゐた雪も、晴渡つた空に輝や

いてゐる。美しい太陽のよはい光にとかされて、雨だれのやうな水玉になつて、とたん屋根をつたはつて、軒ばにと落ちてくるのである。細い裏路には雨だれのおち合ふ度に飛ぶ水玉が、けむりのやうなきりになつて、あたり一面にひろがつて、大通りから入つて來る人を包んでゐる壯觀は、瀧つぼのふちに立つてきりをかぶつた人かの如くにも思はれる。

一ノ二　「ぼたんぼたん」と雨だれになつて落ちてくる雪のとけた水。今まで眞白に積つてゐた雪も、コバルト色に晴渡つた空に輝やいてゐる美しい太陽の、はげしい光にとかされて、雨だれのやうな水玉になつて、トタン屋根をつたはつて軒場にと落ちてくるのである。細い裏路には雨だれの落ち合ふ度毎に飛ぶ水玉が煙のやうなきりになつて、あたり一面にひろがつて、大通から入つてくる人を包んでゐる美しさは、瀧つぼのふちに立つて、太陽の美しい光を受けてきりの中に立つてゐる人かの如くにも思はれる。

この第一の一と二との成績の間には、著しい展開がない。この文の觀察點は雪の融ける所にある。一ではそれが煙の樣にとび散る處を、瀧つぼの處に見る壯觀としてゐるのに、二では壯觀といふのを不穩當と思つたとみえて、程度をさげてゐる。その外では、「晴渡つた空」といつてゐるだけのものを、これではコバルト色といふ具體的な描き方にしてゐるのみである。それが三になると、瀧壺の形容をすつかり除去して、屋根からすべり落ちた雪の描寫をしてゐる。ここになつて前の靜止態から、鮮かな運動態に轉向して來た。そしてそのおちて來た雪の觀察もあつて、一と二とには見られなかつた生彩を生じて來る。この生徒では、二と三との間において、構想が

展開してゐる。

一ノ三「ぽたんぽたん」と雨だれになつて落ちてくる雪どけの水。今まで眞白に平たく、きちつと積つてゐた雪も、コバルト色に晴渡つた空に輝いてゐる美しい太陽の烈しい光に負けたのか、所所トタン屋根が水にぬれてはつきりとした體をあらはしてゐる。軒下には雪のとけた水が雨だれのやうにおちてくる。其の落合ふ度毎に下にたまつてゐた水はぴよんと小さくはねる。其の時家の横丁の方で、「ばちや」と大きな音がした。私は「何んだらう」と思つて、すぐ表へ出て横丁へと廻つて見た。それは大きな雪のかたまりがおちたのでした。私はおもしろくなつていつまでもみつめてゐた。白い所に黒い所。その雪はまだらでした。そして私はなほ雪の黒くまだらな所がとけて穴のあいてゐることにも氣がつきました。

二ノ一　氣持よくねむつてゐると突然兄さんが「あッ雪だ雪が降つてゐる」といふ聲にたちまちゆめは破られた。すぐにとび起きて見ると、白ざとうのやうな眞白い雪がふつてゐる。これじや犬小屋もぬれて、さむいだらうと思つて、着物をきて外へ出て見ると、犬は小屋の出口に出てクンクンないてゐる。弟はもうマントをきて、炭を糸でいはへて、雪をいつぱいくつつけて喜んで私に見せてゐる。お母さんも「小僧さんも雪で困るだらうね」といつてゐる。それから家で勉强をしたりあそんだりして一日をすごした。

二ノ二　氣持よく眠つてゐると突然兄さんが「雪がふつて居るよ早くおきて見てごらん」と言つたので私は飛起きた。お父さんもお母さんも兄さんも弟も皆おきてゐる。私が一番おそいのだと思ひながら時計を見ると八時になりかけてゐる。どうしてこんなにおそくなるんだらうと思ひながら、がらす戸を開けて外を見るとどこもここも皆眞白だ。ことに屋

根などは、人がふんであるかないからすうとたいらになつて一寸も積つて居るやうに見える。植木などは枯れてしまつてゐるけれども、まだ少しのこつてゐるところへ雪が降り積つて、枯れた細い植木でも雪がふつてつもるので、ふわりと細い枝に積る。よくあんな細い所へでもおちないでつもつてゐるのかとおもふと、感心する。物乾しざほを見ると、さほは細くて丸るいものだ。そしてつるつるしてゐるから、雪がつもりつもつて、するりとおつこちさうになつて、あめんぼう見たいな雪の細長いものが出來た。そのうちにお母さんが「何をそんなに見てゐるの。中にお入り」と言つたので、家の中へは入つた。

この第二の生徒は日常生活の方面から、雪をみてゐる。一で小僧さんの困ることを言つてゐるのは藪入だつたからである。二には之を省略して、屋根の雪、植木にふつてゐる雪を、かなり細心に見てゐる。それが三になると、自分の母に對する心持からかきはじめて、一と二とにある見におこされた事はぶいてゐる。それから弟のことも出て來る。雪についての觀察が進むにつれて、平常の心持が雪に結びついてくる。雪を理科の様に外界のものとして、冷かにみる心持から、それを自分の事實としてみる心持に展開してゐる。それが外に降つてゐる雪ではなくて、自分の家庭にも降つてゐる雪になつてゐる。それと共に、二にあつた物ほし竿の雪の叙述は省略せられた。外界から家族の上にかへつて來たのである。その上に自分の心持も、はつきりと反省されてゐる。

二ノ三　「ほんとにこれでは困りますね」「さようでございます」お母さんが近所の人とお話をしてゐらつしやる。いつもの母なら「よいお天氣で助かる」とか「今日は上天氣で氣持がよい」とかいふのである。今日はどうしたんだろうと思つて上を見ると、ガラス越に眞白な雪。ああだからお母さんは困まるといつてゐるのだ。こんなさむい日にお母さんは水仕事をして、朝は暗い中からおきてゐらつしやる。お母さんより私は三時間もおそくおきるのだ。お母さんは雪をいやがつてゐるけれども、私はなぜかあの眞白い雪の降る事がすきだ。私は雪といふとすぐにとびおきる。今朝もうれしいのでおきて見た。ガラスを開けて見ると、まあ眞白。弟が雪釣をして遊んでゐる。下をみると眞白い雪をだれがふんだのかくつのあとだの、げたのあとがついてゐる。上を見るとぼたん雪の大きいのがどんどんふつてくる。私はなほもつづけておとうさんの大好なとこなつを見た。とこなつの花のかれた所へ、雪が一つぶ、ぽつかりのつてゐた。その様子はとてもきれいである。まるで白雪が花のはなびらの所へぽつりと、さいたやうである。弟は私の所へ來て「何をしてゐるの。大きい雪だるまを作るのだから見てゐてごらん」と言つて、方方の雪をかきあつめて來た。私は、「お前に作れるものか。作つたつて大きいのはだめよ」と言つたら、弟は、「姉ちやんなんかだまつてゐればいいんだよ」と言ひながら、小さい雪だるまのかつこうにたものを作つた。中からお母さんが「寒いから早く中へおはいり」といつたので、弟と一しよに家の中へ入つた。

次の第三の生徒は、夜の雨がいつか雪になるところに、觀る働を出發させてゐるが、それをぼんやり父母の會話からきいてゐるのである。この邊は自然であるが、そのあとは何も特殊な觀察をしてゐない。そして三回にわたつて別に構想の發展もない。ただ第三回はそれ前に比べるとやや內省的になつてゐる。構想の發展の殆どないこの平板な傾向の生徒でも、最後には觀る働が、

外から內に向ひ、內觀の働になることが理解せられる。これは重要なことである。觀る働の深化の向ふ所を明かにしてくれた感がある。

三ノ一　昨日の晩はあめがふつてゐました。私はあめのふつてゐることはしつてゐましたが、その時はもう九時でしたから、もうねてしまひました。それで今朝私が目をさましたのは五時半でした。その時お父さんとお母さんと二人で雪の話をするのをきいたやうな氣もちがしました。お父さんは私がおきる頃にはもう會社へ出かけました。私は雪のふつてゐるのをしらないで朝おきてみたらば、すこしつもつてゐましたので、うれしいなつと思つてゐると、だんだんはれて雪がだんだんとけてくるので、その時にはあいつまでもふつているといいけれどと、私は一人ごとをいつてゐました。おかあさんが「榮子おまへなにいつてゐるの」といひました。そうしたら弟もまねをして笑つてゐるのでづいぶんこつけいでした。

三ノ二　昨日の晩はあめがふつてをりました。けれど私はあめのふつてゐることはしつてゐました。あめのふつてゐる時にはもう九時でしたからねてしまひました。その朝目がさめましたのは、五時半で其の時お父さんとお母さんの聲がなんだかしんときえるやうでした。私はしづかにきいてをりましたら雪の話しでした。ああ又雪がふつたのかと思つてゐるうちに、そのままねてしまひました。それで私がおきる時にはもう會社にでかけてゆきました。雪はだんだんつもつてきましたのでうれしいと思つてゐると、だんだんとはれてきました。其の時はあいつまでもふつてゐるといいけれどと、私は一人ごといつてゐましたら、おかあさんが榮子をまへなにいつてゐるのといひました。

三ノ三　昨日の晩はあめがふつてをりました。けれど私はあめのふつてゐることはしつてゐました。あめのふつてゐる時にはもう九時でしたからねてしまひました。その朝目がさめましたのは、五時半で其の時お父さんとお母さんの聲がなんだかしーんときこえるやうでした。私はしづかにきいてをりましたら、雪の話でした。ああ又雪がふつたのかと思つてゐるうちに、そのままねてしまひました。いそいで私がおきる時にはもうお父さんは會社にでかけてゆきました。雪はどんどんつもつてきましたのでうれしいと思つてゐると、だんだんとはれてきました。其の時はああいつまでもふつてゐるといいけれどと、私は一人ごといつてゐましたら、お母さんが榮子おまへなにいつてゐるのといひました。

四ノ一　きのうの朝私がおきてみますと、雪がちらちらとふつていました。時計はいま七時十二分すぎでした。私が「お母さん雪がふつているわ」とお母さんにいいました。お母さんはしつたふりして「ええふつているわ。さつきからよ」といゝました。私はなんだかまけたようなきがしたので、お母さんに「なん時ごろから」と私はききました。お母さんは「六時ごろよ」といいました。私は「そう」といつてだいどころのおてつだいにかかりました。それから私は弟をおこしますと、弟はねむさうなかほをしてああああとおほきなあくびをしました。私は弟に雪がふつているんだからそとへいつて雪なげをしようとおだてました。弟はそれでもへいきです。友だちはもうむかひにきました。友だちはなんといふかとおもうと、雪なげをしようといいました。私は「それごらん。友だちだつていふぢやないか」と私は弟をおこして、ひろい通りへでて雪合戰をしました。私はどんどんとぶつつけました。弟は私をねらつてゐました。私は弟をねらひました。私はおもはず弟のかほへぶつけてしまひました。弟はいたいといひましたから、私は弟のところへはしつていきました。弟はなきませんでした。私はやねの方をみますともう日がさしていました。雪はとけはじめました。やねの方をみますとぴかぴかとひかつてゐました。

四ノ二　きのうの朝私がおきてみますと、雪がちらちらとふつてゐました。そとをとほる人はみんな「おおさぶい」といつて、き物に雪がたかつたのを、ふるひながらとほります。私は時計をみますと、七時十二分すぎでした。「お母さん、雪がふつているわ」と私はお母さんにいひました。お母さんはしつたふりをして「ええふつているわ。さつきからよ」といひました。私はなんだかまけたようなきがしたので、お母さんに「なんじごろ」と私はききました。お母さんは「六時ごろよ」といひました。私はそうといつてだいどころのおてつだひにかかりました。それから私は弟をおこしますと弟はねむさうなかほをして、ああああとおほきなあくびをしました。私は弟に雪がふつているんだからそとへいつて雪なげをしようと私が弟をおだてしまいました。弟はそれでもへいきです。友だちはもうむかひにきました。友だちはなんといふかとおもうと雪なげをしようといいました。私はそれごらん友だちだつていふぢやあないかと私は弟をおこしてひろい通へでて雪合戰をしました。私はどんどんとぶつけました。弟は私をねらつてゐました。私は弟をねらひました。私はおもはず弟のかほへぶつけてしまいました。弟はいたいといいましたから、私は弟のところへはしつていきました。弟はなきませんでした。私はやねの方をみますともう日がさしていました。はのうへに雪がおもさうにたれていたのに、いまはもう雪はとけはじめてぴかぴかとお日様のかをがみえだしました。

四ノ三　きのうの朝私がおきてみますと、雪がちらちらとふつてゐました。そとをとをる人はみんな「おおさぶい」といつて、き物に雪がたかつたのをふるいながらとほります。私は時計をみますと、いま七時十二分すぎでした。私が「お母さん、雪がふつているわ」と私はお母さんにいいました。お母さんはしつたふりをして「ええふつているわ。さつきからよ」といいました。私はなんだかまけたようなきがしたので、お母さんに「なんじごろ」と私はききました。お母さんは「六時ごろでせう」といいました。私はそうといつてだいどころのおてつだいにかかりました。それから私は弟をおこしますと、弟はねむさうなかをして、ああああとおほきなあくびをしました。私は弟に雪がふつているんだからそとへいつ

て雪なげをしようと私が弟をおだてました。弟はそれでもへいきです。友だちはもうむかへにきました。友だちはなんといふかとおもうと雪なげをしようといいました。私は「それごらん友だちだつていふぢやあないか」と私は弟をおこしてひろい通りへでて雪合戰をしました。私はどんどんとぶつつけました。弟は私をねらつてゐました。私はおもはず弟のかほへぶつつけてしまいました。弟はいたいといいましたから、私は弟のところへはしつていきました。弟はなきませんでした。私はやねの方をみますと、もう日がさしていました。はのうへに雪がおもさうに、たれさがつていたのにもう雪はとけはじめて、ぴかぴかとお日様のかをがみえはじめました。

この第四の生徒も、構想の發展しないことにおいては、第三回と同樣である。その最初に到達した所から、僅かに二で葉の雪のとけた觀察を加へ、三は二と少しも變らない。一の成績ではすぐれてゐる樣に見えながら、その後全く展開し得ない。かういふ生徒は第一回だけでおけば、他の何れの生徒よりも、優秀であるやうにみえるが、その實可能性は少いのである。母との會話は細かにかいてゐるが、その外に雪の主題と觸れる所には、それ程のくはしさがない。この生徒の興味は、自分の身のまはりだけで、自分から離れたものに向けらるる興味は甚だ少いものと見える。女性は一般に自分より時間的に或は空間的に遠いものには興味がないのであるが、この生徒もその一人で、自分のプライベエトの生活に埋れて、それ以外一歩も出す、それをくりかへすにすぎないであらうか。自分のまはりの人と人との人事的な交渉だけに興味があつて、それから離

れれば、何れの部面にも全く興味を失ふ。自分の母、自分の弟、自分の子供。それも自分に觸れた方面だけに興味があるのである。しからばこの娘のこの先の生活も、また自分の家の一間と、そして隣一二軒との交渉で、他の世界に何があらうとも、全く無關係に、自分の長火鉢と茶碗とをふいてゐるに過ぎないであらう。この文に對して、慘然たる狹少を感ぜずには居られない。この石の様に狹く堅い生活を廣めくつろげてゆくのが、その生徒に對しては第一に肝要であらうと思ふ。狹いが故に一擧にして到達し、あとはそれをくりかへすにすぎない。成績のわるい子供の圖畫や綴方にみらるる優秀なものが、實はこの種のものに過ぎぬことがあるのは、注意すべきであります。

五ノ一　八時をうつた時計の音にふと目をさました。「ああ雪だ」とおもわずさけんだ。いそいで出て來てまどをあけて見ると裏の家の屋根の上は一面の雪でおほはれてゐる。土の上にはもうだいぶ人があるいたと見へて、眞中だけは黑いどろどろの雪になつていた。ふとふりかへつてね床を見ると妹や弟はすやすやとねてゐる。おもはず、「雪が降つているよ」とどなりました。するとねていた妹が一人目をさますと、あとの弟も目をさまして、「なに、雪。うれしいな」と弟がさけぶと妹も「もう、つもつた」といつてどやどや大きな聲をして、さわぎだした。みんなは一どにおきてしまつた。

五ノ二　時計の音にふと目がさめた。「おやいまうつたのは八時かしら」とまどの方を見ると、なんだかうすぐらいか

らまどをあけてみると、雪がどんどん降つてゐる。今朝は雪がふつてゐるから、すこしうすぐらくて、まだ七時ごろかと思つたのでした。裏の屋根は眞白な雪で一面におほわれてゐる。土の上にはもうだいぶ人があるいたと見へて、道の眞中だけは黒くどろどろの雪になつてゐる。その雪をじつと見つめていると、はやく着物を來て、外へ出て、雪だるま、雪うさぎなど、こしらへたり、雪つりなどをするありさまが走馬とうのようになつて心の中をいそがせた。妹や弟はすやすやとねている。おもはず、「雪が降つてゐるよ」といふと、ねていた妹や弟が目をさましてしまつた。外へ出て見ると、すぐ目についたのは家家のてんとの雪で、一面の綿のやうに思はれた。雪はどんどん降つてゐる。もう時間がおそいから二の字のげたのあとなどはあまり見へなかつた。けれども、枯木につもつた雪は、花も恥ぢらふばかりの美しさであつた。電信柱の線にも白い雪のつぶがつもつてゐた。

五ノ三　時計の音にふと目がさめた。「おや今うつたのは、八時かしら」と、まどの方を見るとなんだかうすぐらい。たちあがつてまどをあけて見ると、眞白で、しかも、綿をちぎつてなげたような雪が、おしげもなくどんどんと降つて來る。今朝は雪が降つてゐるから、すこしうすぐらくてまだ七時頃かと思つたのでした。裏の家の屋根は綿のやうにおしげもなく降つて來る雪で一面おほはれてゐる。土の上を見るともうだいぶ人が歩るいたと見へて、道の眞中だけはひさしぶりで降つた雪がかわいそうに黒いどろどろの雪になつてゐる。どんどん降る雪は、それにつりこまれて眞黒になつてしまふ。その雪をじつと見つめてゐると、雪のとけない中に、外へいつて、雪だるま、雪うさぎなどこしらへるありさまが走馬とうのやうになつて、心をいそがせた。すぐ外へいつて見ると、すぐ目についたのは家家のてんとの雪で一面の綿のやうに思はれた。雪はどんどんふつてゐる。もう時間がおそいから、それで人通りの多い所だから、二の字の下駄のあともくちやくちやになつてゐた。けれども春を待つかれ木の上は、春の野に咲く花も恥ぢらうばかりの美しさであつた。電信柱の線にも白い雪のつぶが顔を見せてゐた。

第五の生徒は、二において展開をした。一では「八時をうつた時計の音にふと目をさまして」とある觀察を更に展開させて、「おや今うつたのは八時かしら」とうたがふ處にかき出して、その狀態を、精しくかいてある。道の融けてどろどろしてゐる所は、この上展開しがたくてそのままになつてゐる。それから弟や妹をおこす處があつて、そのあとに外の景色がある。この二の展開は、自然であるし、且精細でもある。しかしこの展開は二で終つて、三にあらはれない。ただとけた雪の上にふる雪のことがふへただけで、二でとまつてしまつたのである。これでみると展開にも色色の樣式のあることがわかる。一―二で展開するもの、二―三で展開するもの、一―二―三と順次に展開するもの、全くしないものの數種があり、その展開の仕方の上にもまた樣樣の個性がある。

六ノ一 「雪やこんこあられやこんこ」と妹の聲にとびおきた。私はほんとうかしら、妹のこつたから、うそかもしれないと思いながら、ねまきのまま店へでて、ガラス越しに外を見た。妹のいつたように、雪はちらちらふつてゐる。そばにゐたお母さんが「なんだねそのかつこうは。こじきがものもらいにきたようだね。早くねまきをきかへなさいよ」といわれて、いそいで、洋服ときかへて、店へ出た。おむこうの屋根を見るともう一寸ぐらゐにつもつてゐた。往來の道を見ると今朝もう誰か雪をかたづけたのであらう。ちやんとすみの方へ雪がおいてあつた。ふる雪は人が通るたびにけされていつた。私は一尺ぐらいつもつたら面白いな、けふ一晩中降つてくれればいいがな。もし男だつたら「竹馬にのつて遊ぶん

だがな。ああ男に生まれればいいんだがなあ、つまらない」など思つてゐると、奥の方から「富美ちゃんごはんですよ」とよばれて奥へ入つた。

六ノ二　「雪やこんこ、あられやこんこ、ふつてはふつては又ふりつもる」といふ妹の歌にとびおきた。私は雪なんか降つてないだわ。妹の事だからうそかもしれないと思ひながら、ねまきのまま店へ出てガラス越しに外を見た。妹の歌つた通り雪はちらちらふつてゐる。そばにゐたお母さんに「なんだねそのかつこふは、こじきがものもらいにきたようだね。早くねまきをきかへなさい」といはれて、いそいで奥へ入つて、洋服ときかへて店へ出た。向いの家の屋根を見るともう一寸ばかりつもつてゐる。往來の道を見ると今朝もう誰かが雪をかたづけたのであらう。ちゃんとすみの方へ雪がかたづいてある。ふる雪は人の通る度にけされたり、二の字をのこしたり、くつのあとをのこして行く。むかふの方をみると、お屋敷の屋根につきでてゐる高い木は雪を頭にのせて、ぼうとかすんで見えた。すると奥から「富美ちゃんすまないが、お花を買つてきておくれ」とお母さんの聲がした。私は「いやだな。この寒いのに、あああ」とためいきをついた。又お父さんの聲がして「富美子いやなのか、行かなくてもいい」と、お父さんのおこつてゐる聲がしたので「はあつ」と思つたが「いま行くのよ」と、奥へお金をもらいにはひつて、しぶしぶながら、お花を買いにいつた。行く時は、手をポケットの中へいれていつたので手が寒くなかつたが、かへりはお花をもつてゐたので、手がちぎれそうにいたかつた。行く道の家家のガラスはどの家もしめてあつた。電車通の坂は、人一人通らないし、雪はどんどんつもるから平になつてゐた。

六ノ三　「雪やこんこあられやこんこ」といふ妹の歌にとびおきた。私は雪なんか降つてないわ、妹の事だから、うそかも知れないと思ひながらねまきのまま店へ出て、ガラス越しに外を見た。妹の歌つた通り雪はちらちら降つてゐた。そばにいたお母さんに「なんだねそのかつかふは、こじきがものもらいにきたようだね。早くねまきをきかへなさい」としか

られて、奥へ入つて、洋服ときかへて店へ來た。向いの屋根を見ると、もう一寸以上つもつていた。てんとを見ると雪がのつかつて重たそうにおされてゐる。往來の道を見ると、もう誰が雪をかたづけたのであらう。ちやんと、すみの方へ、かたづけてある。だからふつてもきえる方が多い。となりの方は、かたづけてないから、人があるくと、二の字やくつのあとを殘して行く。むかふの方を見ると、お屋敷の屋根につきでてゐる高い木は雪を頭にのせて、ぼうとかすんで見える。そして、自分は「ゑらいぞ」といふようにつんと眞すぐに立つてゐた。すると奥から「富美ちやん、すまないが、お花を買つてきてくれない」とお母さんの聲がした。私は「いやだなこの寒いのに、あああ」とためいきをついた。又奥からお父さんの聲がして「いやなら、行かなくてもいい」とお父さんのおこつてゐる聲がしたので、「はあつ」と思つたが「いま行くのよ」と奥へ入つて、お金をもらつていやいやながら、お花を、かいにいつた。手がちぎれるようにつめたかつた。行く道道どの家をみても、みなさむそうにしてゐた。あるくたびに「しやりしやり」と音がした。空を見あげるとどんよりとして、そこから雪がふつてくるのだらうと思つた。電車道の坂は人一人通らないので、平になつてゐた。行く時は、いやいやながら、いつたけれども、かへりは元氣よく家へかへつた。

第六の生徒は、最初から自分の感をかいてゐる。二になると花かひに行く一節を加へて、文の內容を大きくしてゐるが、一方には自分の男と生れなかつたことを後悔する一節を削除してゐる。三になると二の形を少しく大きくして、しかもそれを確定した形にしてゐる。この生徒の見方には、精緻なものがあるといふ程ではないが、どこかに明かるい、しつかりした處がある。その上に材料を盛にして展開させて行く一方、既に書いたものの中から除去してゐる。卽ち材料に

輕重關係をつけてゐる。感をすぐに出さないで、細かに見ることが出來れば、味が出てくるに相違ない。かき方のはつきりしてゐる割に、どこか輪廓の不明瞭な處があるのはこの爲である。

七ノ一　私は起きてえんがはの戸をあけてみると、そこいら一面はまるで、おさとうやしほをまいたように眞白です。どうして終のお正月なのに、雪なんかふつたのだらうとおもふと、雪がうらめしくなりました。けれど雪だるまや、雪兎がつくれると思ふと、ちよつと父ゆかいなきがした。だけどはねつきや何かをする方がいいとおもふと私は頭の中がごじやごじやになつて、どつちが、ほんとうにいいのかおもしろいのか。わからなくなつてしまひました。けれど雪はどんどんとふつてゐます。

第七の生徒は一つの困惑に居る。そして最後に「けれども雪はどんどんふつてゐます」といふあたりは、人の力の如何ともし難い、自然の偉大さに觸れてゐる。二になつては、その困惑も落つき、平靜な態度で全く觀方を變へてゐる。雪が降るか降らないかを母と問答するあたりから、雪にふられてゐる南天の姿も、街頭の光景も、この生徒らしい情景で現されてゐる。三になつては、街頭の光景を削除して、ただ交通巡査の外套の雪をかいてゐるだけである。すると南天と手洗場がこの文の中心になつて來た。一の困惑が二の情景になり、更に三の統一をもつ靜視に縫つてくる處に、子供ながらまとまつた一つの展開をなしてゐる。訂正によつて激越になることはな

い。この平靜、この持續に達して來て、はじめて深さが見える。

七ノ二　私は朝、起きて「今日はずいぶんくらいわね。雪でも降つてゐるのかしら」と、お母さんにいひますと、お母さんは、「ええ降つていますよ。とてもきれいですよ」と、おつしやいましたので、私は大いそぎで雨戸を開けて見たら、にはの南天の葉の上に、雪が落ちて其の下から赤い實がちよこちよこと出ているのは、まるでルビーのようできれいだつた。そして、電車の中から、外を、見ると、外を通つてゐる人も、自轉車へのつている人でも、何だかさぶさうで、しよんぼりしてゐた。とまれ進めのおまはりさんもなんだか、今日はがいとうをきてしよんぼりたつてゐるようすは、ほんとうにさむさうだつた。

七ノ三　「妙ちやん。雪が降つて居るよ」といふお母さんのこゑに起されて、目をさました。私は「あら。雪」といひながら大急ぎで起きて、えんがわへ出た。外を見ると、どの木も〱眞白だつた。南天の木の葉の下から實が出ているのはほんとうに、ルビーのようできれいだつた。はばかりの手あらいばちのそばの雪は、水にとけてまるで氷水のうよだつた。私は外へでた。けれど、何だか雪をふむのがおしいようなきがした。止進のおまはりさんが、雪のつもつたがいとうをきてたつているのもさむさうだつた。

八ノ一　ふと私が目をさました。話ごえが聞える。私は耳をかたむけた。するとお父さんのこゑで、雪がふつて居ると言ふ話が聞えた。私ははつと思つて戸をあけて見る。外には氷がふつてゐる様につめたい。私はだれに言ふとなく十五日と言ふのにつまらないと言ふ。そしてお使にゆく。歸つてきて、のき下で雪をつかんで弟にやる。お母さんはそれをみて

つめたいからおよしと言つた。私はよした。そして御飯をたべて學校へゆく。

八ノ二　私が目がさましますと、戸のすきまから雪がちらちらふつてゐるのをみえます。私は大きな聲で妹をよびおこしました。妹は姉ちやん雪だるまをこしらへないと言つた。私はそれではお母さんにきいてからといひました。妹はすぐお母さんの所へいつて、お母さん雪だるまこしらへてよいといつたら、お母さんはあとでつめたくなるからおよしなさいといつた。妹ははいといつて下えおりていつた。私は戸をあけて植木だなをみると松の葉が白く花火のやうです。植木鉢の土に雪がかかつて白くてきれいですが、所所に黒い土の見えるのもきれいです。私はその樣子をみつめて居りますと、下でお母さんのよぶ聲がします。私ははいといつてすぐ下へ下りていつた。私がお母さんなあにといつたら、お母さんはお使ひにいつてちやうだいといひました。私は、はいといつて外へ出ました。外へ出ると、ひやりとする。家の前の車のわの廻りがきれいです。學校のやねをみますと、とたん屋根の所が一面に白い雪がつもつてゐました。そして私は電車通へいきました。電車の線路の上に五分ぐらいのあつさに向ふの方までつづいてゐます。私はお使ひをして歸つて來た。

第八の生徒は、父母の話で雪の降るのを知ることから、お使にゆくことをかいてゐる。しかしそこには觀る働が少しも働いてゐない。それが二になると、戸の隙間から雪の見える印象的な描寫ではじめて、雪だるまを作る可否を母親にたづねるだらだらした描寫となり、次に植木棚の描寫になる。雪の下からみえる土も感が鮮かである。使に出ての町の景色はその觀方が不安定である。一では著しく貧弱であり、觀る働も描く働も全く缺けてゐると見えたこの生徒が、二でその

缺點を回復して來た。中中適應し得ぬ生徒、卽ち普通にはだめと見られてゐる生徒の中に、實は適應の甚しくおそい生徒のあることが、ここでわかる。

八ノ三 雪のうたをうたう聲に私は目をさましました。ふと外をみますと、戸のすきまからちらちら眞白な雪がみえます。私は「あら雪がふつてゐるは」と言ひました。妹はその聲をきいて「あら雪がふつてゐるの」といつた。私が「ええ」と言ふと「うれしいな」といつた。私は外を見ませうと思つて戸をあけました。戸をあけてみますと植木だなの上に兄さんのすきな松の木の葉の細い所へ眞白な雪がかかつて花火のやうにきれいです。きくの植ゑてある植木鉢の土の上に、雪がかかつて白くてきれいです。外へでてみますと車のわの廻りが白くきれいでした。學校の屋根をみますと屋根の上に一面に白雪がつもつてゐました。道の上に犬の足あとなどが幾つもついてゐるのもきれいでした。電車通へゆきますと電車線路の上に、白い雪が長くつづいつゐるのはまつたくきれいです。歸りにお湯屋の所まできますと九つぐらひの男の子のあしだの齒に雪がはさまつて、ころんでゐました。私は雪がふる時はくつの方がよいと思ひます。

そして三になるとこの生徒は、二で描いた材料の整理をはじめた。雪達磨關係の記事は第一に削除した。戸のすき間から雪のふるのが觀えるバラックの建物の狀況から、直に植木棚に移つてゐる。かういふ住居さへまだ不完全な家家でも、必ずもつてゐる、植木棚があつて、それがこの文の中心になつてゐる。それを見た後に眼を街頭に轉ずるのであるが、しかしこの描寫は不十分である。おそらくこの生徒に、も一度推敲をさせたならば、ここの部分を確定するであらう。お

私は「あらそうなの」といつて家の中へはいりました。その事もしらずに、雪はずんずんとふつてゐます。

十ノ二　私はふと目をさますと、お母さんが「今朝は雪がふつてさぶいからもうすこしねていらつしやい」とおつしやいました。私は「はい」とへんじをしてねどこへもぐつてしまひましたけれども、どうしてもねられません。それは雪つりをしたいからです。そうしてゐる時に、七時がなりました。私はいつもよりも、はつととびおきて、おもて通りを見ますと「まあずいぶんつもつたわね」ととんきよもない、こゑでいひました。そうして學校へゆかうとしたらばお母さんが「今日は日曜じやあないの」といはれました。私は「あらそうなの」といつておもはずふきだしてしまいました。そうしておつかいに行く時に、公園の前へくると、松の木へ雪がたまつてなんともいへない美しさです。私はその枝をおりたいようにかんじました。けれどもそれは學校の校長先生から、公園は私達の家の物だと思もつてかはいがつて下さいとおつしやつた事を思つたら、枝をたいせつにしてやりたくなつてきました。そうして家へかへつてから、すみを糸へくくつて雪つりをしました。そしてゐる時にお母さんが「今日はお正月の十五日なのにかはいさうね」とお父さんとはなしてをりました。私はふとそのこゑがきこへたので、「まあいやな雪ね」とそういいました。けれども一方ではすきな雪でこまつてしまひました。ほんとうに雪はだいすきです。

十ノ三　私はふと目をさますとお母さんが「今日は雪が降つてゐてさむいから、もうすこしねていらつしやい」とおつしやいました。私は「はい」といつてねどこへもぐりましたけれども、どうしてもねつかれません。それはだいすきのだいすきの雪が降つてくれたからです。私は雪つりがだいすきなのです。そうしてゐる時に七時がなりました。私はいつもよりも、はつととびおきておもてを、見ると思はず「まあずいぶんつもつたわね」と、とんきよもないこゑをだしてしまひました。そうして、學校へ行かうとしましたらば、お母さんが、「今日は日曜日じやあないの」といはれました。私は、

「あらそうなの」といつて思はずふきだしてしまひました。そうしておつかひに行く時に、公園の前を通らうとすると、松の木へ雪がふつてなんともいへない美さです。私はその枝をすこしでも、おりたいほど美しいのです。私はその松の枝がほしくてたまりません。おもひきつておらうとしたけれども、それは學校の校長先生から、「公園の草木や公園を私達の家のおにはと思つてかはいがつてやつて下さい」とおつしやつた事を考へだしたら枝をおらうとした私が、はづかしく思つて家へかへりましたら、私の家の屋根はまつ白に雪がつもつて、とてもきれいでした。私は家へはいつてすみを糸へくくつて、雪つりをしている時に、お母さんが「今日は十五日だといふのに雪なんかふつてほんとうに子供等はかはいそうね」とお父さんとはなしをしておりました。私はふとそのこゑがきこへたので、「まあいやな雪ね」とそういひました。けれども一方からはだいすきの雪なので私のあたまはこんがらがつてしまひました。ほんとうに雪はだいすきなのですと思ひながら、又雪つりをはじめました。

第十の生徒は、一のものを二で少しも展開させず、二では一の終に使に出た時のことと、使から歸つた時のこととを書きたしただけだ。ただスケールは少し大きくなつたが、深さには何等增す處がない。三は二と同じ範圍であつて、ただ僅かに朝母親に寢ろといはれて寢つかれぬ心理をかいてゐる。その他でも少しづつ描寫は細かになつてゐるが、しかしこの深かさはとり立てていふ程ではない。この文を見ると、推敲に際しての一つの樣式を發見する。それは一度到着したものを變更することが出來なくて、ただそのあとへあとへと新らしい部分を書き加へて行くだけの形式である。長さだけを增して、深さを增さぬ形である。

十一ノ一　六時をうつ時計の音に、ゆめをやぶられた私は、ねむい目を、こすりつつ、やうやくとこをはなれました。ふとおはちの上を見ると、眞白な雪がまどからふきこんで、おはちの上には一寸もつもつてゐるのにおどろき、まどから見れば、家々の屋根の上はぬのをかぶせたやうに積つてゐました。私はなんだかうれしいやうな氣がしました。朝飯をすませてからも、雪つりなどをしてあそんでいますと、となりのこすもすの上にふり積つている雪は、花だけを、ぽつりと出してをります。ほどなく雪はやみました。

十一ノ二　六時をうつ時計の音に、ゆめをやぶられた私は、ねむい目をこすりつつ、やうやくとこをはなれました。近所のおばさん達は、ほんとうに雪ばかしで、こまりますねなどとたがひにあひさつをしてゐる。其の聲に驚いてまどをあけて見れば家家の屋根の上は、ふつくりとわたでつつまれているやうに積つてゐました。私はなんだかうれしいやうな氣がしたので、朝飯をすませてからも、雪つりなどをしてあそびました。ほどなく、雪はやんで、おにはのはつぱがてんてんと見えるやうになつてきた。

十一ノ三　六時をうつ時計の音に、ゆめやぶられた私はねむい目をこすりながら、やうやくとこをはなれて臺所へ行つた。となりの家のとよちやんが、とんきやうなこゑで「雪、雪」。はつと思つて見ると、ガラス戸のすきまからちらつと眞白な雪が。「あら雪が」私は思はずさけんだ。なんとなくうれしいやうな氣がしたので、下へおりて行つた。そして雪つりなどしてあそんでいると、向ふの方から雪の歌がきこえてきた。一そうつめたくなつたやうな心持がしてきた。「あらこんなに雪がつれてよ」ふと見ると雪はもうたくさんつれていた。家家のえんとつからは、煙がおもさうに立ちのぼつて行

く。

第十一の生徒は、可成り特殊なものを見て居る。飯櫃の上にたまつてゐる雪をみつけたり、枯れたコスモスの花の上に積つてゐる雪をみつけたりしてゐる。然るに二では是等の觀察を皆削除して、近所の人達の雪のうはさを入れてゐる。三になるとまた變つて向ふの方から聞えてくる雪の歌などを書いてゐるが、はじめの特色は全く殘つてゐない。一度到達した處から少しも動けぬ者があるかと思ふと、一方にはその度に變つて惡くなつて行くものもある。觀る働が反省されてゐない。觀るものが正しい價値を持つてゐない。自分のものの價値が全くわかつてゐないのである。何が尊いか、それからはじまらなくてはならぬ。

十二ノ一　「おや」……私は思はずさけんだ。それもそのはず、お砂糖のかたまりの様な雪がおしげもなく降つてくる。そして石や土をふつくりつつんでゐる。あしだの足跡や車のあとがはつきりとついてゐる。ガラス戸なので外からの明を受けて家の中はあかるい。私の心は急におうちやくになつて、起るのがいやになつたが、私は先生におつしやられたお言葉を考へると申しわけがないので、大いそぎで飛起きた。いつもより少しおそいが雪が降つてゐるのでさむい。けれどもえらい人になりたいのでさむいこと等はなんともない。私はこんな事を考へながら下へおりた。

第十二の一の成績をみると、あとからの書き入れがあつたり、消してなほしてあつたりして、きたない。それでゐて文は短かい。明瞭な觀察もない。頭の混亂した生徒と見える。ところが二になると全くちがつて來た。一の砂糖の様だといふ雪の形容を撤回して、街頭の精しい觀察にうつつた。この場合に、この生徒の適應は甚だ緩かであるが、それは深めて行くことの出來る傾向であることが知られる。電柱の北の半面だけに雪のついてゐる處も鮮かであり、木や屋根やその他にかかつた雪の觀察も、降るのが細かい雪になつた觀察も、よく行きとどいたものになり、一とは全然性質の變つたものになつて來た。そして書寫もおちついて美しくなつた。混亂してゐたもの、卽ちあらはさうとして現はし得ず、混亂してゐたものの間に、一つの整理がつき、體系がついて來たことがわかる。三になると、その觀察には外套をきて通る人と、猫の軒づたいにゆくのをかき加へただけで、別に展開がない。しかし全體がおちついて來て、前の様な喧騷がなく、ここに全き適應を示して來た。くりかへして推敲を加へる度に、その文の成績の上にも、その變化の經過の上にも、それぞれ個性の鮮かになつて行くのを感ずる。推敲を加へる回數については暫くとしても、とにかく推敲を經てやうやく生徒はその落ちつく處、必然なる處にゆきつくことを感じさせる。

十二ノ二　「おや」なんだか白いものが降つている。雪だ。急に起きるのがいやになつたが、先生におつしやられたお言葉を考へると私はいそいで飛起きた。二階の窓から外をながめると、くつ、下駄、車の跡がはつきりとついている。人がさむそうなかつこうをして三人通つた。でんしん柱やがいたうの北にむかつている半面だけ、雪がうすくかかつている。交番の横にある紅葉の枯木に雪がつもつて、ちやうど白い梅の花が咲いたやうである。やを屋のかはら屋根につもつている雪は、波形につもつて、竹屋さんののれんに白い雪がつもつたのはちやうど白いたをる布のやうに見える。ねこが、さむいのに家ののきからのきへはつてどこへかいつた。起きた時よりも大そうこまかい雪になつた。田部井さんの家のにいさんが、雪かきをしている。空はどんよりくもつて、雪はまだやみそうにもない。

十二ノ三　つと起上つて見ると、ガラス越しにちらつと見える眞白な雪。私は急に床をはなれるのがいやになつたが、先生におつしやられたお言葉を考へると私はいそいで飛起きた。二階の窓から外をながめると、かかとの先だけしかないくつの跡、二の字二の字の下駄の跡、車の跡が二つ、長長ついてゐる。白い息をはきながら、がいたうにくるまつて、さむさうなかつこうをした男の人が三人通つた。でんしん柱や、がいたうの北にむかつている半面だけが雪がうすくかかつている。交番の横にある紅葉の枯木に雪がつもつて、ちやうど白い梅の花が咲いたやうである。八百屋のかはら屋根につもつている雪は、さざ波のやうに美しく、竹屋さんののれんに白い雪がつもつているのは、ちやうど白いたをるの布のやうに見える。ねこがさむいのに家ののきからのきへつたはつてどこへかいつた。起きた時よりも大そうこまかい雪になつた。田部井さんの家の兄さんが、雪かきをしている。空はどんより曇つていて、雪はまだやみそうにもない。

十三ノ一　風はしんしんと身にしみて、なんともいはれない寒さ。お客様は「まあ今日のさむさはづいぶん寒むいので

ございますねえ」「ええ今日は特別のようにかんじます」とお母さんはいつた。そして色色の話しをしている内に、お客様はお歸りになつた。後お母さんが「お湯に行きませう」とおつしやつたので、私はお母さんとお湯へ行くので外へ出た。外は寒くて私は體をふるはせると、お母さんが「そんなにさむいのなら早くあつたまつて早くでませう」といつた。その時私の顔はつべたく背を丸るくして、いそいでお湯へいつてしばらくして早くお湯から歸つてきました。家の窓からながめた時はその外の様子は物さびしくまつ暗。今にも雪を降らせるばかり。おお寒い。窓の戸をしめてまもなく寒い風を背にうけて床についた。

十三ノ二　八時をうつ。外はしんしんと身にしみるほどの寒さの樣にかんぢた。私は起きた。自分の床をとつて外の窓をながめた。家家の屋根のきしたには雪が白い色をぬつたようであつた。その内お母さんが「顔を洗いなさい」といつたので顔を洗つた。お父さんは「今日はさむいから」といつて、朝湯へ行きました。その内兄さん姉さんは起きてきて「あら今日は雪が降つているのねえ」といつた。その内大小のつぶとなつて雪は積つて行く。その降つている中をすぐそば家の犬がくるくると家の廻をよろこび勇んでとんで行く。その後皆といつしよになつて座しきをはきをはるとお父さんはお湯からかへつてきました。私は「今日は雪が降つてさむいからあんかをしてちようだい」と言ひました。其の時はもう九時になりさうで、雪はたへまなく降りつもつて行きます。

第十三は一では特に「雪の降る前のばん」と説明的な文題をつけてゐる。それも都會の子供に普通な傾向として、自然を直視するのでなくて、人間の關係を中心にして、その間から雪をかいてゐる。自然現象が人間生活の中に入りこんでくる姿でかいてゐる。二になると今度は急に態度

をかへて、雪の朝をかきだした。ここでも亦雪は僅かに人間生活の中に介在してゐるだけである。自然は人間の生活をかき亂す場合のみに、はじめて意識される。その傾向が三にいつて一層強くなる。自然を觀照することの缺乏する生活の生んだ、たとへば江戸藝術などの形體の基礎を、この子供の短かい文章の中にも見出すことが出來る樣である。

十三ノ三　八時をうつ。私はおどろいて目をさますと、近所の家家では朝のしたくにかかつている。私は着物をきて窓をあけて外を見た。お向の家を見ると、皆外にある物は眞白になつて綿をうすくはつたやうである「芳子さんはやく姉さん兄さんの起てこない内に顔を洗ひなさい」とお母さんの聲。私は顔を洗つてお母さんに「今日はやぶ入の女中さん小ぞうさんの日だのにまあこの雪では出かけるのにこまるでせうねえ」と言ふ。その内姉さんも兄さんも起てきて、兄さんが顔を洗はうとすると、もうちかくの家の犬はほへて雪のつぶを體へのせて、喜こんでとんで歩いてゐる。その後皆は顔を洗つて、朝飯のしたくがすんで、そをぢをしをはると、お父さんはもう雪にふられてつべたい風にふかれてよい氣持で朝湯から歸つてまいりました。私はお母さんに、「今日は雪が降つて外へも出られないし又寒いからあんかをして下さい」といつた。「ええ」とお母さんは言つた。外は大中小の雪つぶとなつて、いきほいよく降りつづけている。「あ九時」外は雪風さむく雪は降りつづけている。

十四ノ一　「あら雪がふつて居る」というころに私は目がさめました。私はいそいで着物をきて、戸をあけると、すうつとつめたい風が私の顔をなぜていつた。私はそれがなんとなく氣もちがよい。外を見るとまつ白な雪がどんどんふつてい

たが、そんなにつもらず、すぐとけてしまう。私はだいどこへいつて見ると、竹の葉の上にまつ白な雪がつもつてゐる。そのうちに雪がやんで日がきらきらとてつて來た。竹の葉の上の雪はとけて、まつさをなみどりの葉がてんてんと見えるやうになつた。

十四ノ二　「あら雪がふつて居る」といふお母さんのこゑに私は目がさめました。私はいそいで着物をきて戸をあけると、すうつとつめたい風が私の顔をなぜていつた。今までねぼけ顔で居た私が、そのつめたい風のため水で顔をあらつた樣に、すうとして氣もちがよくなつた。外を見るとまつ白な雪がどんどんふりつづけて居る。私はふと家家の屋根を見ました。屋根の上にはまつ白な雪がふりつもつて、まくをふつくりかぶせたよう。私はだい所へいつて見ると、竹の葉の上にまつ白な雪がつもつてゐる。その内に雪はやんで、日がきらきらとてつて來た。竹の葉の上の雪はとけて、まつさをなみどり色の葉がてんてんと見へるようになつた。

十四ノ三　「あら雪がふつて居る」といふお母さんのこゑに私は、ふと目がさめました。私は、はつと思つて、床をでると、いそいで着物をきて、かけるようにしてはしご段をおりて見ると、もう前ののぶちやんは長ぐつをはいて、どんどんふる雪の中をおもしろそうにあるいて居た。私は下へおりて戸をあけると外から、すうつとつめたい風が私の顔をなぜて居つた。今までねぼけ顔で居た私が、そのつめたい風のために水で顔をあらつたようにすうつとして、氣もちがよくなつた。外を見ると家家の屋根の上には眞白な雪がつもつてまくをふつくりかぶせたよう。私はだい所へいつて見ると、竹の葉の上に眞白に雪がつもつてゐる。その内に雪はやんで、日がきらきらとてつて來た。竹の葉の上の雪はとけて眞さをなみどり色の葉がてんてんと見へるようになつた。

これは第十四特有のことではなくて、これ迄のほとんど全部に共通したことであつたが、如何に構想が展開して行つても、その最初の一句は改められないといふことである。この最初の一句こそこの全構想の出發點であり、その依據する處である。この最初の一句が生徒の中に浮び上つた時は、既にその描く働のはじまりかけた時で、同時に觀る働の結晶しかけた時である。隨つてその出發を與へることは、教授の大事な點をなすのである。一では竹の葉が觀察の中心になつてゐるが、二では屋根の雪がみられ、三では長靴をはいて遊んでゐる子供のことが出て來て、全體が一つの連續した完全な展開になつた。そして竹の葉は依然として、觀察の中心になつてゐる。この展開は最初のものが最後までその位置を保ち、それだけの部分の展開の中で、その價値を持續してゐる。これは全體的なものの自然の發達であつて、一を描く時既に、その觀照は全體にゆきわたつてゐたこと、二以下になつて全體が細部を分泌したこと、そして全體は決して細部の集積でないことを明かにしてゐる。子供の中心をなしてゐる童心は、決して無邪氣を性質とするものでなくて、それが無限の展開をなすものなることを性質とするのである。無邪氣のみで展開し得ないならば、それは痴愚と選ぶ所はないのである。

十五ノ一　朝おきたら雪がふつてゐるのでした。ごはんをたべてからひばちへあたりながら、ほんをみてゐました。そしたら、がやがやしていたから、したへおりてみたらば、まあちやんやふくちやんも花子ちやんもきよしさんも、みんな

でうちの前でこうりかきをしていました。そしたらゆきがふつていた時、おともだちが家へかつどうへゆきませうとさそひにきましたから、あたまをゆつてから、着物をきて、すつかりようゐをしてからいきました。その時もうお空が晴れてゐましたから、かさをもたずにかつどうへたまちやんとたい子ちやんとすい子ちやんと松とみんなでいきました。

十五ノ二　朝おきたら家の前の木がまつしろでした。下へかほをあらひにいく時、家の前の所がまつしろでした。人の足あとがないからきれいでした。かほをあらつて又二階へあがつて又みたら、屋根をみたら、とてもきれいでした。ごはんをたべてからひばちへあたりながら、木をみてゐました。そしたらがやがやしていたからしたへおりてみたらば、みんなが家の前でこうりかきをして遊んでゐました。そしたらおともだちが家へかつどうへいきませうとよびにきましたからわたしはあたまをゆつて、着物をきてすつかりようゐをしてから、よびにいくはといつたら、そおといつてかへりました。それから着物をきてすつかりようゐをしたら、よびにきました。その時もう空が晴れていましたからから、かさをもつていきませんでした。

十五ノ三　朝おきましたら家のものほしがまつ白でした。家のお父さんがすきな朝顔の箱がまつしろでした。それから家の前の木がまつしろでした。したへかほをあらひにいく時、家の前の所が雪でまつしろでした。人のあしあとがなくてきれいでした。かほをあらひにいつたら、ながしがすこしこほつていました。おゆうでかほをあらつてから二階へいつてすこしまどからみていました。ちよつと長い物さしがありましたから、物ほしの雪をものさしでおとしていましたら、なかなかおとせませんでした。それだけれどもおとそうとおもつておとしていたら、あまだれが私の頭へどたりとおちましたから、なんだとおもつて上をみたら、あまだれだつたのでした。それでもおとしてゐましたら、ごはんになりました。ごはんをたべてから、又ものほしのほうをみてゐました。お父さんのすきなあさがほへ、やつぱり雪がつもつておりまし

た。物ほしをみてはかまをはいてかばんをさげて紙をもつてうんどをぐつをもつて學校へきました。

第十五の一は全く散漫で、集中してゐるものがない。隨つてこの構想は何の體もなさず、またこれがどの様に展開するかは、豫想し難いのである。二は一よりも分量が多くなつて、少しの增加があつて、多少の展開があるやうにみえるが、それは展開ではない。無關係な零細な事柄を少しばかりとり集めたにすぎない。故に構想は何等の展開もしてゐない。「それから」で結合されるものの雜集にすぎない。三はまるでちがつた日のことを書いてゐる。一二は映畫にゆくことを中心にして、雪には輕くふれてゐるのに、ここでは雪を主題として居る。この生徒には一大進歩である。ことに雨だれ（雪崩か）が上から落ちてくる處は生彩がある。この生徒も前のものを漸次に深めることは出來ない。無關係に新らしいことをはじめる外には、新らしい工夫が出て來ないのである。文全體が確立してゐたならば、細部を分化し得るのであるが、それがないから、いかに手を入れても遂に雜纂に過ぎない。仕方ないから、まるで別なものにかきかへる。かういふことは數學の不得意の生徒が、無暗に式を立てかへるのとよく似てゐる。觀る働の完成がないのである。觀る働の完成は、全體的なものをつよくつかむことであり、全體的なものとは、多くの場合先づ强く感じたものである。この直接な强い感動を、觀る力で事實にして行かなくてはなら

ぬ。この中心なくしては、系統ある展開は不可能であり、隨つて推敲に推敲を加へることも不可能である。これはそのよい一つの例である。

十六ノ一　私は朝あまり靜なので、まだ早いのだと思つてとこの中から起きて、まどをあけて見ると、裏の庭に昨日までかれていた木は皆花を咲かせた樣にきれいに雪がつもつています。外をとほる人のかさの上には、雪がつもつて眞白です。外を歩く人は皆二の字を後にのこして行きます。裏のとりごやの中にいつもげんきよくにはとりが朝のゑをあさつているのに、今日はとりごやにしよんぼりひよこをお腹の中にいれて、すはつてゐます。にはとりも雪がふつては、外へ出られないと見えて、ひよこはさみしそうに親のお腹でしくもくしくもく動いてゐます。私はごはんをすまして裏のとをあけてみると、とりはやつぱりさみしそうにしてゐます。私はごはんののこりをやつたら、ひよこはよろこんでたべはじめました。

十六ノ二　私は朝餘り靜かなので、まだ早いのだと思つて、床の中から起きてまどをあけて見ると、ほうぼうの屋根は白い布をかぶせた樣に眞白です。裏の庭に昨日までかれていた木は、皆花を咲かせた樣にきれいで、又雪の間から青い葉が見えます。外を通る人のかさの上には雪が積つて眞白です。外を歩く人は皆二の字を後にのこして行きます。裏のとりごやの中にいつもげんきよくにはとりが朝のゑをあさつているのに、今日はとりごやにしよんぼりひよこをお腹の中に入れて坐つています。にはとりも雪が降つては外へ出られないと見えて、さみしそうに親のお腹でしくもくしくもく動いてゐます。私は御飯をすまして裏の戸をあけてみると、とりはやつぱりさみしそうにしています。私は御飯ののこりをやつて見たら、ひよこはよろこんでたべ始めました。雪はやみ日光はよはい光りでかがやいています。雪はとけ始めます。

私はおしく思つてにくらしい日光だと思ひました。

十六ノ三　私は朝餘り靜かなので、又早いのだと思つて窓を開けて見ると、雪がちらちらと降つてゐる。向ひの窓がらすに雪が積つて眞白です。向ひのおぢさんが大切にしてゐた菊は、花を咲かせた樣に眞白です。裏のものほしの方へ出て見ると、向ふどなりの次郎さんの家のさくらの木は眞白で、ちやうど花が咲いた樣です。その間から御飯をたく煙が立つてゐます。原の木は皆花を咲かせた樣に眞白です。眞白な地面に道行く人は皆二の字二の字を跡にしていく。道行く人は皆寒むそうな顔をして通つていきます。方方の屋根はちやうど綿ぼうしをかぶせた樣に眞白です。私はそれをじつと見てゐると、下から妹が姉さん雪だるまこしらへようといつて上つてきます。私はしませうといつて二人で下へいつて雪だるまをこしらへはじめた。お母さんはつめたいでせうとこゑをかけたがへんじもせず一生けんめいでこしらへあげた。その時は手のつめたさをかんじなかつた。ひばちにあぶつてみたらいたくなつた。妹はうさぎをこしらうのといつてきかなかつた。とこのまにかざつてあるなんてんの實をとつてきて、眼にくつつけた雪だるまは、次郎さんがきてけとばしてこはしてしまつた。妹はくやしそうな顔をしてゐました。

第十六の一は、外を通る人の傘の上につもつてゐる雪や、籠の中の鷄を中心にして居る。この觀方は可成り特色のあるものであるが、二ではそれが一層進んでゐ、雪の間から見えてゐる青い葉も、ちやんと見つけてゐる。そして鳥小屋をつつんでゐる雪と日光とを描き、それを自分の感想でまとめてゐるのである。この展開は二で十分の發達をとげたのであつて、三になるとそこで

ずつと方向を轉囘して來た。これは無能のためになした十五の例とは全然異つてゐる。二に於いて描き終へたものを、再びするより他のものを描かうとしたのである。しかしこの展開は不十分で、描寫は立つ朝飯の煙と、雪達磨をこしらへることとを描いてゐる。おそらくも一囘の推敲を要するのであらう。この生徒の成績をみると、一には欄外に多少のむだ書きが見え、二では字體も正しく謹み、三になると字體は一よりは謹んでゐるが、欄外にはまた少しのむだ書きが見える。これは苦心の跡を示すものである。一般に一の成績は字體もきたなく、むだ書きなども見える。むだ書きはわからないで試に書いたものと、頭の中で工夫してゐる間にかいた曲線や直線の無意味な形とである。かういふ形をかくことは、觀方の成形が不十分であり、この不十分なことの表現であると見るべきであらう。

十七ノ一　私があさおきて床のなかで、雪がふつてゐることもしらないで、妹と私と二人でふざけてゐましたら、お母さんがたいちやん、雪が眞白になつてつもつてゐるから外へでてごらんなさい、とお母さんがいひますと、妹はよろこんでさつそくしたくをして外へでていつてしまひました。私はそのあとからいつてみますと、きんぢよの子供たちは、よろこんでゐました。私はあしだをはいて外へでていきました。そしたら、あしだのはに雪がいつぱいたまつて、ころびそうになりましたから、びつくりしてしまひました。そのうち姉さんが御飯ですといひましたから、そのままうちへゆきました。

十七ノ二　私があさ床のなかで姉さんと私と二人でふざけていましたら、お母さんがもう七時だからはやくをきてゆきをみてごらんなさいといひました。私はもううれしくてたまりませんでしたので、すぐにおきて戸をあけてみますと、地面はまだ人があるかないとみえて、そつくりとしてゐました。そしてわきにあつた植木をみますと、ただきむそうにぼんやりして、木のねつこには眞白な雪がつもつて、あをいかわいらしいはつぱがところどころにみえるばかりです。それから内へはいつてきてから、小鳥のすをみますと、小鳥もいつもとちがつて、なんだかいつもとちがつて、あの死んだ小供のことを思つては雪をながめながら、一人ちよんぼりとさむしそうにして雪をながめています。

十七ノ三　私があさ床のなかで、姉さんと私と二人ふざけていましたら、お母さんが、もう七時ですから、はやく、おきてあの眞白な雪をみてごらんなさいと、おつしやいました。私はうれしくてうれしくてたまりませんでしたので、ながい寢卷のまんまで戸をあけてみますと、地面は眞白な雪につつまれて、地面の色は一つもみえませんでした。そつとお父さんのすきなはなをみますと、ただきむそうにぼんやりして、立つています。木のねつこは眞白な雪がつもつていて、あをいはつぱがところどころにみえるばかりです。私もあんまりさむいので内へはいつてきてから、小鳥のすをみますと、小鳥もいつもとちがつて、かなしそうに一人ちよんぼりと木の枝にとまつて、雪をながめています。

第十七の生徒は書記の働が十分に出來てゐない。誤字も多く、言葉も重復してゐるのを、これまでにやうやくなほしたのである。一には少しもよい所がない。雪のことも何も書けては居ない。望みのない生徒だと思つてゐると、二で様子が變つて來た。一では妹となつてゐるのが、二

では姉である。どちらが正しいか不明であるが、三も姉になつてゐるから、姉が正しいのであらう。植木の鉢の根本の雪をみたり、小鳥の巣をみたりする處、特に小鳥の姿からみる小鳥の解釋は、この子供の心をみることの出來るものである。この二つの發見は、この子供には重要な展開である。かういふ好ましい展開をした後三でどうなるかは興味のある處である。しかるに三ではこの豫期に反して、なんの展開もしてゐない。蓋し二の展開はこの子供には全力を盡したもので、これ以上の發見はなし難いであらう。それは一の貧しさからも想像出來る。もし一でとどめてはこの貧しさに終るものを、二を書かせたために、この展開をなしたのであるから、二をかいたことは、有意味であつた。この子供に小鳥の死を更に細敍せしめたならば、その感情はもつと生きてくる筈である。

十八ノ一　ふと目がめた。なんだがさむい。まくをはづして外を見るとまあと、私はさけんだ。雪です。雪がふつてゐるのです。私は、むねをおどらした。私は、お母さん、雪がふつてゐるはよと、すこし大きなこゑでいふと、お母さんは「どうれでさむいと思つた」といつたきりでした。私は、又、外を見た。ちらちらと雪はふりつづけてゐる。それをながめてゐる。下では、とけいが八時をうつた。私は、はつとして下へおりて行きました。お姉さんは、御はんごしらへをしてゐました。お姉さん雪がふつてゐるはねえ、と私はいつた。お姉さんは「ええ」といつた。私は御はんをたべたら雪つりをしようとおもつた。又にかいに上つていつて外を見ると又もちらちらとふりつづけていた。

十八ノ二　ふと目がさめた。なんとなくさむい。まくをはづして外を見ると、まあーと、私は思はずさけんだ。雪です。雪がふつてゐるのです。私は、むねをおどらせた。お母さん、雪がふつてゐるはよ、と私はいつた。お母さんは、「どうれでさむいと思つた」と、いつたきりでした。私は又も外を見ると、公園にうゑてある木の上には、みなふわつとした雪が木の所へのつてゐる。おすべりの所を見てもみな雪がのつてゐる。私は、しばらくそれをながめてゐた。下のとけいがぼんぼんと七時をうつた。私は、はつとして下へおりていつた。下では、おねえさんがいそがしそうにごはんのしたくをしてゐた。私は、ねえさん雪がふつてゐるわねえと、私はいつた。ねえさんは「ええ」といつた。私は、又、にかいへ行つた。弟は、もうおきてゐて私のこと「雪つりをしよう」といつた。私は「ええ」といつた。きものをきて私は、外へ出て少し雪つりをして見た。なかなかつれない。私は、にかいへ行つてつまらなそうに、雪を見てゐた。雪はゑんりよなしにちらちらとふつてゐる。

第十八の一には、その行動の筋書だけがあつて、その見たものが少しもかかれてゐない。しかしかういふ筋書を正確にかくものは、二において展開の可能がある。「雪です。雪がふつてゐるのです」といふ様な、適確な描寫をする力のある生徒だからである。果して二ではその間に觀察の叙述をしてゐる。これでもまだ完全だとはいへない。更に三でそれをしなくてはならぬ。三になつて可成り周到な觀方と書き方とがされてゐる。けれどもなほこれは展開する可能性がある。この生徒は成績のよい生徒である。成績のよい生徒には、よく一のやうな筋書で滿足してゐることがみられる。そこで綴方と、他の理知的な成績とは、相反するものの如くに考へられやすい。し

かしこれの誤なることは明かである。蓋し理知的な子供は、それを順序正しくかいて、それで安心してゐるのである。自分は明瞭な事であるから、他人にも明瞭だと信じてゐるのである。故に筋の報告になる。これに氣がつかぬのである。故に二回三回とそれを訂正して、觀察と描寫とを精細にすることを指導してゆけば、この生徒はすでに觀て居、もしくは觀る働の可能を有するのであるから、相當の深さには達し得る。少くとも最も細密周到なる記述をなし得る。これはやがてこの生徒が理科的な觀察と記載とをなすことに直に貢獻する。小學校の程度では、綴方における觀る働と描く働とは、他の學科におけるそれと一致し、隨つてその成績は並行するものなることを知り得るのである。

十八ノ三　ふと目がさめた。なんとなくさむい。まくをはづして外を見ると、まあーと、私は、思はずさけんだ。雪です　私の大すきな雪です。私はむねをおどらした。私は、お母さん、雪がふつてゐるはよ、と私はいつた。お母さんは「どうれでさむいと思つた」といつたきりでした。私はいそいで着物を來てかほを洗ふのも、いそがしく思つて又外を見た。雪は、えんりよなしに雪をちらちらとふらせた。私の家の物ほしを見ると、からの鉢の中には、ふわりとした雪が一つぱい、つもつてゐる、前の公園を見ると、公園の木にも雪がたくさんつもつてまるで白い花がいつぱいさいてゐるやうだ。下では、とけいがぼんぼんと七時をうつた。私は、はつとして下へおりていつた。おねえさんがいそがしさうにごはんのしたくをしてゐる。私は、ねえさん雪がふつてゐるわねと、私はいつた。ねえさんは「ええ」といつた。私はぼんやりとしてゐる時、弟は、とんきやうなこゑを出して雪がふつてゐるよといつた。私は、ええといつた。弟は、雪つりをしよう

といつて着物をきて來た。私はごはんをたべて外へ出てきて弟と二人で雪つりをして、もうかへるころには、家家のとたん屋根からあまだれがたれはじめた。

十九ノ一　ふと目をさました。室内はいつになく明るい。ふしぎに思つてまどをあけた。「雪」だ。思はず口ばしつた。弟は「じゆうどう」の寒げいこにいつて、寒さうに二階へ上つて來た。「姉ちやん雪だよ」とそれでも元氣のいいこえでどなつた。家の屋根に道に眞白につもつてゐる。それでもまだどんどんおかまひなしに降りつづく。着物をきて三階の物干に上つた。御かち町のステーションの屋根にも松坂屋のおく上にも國ぎ館の屋根にも眞白にしきつめてあるようだ。上から見た雪景色も亦一段に美しい。ちようどゑに書いたやうだ。弟と妹はつめたそうに雪をまるめて、雪だるまをこしらへてゐた。小雪はどんどんとつもりにつもつて、ちよつとやみさうな景色もない。

十九ノ二　ふと目をさました。室内はいつになく明るい。不思議に思つてまどをあけた。「雪」だ。思はずくちばしつた。どこもかしこも雪の世界の様に眞白だ。それでもまだあきたらないかのやうに、どんどんと降りつづいてゐる、しづかに一寸の音もたてず。弟はじゆうどうの寒げいこからかへつて來て、寒さうに「姉ちやん雪だよ」とそれでも元氣の良いこゑでどなつた。私は着物をきて三階の物干に上つた。御徒町のステーションの屋根にも國ぎ館の屋根にも、眞白に雪をしきつめたやうだ。道には人や車や犬等の足あとが點點とのこつてゐる。ぼんやりと寒いのもわすれて、そこここの雪景色に見とれてゐた。其の内そこかしこの家で雪かきがはじまつた。弟と妹はつめたそうに雪だるまをこしらへてゐる。いつしか雪もやんで、東の空からは美しい太陽のすがたが見え出した。近所の子供等はうれしさうに雪つりをしたり、雪なげをしたりして、さわぎはじめ、人通りもしだいに多くなつて、雪の道もしだいににぎはしくなつてきた。やがて雪ものこりおしげに太陽の光にとかされてゆく。

十九ノ三　ふと目をさました。室内はいつになく明るい。不思議に思つてまどを開けた。そして「まあ雪」と思はずさけんだ。どこもかしこも雪の世界の様に眞白だ。それでもまだあきたらぬかのやうに、一寸の音をも立てずに降りつづいてゐる。弟はじうどうのかんげいこから歸つて來て、寒さうに「姉ちやん雪だよ」とそれでも元氣の良いこゑでどなつた。私は着物をきて三階の物干に上つた。御徒町のステーションの屋根にも松坂屋の屋上にも國ぎ館の屋根にも眞白に、ちようど雪をしきつめたやうだ。物干にも眞白な雪がつもつてゐた。なんだかこんなにきれいになつてゐるのに取つてしまふのはおしいような氣がしてならない。そして眞白な雪景色にしばし見とれてゐた。その時下からお母さんのこゑがした。「そこでなにをしてゐるの」で私はふとわれにかへつて下へおりた。そしてこんどはまどのガラスごしに往來をながめた。道には人や犬の足あとが點點とのこつてゐる。時時車なども通つたのであらう。車のあとがまがりくねつてついてゐる。道をあるく人人は皆さむそうに「はつはつ」と白いいきをしながら、がいたうやえりまきにくるまつてゐる。いつしか雪もやんで、そこかしこの家から雪かきの音がきこゑはじめた。弟や妹はつめたさうにぶかつこうな小さい雪だるまをこしらへてゐる。東の空からは美しい太陽のすがたが見え出した。近所の子供等はうれしさうに雪つりをしたり、雪なげをしたり、さわいでゐる。やがて人通もしだいに多くなつて、工場の汽笛などきこえはじめた。そして雪の道もにぎはしくなつて、雪ものこりをしげに太陽にとかされてゆく。

第十九の例も、第十八の例と同じである。理知的な記述が、だんだんに精細になつて行く經過を示すのである。文の長さを比較しても、一は生徒用の原稿紙二頁であるのに、二は三頁、三は四頁である。そしてかういふ增加も決して、第十五のやうな雜纂的なものではなくて、十分に系

統のあるものになつてゐる。これが理知的傾向のものの、推敲に伴つて生ずる模範的な形體である。

これまで甲組の成績について、比較的多くの例をあげて來た。ここで以上の觀察に基いて、一先づその結論を記さねばならぬ。その上で乙組の成績を吟味したい。

三

第一の例は、二に於いては展開せずして、三に於いて展開してゐる。一、二は準備である。そしてその展開の様狀は動體轉向である。

第二の例では、二三共に展開し、二の展開では客觀的となり、三の展開では内觀的になつてゐる。しかもその他の何れの場合にも共通する様に、人間生活を中心として、それに混入して來る自然を見てゐる。故に自然は常に人間を離れぬのである。自然を最後まで自然として見究めて行かうとする様な、冷かにして且つ確かな態度はみられない。これは蓋し都會に於ける兒童生活の常態であらう。窓を飛んでゐる一羽の羽蟲に、遙かな秋草の野の面影を見、炭俵に編みこまれた芒の穂に、銀にかがやく芒野を見るといふやうなことは、望む方が無理である。故にその彈力は

自然の深さに向はずして、日常の人間生活の興味に向ふのである。雪も人間生活の中に降つて來るのである。

第三の例では、二でも三でも共に展開せずして、三でやゝ内觀的になつてゐる。

第四の例では、一は優れた觀方を持つてゐる樣に見え、その上に二で少しく展開するが、三は全く二と同一である。一ですぐれて居る樣にみえて、その後の展開はない。これはその心の平板を示すもので、この生徒は他の知力的な學科に於いても、能力が低い。算術の立式に、奇態な特異性を示し、思ひもよらぬ、そして何とも指導の仕方のない、懸絶した考方をする。かういふ特異性が綴方にあらはれると、これは創意に富んでゐる樣にみえる。知力的な學科は不得意であるが、綴方は反對に優秀であるとみられる。しかしこの有する特異性は、全く無根據のものであつて、展開の傾向を有してゐないのである。さうしてかういふ生徒の多くは自分の身のまはりの零細なことに興味を有し、その興味は狹少である。しかも狹少なるその興味をこまごまとのべる。これは細かい觀方が働いてゐる爲であるかのやうに見える。ところが全く反對である。地理や歷史の答が、要領を得ず、些末なる所までくどくどと述べたて、だらしのないのが、低能なる生徒の示す姿である。これが綴方にあらはれる。之は觀方の深いのではなくて、要點をとらへ得ぬくどさである。かかるものが優秀と見あやまれた傾があつた。これと同じ傾向を示すのが第九であ

つた。各回の間に完き展開なく、同一なるもののそのままなる反復である。脆弱であつて、彈力を有しない。

第五は二で展開して三では展開しない。随つて三の推敲は無意味になつた。

第六は二三共に展開し、その展開の中で常に描く素材の價値批判を行ひ、その價値批判の結果、態度が平靜になり、內觀的になつた。隨つて對象を深くみるといふ事は、自己を深くみることに歸着する事が知られる。

第七もこの傾向にある。二で展開し、この展開を通じて平靜になり、內觀的になり、觀方の上に轉向が生ずる。それが三になつて一層內觀的になり、內的なる統一が生じて來る。かういふ展開は靜平に向ひ、內觀化され、決して激越に變はる事はない。激越はある條件の下における瞬時の調子で、それは平靜となり、內觀化されて、しかもその强さを失はぬものなる事が知られる。卽ち數多き推敲の後に、永遠の相に到達するものなることが知られる。

第八の例は、一では全く觀る働をあらはさず、二に於いて展開をはじめ、三に到つて觀たものの批判整理が行はれ、はじめて統一ある觀る働が生じて居る。ここになほ適應の遲速があり、遲きもの決して可能性の薄弱を示さず、可能性は何回かの訂正批判の後に於いて達せられることを知り得る。卽ち何回かの推敲をまつて、個性はその深所に達し得る。故に第一回の成績は、その

生徒の眞の能力を示すものでなくて、かへつてその適應性の遲速を示すものである。第八の生徒は三の展開にても猶その展開は不十分であつて、その達する處まで達し得ないことが知られる。故に訂正批判の回數は可成り個差を有するものなることを知り得、これを知り得ることによつて綴方が一齊に行はるる課業でなく、進度に或る程度までの差別を附すべき課業なることを知り得るのである。

第九は第四と同じ傾向であつて、すべてが反復形式である。この生徒にあつては推敲は書き方の淸書であり、書寫練習に過ぎない。

第十には推敲がなくて、形相の附加がある。一はそのままに殘され、その後に一にはふくまれなかつた全く新らしい材料が附記される。これは附加形式である。かういふことが推敲の目的に合しないことは勿論である。それは觀る働、描く働を深める生長があるのでなくて、單に附加するに過ぎないからである。

第十一では二は一と同じからず、二は三と同じでない。一の觀る働は、二では全く別の觀る働に變へられ、三ではまた變へられる。これも亦生長ではなくて、變化である。前の作業とは全然無關係に切り離された變化である。しかもその變化を通じて頽廢が生ずる。ここにある變化は崩壞の變化である。

第十二の例は一では全く混亂したものを示してゐる。然るに二になると、その一にある混亂が整然として整ひ、系統ある深さを示してゐる。この傾向は二に於いて未だ完成せず、三になつて始めて完成する。この生徒の適應は甚だおそく、一では不安定な、且混亂せるものにすぎない。それは文字の書寫作用にも明かにあらはれ、後になるほど、整ひ、心のほがらかに晴れ澄んで行く消息が明かになる。數回の推敲の後に、その混亂は全く除去せられる。故に最初の混亂は可能性の貧弱なるが爲ではなくて、かへつてその豐富なる事を意味してゐるのである。これも推敲を課して後に、始めて知らるることである。換言すれば推敲は生徒自身の自己發見であると共に、教師の生徒發見である。

第十三は一では夜をかき、二では朝をかき、三では二を展開せしめてゐる。故にこの生徒は變換形式と展開形式との接合を爲してゐる。かくてこの展開變換形式といふものは、今迄にない一つの特殊な形式ではない。最初の變換形式は、第十二の場合の混亂の部分にあたるのである。ただ第十三では一に混亂せざる夜の雪をかき、二にまた混亂せざる朝の雪をかいてゐる。第十二は豐かな可能性、豐かな全體性が、最初からあらはれてゐるのであるが、これはさういふ可能性を最初に見得なかつたのである。けれども亦第十一の如く、變化しつつ頽廢して行くものとも異つてゐる。かういふ生徒に對しては、教師の指導が實に有益にあらはれるのである。第十三の生徒

の興味は、人間的なそしてあまりに人間的な、狹少なものであつて、この點では第四の例に似てゐる。變化と展開、混亂と整理、さういふ相反する要素が不思議にも連結せられる。且その適應は決しておそいのではなくて、一に於いても可成り迅速なる適應をなしてゐる。故にこれは全體に深いものを示さずに、淺いものを示してゐる。

第十四は一より二、二より三と絶えず展開してゐる。かういふ完全な展開にも係らず、最初の第一句は最後まで同一であつて、變化しない。これはその場合にも注意したるが如く、最初にあるものが全體で、その展開の各狀態で、それぞれの細部を分泌するものであることと、さういふ全體が結晶する場合にその中心となるものが必要であり、その中心となるものは最初の第一句であることとの二つが明かにされる。これが文意である。この最初の形體は、幼い子供の會話に出てくる「私は」であり、「それから」である。故に綴方の教授は、その「私は」或は「それから」に代へる或る者を先づ捉へしむることに重要な意味を見出すのである。

第十五には、最初から全體的なるものが存しない。隨つて展開もなく、系統もない。展開とは全體が細部を發出する働であり、統一とは細部が全體的なるものに歸着する働である。故にこれでは二は雜集であつて、展開ではなく、三は二と別である。

第十六は一が二で展開し、二は三で轉向して展開する。この轉向は最初の仕事であるから、三

では不十分であつて、展開が完成しない。故に作業の上では、同一の題目によつて二つの異る描寫をなしたもので、兩者は共に一回性の展開をなし得る。これは一回性展開形式の二重積重である。

第十七は二で展開し、三は反復である。これは完全な一回性展開形式である。

第十八と第十九とは同一形式の展開例である。一は報告的な筋書で、二、三と展開し、なほ四にも展開する樣である。最初の筋書は、筋書にあたるもの以外を觀なかつたのではない。その筋書は骨をあらはしてゐるのである。この筋は全體的なもの、從つて二以下の推敲によつて完全に展開し、三でも猶展開しきつたものとは言へない。知力的な能力の優秀なものは、綴方にはだめだといふのは、これは一の骨書しかない場合である。要點をとらへて巧に地理の答をする能力は、綴方にもその形であらはれる。これは更に細かい分化をなし得るのみならず、その分化を豫想してゐる。故に綴方でも一は二以下の推敲を豫想してゐるものと解すべきである。

以上の吟味によつて、はじめて展開の意味が明かになつた。展開とは、之を態度の上からいへば、客觀的な態度から、內觀的な態度に向ふ傾向である。觀らるるものから、觀るものに還る働である。換言すれば當然性が、一度對象の世界に沒し、對象を貫き、當然性によつて對象が支持

せらるる傾向である。常然をして對象の中に純粋にする傾向である。この場合對象とは、自己をも自己以外の一切をもふくむ總てをさしてゐる。故に觀らるるものが觀るものになること、觀らるるものと觀るものとの一致することである。この一致が前にいつた統一である。ここに於いて展開は對象を深くみる働に一致する。對象を深くするとは、觀る働の批判であり、やがて當然なるものに觀入る內觀である。對象をみるとは自己をみるのである。ここに展開は漸く平靜に向ひ、展開が激越をもたらすことなき消息を明かにするのである。

されば展開の働で、先づ第一に存するものは、全體である。全體は當然性であつて、當然性のまだ對象化されぬ形態である。卽ち當然が對象を貫く働をあらはさぬ形態であるから、ここでは一つの混沌たる狀態である。それは熱と力とに滿ちたケオスの狀態である。力づよき可能態である。かういふ全體が、靜視せらるると共に細部を發生し、分化する。ここに熱は平靜に歸し、漸く透明となる。そしてさういふ分化は、分化によつて當然なるものの姿を明かにするのであるから、やがて當然に歸結する。この細部が全體を貫くものに歸結する働が統一である。分化が全體に結合する働である。孔子はよく「一以つて之を貫く」といつたが、この一以つて貫くものが、孔子の當然である。故に當然とはその「一なるもの」である。當然なるものに依つて貫かるる傾向が展開である。

然らばこの甲組が「雪」で示した構想の形式は、幾箇あるか。

1、展開形式。最も正當な展開の形式は、第二、第六、第七、第八、第十二、第十四、第十八第十九等に示されたものである。一二三共に展開の連續するものであつて、之を符號化すれば次の如くである。

一→二→三(→)

この形式では適應の遲速は樣樣であるが、當然の深さに到る可能の途を示してゐる。展開形式の一變體に一回性展開形式がある。これは一回の展開の後にその展開を止めるものである。これに二種がある。第一例の如きものと、第五、第十七の如きものとが之である。

一・二→三

一→二・三

2、反復形式。何等の展開なく、之を反復するに過ぎないもので、第三、第四、第九の例が之である。

一・二・三

適應性は大きいが、早さにあらはれて、深さにはあらはれない。

3、變換形式。例第十一に示さるるが如く、一二三共に無關係な變更をするものである。この斷絶的な變更をなすものの適應性は早いのであるが、深さには到り難い。

一・二・三

4、附加形式。例第十の如きもので、適應は早い。この形式は展開がなくて、一の終に新らしいものを附加して之を二とし、二の終にまた新らしいものを附加して之を三とするのである。これは展開でなくて延長である。全體なるものの分化並びに歸一ではなくて、附加によつて尾部を延長する形である。

一・一a・二b　即　一ab

5、雜集形式。は尾部延長であつて、そこには自ら一つの統一がある。然るにこれは推敲毎に雜然として採集するもので、全く統一がない。そして附加形式の適應性大なるに對して、これは遲い。例第十五。

一・一+a・二+b　即　一+a+b

6、混合形式。2の一囘性展開形式も混合形式といへば、混合形式ともいへる。それは反復形式と展開形式の混合である。しかしこれのふくむ反復は、反復といふよりも展開の障害或

は展開の終結としてみるべきであるから、これを混合形式に入れない。一般に反復形式は變換形式と結合しても、附加或は雜集の形式と結合としても、展開形式の場合に於けるが如く、その反復の部分は、他の性質の障害或は終結とみるべきであるから、別立する必要がなくなる。ここに於いて混合形式は展開、反復、變換、附加、雜集の五箇の基本形式中、反復を除去した他の四種形式の混合であつて、

展開變換形式　　展開附加形式　　展開雜集形式

變換附加形式　　變換雜集形式

の五種形式となる。これが考へ得べき混合形式の種類である。

この形式中で例のあるのは、第一の展開變換形式である。例第十三と第十六とは、それぞれ別な形をなしてゐる。

一・二→三

一→二・三

かういふ混合形式は一般に適應は早いが、持續が小さい。

これが構想形式の各種の樣狀であるが、是等の形式がそれぞれの生徒に固着するのであるか、

或は變化的であつて固着しないものであるか、またその形式が如何なる割合に存してゐるかは、更に多くの例を取り扱つた後でなくては明かでない。

構想の展開を知ることを目的としたこの考察は、その展開の基本形式を見出した外に、次のほぼ四個の重要事實を確かめ得た。

(一)その第一は綴方の能力の問題である。能力の劣等な生徒は經驗が經驗の形で其の儘にあるから、最初から生彩がある。しかしこれは內觀化の傾向を取り得ないので、推敲による展開がない。然るに能力の優秀な生徒は經驗を思惟化してゐるから、第一回には概念化された筋書の形で出てくる。そして第二回からその概念を具體的な形に活かして行く。一度思惟化された經驗であるだけに、それは具體的な經驗となつても、心の全體の背景を持ち、随つて內觀的な深さに達し得る。優秀とは展開可能性の無限なる意味であるから、能力優秀なる生徒は綴方に於いても亦、その優秀を示し得るのである。

(二)第二は適應の問題である。適應の遲速は展開の深度とは關係がない。第一回の綴方成績は、適應の遲速を示すことが多いから、これを以つて生徒の綴方の力を査定するのは、不深切である。

(三)第三は全體性の問題である。最初にあるものは全體であり、その全體は第一句を得た時に結晶をはじめ、結晶傾向を決定する。

第四は推敲の問題である。個性は推敲を經て後に達し得るものであるから、推敲は生徒に對しては個性を確立せしめ、教師に對しては個性を發見せしめる。そして推性の回數は、その屬する展開形式の性質によつて相違がある。

甲組「雪」の綴方成績の考究によつて達したかかる結果を暫く保留し、乙組の同成績を考究して、その結果とこれとを比較し、その上で暫定的に肯定さるる構想の展開樣式を確立させたい。

四

乙組の雪の成績を考査して、先づ氣づくのは、構想は必ず展開すると言ひ得ることである。三十九名の生徒の中、完全に展開しないもの、卽ち展開に障害のあつたものは、僅かに六名であつて、他のものは多少共に展開してゐた。構想の展開可能といふことは、綴方が教育的に指導し得ることの可能なるを示すものである。構想が展開しないものならば、教育の可能域内には入つて來ない。展開が可能であるならば、その展開の狀態を調査することによつて、構想の展開を指導し、示唆し得ることを示すのである。そして同時に綴方にはこの指導乃至は示唆がなくては、十分に教科となり得ないことを示すのである。故に構想が展開することを知り得たのは、喜ぶべき

收獲だと言はなくてはならぬ。以下また生徒の成績品のそれぞれについて、展開の様狀を考究して、その內的關係を探り求めたいと思ふのである。

二十ノ一　朝起きて着物にきかへると、お父さんが雨戸をあけろと言つたので、二階の雨戸をがら〳〵とあけて見ると驚いた。雪がちらちらとこつぶに降つてゐる。まだ銀世界と言ふ程には、降りつもつてはいないけれど、大方は眞白くつもつて、その中から黑い煙突の下側や、のきの下の奥の方は雪がつもらないで白くなつてゐないのは目につきやすい。」ぼおー」と聞こへるのは、凸ばん會社の汽笛であらう。さつきまで小つぶにふつてゐた雪が今度は大つぶになつてふつてゐる。ぴちやぴちやと音を立てて、地面におちていく水の音もかすかにきこえて來る。それは多分煙突のために雪がとけておちていくのであらう。外では公園の木に降りつもつてゐる雪が時時ざざつと音をたてながら地面におちていく。

二十ノ二　朝起きて着物にきかへると、お父さんが「雨戸をあけな」と言つたので、二階の雨戸をがらがらとあけて見る。と、あたりの屋根が白くなつてゐるのには驚いた。雪がちらちらと小つぶに、いつも薄黑いバラックの屋根にふつてゐる。どの屋根にも白くふわふわとまわたをかぶせた様になつて、又其の上に雪がすうすうと落ちて雪は段段とつもつて行く。其の中にすすけて黑くなつてゐる煙突の下側や、うすぐらいのき下などは目立つて見える。遠くで「ボオーッ」と聞こえるのは、凸ばん會社の汽笛であらう。さつきまで小つぶにふつてゐた雪が急に大つぶにふつてゐる。ぴちやぴちや音を立てて、地面におちてゆく水の音も、ほんのかすかにきこへてくる。それは多分煙突のために雪がとけてゆくのであらう。公園の木にふりつもつた雪は、時時「ざつざつ」と音をたてながらおちて行く。おうらいを通る人人は、皆さむさうに「はあはあ」と白いいきをはきながら雪をふんでいく。あとには足だの跡やくつのあとがはつきりとほりつけた様になつて、一つ一つとふへて行く。

二十ノ三　朝起きて着物にきかへると、お父さんが「雨戸をあけな」と言つたので、二階の雨戸をがらがらとあけると、はい色の天からまわたをちぎつた様な雪が小つぶにふつてゐる。どこの屋根にも眞白い雪がつもつて、となりの薄黒い屋根にも白くおほひかぶさつてゐる。さういふ間にも雪は無心にすうすうと落ちて、段段と雪はつもつていく。其の中にすすけて黒くなつてゐる煙突の下側や、うすぐらい家ののき下などは、ことに目立つて見える。外では近所の子供達がよろこびにみちた聲をたてながら、「雪やこんこん」とふし面白く雪のうたをうたつてゐる。そのとき凸ぱん會社の汽笛がしづかな朝の空氣をやぶつて、ぼをつときこへる。ぴちやぴちや音をたてて地面におちていく水の音も、ほんのわづかにきこへてくる。それは多分煙突のために、雪がとけておちていくのであらう。公園の木にふりつもつた雪は、時時「ざざざつ」と音をたてながらおちていく。おうらいを通る人人は皆さむそうに「はあはあ」と白いいきをはきながら、ざくざくと雪をふんで行く。あとには二の字形のあしだのあとがはつきりと、ほりつけた様になつて一つ一つと殘つていく。電線からすずめが一はとびたつた。雪はまだはひ色の空からすうすうと無心にふつてゐる。

この生徒の展開は、一二三と漸次にすすんで居る。しかしこの間に、著しい飛躍はない。實に着着と一歩づつ歩み進んで居のである。例へば一では「雪がちらちら小つぶに降つてゐる」といふ描寫が、二は「雪がちらちらと小つぶに、いつも薄黒いバラックの屋根にふつてゐる」となり、三では

はい色の天からまわたをちぎつた様に雪が小つぶに降つてゐる。どこの屋根にも眞白い雪がつもつて、となりの薄黒い屋根にも白くおほひかぶさつてゐる。さういふ間にも雪は無心にすうすうと落ちて、段段と雪はつもつて行く。

となつて來る。ここに構想の展開は、第一に觀る働の展開に外ならぬことを知るのである。しかもこの場合では一つの觀たものを中心にして、それを精細に觀るやうに進んでゐる。甲組の成績品でも、最初の第一句は、最後まで變らないのが一般の傾向であつたが、ここでもそれは同一である。最初の一句が出發になつて、展開して行く。最初の一句を變へることは、全體をかへることになる。そこで最初の一句を依然として置いて、その後の節節を展開の部分的中心として、それを精細にしてゆくのである。この節が子供の情感の部分的中心になるものであり、この節節は最初の出發の自らなる展開であるから、かういふ二段の自然的展開を通して、この展開が分散しない。これが展開形式の一つの自然の形體であると見える。するとここでこの展開形式に屬する生徒の指導法の一つが明かになる。出發點を定位して置いて、次にその節節を定位し、その節節を精細に展開せしむることである。これは讀方に於いて、文意を求め、節意を求める働と、相應するものである。讀方で文意節意を求むるのは、展開した形から還元するのであるが、綴方では文意節意から展開させるのである。讀む働と綴る働とは、方向を異にして、しかも同一の心理に立つてゐる。そしてこの兩者を連ねるものは表現の形である。この表現の形を中心にして、讀方と綴方とが相連續するのである。

二十一ノ一　朝目がさめると、なんだかかすかな音がするのでおきてみると、もう店があけてあつて、お父さんが火鉢にあたつてゐた。そして雪が降つてゐる。僕はすぐ着物を着て裏にまはり、雪かきをもつて、マントをかぶつて表へ出ると、二寸位しかつもつてゐないので、僕はあんまりうれしくなかつた。雪をかいてから大通へ行つて、一人で雪をまるめてあそんだが、直徑一尺位になるともちあげてわつてしまつた。ふとまだ顏をあらつてないことをおもひだして、すぐ家へかへつて顏をあらつたが、いつも湯であらふのに、今日にかぎつて水であらつた。あとでごはんをたべながら、あとのおもしろいことを思出してうれしかつた。

二十一ノ二　朝目がさめる、となんだかさらさらとかすかな音がするので、起きてみるともう店があけてあつて、お父さんが火鉢にあたつてゐる。音のするのは何だらうと表を見ると、眞白な雪が降つてゐる。僕はすぐ着物を着て裏へまはつて、雪かきをもつてきてマントをかぶつて表へ出ると、二寸位しか積つてゐないので、一昨年などとくらべれば、はなはだ少い。白い雪をかくと下から黑い土があらはれてくる。後から小さい雪が土の所におちるとすぐとけてしまふ。雪をかいてから大通の方へ行つて、一人で雪をまるめて方方へころがして行くと、ばりばり音をたててついて行く。やがて直徑一尺位になると、もちあげて大きな石の所へぶつつけてこはしてしまつた。その時ふとまだ顏をあらつてないことを思出したので、家へかへつて顏をあらつたがいつもに似ず、水であらつた。あとでごはんをたべながらあとのおもしろいことを思ひうかべて、うれしいやうな氣がした。前の家の子がつめたさうにふくらんだ手で雪をつかんでたべてゐた。

二十一ノ三　朝目がさめると、なんだかさらさらとかすかな音がするので起きてみると、もう店があけてあつて、お父さんが火鉢にあたつてゐる。音のするのは何だらうと表を見ると、眞白な雪が降つてゐる。とたんやねだから聞えるのだらう。僕はすぐ着物を着て裏へまはつて、雪かきをもつてきて、マントをかぶつて表へ出ると、二寸位しか積つてゐな

い。一昨年などとくらべると、ずゐぶん少い。端から雪をかいていくと、下から黒い土があらはれてくる。後から小さい雪が土の所におちると、すぐとけてしまふ。雪をかいてから大通の方へ行つて、一人で雪をまるめて、方方へころがして行くと、ばりばり音をたてついて行く。やがて直徑一尺位になると、もちあげて大きな石の所へぶつつけてこはしてしまつた。その時ふとまだ顏をあらつてないことを思出だしたので、家へかへつて顏をあらつたが、いつもに似ず水であらつた。あとでごはんをたべながら、あとのおもしろいことを思ひうかべて、うれしいやうな氣がした。前の家の子がつめたさうに小さくふくらんだ手で、雪をつかんでたべてゐた。

この二十一の例では、第二回には雪の下の土の描寫が出て來、それから雪まろげの描寫が出てくる。それが第二回ですつかり定位して、第三回には、第一回の時にはかすかな音がしてゐるとのみ書いた音を、雪の音とする細かい觀察が出てくる。この成績では展開の節となつたのは、雪の下の土と、雪まろげと、雪の降る音である。それがこの年頃の子供としては精細なおちついた用意の下に觀察されて居る。しかもその定位は動搖せず、着着と進行して、いかにもよく整理のついた頭の働が知られる。この展開形式は、廿と同一である。

二十二ノ一　僕はぱつと目をさましたけれども、なんだか身體が寒くてしやうがなかつた。そうするとすぐ側に寢てゐた父さんが、「雨戸を開けてきな」といつたので、僕は寒いけれども、父さんのいひつけであるから、いやいやながら床を抜出して、雨戸をちよつと開けると、外が眞白なので僕は雨戸を開けるのをすつかり忘れてしまつて、父さんの所へかけ

出して來て、「父さん雪がふつてゐるよ」といふと、父さんが「何何雪が降つてゐる。早くこの障子を明けて見ろ」といつたので、僕は急いで雨戸を開けて、障子を開けてやつた。そうすると、父さんは「これは珍しい雪だな」といつて、ひとりごとをいつてゐた。僕は寒いのを忘れてしまつて、外の石燈籠にだんだん雪がつもつて來て、その上に松がちよこつと出てゐるところに、雪がつもつてゐる景色が、あんまりきれいなので、すつかり見とれてしまつた。

二十二ノ二　僕はぱつと目をさました。けれどもいつもなら外は、犬の鳴聲、鳥の鳴聲が聞えるのだが今日は、外は靜まりかへつて、なに一つ聞えなかつた。僕はまだ起きる時刻でないかなと、そばに新聞を讀んでゐた父さんに、「今時刻は幾時」と聞いたら、「今六時だから、もう起きて新聞を持つておいで」といつたので、寒いけれども、父さんのいひつけであるから、仕方なしに戸を開けて、お店へ新聞をとりに行かうとしたら、何だか雨戸が、いつもより明るいので、新聞を取りに行くのを忘れて戸をちよつと開けた。そうすると、石燈籠が眞白なので、僕は思はず、「雪だ」と父さんの所へかけこんで來た。そうすると、父さんは、新聞をもつて來いといつた。新聞のことをすつかり忘れて、「早く戸を明けて見ろ」といふので、僕が戸を開けた。僕は雪が降つたので、喜んで、雪の方を眺めてゐると、ふと僕の頭に新聞を持つて來るのを、忘れたといふことがうかんだ。「けれども父さんが、新聞を持つて來るのを忘れてゐるからいゝや」と僕は一人言をいひながら雪を見てゐた。そうすると、父さんがきがついたのか、僕を呼んで早く新聞を持つて來なけりやだめじやないかといつたので、僕は、しらないふりをして、「ああそうだつたつけ、新聞を持つて來るんだ」といつて、僕は店の方へ新聞をとりにいつた。けれども、新聞をとつたけれども、僕は幕をひいて、ぼんやりと外を見てゐた。をはり

二十二ノ三　僕はぱつと目をさました。けれどもいつもなら外は、犬の鳴き聲、鳥の鳴き聲が聞えるのだが今日は、外は靜まりかへつてなに一つ聞えなかつた。僕はまだ起る時刻ではないかなと、そばに新聞を讀んでゐた父さんに「今時刻

は幾時」と聞いたら、「今六時だからもう起きて新聞を持つておいで」といつたので、寒いけれども父さんのいひつけであるから仕方なしに戸を開けた。お店の方へ新聞をとりに行かうとしたら、何だか雨戸が、いつもより明るいので、新聞を取りに行くのを忘れて、戸をちよつと開けた。そうすると、石燈籠が眞白なので、僕は思はず「なんだかさつき靜だと思つたら、雪が降つてゐたんだ」と言つて、父さんの所へかけて來た。そうすると父さんも新聞を、もつて來いといつた。新聞のことをすつかり忘れて、「早く戸を開けて見ろ」といふので、僕が戸を開けた。僕は雪が降つてゐるので喜んで、雪の方を眺めてゐると、ふと僕の頭に新聞を持つて來るのを忘れたことを思ひ出した。「けれども父さんが、新聞を持つて來るのを忘れてゐるからいいや」と僕は一人言をいひながら、雪を見てゐた。そうすると父さんが氣がついたのか、僕を呼んだ。早く新聞を持つて來なけりやだめじやないかといつたので、僕はしらないふりをして、「ああそうだつたけ、新聞を持つて來るんだな」といつて、僕は店の方へ新聞をとりにいつた。けれども僕は蓙をひいて、ぼんやり外を見てゐた。をはり

この二十二の例では、著しい節といふほどの所はないが、戸外の雪に氣のつく處と、雪に氣をとられて、新聞を父の處に持つて行くのを忘れてゐる心理狀態とが、比較的明かな節となつてゐる。この展開には外界の視方の精しい展開よりも、自分の心持をみる精しい展開の方が明かである。そして內省が困難であると見えて、二で展開してゐるが、三ではあまり展開してゐない。しかし三は二に比して可成りおちついて居る。全體としてこの展開は、どことなしになだらかで、かかる節のない展開もあり得ることが知られる。

二十三ノ一　朝目をさますと、硝子の外がとてもあかるい。いやにあかるいと思つてゐると、妹がはいつて來て「兄さん雪がふつてゐるわ」といつたので、僕は思はずとびおきた。硝子戸をあけてみると、ひうと雪がはいつてきた。どこの家の屋根にも雪がつもつてゐる。僕はさつそく着物をきて、下へおりて行くと、もうごはんをたべてゐた。なんだかさむくて顔をあらう勇氣もない。しかたなしに顔を洗はないでごはんをたべた。障子の硝子から見ると、庭の松に雪がつもつて、とてもいいけしきだ。僕は面白半分に外へでて、雪かきをはじめた。えりに雪があたつてぶるぶるとした。それから家へはいつて、まんとをきて、又外へ出て雪をかいた。雪もだんだんこやみになつて、ひる前にやんでしまつた。なんだかつまらないような氣がした。雪どけがしだして、せつかくきれいになつたにはがだいなしになつてしまひさうなので、きがきでない。

二十三ノ二　目をさますと硝子の外がなんとなく明るい。むづかしくいうと、其明るさも日光の明るさとちがふ。へんだなあと思つてゐると、妹がはいつて來て「兄さん雪がふつてゐるわ」といつた。僕は心の中でやつぱりさうだつたのかと思ひながらも、思はずとびおきた。北口の硝子戸をあけると、ひうとほほをきるやうな風と共に雪がふうととびこんで來た。この時僕は頭にふと震災前のことが思ひだされた。雪がさかんにふつてゐるのに、僕と兄さんと二人でかじかむ手をしばしのばして、造りあげたたぬき。あの時ほどいつしんに苦心して造つた時はなかつたと思ふ。じんじんじんとなる時計の音に、はつとしてあたりを見た。どこの家の屋根にも、雪がつもつてゐる。僕は着物をきて下へおりていつた。あんまりさむいので、顔をあらう勇氣もないので、そのままごはんをたべた。庭にいつぱい雪がたまり、松の木に雪がつもつてゐ、いいけしきだ。僕は面白半分に外へ出て、雪かきをはじめた。雪がえりにあたつて、ぶるぶるとした。それから内へはひつて、まんとをきて、又外に出て雪かきをした。雪もだんだんこやみになつて、晝前にやんでしまつた。なんだ

かつまらないやうな氣がした。雪どけがしだして、せつかくきれいになつた庭が、だいなしになつてしまつた。

二十三ノ三　目をさますと、硝子戶の外がなんとなく明るい。其の明るさも、日があたつてる時の明るさとちがう。雪ではないかなと思つてゐると、妹が入つて來て「兄さん雪がふつてゐるわ」といつた。僕は心の中でやつぱりさうだつたのかと思ひながらも、思はず飛び起きた。北口の硝子戶をあけると、身をきる様な風と共に雪がふうととびこんで來た。此のしゆんかん僕の頭にふと震災前の雪のふつた時のことを思ひだされた。雪がさかんにふつてゐるのに、僕と兄さんと二人でかじかむ手をのばしのばし造りあげたたぬき。あの時ほどいつしんに苦しんして造つた時はなかつたと思ふ。じんじんとなる時計の音にはつとしてあたりを見た。どこの家の屋根にも雪がつもつてゐる。僕は着物を着て下へおりていつた。あんまりさむいので、顏を洗う勇氣もないので、其のままごはんをたべた。庭にいつぱい雪がたまり、松の木に雪がつもつていい景色だ。僕は面白半分に外へ出て雪かきをはじめた。雪がえりにあたつてぶるぶるとした。それから內へはひつて、まんとをきて、又外に出て、雪かきをした。雪もだんだんこやみになつて、晝前にやんでしまつた。なんだかつまらないやうな氣がした。雪どけがしだして、せつかくきれいになつた庭が、だいなしになつてしまいさうなので氣が氣でない。

二十三の例は、二で最も展開し、三はその量において、二とほとんど變らない。然らば三で展開がないかと見ると、決してさうではない。この生徒は先づ二において、硝子戶の明るさ、戶をあける瞬間のこと、狸をつくつたことを節にして、十分に展開した。三ではこの展開をうけて、おちついた心の形にかへた。例へば、二では

目をさますと硝子の外がなんとなく明るい。むづかしくいふと、其の明るさも日光の明るさとちがふ。

とかういふ風に、論議して觀てゐるのに、三では、

日をさますと、硝子戸の外がなんとなく明るい。その明るさも、日があたつてる時の明るさとちがふ。

とかういふ觀方にかはつて來た。卽ち論議して居、觀察して居る態度から、旣に觀られたもの、觀察されたものとなつて居る。客觀的な態度から、主觀的な態度に向つて轉回して來たのである。隨つてそこには、觀てゐる働よりも、觀られた形、味はれた形があらはれてゐる。形の成熟があらはれて居る。換言すれば、外界の秩序が、內界の秩序に變つて來たのである。これは重大な展開である。故に展開ははじめ文の形の延長となつてあらはれ、次に收約となつてあらはれる。ここで暗示されることは、延長の後に、客觀的形象の延長の後に、收約、卽ち主觀的形象化、卽ち內面化が行はれる事である。展開はそこまで行かねば、完全でないことを吾等に語るのである。

二十四ノ一 僕はむつくりふとんから起き上つて、窓ごしに空をながめた。空はどんよりくもつていたので、起きるのがいやになつて、又ふとんをかぶつた。しばらくして「正ちやん雪ですよ」と小僧が入つてきてふとんをめくつたので、「寒いじやないかもうすこし」と僕はいつたけれど、こんど起きる時も寒いのであるからと思つて、着物をひつかけて、外

をながめた。僕は「はつ、日曜なのに遊べやしない。雪なんてふるとその時だけは美しく又面白いこともあるが、後になると、とけて道路がぐちやぐちやになつてしまふ。なんてばかばかしいんだらう」と、一つきに思つた。「だがいまいつ頃だらう」と思つて時計にしせんをむけたら、十時なので僕の心にたのしいことがうかんだ。

二十四ノ二　僕はむつくり起き上つて、窓越しにねむたい目をこすりながら空をみた。空はどんより曇つていて、なんとなくいんきくさいので、又ふとんをかぶつた。しばらくして「正ちやん起きるんですよ、雪が降つてゐますよ」と、小僧がきてふとんをはいだので「寒いじやないか、もうすこし寝かして」と僕はいつたけど、こんど起きる時も寒いのだと思つて、着物を大いそぎに着て、二階へかけ上つて外をながめた。僕は「はつ日曜なのに遊べやしない。雪なんかふると、その時だけはいくらか美しいが、日が照りはえてくると、道路はぐちやぐちやになつて、雨の降つたよりひどい。なんてばかばかしいんだらう」と思つてゐた時、どこからとなく「こんなに雪がつもつてゐるのに外で遊ぶなんてだめ。内で遊びなさい」といふどなり聲がきこえてきたので、「どこでしかられてゐるのだらう」と思つて前の店をみたら、いつもげんきな顔をした卵屋の子が、おばさんにしかられてゐるのだつたので、僕は「それ見ろ雪なんか降ると、子供の遊びをさまたげ、その上社會のためにいろいろとさまたげる。雪はもうふらなくてもいい」とつぶやいてゐたが、さむくなつたので下へかけ下りた。そして時計にしせんをむけたら十時だつたので、淺井さんと僕とのやくそくをおもひだして、僕はふふと笑つた。

二十四ノ三　僕はむつくりと起き上つて、窓越しにねむたい目をこすりながら、空を見た。空は薄墨色にどんよりくもつてゐて、なんとなくいんきくさい、空もようであつたので、「つまんない」なと思ひながら、又ふとんをかぶつた。しばらくして「正ちやん起きるんですよ、雪ですよ」と小僧がひんじやくな聲を出しながら、ふとんをめくつたので、「寒い

じやないかもうすこし」と僕はいつたけれど、こんど起きる時も寒いのだと思つて、着物を大急ぎできて、二階へかけ上つて、外をながめたら、雪がこぶりにちらちらと降つてゐたので、僕の心は「はつ、日曜なのに遊べやしない。雪なんか降るとその時だけはいくらか美しいが、日が照りはえてくると、道路はぐぢやぐぢやになつて、雨の降つたより、ひどい。なんてばかばかしいんだらう」と思つて屋根を見、さうして地上を見た。その時白と黑のまだらな犬が、降りつもつた雪の中をおもしろさうにころがり歩いている。その様子を見て僕はばかな犬だなと思つている時、どこからとなくどなり聲がきこえてきたので、なんだらうと思つて、前の店を見た。小供がおばさんにしかられていたので「それ見ろ。雪が降れば子供の遊びをさまたげ、その上社會のためにいろいろとさまたげる。雪なんかつもらなくつてもいい」と思つていたが、寒くなつたので、下へおりてきて時計にしせんをむけたら、十時だつたので僕と淺井君とやくそくした事を思ひだしたので、おもはず笑ひをもらした。

二十四の例は、二になつて雪の與へる不快を中心にして展開した。一にもその不快は出てゐたが、それが文の中心になる程の力を持つてゐる譯ではなかつた。然るに二ではみるみるこれが展開して、文の中心となり、三の展開では、雪の中に戲れあそんでゐる犬のことが出て來るが、その犬がたちまちまたこの不快の感情で着色されてしまふ。この色の濃い中心感情は、この文を貫いて太い明瞭な調子で出てゐる。この生徒は自分の感情を一一敍述するかと思ふと、「淺井さんと僕との約束を思ひ出して、僕はふふと笑つた」と言ふことで文章を終らせる樣な、非常な省略を用ひてゐる。かういふ省略を根據として、全體を更に省略せしむる可能がある。そしてこの次

の展開は收約である。精細に向ふ展開はここでほぼ完了したものと見えるからである。

二十五ノ一　土曜日の晩「どこかで雪がふつてゐるのかしら」とあたしがいふと、「明日はきつと雪がふるのでせう」、こんなことを女中がいつてゐた。

その晩は「明日は日曜だから、少しぐらひは夜ふかしをしてもいいだらう。お餅でも食べてから寢な」とお母さんが言つたので、「わるい事をすぐ實行する」私はすぐ賛成した。

それからお餅を食べてすぐねた。

何にも知らず朝までねてゐた。とつ然耳もとで「姉ちやん」と大きな聲でいつたが、まだねむいからねてゐた。

「おいねぼすけ、雪がふつてゐるぞ」。口のわるい弟は、こんな事をいつたので飛びおきた。

なーる程雪がふつてゐる。

所へ女中が來て「ほーらあたしが言つた通りだつた」と自慢さうに言つた。

「だつてあたしが始め『雪』つていつたんだもの」とあたしがよこから口を出した。ここで以て自慢話が始まつた。

「あたしだつて雪と思つてゐたんだけど、いはなかつたのよ」

「うそだい。お前うまいことばつかり」と弟が言つた。

「お前になんかいつてゐないよ」。家の中は大さはぎ。それに引かへて外では靜かに靜かに雪がふつてゐた。

二十五ノ二　土曜日の晩「今夜はどこかで雪がふつてゐるのかしら」とあたしが言ふと、「明日はきつと雪がふるでせう」と女中がいつた。

その晩はお餅を食べてすぐねた。

何も知らず朝まで「ぐつすり」寢てゐた。突然耳もとで「姉ちやん」と大きな聲で言つた。聞えたがまだねむいので、きこえないふりをして又ねた。
「おいねぼすけ。雪がふつてゐるんだぞ」相かはらず口のわるい弟は、こんなことを言つたので、すぐ飛びおきた。なーる程空から綿をちぎつてなげたやうに音も立てないで、靜かに靜かに降り、家家の屋根は綿帽子をかぶつてゐた。
所へ女中が來て「ほーらあたしが言つた通りだつた」と自慢さうに言つた。しやくにさはつたので「だつてあたしが始め『雪』と言つたからだ」と、あたしが一いばりいばつてやつた。ここで以て自慢話が始まつた。
「あたしだつて雪と思つてゐたんだけれど、言はなかつたのよ」
「うそだい、お前らまいことばつかりゐつてゐる」と弟がよこから口を出した。
それに引かへ、外では靜かに靜かに雪がふつてゐた。

二十五ノ三　土曜日の晩「どんより」と曇つた空は、今にも降り出しさうであつた。「今夜はどこかで雪がふつてゐるのかしら」と言つたら、「明日か今夜はきつと雪がふるでせう」と女中がいつた。
朝まで何も知らずに「ぐつすり」寢てゐた時、突然耳もとで「姉ちやんもう起きな」大きな聲で言つた。ちやんと聞えてゐたがまだねむいので、きこえないふりをしてねてゐた。
「おいねぼすけ、雪がふつてゐるんだぞ」相かはらず口のわるい弟はこんなことを言つたので、すぐ飛びおきた。なーる程雪が天から綿をちぎつてなげたやうに、音も立てないで靜かに靜かに降つてゐ、家家の屋根は皆綿帽子をかぶつてゐた。
所へ女中が來て「ほーらあたしが言つた通りだつたでせう」と自慢さうに言つた。

しやくにさはつたので「だつてあたしが始め『雪』と言ひ出しただからよ」とあたしが一いばりいばつてやつた。そして、「あたしだつてきつと雪が降ると思つてゐたんだけれど言はなかつたのよ」
「うそだい。お前うまいことばつかり言つてゐる」弟がよこから口を出した。
「お前なんかに言つてゐないよ」家の中は大さはぎ。
ふと外を見ると今やんだばかりの重さうな雪空を、カラスが寒むさうに羽をひろげて飛んで行つた。
下を見るとヒヨケが白いかたまりの雪を負つてゐた。

この二十五の例は、量に於いては一二三の三回共に、別に展開してゐる様には見えぬ。しかしよんでゆくと、可成りよく展開してゐる。これは一方に於いて省略してゐるからである。例へば一では

その晩は「明日は日曜だから、少しぐらひは夜ふかしをしてもいいだらう。お餅でも食べてから寝な」とお母さんが言つたので、「わるい事をすぐ實行する」私はすぐ賛成した。
それからお餅を食べてすぐねた。

とこれだけ書いてゐるものを、二では

その晩はお餅を食べてすぐねた。

とこれだけに、省略してゐる。また一では、

土曜の晩「どこかで雪がふつてゐるのかしら」とあたしがいふと、「明日はきつと雪がふるのでせう」、こんなことを女中

が言つていた。

と細かにかいてゐるのを、二でも殆どそのまゝに受ついでゐるが、三になると

土曜日の晩「どんより」と曇つた空は、今にも降りだしさうであつた。「今夜はどこかで雪がふつてゐるのかしら」と言つたら、「明日か今夜はきつと雪がふるでせう」と女中が言つた。

といふやうに、穏やかにして來た。

それからまた自分のねてゐるのを弟がおこしに來たのを書いて、「ちやんと聞えてゐたが」の「ちやんと」を入れてゐる。これは極めて簡單な言葉でありながら、よくきいてゐる。また雪を描寫して、「今やんだばかりの重さうな雪空」といふ、「重さうな」といふ言葉も、またみる働の深さを示して來た。この展開形式も、描寫の上に批判が行はれて、精密に向ふよりも、深さに向つてゐる。

この生徒はこれ迄のどの例ともちがつて、雪の描寫を、雪の客觀的な描寫ではじめずに、他の人達との關係と、會話とで運んでゐる。雪は人達の會話の中で、定位され、確定されてゐる。かういふ小説にあらはれるやうな文の形がみられることも、興味が深い。

二十六ノ一　「まあ雪」と、窓へ日をむけると、あばら骨のやうなかつこうをしたものが、くるくると、何者かに自由にいぢられてでも居るやうに、廻つて居る。「何んだらう」、窓を、あけると、竹の足袋かけが、風にいぢられてゐるのだ。竹

の色も、茶にかはつて、細い枝にたつた二枚青い葉がついてゐる。物乾の下に、何か左右に動いてゐる。よく見ると、細いひもが、左右に、ゆれる度に、雪をつつて、圓い雪團子を、こしらへてゐる。私は、その大きくなるのを、寒さも忘れて、ねまきのままながめてゐた。私はいつか雪のふるのを見てゐた。雪は、むしんに、降つて居る。風にあふられては、さつと、早く下へ舞ふ。又風がゆるんでは、靜かにつもつた雪に加はつて行く。純白な雪は、はげしく、ゆるく、ほふり落される如く、下へ下へと、無心に、落ちて行く。

二十六ノ二　「まあ雪」と、窓へ目を向けると、肋骨の樣な形をした黒い物が、くるくると、何者かに自由にいぢられてでも居るやうに、廻つて居るのが目にえいじた。「何だらう」と、窓をあけると、竹の足袋掛が、風にいぢられて、くるくると音もなく廻つては、物乾柱にぶつつかつて、はねとばされてゐる。竹の色も茶に變つて、細い枝に、たつた二枚の青い葉が雪にぬれてついてゐる。ああこれは去年の竹だ。去年のお正月の形見だ。物乾の下に、何か、左右に動いてゐる。よく見ると細い黒いひもが、左右に、ゆれる度に雪を、つつて、圓い雪團子を、こしらへて居る。私は其の大きくなるのを、寒も忘れてねまきのままながめて居た。雪團子はだんだん大きくなつて行く。私はいつか雪の降るのを見て居た。雪は無心に降つて居る。風にあふられては、さつと、早く下へ舞ふ。古竹も廻る。又ゆるんでは舞を舞ふ如く、靜かに、積つた雪にくははつて行く。廻つて居た竹も、とまる。純白な雪は、はげしく、ゆるく、はうり落される如く、舞ふ如く、下へ下へと無心に落ちて行く。

二十六ノ三　「まあ雪」と、窓へ目を向けると、肋骨の樣な形をした黒い物が、くるくると、何者かに自由にいぢられてでも居る樣に廻つて居るのが目にえいじた。「何だらう」と、窓をあけると、竹の足袋掛が、風にいぢられて、くるくると音もなく廻つては、物乾柱にぶつつかつて、はねとばされてゐるのだ。竹の色も、茶に變つて、細い枝に、たつた二枚青

い葉が雪にぬれて付いてゐる。ああこれは、去年の竹だ。去年のお正月の形見だ。植木ばちには、冬を知らない様に玉ねぎの青青とした若葉が、つんと雪中につき立つてゐる。其の青葉の先に眞白な綿帽子が、ちよこんと坐つてゐる様は、いかにも元氣がよい。前の家の屋根には、弟の投げた雪團子の爲に雪に穴があいて、黒いトタン屋根がチラと見えてゐる。物乾の下に何か左右に動いてゐる。よく見ると細い黒いひもが、左右に、ゆれる度に雪をつつて、圓い雪團子を、こしらへて居る。私は其の大きくなるのを、寒さも忘れて、ねまきのまま眺めてゐた。雪團子はだんだん大きくなつて行く。私はいつか、雪の降るのを見てゐた。雪は無心に降つて居る。風にあふられては、さつと早く下へ舞ふ。古竹も廻る。又ゆるんでは舞を舞ふ如く靜かに、積つた雪にくははつて行く。廻つて居た竹も、とまる。純白な雪は、はげしく、ゆるく、はうり落される如く、舞ふ如く、下へ下へと無心に落ちて行く。

二十六は二で今迄のどの例にも見ない程の精細さを示した。ことに運動を細かに書いてゐるのは、鮮かである。竹の足袋掛のゆれてゐるのや、雪の降るのや、何れもこの子供でこれ以上に視られぬ程、緊密にかかれてゐる。ここでもこの展開はとまつたと見られるから、三の展開は注意する要がある。三では二の描寫の中に、更に新らしい發見を加へてゐる。玉葱の青い葉と、トタン屋根の雪の穴である。如何にも觀察が要を得てゐる。刻明な、むだのない書き方である。これは第一回からあつたが、足袋掛の竹に二枚殘つてゐる葉も、ちやんと生きてゐる。

かくの如く觀る働の洗錬せられてゐる生徒では、展開に細かさを増すだけである。その細かさも簡約せられる餘地のない細かさである。隨つて客觀的な精細さをもつ型の展開は、展開毎に精

細で鮮かになつてゆくのであつて、苦しい心持がするのである。西尾實氏が嘗て書いた論文の中に、生徒が非常に精細な寫生畫をやつてゐる。そこでその寫生を樂んでやつてゐるかときくと、皆くるしんでやつてゐる。苦しいのであるけれども、いやではないと生徒がいつてゐるといふことがあつた。かういふ苦しい緊張をこの展開の中に觀て、一種敬虔な心がする。

二十七ノ一　「カチカチ」となるセコンドの音に私は目をさまし、便所へ行かうと思つて下へおりて行つた。なんとなくあたりが明るいので私は思はず「雪かな」と一人つぶやいた。便所へ入り窓ごしに外を見ると、ちらちらと白い物が降つてゐる。「あつ、やつぱり雪だ。ねがひ事はかなつたり」と、ぢつと中村さんの庭のひばの木にふりかかつた雪をながめてゐた。と思はずぶるぶるとみぶるいをしたので、おどろいてにかいへ上り、ふとんの中へもぐりこんだ。「にいさん雪だよ。早く起きてあれをしようよ」と。にいさんはやつと目がさめたらしく、ねむい目をこすりながらかほをむけた。にいさんは雪だときいて「あつ」とおどろきながら飛び起きてしまつた。いそいで床をあげ、雨戸をあけると、外はまるで銀世界の様で家家の家根や道ばたは、まるで綿でつつまれた樣である。私と兄さんはぢつと手すりにもたれたまま、外を見てゐた。樋渡さんの所の松の木へ雪のふりかかつてゐるのは、なんとも言はれない景色である。又少しはなれた、向ふのコンクリートの高い建物に雪が積り、他の家より高く一段とうき出てゐるのも美しい。「あああこのまま明日までつもつたら、きつと雪合戰や雪つりも出來るだらうに」と思つた。ものほしはどうだらうかと思つて、ものほしへ出た。ものほしも眞白で、さほの上まで白くなつてゐる。どこを見ても見わたすかぎり眞白で、まるで銀世界の樣だ。これこそ讀本でならつた油繪の樣だ。西浦さんの家の人がしやつ一枚で雪かきをしてゐる。

二十七ノ二　「カチカチ」となるセコンドの音に目をさました。下で何かがやがやと話し聲が聞える。「ああさうだ。昨夜お母さんが明日は寒餅をつくと言つたつけ」と思ひ出し、ねまきのままで下へおりていつた。あたりがいつになく明るい。「雪かな」と一人つぶやきながら便所へ入つた。窓越に外を見ると「ちらちら」白い物が降つてゐる。「あつ。やつぱり雪か」とぢつと外をながめた。中村さんの庭のひばの木に、雪がふわりと綿をちぎつてのせた樣に、降り積つてゐるのは、濱邊のえだぶりのいい松の樣に見える。ぶるぶるとみぶるいがした。おどろいて二階へ上りふとんの中へもぐりこんだ。兄さんは何とかの會があるから百人一首をならうんだと、大聲で歌をよんでゐる。「兄さん雪が降つてゐるわ。早く起きなさいよ」と。兄さんは雪ときいておどろいて飛び起きてしまつた。いそいで二人で床をあげ雨戸をあけた。ぱつとあたりが明るくなつた。家家の家根は眞白で、道ばたもまるで綿でつつまれた樣である。所所道に車の線が長くつづいてゐたり下駄のはの跡等がつづゐたりして、あたり眞白な中に、黑く土色が出てゐるのも、ちよつと面白い。私と兄さんはぢつと手すりにもたれたまま、外をながめてゐた。遠く第一高女のコンクリートの高い建物が白い所へ、又雪で眞白になつて他のものより一きはうき出てゐるのも美しい。ものほしはどうだらうと思つて、ものほしへ出た。さほの上も眞白で、折折風の爲に雪がふぶきの樣にこまかく、西の方へ飛んで行く。所所で雪かきの音が聞える。西浦さんの馬方もしやつ一枚で勢よく雪をかいてゐる。此處もかしこも見わたすかぎり眞白で、まるで讀本でならつた油畫の景色にてゐる。

二十七ノ三　「カチカチ」となるセコンドの音に目をさました。何處かで「雪やコンコンアラレヤコンコン」と歌ふかあいい聲が聞える。「おや又雪かしら」と一人つぶやきながらとこの上に起き上がつた。何か下でお母さんのかん高い聲がする。

「ああそうだ今日は餅つきだと言つたつけ」と思ひ出し、ねまきのまま下へ下りていつた。あたりがいつになく明るい。便所へ入つた。窓越に外を見るとちらちらと白い物が降つてゐる。

「あ、やつぱり雪だ」と小聲でつぶやきながら、外をぢつと見つめた。中村さんのひばの木に、雪が降りかかつてゐるのはふわりと綿をちぎつてのせた樣で、まるで濱邊のえだぶりのいい松の樣にも見える。遠くでしきりに犬のほへる聲が聞える。ねこは雪の日は火にかじりついてゐると言ふが、犬は雪を大へんよろこぶさうだ等と、母さんにきかされた事等をおもひ出した。じつと見とれてゐると、思はずぶるぶるとみぶるひをしたので、おどろいて床の中へもぐりこんだ。「兄さん雪が降つてゐるから、早くおきてみなさいよ」と。兄さんも急いで飛び起きてしまつた。急いで床をあげ、雨戸をあけた。ぱつと部屋内があかるくなつた。家家の屋根も道路も眞白で、丁度綿で、つつんだ樣である。所所車の跡が二すじ長長とつづいてゐたり、二の字二の字の下駄のはの跡等がつづいてゐたりして、あたり眞白な中に黑く土色が出てゐるのも面白い。ふと電車道を見ると、まむし屋の赤い旗が銀白の中にひらひらとゆれてゐるのは、なんとも言はれない。又遠く第一高女のコンクリートの高い建物が、一きは高くつきたつてゐるのも美しい。三州やのひさしをおばさんがはくたびに、ひさしに積つた雪がばさばさと音を立てて、はふり落され、くだけて、ぱつとあたりに飛びちるのもおもしろい。私と兄さんはぢつと手すりにもたれたまま、外をながめてゐた。ものほしはどうだらうと思つて、ものほしへ出た。さほの上も眞白で折折風の爲雪がきりのやうにこまかく、西へ西へと飛んで行く。所所で雪かきの音が聞える。西浦さんの馬方もいせいのいい聲で歌をうたひながら、しやつ一枚で勢よく雪をかいてゐる。どこもかしこも見わたすかぎり眞白で、まるで讀本でならつた油繪のやうだ。

二十七の例は、別に特色のない、平和な展開をしてゐる。これは更に縮約せらるべきであり、その展開をこの次にさせなくては、觀る働は深さに達しない。

二十八ノ一　ふと目をさまして見ると、何だかあたりが明るいやうな氣がした。おや「電氣がついてゐるのかしら」と

思つて見たが、電氣もついてゐない。

何の氣なしに幕をまくつて見たら、何んだ雪が降つてゐたのだ。ちやうど私のねてゐる部屋は、庭といつてもほんの小さい庭だが、其のとなりにあるので石どうろうや箱庭の上にふつくらと美しい雪が積つてゐた。私は雪が降ると、きつとあの四十七士の討入や、櫻田門の變のことを思ひだす。そうして雪と言ふと、何だか勇ましいやうな氣がする。チンチンチン時計が七時をうつた。びつくりして大急ぎでふとんをたたんで外へ出た。さしのぼる太陽が雪を銀色に照らしてゐた。その様子がまるで讀本にあつた雪景色のやうに美しかつたので、私はぼんやりと眺めてゐると、ふいに飛びついたものがあつた。

それはエスと映ちやんだつた。

映ちやんは雪つりをしようしようといつたので、私もしかたがないからお相手をしながら、なほその雪景色にみとれてゐた。

ああこの雪景色も、いまにあのどろんどろんになつてしまふのかと思ふと、私は何だか悲しくなつた。

二十八ノ二　ふと目をさまして見ると、何だかあたりが明るいやうな氣がした。おや電氣がついてゐるのかしらと思つて見たが、電氣もついてゐない。

おや何だらう。おかしいな。ああそうだ雪かもしれない。もし雪だとうれしいがなあ。と思ひながら幕をまくつて見たらあんのぢやう雪がふつてゐた。ちやうど私の寢てゐる部屋は、庭といつてもほんの小さい庭だが、其の隣にあるので、石燈籠や箱庭の上にふつくらと、美しい雪が積つてゐた。私は雪が降ると、きつとあの北海道の雪の事を思ひ出す。私は元來雪が好きであつたが、あの時ばかりは雪が家の高さまで降つてしまつたので、遊ぶこともどうすることも出來なかつた。雪の中をソリに乘つて學校へ通つたこともあつた。あれからこれへといろいろなことを思出してゐると、時計が七時

をうつたのでびつくりして、飛起きた。表へ出て見るとさしのぼる太陽が雪を銀色に照らしてゐた。向ひのお湯やの煙突から煙が寒さうに立昇つてゐた。前の赤い家が白い雪に包まれてまことにつり合がよい。その様子がまるで讀本にあつた雪景色のやうに美しかつたので、私はぼんやりと眺めてゐると、ふいに飛びついたものがあつた。それはエスと映ちやんであつた。エスが殘したのであらう、つばきのやうな足跡があたり一面にちらばつてゐた。映ちやんは雪つりをしようしようといつたので、私もしかたがないから、お相手をしながらなほもその雪景色にみとれてゐた。ああこの雪景色も、いまにあのどろんどろんになつてしまふのかと思ふと、私は何だか悲しくなつた。

二十八の例をかいた生徒は、三には休んで書かなかつた。この生徒の態度に著しいことは、おちついて敍述してゆく、豐かな調子である。例へば自分の部屋が庭のそばにあると言つておいて、すぐにその庭が小さい庭にすぎぬことを、ここで述べてゐる。それが文脈が通つてゐて、少しも不自然でない。そしてさういふ事柄の敍述ばかりではなく、自分の聯想内容についても、同様におちついて述べてゐる。最初の聯想内容は、四十七士や櫻田門であつたが、その次の聯想内容は、北海道で暮した冬のことである。何れにしてもよくおちついて敍述してゐる點は同一である。雪明の明るさをかく時にも、すなほにおちついて居るのである。展開は、これといふ節がなくて、金塊をうちのばして行く様に、そのものが持つ内なるものの、自然の展開である。附加されてそれが系統化されて行くのではなくて、系統そのものが展開してゆくのである。隨つてかう

いふ展開形式を持つ子供の成績は、はじめから一つの形をちやんと持つてゐる。だんだんに築き上げられてゆく形でなくて、はじめから全體がそなはつてゐるのである。故に系統化す働の強く働く展開と、部分化する働の强く働く展開とが、展開形式中の二つの特色ある型であると思はれる。

二十九ノ一　ふと目が覺めると、すぐ寢卷のままで下の便所へ行つた。「サラサラサラ」と言ふ音が私の頭にすぐに響いた。すると私は不斷から臆病であつたから、さては誰かの惡戯かと思つて、上を見上げたり後を向いたりして、自分の前にある便所の細い窓の所を見ると、何んだかいつもと違つて樣子が怪しいので、其の戸を開けて見ると驚きました。近頃に珍らしい雪、綿をふわりと天の神樣がお下しになつたのだらうなどと嬉しさの餘り、便所を出て二階に行き、急いで着物と着變へて、長靴のままかつぱも着ないで外に出る。
自分は得意になり誰も出て居ないかと思へば、其れとは違つて梅田の高ちやん、岩本さんの小僧さん、まだ澤山の人人が雪かきでかいて居る。其の樣子を見ると面白くて面白くて仕方がない。ああ樂しき雪よ。

二十九ノ二　靜かに眠つて居る私はふと目が覺めると、すぐ下の便所へ行つた。
何處からともなくすーと私のものの邊を行き過ぎる。
さう思ふと何だか今日は、いつもより樣子が違ふ樣な氣がするので、すぐ目の前にある窓の所を見ると、近日に珍らしい雪。
雪を見ると、私はすぐ便所を出て、二階に行き着物を着變へて、又も二階より下りて來て、長靴をはき、かつぱも着ない

で外に飛び出した。
たしか私が一番早いだらうと思ひ、得意になつてかけずり廻つて居ると、其れどころか岩本さんのお芳ちやん、梅田の高ちやん、其の他近所の子供達と、大きな雪だるまを作つて遊んで居る。皆は私の方を向いて「みーちやん隨分寢ぼすけね」などとかへつて恥をかかせられた。其れでも嬉しい此の雪。
ああ樂しき此の雪よ。

二十九ノ三　ふと目が覺めると、あーんと一つ大きなあくびをした。とすぐに下の便所へ行つた。
何處からともなくすーと私のももの邊を行き過ぎる。
さう思ふと、何だか今日はいつもよりは樣子が違ふ樣な氣がするので、邊を見廻して居ると、すぐ目の前の窓越しに、ちらつと眞白な雪。「あらッ雪」と窓を明けて外を見ると、綿をちぎつた樣な雪が、ほこりの樣に細かく降り續いて居る。
私は其れを見るとすぐに窓をしめ、便所を出て二階に行き、着物を着かへて、又も二階より下りて、長靴をはきかつぱも着ないで外に飛び出した。
たしか「私が一番早いだらう」と思つて得意になつて居ると、其れどころか岩本のお芳ちやん梅田の高ちやん等が、大きな雪だるまを作つて居るのに恥かしくなつてしまつた。其して私の方を向いて、「みーちやん隨分寢ぼすけだねー」と言つて笑つて居る。ああ、なんと朝からおかしな雪の朝だらう。

二十九の例は、二で一を收約して、寢卷のまゝ便所に行つた處の敍述を削つてしまつた。二と三で一の終の部分を展開させてゐる。しかしこの收縮はむしろこの文章の特色をすてたものであるし、終の展開は不必要なことをしたものである。故にこの文章は無價値の所を展開させて、文

章の價値をかへつて低落させてしまつた。これは展開形式のもつ一つの衰頽である。

三十ノ一　僕の名前を呼ぶ者がゐる。誰かと出て見ると平野君や中村君であつた。その時は五時十五分頃。さつそくじうどうぎをもつてもう二人呼びにゆき、どうじようへゆき、じうどうぎにきかへ、じうどうをはじめた。その内に雪だ雪だという者がゐた。皆んなは一度に雪かへといつて、ガラリと戸をあけて見れば、綿の様な雪が降つてゐた。氣がついて見れば、なるほどさつきよりづつと寒むかつた。その内先生はあまざけをもつてきたので、それをのみ、かけるやうにして家にとびこんだ。まだくらかつたので、僕はねてしまつた。目がさめると、九時三十五分であつた。すぐ窓をあけると、もう一寸餘りつもつていた。それからおきて公園にいつた。

三十ノ二　僕の名前を呼ぶ者がゐる。誰かと出て見ると、平野君や中村君がにこにこしてまつていた。ふと時計を見ると、五時十五分。さつそくじうどう着を着て、どう場へ行き、じうどうをはじめた。すると雪だといつたので見れば、白い白い雪がちらちらふつてゐた。氣がつくとさつきよりづつと寒い。そして終つたので家へきてねてしまつた。すると、おばあさんが僕をおこすこゑがきこえた。おきて外をみると、もう一寸ばかりつもつていたので、さつそく公園へいつてみたら、誰かあるいたらしく足跡がついてゐたので僕もはいつてみたら、げたに一つぱい雪がはさまつて、ころびさうになつたので、ヒヤツとして家へかへつて妹をおぶつて雪釣をした。

三十ノ三　どしんどしんとじうどうをやつてゐると、雪だ雪だといふので見れば、白い白い雪がちらちらふつてゐる。ふと氣がつくとさつきよりづつと寒い。そこでさつそく家へかつてきて、寒むかつたのでさつそくねどこへとびこんだ。そのうちに、おばあさんが僕をおこすこゑがきこえた。さそつくおきて外をみると、もう一寸ばかりつもつてゐる。さ

づそく公園へいつてみたら、誰かあるいたらしく足跡がついてゐるので、僕もはいつてみたら、げたに一つぱい雪がはさつて、ころびさうになつたので、さつそく雪をとつてまた一足二足とあるく。またころびそうになつたので、又雪を取つて、やつとのことで公園を出て來た。そしていそいで家へ飛んできて、「ぼうや兄ちやんにおぶさつて外へあそびにゆかう、ゆきつりするの」といつて、ゆきつりをしてあそんだ。

三十の例は少し妙な位置に居る。一では柔道場に居て見つけた雪である。家にかへつて後公園に行くが、それはほんのつけたしにすぎぬ。二では一とはじめの部分は同一であるが、甘酒をのんだ所などを視野の外に出して、この部分を省略し、公園の雪をかいてゐる。三はずつと視方向をずらして來、柔道場を出發として、そこですぐに降る雪にあふ。一の全文の七割をしめてゐた部分を、二では最初の部分に片づけてしまつて、公園の方が重要な位置をしめる樣になつた。この展開は普通の展開形式のやうに首部と尾部とがほぼ一定して、その間を精細にする展開ではなくて、常に變つてゐる。しかも突然新らしい觀方があらはれて來たのでなくて、大體の方向は既に一にあつたもので、それを時により、重さを變へてゐるのである。この展開では、第一回、第二回には重點を家を出る時から柔道場にゐる間に置き、第三回には家を出ることは全く省略されて、柔道場が半分から書かれ、そろそろ公園の方に、重點が移行してゐる。しかもこの三にあらはれた移行は、既に二でその氣合がみえてゐたもので、決して突然の生起ではない。この點から

みると一から二を通して來たものが、三であつて、三は決して突然の生起ではない。したがつてこの展開は展開形式である。しかし一と三とを比較すれば、展開形式ではなくて、むしろ變換形式である。二を置けばはじめて展開形式になる。この三十の例は少し妙な位置に居るといつた所以である。

かかる移動性開展形式は、必ず系統化の展開で、少くとも中に二つの著しい節がなくてはならぬ。そして一つの節から他の節に重點が移動するのである。この點でこの變換は、移動性を持つてゐるが、この移動性は展開力の頽廢から來るものでなくて、展開力の增盛から來るのである。故にこの展開のとる位置は展開形式と附加形式との中間に居る。附加形式は初部を反復的に保留して、尾部に展開するものであるが、この移動性展開形式では、尾部の方に展開方向を移動させるものである。しかしこの移動は必ずしも尾部にのみ向ふものではなくて、頭部の方に向ふ場合もあり得ること勿論である。けれども文章の定位は先づ最初の一句にはじまるのであるから、この一句を動かすことは困難である。この部分を切りすてて、背景の中に埋づめてしまふことは出來、その次を定位の首部におくことは出來るが、この一度定位したものを更に定位しなほして、ここに力點を移動することは困難である。これを出發にして展開して行つた、比較的未展開の部分、卽ち後部に、展開の重點を移し、既展開の部分を削除して行く方が容易でもあり、展開傾向

の自然でもある。故に頭部に力點移動の方向をとることはあり得ると考へられながら、その實かかることの容易に行はれ得ない理由がここにある。

三十一ノ一　ああ目がまぶしい。

「どこから始めようかしら」と思つて考へてゐた。
「そうだ眞中からやらう」と思ひ、雪かきにとりかかつた。
シャベルで雪をすみへおして行く。
するすると音をたてて、雪をおして行く。
あまり強くおした爲に、體の方がシャベルより、先へ出て、雪の上にうつぶしになつた。
「いやになつちまうな」と思ひながら、起き上つた。そして又始めた。
今度は雪をあまり入れずにやつて見たら、すうすうと上手にいつて、割合にはかどつた。
こんな、同じやうなことでは、あきつぽい私には、續けられなかつた。
「どうしようかなあ」と考へてゐると、おもしろいことがうかんだ。
それはおとなりの家の屋根へ、雪をかためて、おとすことである。
始めに、小さいのをこしらへて、おとして見た。
トタン屋根であるので、思つたより大きな音が起つた。
私はびつくりしておちた處を見てゐると、誰だかかい段を上つて來るやうな音がしたので、「はつ」として又もとの仕事をはじめた。

三十一ノ二　「ああまぶしい」私は思はずひたひへしはをよせた。「どこから始めようかな」と思つて考へた。
先づ順序として眞中からしようと思ひ、眞中へと走つた。丁度眞中ごろからいよいよ始めた。
雪かきで雪をすみの方へおして行く。
するすると小ちやな音を立てて、雪かきが滑る。あまり强くおした爲に、體の方が雪かきより先へ出て、足跡一つない純白な雪の上に、はいばひになつた。
私はいつまでも顏を雪へおしつけてゐた。
そして呼吸したら、鼻の中へ雪がすつと飛びこんだ。それでもまだ起き上らなかつた。
すると、鼻の中から何かおちて來た。
鼻血かなと、思つたら、もうさつきの雪がとけておちて來たのだ。
その中におなかがつめたく感じて來たやうだつたので、起上つて又雪かきをはじめた。
もうあきてしまつたのでやめた。
雪は一人でにとけたのであらう。
この雪が降つてから、何日目かに又ひらひらと白いものが降つて來た。
今度こそたくさん積つてくれればいいなと思ひながら、落ちて來る雪を見つめてゐた。
窓ぎはへ行つて、何も見てゐると、雪はすこしも積らず、皆消えて行く。
「なんだ積らないのか、つまらないな」といひながら窓をしめた。
そして又机の傍へすはつた。「何時だらう」と思つて時計を見たら丁度八時半であつた。
後三十分鉛筆をとつた。
「もういいや」鉛筆を筆入にしまつた。

そしてカバンにふとんをしばりつけた。
まだはやいかなと思つて、表へ出たら、二三人づつそろつて門の中へはつて行く。
「この時計おくれてゐたんだわ」
「いつてまゐります」といつて家を出た。
雪はひらひら降つてゐた。

三十一の例は、第三回を缺席の爲に缺いてゐる。この展開はまた一つの特色ある樣式を示してゐる。二は一のそのまゝの展開ではない。はじめの雪かきをして倒れた所を、二では可成り精しく展開させてゐる。この展開の樣式は客觀的展開の常態である。しかもその客觀的なものが、常に反省せられて主觀的な味を持つてゐる客觀性である。然るにその後に次の觀察をそのまゝ附加してゐる。これは明かに附加形式である。展開形式であると同時に附加形式である。展開附加形式では、第二回が展開形式であつて、第三回は第二回に展開したそのまゝの部分を、少しも變へずに、その尾部に新らしい觀察を附加するものである。しかるにこれは一つの文章で前半は展開形式、後半は附加形式である。展開形式なると共に附加形式である。しかし前半部の展開狀態でみれば、十分に展開させうる能力がある。前の展開附加形式では、展開不能なるが故に、その尾部を延長して行つたのである。故に素質と傾向とが全然ちがつてゐる。故にこの附加形式は、展

開形式の一變遷態とみるべきである。展開する形の一つの異例としての展開とみるべきである。第三回でこの展開をどうするかを見たいのに、それがみられないのは殘念であつた。

以上二十乃至三十一の例は、何れも展開形式に屬するものであつて、これを總括して考へる時には、二つの樣式を見出し得る。第一は展開の範圍が一定してゐて、その中で展開するものである。換言すれば視野が一定してゐて、同一視野の中でその節節が凝視せられ、精細をましてゆくものである。然るに第二は視野は一定してゐるが、視野の中にあらはれる節の、全體に對する地位に變動をおこすやうな展開をするのである。三十の例の樣に、展開の力點を移動して、文章が全く別の面目を持つて來る程の變化を生ずるものである。第一は節がはじめの決定された位置で展開するのに、第二は決定された位置を持たずに、移動的に展開するのである。

しかしこの兩者共に、はじめから節を有つことは同一であるから、この節に着目すれば、更に展開形式中に二種の形が見出される。第一は文章中に、節卽ち展開の據點があつて、節を展開の中心とするものである。第二は文章中に節なく、文章の全體が展開するものである。前者は系統化であり、後者は部分化である。系統化とは、節を中心として展開するのに、展開の爲に新らしい觀る働が作用し、この觀る働がなしとげた發見が、節の展開となることである。後の發見が、

單なる附加乃至雜集となることなく、完全に展開を成就するのである。卽ち新らしき部分が、系統の中に取入れられるのである。部分化とは先づある全體が、新らしき客觀的要素を要せずして、展開することである。卽ち全體が絕えずその部分を分出して行く展開である。

而して以上の二者は、共に文章の量を延長するのであるが、延長が一定の度に達すれば、その中に統一を求めて、結晶しようとして來る。收縮にも二つの樣式がある。第一は延長の後にするものであり、最も普通の展開形式である。しかるに第二は展開が同時に延長であり、收縮である場合である。卽ち展開が批判的であつて、絕えず展開作用を內省し、延長しつつ、他方には收縮するのである。これは展開がそのままの形で推敲であるといふ、緊密な狀態を示すのである。

次に展開形式の頽廢を考へてみる。展開形式の第一種卽ち系統化の展開、節のある展開、展開根據點があつてする展開は、系統化の力がゆるめば、雜然として孤立しやすい。この紛錯が統一力にかてば雜集形式を得る。故にこの形式は展開形式第一種の頽廢化として見ることが出來るのである。

次に展開形式第二種の部分化展開の頽廢が產む形式は、反復形式である。節のない展開であるから、これが展開力を破壞すると、全體を繰返すより外ない。これが反復形式である。

故にこの系統を表にすると、次の如くである。

展開形式
- 系統化展開
  - 定位性展開
  - 移動性展開 ……雜集形式
- 部分化展開……………………反復形式

三十二ノ一 ちんちんちんと七時がなつた。下ではお米をごりごりといでゐる音がする。まだ七時なのかと一人言をいひながら、またふとんの中にもぐりこみ、着物を頭の上にかぶせ、かいろをだいてねやうとすると、さらさらさらさらと雪の降つてる音がする。雪がふつてゐるのか。頭にかぶせた着物を持つてカーテンをはづし、窓ごしに外をながめると、銀世界。自動車のはしつた跡が、はつきりと五寸ばかりの跡をのこしてゐる。

三十二ノ二 ちんちんちんと七時がなつた。下では、お米をごしごしとといでゐる音がする。まだ七時なのかと一人言をいひながら、またふとんの中にもぐりこみ、着物を頭の上にかぶせ、足と足とさかんにごそごそやつてゐるあひまに、ばさばさ、ちらちらちらと聞える。あー雪がふつてゐるのかと、頭にかぶせた着物を持つて、かあてんをはずし、外をながめると、邊りは一面の銀世界。たがひちがひに、二つ、四つ、六つ、八つと、ほう齒のあとが薄黑くのこつてゐる。大通の眞中には、自動車のはしつた跡がはつきりと五寸ばかり、のこしてゐる。

三十二ノ三 ちんちんちんと七時がなつた。下では、お米をごりごりとといでゐる音がする。まだ七時なのかと一人言をいひながら、またふとんの中にもぐりこみ、着物を頭の上にかぶせ、足と足とさかんにごそごそやつてゐるあひまに、ばさばささらさらさらと聞える。ああ雪がふつてゐるのか。頭にかぶせた着物を持つて、かあてんを、はずし外をながめると、邊りは一面の銀世界。二の字の下駄の跡が二つ、四つ、六つ、八つ、とたがひちがひに、薄黑くのこつてゐる。大

道の眞中には、自動車のはしつた跡がはつきりと五寸ばかりの、跡をのこしてゐる。

三十二の例は、反復形式である。一、二、三共にほとんど展開して居ない。展開し得ない理由は、主題雪に觀る力が集中しないためである。書けないのは觀得ないからである。この文の第一回でみると、八割は雪のことでない。布團の中に寢てゐることである。それでも第二回になると、こんどは雪のことがふへて、三割六七分になり、第三回では、第二回と同一である。描寫も全く同一である、主題に向つて注意力を集中することが出來ない。初めあるものに後から增加して、觀るものを豐富にすることも出來ない。そこには最初の全體が、そのままに物質的に橫つてゐるに過ぎない。もし觀る働を盛にして、新らしい發見が加り、展開をおこすやうであつたならば、これ節を有するものであり、卽ち全く別の系統に屬するのである。

三十三ノ一　十五日の朝五時頃、中村君が平野さん平野さん平野さんとよんだので飛起て見ると、今朝柔道へゆく日だ。そしてすぐ柔道着を着て、中村君と二村君の家へ起しにいつた。それから柔道へいつて見ると、もう皆がゐて、皆寒そうにしてゐる。僕も中へはいつてみると、なかなか寒い。そしてたをされるといたい。その中に六時を時計がうつた。先生も着物をきてよいといつたので着物を着て、すこしたつと先生は甘酒をもつてきたので、それをのんでかへらうとすると、雪がちらちらふつてゐる。それからもうねないで家にゐた。そうすると七時半になつた。家の外を見ると、もう一寸ぐらいつもつてゐた。そして二階の窓から家外を見ると、近所の家の屋根は眞白になつてゐた。

三十三ノ二　十五日の朝五時頃、中村さんが平野さん平野さんとよぶので、飛起きて見ると、今日は朝五時までに柔道へゆく日だ。そしてすぐ着物を着て、中村君といつしよに二村君の家へ起しにいつた。それからすぐに三人で柔道へいつた。みるともう皆がきてしてゐる。皆を見ると皆寒さうに、首をちぢめてゐる。僕もその仲間になつてゐるとなかなか寒い。その内に僕の番がきたので、先生としてたほされると、なかなかいたい。その中に六時になつた頃、先生は「着物を着てよし」といつたので、すぐに着物を着て、すこしたつと、先生が甘酒をもつてきたので、それをのんでかへらうとして、家の外を見ると、雪がちらちらふりはじめている。それから家へかへつていつて、七時半頃になつた頃、家の外を見ると、もう一寸ぐらゐつもつてゐた。そして二階の窓から外を見ると、どこの家の屋根にも雪が一寸ぐらゐつもつてゐる。近所の家の屋根は眞白に見へる。

三十三ノ三　十五日朝五時頃、中村君が平野さん平野さんとよぶので飛起きて見ると、今日は朝五時までに柔道へゆく日だ。そしてすぐに着物を着て、中村君といつしよに、二村君の家へ起しにいつた。それからすぐに柔道へいつてみるともう友達がきてゐる。友達を見ると寒さうに首をちぢめたり、手をこすつたりしてゐる。僕等もその仲間にはいつて見ると、なかなか寒い。その内に六時になつた頃、先生は「着物を着てもよい」といつたので、すぐに着物を着て、すぐ柔道をでると、雪がちらちらふりはじめてゐる。それから家にかへつて七時半頃家の外を見ると、もう一寸ぐらゐつもつてゐる。二階へいつて窓から外を見ると、どこの家の屋根にも雪が一寸ぐらゐつもつてゐる。近所の家の屋根は眞白に見える。

三十三の例も亦反復形式である。これも前例と同一に文の主題に注意してゐない。一では雪の

ことが全文の二割とは書いてない。おきて柔道の稽古に行くことを八割以上かいてゐる。二でも同様であるが三になると、少し増加して四割位は雪のことを書いてゐる。しかし雪について何も注意深い觀察をしてゐるわけではない。漫然として雪のふる朝のことを書いてゐるに過ぎない。故に反復形式は、主題に集中する力を缺くことに外ならない。隨つてこの指導は、推敲によつて雪に關係のないすべての觀察を削除して、まづ主題關係の部分だけを取出し、それを中心にして觀る働を換起する外はない。この三十三では柔道のすんだ處などを削除し、先づ雪のふり出した處から觀察をはじめる。空と地と、雪が歸つてくる肩の上にかかる樣子、さういふ觀察をはじめさせる。少しも雪のことが書いてないならば、全く出發點がないのであるが、これだけ雪のことがあるから、それを出發點にすることは、困難ではない。ことに無關係なことを削除されてみると、自分のしてゐたことが全く見當をちがへて居ることに氣がつくであらう。そして雪の觀察が出來上つたならば、先に削除した柔道場のことを復活して、その寒さが雪の降り出す前だつたといふことで關係づけてもよい。しかしこれをいそいでは、折角雪の主題にむけた觀察をそらすことになるから、注意を要する。

三十四ノ一　目がさめた。すぐ上の引まどをみると、ガラスの上にへんな物がのつてゐるので、へんだと思つてゐると

「雪だよ雪だよ」といふ弟の聲も喜に滿ちてゐた。僕はその時、去年の雪の朝を思ひ出したが、そんな事には猶豫してゐない。すぐ飛び起きて着物と着かへて、すぐながしの方へいつて、大急で、かほをあらつて、弟と二人で外へ出た。屋根には眞白な雪が一寸ばかりつもつてゐた。僕は外へ出るとすぐ弟に、雪のつぶてを投げてやつた。それが丁度、弟のえりの中へ入つてしまつた。弟はからだをふりふり「まだだよまだだよ、あんまりひきようだ」などといひながら、上着をぬいではたいて、それをきてきうにまたつぶてをなげた。僕はそんなことには、もうしようちもしようち、ひらりとたいをかはした。うしろのがらすへぶつかつたのでひやりとした。

三十四ノ二 目がさめた。すぐ上の引まどを見ると、ガラスの上にへんな物がのつてゐるので、へんだと思つてゐると「雪だよ雪だよ」といふ弟の聲も喜に滿ちてゐた。僕はその時、去年の事を思出したが、そんな事にはとん着してゐない。すぐふとんをまくつて飛び起さ、ねまきと着物と着かへて、すぐながしの方へいつて、大急ぎで弟と二人で外へ出た。屋根には眞白な雪が一寸ばかり積つてゐた。あたりは眞白で、目がいたいようだ。外へ出るとすぐ弟に、雪のつぶてを投げてやつた。するとそのつぶてが丁度、弟のえりの中へはいつた。弟は體をふりふり「まだだよまだだよ、あんまりひきようだ」といひながら、上着をぬいではたいて、上着をきると急に僕につぶてをなげた。僕はそんな事はもうしようち、ひらりと體をかはしたら、うしろのガラスへぶつかつたら、おばさんが出てきてにがいかほをして、ひたひにしはをよせながら「ぶつけてはだめですよ」といつたので、弟と二人で家へひつこんでしまつた。

三十四ノ三 目がさめた。すぐ上の引まどを見ると、ガラスの上を見ると、へんな物がのつかつてゐるので、へんに思つてゐると、急に後から弟が「雪だよ雪だよ」といふ聲も喜に滿ちてゐた。僕はふと去年の雪の事を思ひ出したが、そんな事にはとんちやくしてゐない。すぐ布團をはねかへして飛び起きた。そして寢卷と着物と着かへた。そして臺所へ行つ

て急いで顔を洗つて、弟と二人で外へ出た。屋根には眞白な雪が一寸ばかりつもつてゐた。あたりは眞白で、目がいたいようだ。外へ出るとすぐ弟目がけて雪をなげた。するとその雪が丁度弟のえりの中に入つた。弟は體をふりながら「まだだよまだだよ、あんまりひきようだ」といひながら、上着を脱いで雪をおとした。上着を着るとすぐ僕に雪を投げた。僕はそんな事はしようちしきつてゐる。ひらりと體をかはした。すると後のガラスへバチヤンとぶつかつた。僕はひやりとした。するとおばさんが出て來て、にがいかほをして、ひたひにしはをよせながら「ぶつつけてはだめですよ」といつたので、弟と二人で家へひつこんでしまつた。

この三十四の例は少しちがつた反復形式である。反復形式のものは能力の薄弱を示すのが普通であるのに、この生徒はかなり明確にかいてゐて、しかも三回にわたつて、一寸他に比較のない程に、そのままの反復を示してゐる。一回ではどの生徒にくらべてもまけない成績を示し、展開が可能であると思はれたのに、二回以後それをしてゐない。ただ終の方の硝子戸に雪をうちつけた所を一層正確にしてゐるだけ違つてゐる。これは力が足りぬので反復してゐるのではない。他に何かの理由があると思ふ。書寫も正確で、熱心で、作業をいいかげんにやつてゐるのではない。或は推敲の意味が、十分に徹しなかつたのかもしれない。故に暫らくこの形式の考察からは取除いておきたい。

三十五ノ一　僕は自然に目がさめた。僕は暖かい布團の中から目をさました。そして側の時計を見ると、もう九時であ

る。すると下の方で、妹が「兄さん雪がふつたのよ」と言つたので、窓からのぞいて見たくなつが、何だかめんどうくさいのでまたすぐねようとしたら、お母さんがもう「御飯ですよ」と言つたので、仕方なく起きて、下へ行くついでに窓からのぞいて見ると、外は一面の雪で眞白であつて、まだ空からは雪がちらちらと降つてゐた。僕はそれから着物を着かへ御飯を食べてから外へ出て見ると、雪が少し積つて居る。僕が外の景色を見ると眞白だ。僕はそれからすぐ二階へ上つて勉强した。

三十五ノ二　リリリンといふ目ざまし時計が勢よく鳴つた。九時のしらせだ。もう起きる時刻だが起きるのがおつくうでならない。けれども仕方がないので、布團をはねてとびおきた。そして何の氣なしに窓の外を見ると驚いた。どんより曇つた大空から、白い綿の樣な雪がちらちら降つてゐた。思はず戸をがらりとあけて外を見ると、雪が積つてゐる。僕は雪がめづらしいので、いつまでも見てゐた。が田舍の雪景色とくらべて見ると、都の雪景色は殺風景なものだとつくづく思つた。

三十五ノ三　リリリン――といふ勢よい目ざまし時計が鳴つてゐる。九時の報だ。「もう九時か。起きるのがいやだなあ」と思ひながら、やつとおきた。おや何だか外があんまり靜だぞ。もしかしたら時計がおくれてゐるのかもしれないと思つて、窓を見て驚いた。どんより曇つた大空から白い綿の樣な雪がちらちら降つて居る。思はず窓際へ行つて戸をがらりと開けて、外を見ると、外は人が誰一人も通て居なかつた。唯幾筋かの車のあとが薄つすらとのこつて居るだけであつた。

人のする仕事に、ことに展開を主として考へようとしてゐる教室の仕事に、完全なる反復のな

い如く、また完全なる變換もない。隨つて變換形式といはるるものも、全く前と無關係に變換し得るのではない。ことに子供の經驗の世界は狹少であり、雪の經驗は、東京では毎日出あふ經驗ではないから、根柢的に變換する事は有り得ない。さればこの三十五の例を以つて、變換形式とよんでも、差支はない譯である。

一は妹と御飯とのためにおこされて、下に行くついでに窓をみて雪を發見し、御飯後外に出たことがかいてある。それが二になると九時の時計におこされる所がかいてある。そして雪を發見し田舍の雪景色と都會の雪景色とを比較してゐる。三では時計におこされる處は二と同一だが、あたりが靜かなのをうたがふことがあつて、窓から雪が發見される。そして外には人通りのない路の上に、車の轍のあとを見出してゐる。かういふほとんど無關係な觀方からこの三回の文章が成立してゐる。しかもこの形式が前形式と相通ずる處の一つであると思はれる、注意の散漫がある。雪をみても、そのみた雪に十分に注意を集中する事が出來ない。雪は輕く取りあつかはれ、それ以前のことが精しくかかれる。これが反復形式と共通する處で、この形式が展開形式の頽廢とみらるる理由である。

この例では、雪を書いた量が第一回に全量の四割五分、第二回に全量の三割、第三回に全量の五割である。最後が量も最も多く、觀察もすぐれて居るから、これによつて、雪と無關係の部分

を削除して、殘の部分を展開させてみなくてはならぬ。
しかしこの文章でもわかる樣に、この形式には多くは節がない。この點から見て、變換形式は、部分化展開の系統に屬し、その頽廢によるものなることが知られる。故にこの形式が展開力を囘復して來ると、部分化展開になるのである。

三十六ノ一　雪の日の朝は、普通よりとくべつ早く起こされた。今日は小僧のやどとりなので、日曜日でも用がいつぱいあつた。なにしろ雪が降つてゐるので、外には出ることができない。今日は日曜日だにさつぱりおもしろくない。妹の金と僕の金とで、かるめやきの道具をかつた。やくのは上手になつたが、外に出られないのが殘念でたまらない。田舍からもらつて切つた竹馬にのつて、外に出やうとしたが、とめられたのでよした。がそれが幸であつた。自轉車であるいた所がこうつてゐるので、よくすべる。所によつてはほうばのもぐりそうな所もあつた。

三十六ノ二　雪の日の朝は、普通より特別早く起こされた。今日は小僧のやどとりなので、日曜日でも面白くない。なにしろ雪が降つてゐるので、外には出る事が出來ない。雪は其の時はすこしは面白いが、後になると道が惡くなるので、朝學校に行く途中道がこほつて、つるつるとすべるから雪はいやだと思つてゐた。もつと積れば雪合戰も出來るとおもつた。其の時時計は十時であつた。活動に行つていいかときくと、いけない雪の降つてゐるのに、といはれたので、全く雪の日はつらいなと思つた。

三十六ノ三　雪の日の朝は普通より早く起こされた。今日は日曜でも面白くない。考へて見れば今日は一月十五日、小

僧のうれしい日、小僧はうれしくとも、僕達は面白くない。なにしろ小僧のやる仕事は、僕達がやるのであるから、其の上雪が降つてゐるのであるから寒い。手の先はちぢかむやうになる。其の手を火にあぶると、針でつきさされたやうになる。これだから雪の日はいやだと思つた。雪の日には外に出られず、内にゐるからつい妹をなかしてしかれる。雪の日はだからきらいだ。雪がとける、と道が惡くなる。こほればつるつるすべる。だから雪の日はいやだ。雪は其の時だけちよつと面白いだけである。

三十六の例は、ほとんど完全なる變換形式である。一は藪入だから用が多いこと、雪で外出が出來ないこと、妹と金を出しあつてかるめ燒の道具をかつて來たこと、竹馬に乘らうと思つたがとめられて乘らなかつたが、それは反つて仕合せであつたことである。二は藪入だから用があつて面白くないこと、雪で外出が出來ないこと、雪はあとが不快であること、もつと降れば雪合戰が出來ること、この時十時であること、活動に行くのをとめられて、雪の日はつまらぬことが書いてある。三は藪入で面白くないこと、雪で寒いこと、雪の日は外に出られぬのでつい妹をなかせること、雪の日はあとが不快であることなど。そしてそれが前と關係なしに、別別にかかれてゐながら、最初の「雪の日の朝は、普通より特別早く起こされた」といふ一句と、藪入のことは共通である。變換形式の型でも、猶最初の一句が保存される傾のあるのは、意味が深い。そして三者に共通してゐるのは、雪は不快であるといふ感である。この場合にも共通してゐる感を中心

にして、そこから展開するものを取り出さなくてはならぬ。この生徒がかかる變換をなすのは、持續的なる働のないためであり、持續的の働のないために、一つの文章でも中心の題目にふれず不必要な問題の中にぐづぐづしてゐる。隨つてここに、文章の中心となるべきものが何であるかといふ判斷を缺除する。この中心となるものの判斷が缺けるから、中心が把持せられず、浮動するのである。されば變換形式の生徒に對しては、先づ中心を定むること、次に中心に向つて精細なる觀察をつづくべきことを、指導しなくてはならぬ。雪が不快ならば、その雪の不快なる事實を精細に吟味させ、反省させる。第二回にはそれを定位させて置いて、その中で一層精細にし、他の範圍を全然許さぬことにする。これをつづければ、生徒は變換形式から、漸次に展開形式に移行し得るであらう。この形式は一度とらへた對象を持續的に深めることが出來ないのであるから、この例でわかるやうに、一つのものによく統一せられ、節がない。故に節を多く作らせず、一つの心持に集中する樣に導かなくてはならぬ。これは展開形式中の部分化展開の浮動的展開の頽廢に屬するからである。

三十七ノ一　早くおきなおきなといふ聲がきこえた。僕ははつと思つておきると、ちやうど五時でした。すぐ弟をおこし、すぐ外へゆくと、まだ夜廻はまはつてゐました。すぐ平野さんたちと二村さんの内へおこしにいつて、四人でじゆうどうへ行き、三十分か一時間程たつて、いよいよかへる時には、小粒の雪がふりはじめました。その時じゆうどうの少年

の方の者は、外へ出てさはぎはじめた時、外はまだ人のあまりとうらないことであるから、今日はよけいにふると思ひ、家へはいり、寒いからまたねどこへはひり、九時頃まで僕はねてゐた。はつと思つておきてみると、雪はよ程つもつてゐた。

三十七ノ二　早くおきろおきろといふ聲がきこえた。僕ははつと思つておきると、ちやうど五時になつてゐた。そしてとなりにねていた弟をゆりおこし、すぐまんとをきて外へでてゆくと、まだ夜廻はまはつてゐた。そして一もくさんに平野さんと二村さんをおこし、四人でじうどうへいつた。よほどやつて一時間もたつたのであらう、歸る時になると小粒の雪が降りはじめた。するとかへりがけのものは外でさんざんさはぎ、内へはひらうとした時、まだ人があまりとほらない事だから、雪もよけいにふると思つて、家へはひつた。そしてあまり寒いから又布團の中へもぐりこみ、九時頃おきてみると、雪はよほど降り積つてゐた。

三十七ノ三　早くおきろおきろといふ聲がきこえた。僕ははつと思つておきてみると、ちようど五時のりんがなつてゐた。すぐとなりにねてゐる弟をゆりおこし、したにおりてゆき、まんとをきて外へでると、まだ夜廻はまはつてゐた。そしてすぐ平野さんと二村さんをよび、四人でじうどうへゆき、一時間位やつた事であらう、歸らうとして戸をあけると、小粒の雪が降つてゐた。かへりがけの者は、外でさはいでゐた。すると外はまだはやいから、人や車があまりとほらないから、雪もよけいにふる事であらうと思ひながら、内の中へはひつていつた。あんまりさむいので、又布團の中へはひりこみ、九時頃おきてみれば、家家の屋根は皆眞白になつてゐた。だが煙突の所には雪がつもつてゐなかつた。下へおりていくと道は人や車のためにぐちやぐちやになつてゐた。

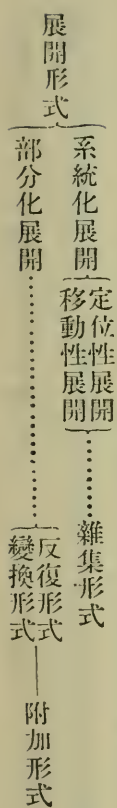
この組の文章には附加形式のよい例がない。これも十分によい附加形式の例とはいへないが、他に適當のものが見出せないのでこれをとつた。一と二とは全く同じ反復で、反復形式であらうと思つて行くと、三が終の方に行つて、煙突の雪を附加して、僅かなる附加形式になつてゐる。このことは附加形式の成立に一つの暗示を與へるものである。卽ち附加形式は、反復形式が尾部で展開をはじめたものである。反復形式は、そのはじめた作業の形を、後迄變更させることが出來ない保守的な傾向であつて、その度に變更する變換形式とは明白に對立してゐる。この反復形式がもし展開をはじめるとすれば、旣に定立した形の中では出來ないのであるから、尾部で展開する外はない。ここに附加形式が出來る。

しかし附加形式の延長は、必ずすべての場合に尾部延長であるとは斷言し得られない。といふのは文章の後部を反復して、その頭部に新らしく附加して行く場合も考へられるからである。けれどもこれは考へられるといふだけであつて、かかる場合は殆どあり得ない位に少いであらう。何となれば、反復性の頹廢は展開力の衰弱であり、文章の定位は最初の一句にはじまるからである。隨つて展開力の衰へた場合に、最初の一句を移動させて前方に附加せしむることは困難である。前の定位を變化せしめ得る位ならば、他の部分をも動かし得る筈であり、それでは展開性の衰頹ではない。非常なる昂進である。故に附加形式は依然として、尾部延長である。

されば展開形式中の部分化展開が頽廢して、保守性をとると反復形式となり、反復形式が僅かに展開をはじめると、附加形式を生ずるのである。故に附加形式は反復形式から導かれるものである。

ここに於いて五種の基本形式は、明かになつた。展開形式の系統化展開の頽廢から雜集形式を生じ、部分化展開の頽廢から反復形式と變換形式とを生ずる。反復形式は固定性頽廢であり、變換形式は浮動性頽廢である。固定性頽廢が、その力を囘復して展開をはじめると、展開は尾部に行はれ、附加形式を生ずる。浮動性頽廢がその力を囘復して展開をはじめると、もとの部分化展開に歸つて行くのである。同じ頽廢であつても浮動性の展開の方が、觀る働が働いてゐるのであるから、展開の囘復は容易である。故に反復形式の指導法の一は、之を附加形式に向はしめ、附加形式の附加部分を大にして、その沈滯を救ふことが第一歩になる。

これ迄の展開の各樣式の關係は次の如くである。

- 展開形式
  - 系統化展開
    - 定位性展開
    - 移動性展開
    - ……雜集形式
  - 部分化展開……
    - 反復形式——附加形式
    - 變換形式

三十八ノ一 朝、目をさまして見ると、雪がちらほら降つてゐた。おきようかと思つたが、雪が降つて寒かつたから、床の中にもぐつた。しばらくすると雪かきの音、雪合戰の音、子供の遊ぶ聲。僕も外へ出ていつた。

三十八ノ二 目をさまして見ると、窓越に雪の降るのが見える。なーんだ雪が降つてゐやがるのかと思つてゐると、弟が下から上つて來た。うれしそうに雪が降つてゐるよといつたので、おまへよりおれの方が先に生れたんだから先に知つてらあと云つたら弟はわらつた。時計は何時かと見ると八時。しばらくすると下で雪をかいてゐるらしいので、僕も起きて下にいつた。九時半頃雪はやみかけた。

三十八ノ三 目をさまして見ると、窓越に雪の降るのが見える。なーんだ雪が降つてゐやがるのかと思つてゐると、弟が下から上つて來て、さも先におきた樣子をして、雪が降つてゐるよといつたので、おれの方が先に生れたから、先に知つてらえと云つた。弟は先へ生れたつてしようがないやいと云つたが、わらつてしまつた。

三十八の例は、部分化展開の不十分なものの一例である。一は雪が降つてゐるが寒いから、起きないといふこと、二は雪の降るのを知つてながら寢てゐると、そこへ弟が上つて來て、雪のふつてゐるのを告げることである。三は二の反復である。一も二も皆床の中に居る點で共通するが、二では一にない弟があらはれて來て、その問答が中心になる。共通して一つの節でゆく所は、部分化展開でありながら、かういふ轉回の行はれる處は、變換性展開形式であり、しかもそ

れがやがて反復形式になつてゐる。部分化展開が不十分で、その展開形式の中で、變換性を呈したり、反復性を呈したりしてゐるのである。この事實は變換性と反復性との同系統内の變異であることを示すよい證明である。

三十九ノ一　八時を打つ時計の音におどろいて、目がさめた。「オヤ、なんだか明るいぞ」と思つて窓を明けて見ると、眞白な、綿のやうな雪がふり積つて、さながらあたりは銀世界。「あ、雪だ」私は思はずさけんだ。向ふの家越しに見える公園は、銀の園の樣である。ふと下を見ると庭にうはつて居る八手の葉が、もうすこしで地につきさうになつて居る。風が吹いて、公園の木木の上に積つて居た雪が落ちた。再びさつと風が吹いて雪が家の中に入つて來た。「おおさむい」急いで窓をしめた。

三十九ノ二　長い夢からさめて、ふと窓ぎはを見ると、何だか明るい。「おや」と思つて窓を明けて見ると、眞白な綿のやうな雪が降つて居る。「あ、雪だ」私は思はずさけんだ。向ふの窓越しに見える公園は、田舍で見た綿畠のやうである。雪は天からひらひら舞ひながら、靜かに靜かに地上へ積つて居る。私はこの靜かな雪景色によはされたやうにながめて居た。するといつか少女世界でよんだ天使鳥舞ふ夜といふ詩を思ひ出して居た。この雪は、はたして天使鳥の羽だらうか。あの詩には雪は天使鳥の羽だと書いてあつたが、こんなことを思ひ出して居ると、下の方で、ばさつといふ音がした。「おやなんだらう」と思つて下を見ると、庭に植はつて居た八ツ手が、雪のためにおれたのであつた。雪はひらひらと靜かに靜かに地上に積つて居る。ああ靜かな朝の雪景色。

三十九ノ三　長い夢からさめて、ふと窓ぎはを見ると、何だか明るい。「おや」と思つて窓を明けて見ると、眞白な綿のやうな雪が降つて居る。「お、雪だ」と私は思はずさけんだ。眞白な綿のやうにやはらかさうな雪が、屋根にも、煙突の上にも積つて居る。向ふの家越しに見える公園は、田舍で見た綿畠のやうである。雪は天からひらひら舞ひながら、靜かに地上へ積つて居る。私はこの靜かな雪景色によはされたやうにながめて居た。するといつか少女世界でよんだ、天使鳥舞ふ夜といふ詩を思ひ出して居た。この雪ははたして天使鳥の羽だらうか。あの詩には天使鳥の羽だと書いてあつたが、いやいやそんな馬鹿なことはない。こんなことを思ひ出して居ると、下の方で、ばさつといふ音がした。「おやなんだらう」と思つて下を見ると、庭に植はつて居た八手に積つて居た雪が、落ちたのであつた。雪は無心にひらひらと靜かに靜かに積つて居る。ああ靜かな雪の朝。

この三十九の例は、一が二に於いて見事な展開形式の展開をした。そして三になると、二そのままの反復形式を示してゐる。蓋しこの生徒は二ですつかり展開してしまつたので、三では展開の餘地がなかつたものと思はれる。この文章をみると、第一に窓側の雪をみつけ、それから戶外の雪を見つけ、それから綿畠の連想にうつり、重ねて天使鳥の聯想にうつり、それが八つ手が雪でおれる音におどろくのである。これは展開の中心を、聯想の上においてゐる、部分化の展開である。この故に展開が停止すれば反復性形式を呈するのは、當然といはねばならない。

四十ノ一　ふと目をさまして見たら、六時をうつてゐた。ふとんから起きて見ると、普通の日であると人聲がしたり、

人の通る音も聞えるのに、外は靜まりかへつてなんとなく寒い氣持がする。まくを開けて硝子を通して外を見て見るに、思ひがけなく眞白な雪が降りつつある。すずめは餌をさがしに方方を飛んでゐるのは、いかにも寒さうに見える。枯木には綿のやうな雪が降りつもつて、花がさいたやうである。地面は白く、人の足跡は僅である。犬の鳴聲があちらこちらで聞える。となりの家も起きたらしく、どやどや人聲が聞える。驚いたやうにあ雪が降つてゐるといつて、今年の初雪だと言つてゐる。外は靜まりかへつてゐる。

四十ノ二　眠むたい目をこすりながら目を明いて、目を時計へむけたら、六時をうつ時であつた。普通の日であると、人の聲がしたり人の通る下駄の音もきこえるのに、今日は外は靜まりかへつて、なんとなく寒い様な氣持がする。まくを開けて硝子を通して外を見て見るに、思ひがけなく眞白な雪が降りつつある。すずめは餌をさがしに方方を飛んでゐるのは、いかにも寒さうに見える。枯木には綿のやうな眞白な雪が降り積つて、春がともなはれて、花のさいたやうである。地面の上に土の色は所所に見えてゐる。その上を歩く人の足跡は僅である。犬の鳴聲があちこちで聞える。となりの家でも起きたらしく、人の話し聲が硝子を通して聞える。驚いたやうに雪が降つてゐると云つてゐる様子が見える。今年の初雪だと言つてゐる。外は靜まりかへつてゐる中を、すずめはひつきりなしに餌をさがしに、方方を飛びまはつてる。空はうすずみ色でまだ雪はやみさうもない。家の硝子戸には雪が降りかかつてゐる。

四十ノ三　眠たい目をこすりながら、目を開いて時計を見たらば、六時をうつ時であつた。普通の日であると、人のわらひ聲がしたり人の通る下駄の音もきこえるのに、今日は外は靜まりかへつて、何んとなく寒い様な氣持がする。まくを明けて硝子を通して外を見てゐると、思ひがけなく眞白な雪が降りつつある。すずめは餌をさがしに方方をとんで、如何にも寒さうに見える。枯木には綿のやうな眞白な雪が降り積つて、春がともなはれて花のさいたやうである。地面は土の

色が所所に見える。その上を歩く人の足跡は僅である。犬の鳴聲があちこちで聞える。となりの家でも起きたらしく、人の話し聲が硝子を通して聞える。驚いたやうに雪が降つてゐるといつてゐる樣子が見える。今年の初雪だと言つてゐる。外は靜まりかへつてゐる。空はうすずみ色でまだ雪はやみさうにもない。家の硝子戸には雪が降りかかつてぼうとしてゐる。

この四十の例は、展開の樣式でみると、三十七の例と同じ樣に、展開形式―反復形式である。しかし三十七は部分化展開系統の展開形式―反復形式であつたのに、この方は系統化展開系統である。卽ち第一より第二にかけての展開は、いくつもの節のあるものが、系統を求めてゐる展開である。ことに幕をひいてみた外景の敍述は、明かに、各個の事實の系統化である。かういふ系統化の展開も、一度展開の頂點に達すれば、それからは展開を失つて反復にうつる。故に反復にも自然に二種の異るもののあることが知られる。卽ち純粹の反復形式は部分化展開の頽廢であつたが、かういふ混合形式における反復、卽ち展開完了後の反復は、決して部分化展開の頽廢とは限らぬ。系統化展開の頽廢に屬するものもある。隨つて他の混合形式においても、蓋し他の展開について來る形式は、純粹反復形式とは、異性質のものであらう。然らばこの混合形式は、單純に基本形式の混合のみとは考へ得られぬ點が生じて來る。

四十一ノ一　ふと目がさめた。時計は八時をさしてゐる。下の方から「雪やコンコン」と唱ふ妹のかあいい聲が流れて來た。私はまだ何とも言はないでねてゐると、妹が入つて來て「姉ちやん雪よ雪よ」とおこした。それと共に私はとびおきた。そして硝子窓をあけて外を眺めた。あまり眞白なので目が何だか變な感じを持つた。そしてしばらくの間銀世界に見とれた。ふと下を見ると妹たちは雪つりをして居り、こつちの方では白石さんのお家の人が、雪合戰をして、顏がほてつて赤くなつたのが見えた。私はさうだ、これをもつと大きく見たらもつともつと美しく見えるであらうと思つてゐた。すると母が私をよんだ。ごはんの時「お母さん上野へ行つていい」と聞くと「お前詩人家にでもなるつもり」と言つて皆にわらわれた。私はだけどどうしても上野へ行き、帝都のにぎやかな雪景色を見たい心はあふれてゐた。しかし仕方なかつた。もつと大きくなつて、一人前になるのをまつよりほかは仕方ない。

その內に太陽は出て、雪は次第にとけて行く。

四十一ノ二　ふと目がさめた。私は夢うつつに流れて來た妹の聲に思はず起きて外を眺めた。屋根の上も、かんばんの上も眞白な色に變つてゐた。しばらく空を眺めてゐた。薄墨色をながしたやうな空の中から、小粒の綿でもおちて來るやうに、地上へさも輕るさうにつもつて行く。ふと下の方を見ると、妹たちは手に息をかけながら雪つりをして居り、こつちの方では平石さんのお家の人がほほをばら色にそめて雪合戰をしてゐる。「あゝつ」今兄さんのなげたたまは眞すぐに私の味方をしてゐた小僧さんの耳のところにて、粉となつてはれつしてゐた。私はそれに見とれてゐると、母が私の名をよんだ。私はさつきこの初雪の帝都のにぎやかな景色を見たいために上野へ行くことにきめてゐた。思ひきつて母に言つた。母ははばかだと言ふように笑つて、詩人家にでもなるつもりかと言はれた。

私も仕方なくよした。

その內に太陽は雪の上に影をなげ、まぶしいようにきらきら光を出して、雪は次第にとけて行く。

四十一ノ三　ふと目がさめた。私は夢うつつに流れて來た妹の聲に、思はず起きて外を眺めた。屋根の上もかんばんの上も眞白な色と變じてゐる。空は薄墨色にてたくさんごみでもおちて來るやうに、しかし輕さうにつもつて行く。ふと下の方を見ると黒い小さいものが雪の中になげこまれ、すこしたつと一ぱい上に雪をのせてでてくる。私は急に小さい時ににはで雪つりをして、うさぎを作つたことが思ひ出され、私も妹たちと雪つりをして見たくなつた。妹たちは盛につつてゐる。又はうつた。私は妹たちのいさましい樣子に引きつけられ外へ出た。通を見ると、自動車の二すじ、人のあし跡、くつのあと、共の中に花をちらしたかのやうな犬の跡、此の美しい雪の上にはいろいろの跡がちらばつて、此の雪の美觀はたちまちやぶられてゐる。お米やさんの前に四五羽のすずめが、盛にえをあさつてゐるすがたゞ、かはいらしい。
今日はいつもより往來がひつそりして居る。ただポストは雪の中にいつもとかはりなくしよんぼり立つてゐる。

この四十一の例は、展開形式が變換形式に移行したものである。系統化の展開が、一度二に於いて完成したと見えて、三では全く別の方向に轉換した。しかしこの轉換も、純粹變換形式のなす變換とはちがつて、二回目になつた展開の成績が背後で働いてゐるから、轉換しても、必ずしも純粹變換形式に於けるが如き、無意味な變換ではない。隨つて混合形式內に於ける變換形式は、或は展開の障害であることもあらうが、この場合の如く、一つの新らしい局面を新生する展開である場合もあり得るのである。故に混合形式內の反復の全く頽廢であるのとは、類を異にするのである。この混合形式中の變換は、積極的展開であり得る點で、純粹變換形式と性質を異に

するのである。

四十二ノ一　「ねえちやん雪がふつてゐる」そのころにガラス戸を明けて見ると、雪がどんどんふつてゐました。「お父さん何時頃からふつてゐるの」ときいたら、お父さんは「六時頃からふつてゐたよ」とおつしやいました。お母さんが「今日はほんとにめづらしい雪ですね」「そうだね」とお父さんがおつしやいました。

四十二ノ二　「ねえちやん雪がふつてゐるよ」と弟がいひました。私はその聲に目をさまして見ると、弟は「雪やこんこんあられやこんこん、降つても降つてもふりきれぬ」と歌つてゐた。「お父さんいつごろからふりつづいてゐたの」といふと、お父さんは「さうだね朝の六時頃から降り積つてゐたよ」。「お母さん今年の初雪だわね」といつたら、お母さんは「ほんとだね」とおつしやいました。その内に雪はやんで日がてるやうになりました。

四十二ノ三　「敬子雪が降つてゐるよ。早く起きて見てごらん」といふお母さんの聲に、ふと目をさますと、まあいつこんなにふつたんでせう。ああ五年の時にならつた天神山のスキイの時、あたりがきらきらして目がいたくてあけないと書いてあつた。今日までがひかつてきらきらしてゐる。

四十二は二で完全な反復形式を示したのに、三では一轉して變換形式を示した。反復形式も變換形式も共に、部分化展開の衰頽であるから、同系統のものである。ただ一方が保守性固定性であるのに對して、一方は變化性浮動性である。その差違と一致とが、かかる形式をとらせたもの

に相違ない。即ち反復がこの固定狀態から起き上らうとする時にとる變化の一つが、この變換形式である。然らば反復形式の矯正方法の一つは、先づこれを變換形式に變へ、然る後にこの兩者の一致點を求めて之を展開形式にかへてゆくのである。この變化と統一とは反復を展開たらしめ得るに相違ない。これは重要な注意の一つである。

四十三ノ一　土曜日の夜、夕飯を食べてゐる時、私がづいぶん暑いねと言ふと、家のお父さんお母さん兄弟まで本當だね、するとこの家のわかい者が、明日もしかすると雪が降るかもしれませんねと言つた。私は本當に雪が降るかもしれないわね、それで今日はしづかだからと言つて、夜はねた。そして朝私がねてゐると、お母さんが、ふみ子今朝雪が降つたよ、早く起きなと言はれて、床の中から出て、硝子戸の方を見ると、雪のためにとても明るくなつてゐる。私はお母さんに夕べいつた通り雪が降つたねと母に言ふと、母も本當だねと言ひながら着物を着て硝子戸を開けて見ると、家の前で、家の前の明さんと弟とが、雨がつぱを着て、雪合戰をしてゐると、三浦さんが、こうもりをさして、すみで雪をつつてゐる。天からは雪がごみのやうになつて、どんどん降つて來る。でんとう家の屋根には雪が一寸ぐらゐつもつてゐる。

四十三ノ二　私が床にはひつてねてゐると、お母さんが、フミ子雪が降つてゐるから、早く起きなと言はれて、ねむい目をこすりながら、床の中から起出した。なるほど雪のおかげで家の中が一面にぱつとして明るい。私は着物を着ながら硝子ごしに見ると、前の家の屋根、軒下、電燈と言はず、一面に白く明るくなつてゐる。私は着物を着て、硝子戸を、開けて、地面を見ると、もう人が通つたのか、あしだの足あとがついてゐる。空の方を見ると、ごみのやうに、雪があとからあとからどんどんと、地上を目がけておちてくる。しばらくして通りの方から、弟と、明ちやんが、雪だるまをつくる

のだと言つて、雪をまるめて、持つて來た。そしてそのたまを地面において、あつめたいなどと言ひながら、雪だるまを作つてゐる。

四十三ノ三　私が床にはひつてねてゐると、お母さんがフミ子雪が降つてゐるから早く起きなと言はれて、目をこすりながらあたりを見ますと、家の中があたらしくなつたやうに明るくなつてゐる。私はさつそく着物を着かかつた。そして硝子ごしに外を見ると、家の屋根軒下と言はず一面に明るくなつてゐる。私は着物をきかへたので、弟と外に出た。そしてこうゑんに出てみれば、木一面まわたをかけたやうにしろくつもつてゐるので、木のえだがたるんでゐる。急に白い物が落ちた。私と弟とはその方に目をそそいだ。なんだらうとよくよく見たらば、雪が葉の上からすべりおちたのであると言つてゐる中、又落ちた。その時中の弟がつめたいやと言つた。私はどうしたのさと言ふと、弟があいつが、ながぐつでぴちやぴちやあるいてゐるから、ひつかかつたんだよと言ひながらあるいていつた。

この四十三の例は、一は前の晩に雪の降るといつた豫言の適中を中心にしてゐるが、二になると、その豫言關係からは全く離れてしまつて、朝見た雪の景色が書いある。これは變換形式である。三になると朝の雪であるが、それは公園の雪が中心になつてゐる。かういふ風に力點の移動する展開は、先の三十の例と同一である。しかしあの場合は最初にあつたものの間で、力點が移動したのであるが、この場合は公園の雪の様に最初にはなかつたものが、觀る働の中心卽ち文の中心になり、最初に中心となつてゐた雪の豫言問題は、二ではあとかたもなく消え失せてる。故に之を力點の移動といふのは無理である。卽ち移動的展開形式でなくて、完全に變換的展開形

式である。興味のあることには、上述の如く常に節が一つで、この點でこの文體は部分化展開に屬し、しかも變換性を有する展開である。變換性は展開の衰頽であるのに、衰頽の形でなくて、展開の形で變換の行はれることは、展開の自由性を示すものである。系統化の展開では、あらかじめ視野の廣さが一定し、その中で精細化するのに、部分化展開では視野の廣さが必ずしも一定せず、それが自然に擴がるのであるから、その擴がる擴がり方が、系統を背面に持つてゐて、あらはに關係が見えぬ場合には、變換性の展開をなすのである。かくの如くして混合形式とみゆるものは、前の基本的形式中の、性質の一つとみらるるものを生じて來る。

六

甲組と乙組との「雪」の綴方成績の考察は、以上でほぼ終つた。ここでこの考察の結果を整理して、構想展開の各形式の有つ内面的性質並びにその相互の關係を検し、更に指導上の問題にも及ばうとするのである。

第一に構想の展開が、數量的にどんな特色を有するかを、前掲の諸成績について考へてみたい。文字數は簡明ならしむるために二捨三入を以つて、五の數に整理した。

展開形式

	I	II	III	2:1	3:1
二	230	430	635	1.87	2.76
六	385	640	725	1.87	1.94
七	220	270	230	1.22	1.05
八	195	485	415	2.49	2.13
一三	255	360	420	1.05	1.64
一四	215	285	340	1.33	1.57
一八	305	435	500	1.42	1.64
一九	300	445	660	1.48	2.28
二〇	315	445	515	1.41	1.63
二一	285	425	450	1.49	1.58
二二	365	580	605	1.58	1.65
二三	280	530	535	1.89	1.91
二四	305	535	600	1.75	1.97
二五	435	475	530	1.09	1.22
二六	345	445	565	1.29	1.63
二七	620	695	905	1.12	1.46
二八	455	735		1.61	
二九	320	315	370	0.98	1.16
三〇	275	275	345	1.00	1.17
三一	405	650		1.61	
合計	6530	9455	9345		
平均	326.5	472.8	519.2	1.45	1.59

備考　I II III は第一回、第二回、第三回の成績。
2:1 は第二回成績と第一回成績との比、3:1 は第三回成績と第一回成績との比。

反復形式

	I	II	III	2:1	3:1
三	320	305	310	0.95	0.96
四	545	610	610	1.12	1.12
九	310	285	295	0.92	0.95
二二	195	245	245	1.26	1.26
二三	305	390	315	1.28	1.03
二四	340	405	380	1.19	1.12
合計	2015	2240	2155		
平均	335.8	373.3	359.2	1.11	1.07

變換形式

	I	II	III	2:1	3:1
二	230	225	265	0.97	1.11
二五	270	220	210	0.82	0.78
二六	250	220	275	0.88	1.10
合計	750	665	760		
平均	250	221.7	250	0.89	1.07

附加形式

	I	II	III	2 : 1	3 : 1
一〇	255	555	750	2.22	2.76
三七	265	280	345	1.06	1.30
合計	520	835	1050		
平均	260	417.5	525	1.61	2.02

雜集形式

	I	II	III	2 : 1	3 : 1
一五	260	330	420	1.26	1.62
合計	260	330	420		
平均	260	330	420	1.26	1.62

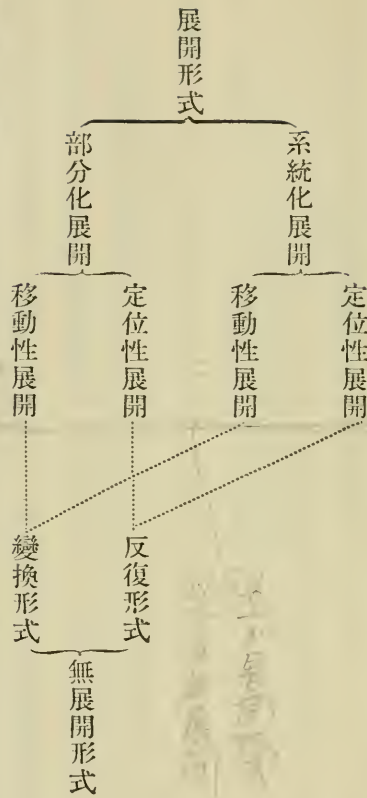
この成績の示す所は、すべての形式が展開することであつて、その數の比を以つてすれば、最も大きいのが附加形式である。二倍以上になつてゐる。しかしこれが展開の完全の意味に相應しないことは明かである。展開形式が一、四五並びに一、五九の平均を示してゐるのは、如何にも堅實なる展開である。故に展開數の大を以つて直に展開の充實だと見得ないならば、增加度の順當なるものを、すぐれた成績とみ得るやうである。そして反復形式の如きは、第二回が一、一一で、第三回が一、〇七二であり、變換形式の如きは、第二回が〇、八九、第三回が一、〇〇である。而して是等の形式は展開の意味と相反するものであるから、それと比較して、比の堅實な上昇を以つて、よき展開を示すものとなし得るが如くみえる。然るにここに第二回一、二六、第三回一、六二といふ堅實で、しかも上昇度の高い形式がある。これは雜集形式であつて、これも展開形式の衰頽に外ならないのであるから、この上昇度の堅實と言ふことも亦、構想の展開の內面的關係を計る尺度とはならぬ。故に展開の數量的硏究は、この問題の考究に殆ど何の貢獻ももたらさない。ただ構想は展開するといふ消極的事情を證明するに過ぎない。

七

隨つて各展開形式のそれぞれについて、それぞれの特性を考へなくてはならぬ。

展開形式は展開が無限に連續する形であるが、この展開には前述の如く、二つの大きい方向がある。第一は系統化の展開である。部分が豐富であつて、その豐富な部分が系統を求めて、大きな全體を形式して行く展開である。そしてこの展開中に、一個乃至數個の節があり、その節が定位してゐて、展開するのが、定位性の展開である。例へば「雪」でも、その雪を寢床で感ずるのと、便所にゆく間で感ずるのと二つの節があつて、その二つの節は定位してゐて動かず、展開につれてその感受がますます、細かに且たしかになつて行くのである。然るにこの節の間に力點の移動を生ずる場合がある。展開中に力點が、寢床から便所の方に移り、或はその反對に便所から寢床の方にうつるといふ風に、一方に移動してゆく節の移動がある。この節移動の展開は、移動性展開である。これが力點移動をなしつつ、しかも系統を有つてゐれば系統化展開である。系統を失へば、それがばらばらに切り離されて節は剝離し、しかもこの剝離性の節の間を力點が推移するので、ここに變換形式を生ずる。之に反して定位性展開が固定されれば、反復形式を生ずる。先には生徒の成績について考究したために、變換形式と、反復形式とを部分化展開から導いたが、しかしあそこにあらはれた例以外の場合を考へると、かかる衰頽の生じ得ることは明かである。

次に展開形式の他の形は、部分化の展開である。先づ全體があつて、その全體が自然に展開し

て部分を分出し、しかもその部分が節をなす程でない場合である。この部分化の展開にも、全系統に力點の移動のない場合と、移動のある場合とあつて、前の場合は定位性の展開であり、後の場合は移動性の展開である。そしてこの定位性展開に衰頽がおこれば反復形式を生じ、移動性展開に衰頽がおこれば、變換形式を生ずること、系統化展開の場合と同一である。

構想の展開形式中、眞に展開といひ得るのはこの展開形式だけである。反復形式並びに變換形式は無展開の形式である。反復形式は何等の展開なしに反復するものである。その數量の上には〇、一一―〇、〇七の増加をなしてゐる。しかしこの増加は文字數に過ぎぬもので、構想の上には依然として反復があらはれてゐる。

變換形式には減退がみえるが、これは變換がその變換の中でも、猶且衰頽することを示すものに外ならない。

かくて反復形式並びに變換形式は、前の展開形式系に對すれば、無展開形式系と呼ぶべきものである。しかもこの無展開形式系中、反復形式と變換形式とは、截然として區別せられる。卽ち反復形式が定位性展開の衰頽である時に、變換形式は移動性展開の衰頽である。このことは同一形式系中にありながら、敎授指導の方法を異にする原因となるのである。

この無展開形式系に對して、延長形式系がある。これに屬するものは、雜集形式と附加形式との兩者である。雜集形式は文章の中間に雜然として集收せられるもので、文の形は增大するけれども、系統がないから、展開といふことは出來ない。延長に過ぎない。附加形式は尾部が延長するものであつて、もし統一がつけば、展開形式系の移動性展開の一種とみらるるのであるが、統一がつかない場合には、雜集形式の中の特殊なものとみらるるのである。故に附加形式は、展開形式と雜集形式との中間に位するものである。このことは構想の展開の重要な性質で、他の衰頽形式を、展開の形式に進める方法について、一つの示唆を得る。卽ちこの附加形式を通じて、衰頽形式が回復するのである。而してこの雜集と附加との二形式の共通の特色は、文形の延長にあるから、合して延長形式系とすることが出來る。

ここに於いて各種の構想の形式は、更に次の如く、三個の形式系にまとめることが出來る。

一＝二＝三 反復形式 ┐
一・二・三 變換形式 ┘ 無展開形式系

一＜二＜三 ┌ 雜集形式 ┐
　　　　　 └ 附加形式 ┘ 延長形式系

一→二→三 ┌ 系統化展開形式 ┐
　　　　　 └ 部分化展開形式 ┘ 展開形式系

そして附加形式と雜集形式とが、どの構想形式と內的關係あるかを考へなくてはならぬ。附加形式の形體は、二つの部分から成り立つてゐる。一つは無展開部分であつて、この部分に着目すれば反復形式である。しかしこの反復性の無展開部分の尾部に延長部分がつくのであつて、延長部分がこの文では新らしい特色になつてゐる。故にこの形式が延長形式系に入るのである。卽ち反復形式が延長性によつて、展開に近づくのであつて、反復形式からみれば、その衰頽の回復であり、展開形式から見れば、その衰頽である。しかもこれには節のあるものと、節のないものとがあるが、何れも移動性の展開であるから、これは移動性の展開の衰頽であることがわかる。そ

して節あるものは系統化展開であり、節なきものは部分化展開の移動性展開である。そして反復部分に節あるものは、多くは附加部分にも節あり、反復部分に節なきものは、多くは附加部分にも節がない。

雜集形式は、附加形式の散布したもので、この散布は節によつて行はれる。隨つて雜集形式は、節のない展開卽ち部分化展開性とは、關係がなくて、有節展開たる系統化展開と關係を有つのである。そして先の附加形式で、附加延長の基部となつた反復形式部分のあつた樣に、この雜集形式にも、雜集が足だまりとする基部がある。そしてその基部となるのは、有節定位性の部分である。有節移動性の部分に雜集しようとすれば、これは附加形式に近づく。故にこの形式の最も鮮明な基部は定位性の節である。かくて附加形式の著しい性質は、次の三點である。

1、附加形式は移動性展開形式の衰頽である。

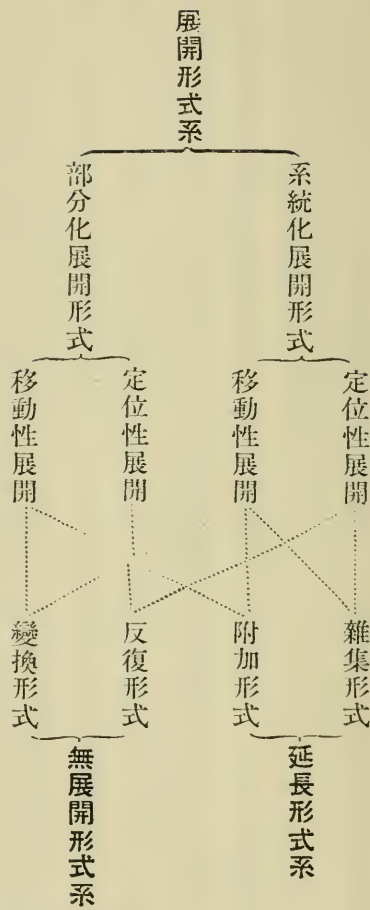
2、附加形式は反復形を基部とする。

3、附加形式は雜集形式の有節移動性化によつて、雜集形式と接近する。

雜集形式の著しい性質は、次の二點である。

1、雜集形式は有節定位性展開の衰頽である。

2、雜集形式は有節定位性部を基部として、その中間に散布する。

されば雜集形式と附加形式とを加へた構想形式の系統は次の如くである。

八

かくの如くにして構想の内面的關係が明瞭になれば、これから構想の指導方法も自然に生じて來る。然らば展開の形式系の衰頽諸形式は、直に衰頽前の形にかへすことが出來るか。例へば變換形式は構想の内面的關係からみれば、系統化展開並びに部分化展開の衰頽であるから、この衰頽を回復すれば、直に變換形式の有節性のものは系統化の移動性展開にかへり、無節性のものは

部分化の移動性展開にかへるが如く見える。この囘復が果して可能であらうか。これが最初にして肝要な問題である。

在來の綴方乃至作文教授の缺陷は、構想の問題に力點を置かず、語句の問題に力點を置いた處にある。中には、この語句中心の立場から一歩をすすめて、構想の問題に入つた人もあるけれども、その人達の努力も、主として十分なる展開形式、特に系統化展開形式中の定位性展開に集中されてゐる樣にみえる。換言すれば展開の優秀な、構想能力の健康な生徒のみが對象とせられ、構想力の缺乏乃至衰頽した生徒、卽ち變換雜集等の衰頽形式の生徒に對する指導は考へられずに居る。可成り深切な綴方の指導書であつても、その對象は常に優良生であつて、劣等生は多くの場合、放棄されてゐるやうに見える。劣等生の構想を如何にして展開させるかについては、殆ど工夫せられて居るとは見えない。これが爲に構想力は天稟であつて、如何ともなし難いものに見え、綴方乃至作文は決定的なもので、指導の餘地は甚だ乏しいものとされて居る。もし綴方或は作文が、かくの如く決定的なものであるとすれば、これは敎室で扱はるべき性質ではない。指導の不可能なるものは、敎育對象となり得ないからである。かかる綴方乃至作文を、敎育の對象となす努力は、構想展開に指導の手が入り得るや否やの問題である。換言すれば構想の缺乏を囘復し得ば、綴方乃至作文は敎育の對象となる。囘復し得ずとすれば、綴方乃至作文は、敎育の對象

とはなり得ぬのである。この故に、衰頽形式囘復の如何は、綴方乃至作文の中心位置に持ち來たされるのである。

この考察を、變換形式からはじめる。

變換形式は主題に集中することが出來ない爲に、變更ばかりしてゐて展開のない形式である。しかも構想の性質は、代數式の如く、−1をかけて、その數の性質を一變させる樣な、早速な譯には行かない。如何にして主題に集中させるか、そしてそれを系統立てるかを考へなくてはならぬ。

移動性展開の衰頽と見ゆる變換形式は、節をもつてゐる。今第三十六の例をとつて考へる。この文章は可成り多くの節を持つてゐる。（有を○、無を×で現はす）

	第一囘	第二囘	第三囘
1、小僧さんの宿とりで早くおこされる。	○	○	○
2、日曜だが面白くない。	○	○	○
3、カルメヤキ。	○	×	×
4、外に出られない。	○	○	○

5、外は危險だ。　○　○　○

こんなに完全な變換形式でも、節をしらべてみると、かくの如くに一致する。ただ一にあらはれたカルメヤキが二、三には缺けて居て、そのかはり、二、三には次の如く別な節があらはれてゐる。

	第二回	第三回
6、活動見物拒否。	○	×
7、雪の日はいやだ。	○	○

そしてこの文章の變換を生ずる根本の理由は、持續的でないところにある。持續的ならばかくの如き節の共通によつて、系統化展開形式の定位性展開をおこすべき筈だからである。しかし全然持續的な性質を缺く譯でもない。卽ち雪の日はいやだといふ感情は色濃く、すべての文章に共通してゐる。故にこの文の主題はこの感情で支持される筈である。もしこの感情だけで節があらはれないならば、この文章は部分化展開の衰頽形式とみられるのであるが、かくの如く節があるので、系統化展開の衰頽形式である。この文章はこの故に二つの點で衰頽を生じてゐることが知れる。

1、構想が持續的に續けられない。

2、各節の連關が不十分である。隨つて各節は移動する。

されぱこの構想をして展開形式たらしめんが爲には、以上の二つを除去しなくてはならぬ。これが先に「隨つてここには、文章の中心となるものの判斷が缺けるから、中心が把持せられず、浮動するのである。されば變換形式の生徒に對しては、先づ中心を定むること、次に中心に向つて精細なる觀察をつづくべきことを指導しなくてはならぬ。雪が不快ならばその雪の不快なる事實を精細に吟味させ、反省させる。第二回にはそれを定位させて置いて、その中で一層精細とし、他の範圍を全然許さぬことにする」と言つた所以である。これを更に他の構想形式との關係から考へれば次の如くなる。

この文章の中心は何にあるかといへば、一に於いて既に姿をあらはしはじめ、二、三に於いて明かにあらはれて來た、「雪の日はいやだ」といふ感情である。そしてこの感情の基礎として1乃至6の經驗があらはれてくる。しかしその中で3と6とは一回あらはれただけであるから、これを暫く重要ならぬものとすれば、1、2、4、5の四個が、重要となつてくる。さればこの四個を基部として、これに3と6との二節を附加する。然らばこの文章は、1、2、4、5四個を基部として之に3、6を附加した雜集形式となる。しかもこの雜集形式を貫くに、「雪の日はいやだ」といふ感情を以つてする。ここに雜集形式は、完全な統一を得て、定位性展開となる。しか

もこの間に力點の浮動をふせぐために、1―3以外の要素は一切之を拒否しなくてはならぬ。ここに於いて有節變換形式の展開化の一つの方式を得るのである。

1、變換要素中より基部を發見する。變換形式の反復形式化。

2、變換形式中にあらはれた基部以外の要素を、基部の中に定位する。反復形式の雜集形式化。

3、變換形式中に共通する感情性を發見し、之を以つて雜集形式を展開形式にかへる。

之を公式化せば

有節變換形式→反復形式（基部）→雜集形式←基本感情
　　　　　　　　　　　　　　　↓
　　　　　　　　　　　　系統化展開形式（定位性）

である。

變換形式の無節なる場合には、その一―三の文章を重ねて、その重なりし部分を基部とし、その基部と基部以外の部分との關係を求めて、之をその基部に附加して、附加形式を作る。純粹の附加形式では、尾部にのみ附加部分の生ずるのが特色であつたが、この場合の附加形式は過程であつて、その前後に附加部分を生ずる。そして發見した基本感情によつて統一すれば、系統化展

開形式の移動性展開となつて、その衰頽を回復する。この經過は先の有節變換形式と大差はない。之を公式化すれば

無節變換形式 → 反復形式（有節、基部） → 附加形式 ← 基本感情
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　↑
　　　　　　　　　　　　　　　　系統化展開形式（移動性）

となるのである。

故にこの變換性の構想形式に屬するものの指導法は、

1、二回乃至三回の推敲によつて、變換性の構想組織による文章二三篇を得る。

2、その變換性が、有節か無節かを鑑別する。

3、有節無節それぞれに、之を反復形式とし、次に之を延長形式系にかへ、更に之を展開形式系にかへる。

これがその基本的方式となるのである。約言すれば變換形式は、延長形式系を通じて、展開するのである。

第二に反復形式の指導法は如何にすべきか。

反復形式にも、有節のものと、無節のものとある。例三十三は有節であり、例三十二は無節で

ある。この例によつて考察する。例三十三の要素は次の如くである。

	第一回	第二回	第三回
1、友達に起される。	○	○	○
2、友達を起す。	○	○	○
3、柔道場にゆく。	○	○	○（友達が寒さうにしてゐること増加）
4、柔道をやる。	○	○（先生とやること増加）	○（先生とやること削除）
5、着物を着る。	○	○	○
6、甘酒を飲む。	○	○	×
7、雪が降り出す。	○	○	○
8、七時半頃の雪。	○	○（精しくなる）	○（二と同一）

この表でも明かなる如く、反復形式の特色は、一度出來た構想の形が、どうしても破れぬ處にある。變換形式の形は、常に之を破つて行くのであるが、反復形式は、一度出來た形に固着してしまふ。隨つてこの固着からして切り離すことが、第一の指導になる。然らばこの固着除去を如何にするか。この固着の生ずるのには、二つの理由がある。一つは書く事件の批判の不足、一つは主題集中の弛緩である。故に一の理由を先づ削除しなくてはならぬ。この批判の不足は、一度得

た材料ですでに滿足し、その後之を機械的に支持するのであるから、第一に材料の增加を行つて、この點で反復形式を破壞し、それを削除する形で批判を行はなくてはならぬ。三十三の例二に於いて、4で先生と柔道をやつたことが增加し、8で屋根の雪が精細になつた。三では友達が寒さうにしてゐる事が增加した。かういふ增加のある以上、この反復形式にも更に增加の餘地がある。友達を起しにゆく途中のこと、柔道場の更に精しい樣子、甘酒の味、屋根の雪ばかりでなくて、木の枝の雪、道の雪、車の上の雪などの觀察、さういふ增加が十分になされる。それを表の中にかき入れる。この作業は、反復形式を雜集形式に變へる作業である。ここで反復形式は完全に排除される。しかしまだ之は雜集形式であつて、展開形式ではない。ここに第二の作業が生ずる。これが材料の批判である。主題は雪であるから、雪に直接關係のない材料を削除させる。これは增加よりも困難であらうがこれも不可能ではない。この第三十三の例でも、三では柔道を先生とやつたことと、甘酒を飲んだこととを削除してゐるからである。この削除の理由をただして、この材料中から不必要な部分を削除する。1から4までを削除してもよい。柔道がすんで着物を着て外に出る處からはじめてもよい。そしてもしその前の柔道場内の寒さをかくとすれば、雪のふる前だつたから寒かつたとすれば、ここでちやんと定位する。しかもこれは困難であり、且材料の增加と削除とによつて、反復形式の破壞をするのが目的であるから、遠慮なしに削除す

べきは削除したがよいと思ふ。削除してくれば材料が自然に主題に集中するから、そこで更に殘つた部分を展開させるのである。さうすれば反復形式の原因たる主題に對する集中弛緩も排除せられる。隨つてこの有節反復形式は、

1、材料附加によつて、反復形式を雜集形式とする。（例三十三の項參照）

2、雜集形式に對し批判による削除を行ふ。

3、純粹に主題に集中する。

といふ三つの段階を通るのである。卽ち之を方式化すれば、次の如くである。

有節反復形式 → 雜集形式 ← 純粹化
系統化展開形式（定位性）

無節の反復形式の指導法については、例三十二をとつて考察する。この文には節といふ程のものはない。しかしそれを書いた順序に並べてみると、次の如くである。

	第一回	第二回	第三回
1、七時になる。	○	○	○
2、米をとぐ音。	○	○	○

3、布團の中にもぐりこむ。　○　○　、○

4、雪の音。　○　○　○

5、窓から外をみる。　○　○　○

6、自動車。　○　○（足駄のあと）　○

三回ともほとんどそのままの繰返しで、ことに二と三とには差異がない。ただ二では一にない足駄の歯のあとが書いてあるだけである。しかしこの文章には、布團にもぐりこんでゐると雪の音のする邊から雪の感が出てゐる。節といふ程のものがなくて、この雪の音の感が文章をこめてゐるのは、無節の例として適當なものの一つである。かくの如く節のないものは、之を前の有節の場合の如くに、雜集形式にすることは出來ない。一度足駄のあとを雪の上にみつけてゐるが、それがそれだけで展開しないのでも知られる。故にかかる形のものに對しては、之れを附加形式に變へて、反復形式を破るより外ない。窓から外を眺めてゐる所からあと、眼に入る雪の姿を拾ひあげて、尾部延長をする。そしてこの尾部延長を、雪の音の感で浸せば、これは部分化展開形式の移動性展開となるのである。されば無節反復形式の衰頽回復には、

1、反復形式を附加形式にかへる。

2、附加形式を先の反復形式の時に有せる基本感情で浸す。

のである。ここに次の方式を生ずる。

無節反復形式　→　附加形式　→　基本感情
　　　　　　　　　↓
　　　　　　部分化展開形式（移動性）

かくの如くして、反復形式の衰頹回復は、延長形式系化を通じて、展開形式化するのである。

以上によつて無展開形式系の展開形式系化は、延長形式系化するのが原則なるを知り得る。かくて問題は自然に延長形式に移行して來た。延長形式の指導法によつて、構想の衰頹形式は回復する譯である。

先づ附加形式から吟味する。附加形式は、反復形式の尾部延長と見らるるのであるから、もしこの附加部分を消去すれば、反復形式になる。故に附加形式の附加をやめれば、すぐに展開形式に回復すると考へるのは無理である。附加をやめればかへつて反復形式を得るのである。附加形式の回復は、反復形式にかへさずして、延長形のままでなさなくてはならぬ。もしこの附加部分が、反復部分と統一を持つてゐれば、これは完全な移動性の展開であるから、ここでは考察の對象とはならない。考察の對象となるのは、統一なきものに限られてゐる。

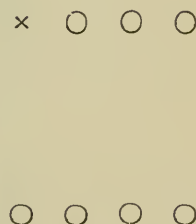
附加延長をする位であるから、固定性保守性ではない。そこで節ある附加形式には、尾部延長

なそのまゝにして置いて、更に雜集形式化する。そしてその上で中心となるべき節を求めて、この節で、前後の各節を統一する。これを例十でみるに、その節とみるべきは次の如くである。

	第一回	第二回	第三回
1、母がもつと寢て居よといふ。	○	○	○
2、雪つりをしたくて寢てゐられぬ。	○	○	○
3、外景をみる。	○	○	○
4、日曜を忘れてゐた。	○	○	○
5、雪はずんずん降つてゐる。	○	×	×

反復部分はこの五節である。二で延長をはじめるが、延長をはじめるのに、5を削つてゐる。5は一の文章を總括する位置を持つてゐるから、これをこのまゝに置いては附加延長が出來ないからである。

	第二回	第三回
6、お使に出る。	○	○
7、公園の雪。	○	○
8、松の枝を折りたい。	○	○

9、雪つり。	○	○
10、父母の會話。	○	○
11、雪の好惡の判斷に困る。	○	○
12、雪つり。	×	○

この附加部分は、時間的にも前の反復部分につぐものであるから、前部分と時間の連續の上で相當の統一を持つてゐる。しかし内面的な關係は十分でないから、延長があつて、深さはない。そこでこの文章に深さを與へることが出來れば、この文章は直に展開形式となることが出來る。一では5が中心感情であつたから統一があつたが、二にはそれ程の中心がない。松の枝を折りたいといふ8の節は、長さでは中心となりさうであるが、それだけの力はない。やはり最後の11が中心になる可能性を有つてゐる。しかしそれには前の部分4 7等が十分に關係を持ち得ぬので、一にも二にも三にも共通してゐる雪つりを持つて來るのが、最も便宜である。一は雪つりをしたくて寢てゐられぬこと、二はそのしたい雪つりをしたこと、三は父母の會語がその間に入つて雪つりで終つてゐる。この展開層からみてもこの文章の中心節をそこに置くことは、自然でもあり且適當でもある。故に有節附加形式では、第一にその節の中心を求めなくてはならない。しかし中心を求めてもそのままでは中心となり得ぬから、ここに雜集化による節の挿入が必要である。こ

の挿入によつて中心節は中心節としての重さを得、文章は中心を得るのである。故に有節附加形式の回復は、

有節附加形式 → 雜集形式 ← 集中化
　　　　　　　　↓
　　　　　　　系統化展開形式(移動性)

である。そしてこの展開は、雜集形式によるから、定位性展開になるべきであるが、附加形式の固有性が保存せられて、移動性展開となるのである。

無節の附加形式は、その反復部の中から、基本感情となるものを發見し、これによつて附加部分をも統一する外はない。

無節附加形式 ← 基本感情
　　↓
部分化展開形式(移動性)

故に附加形式はこれが中心となる節或は感情を發見し、これによつて附加部分を養ひ統一づける工夫が、その指導法となるのである。

雜集形式は、文章の中間に雜然と材料の採集せらるるものであつて、これは必ず節がある。節

がなくては中間に雜集することは困難であるから、雜集形式の無節なるものは、尾部延長となり、附加形式となる。故に雜集形式には無節の場合なく、有節の定位性か移動性かになる。そこで有節の定位性展開の衰頽から來たものは、一、二、三と三回を重ねて、共通部分Aを中心節とし、中心Aに關係なきものは之を排除する。もし不足ならば、更に之に附加する。かくて雜集形式はAを中心にして一つの系統となる。故に雜集形式の回復には、

1、中心の節を定位して、基部とする。

2、各節に加除を行ふ。

3、中心の節によつて統一をつけ、更に展開する。

の三段を要する。そしてこの展開形式は系統化展開の定位性展開となるのである。

定位性雜集形式 ←（基部）← 純粹化
　　　　　　　　　←
　　　　　系統化展開形式（定位性）

移動性の雜集形式は、中心の節を求めることが出來ないから、ここにあらはれるのは中心感情である。しかしこの移動性雜集形式は、力點が移動するので、節が力點移動の方向に集合し、文形の首部或は尾部に延長する。しかしこの延長化は、文の始部不變化の原則によつて、必然に尾部に行はれ、附加形式となる。故に附加形式と雜集形式との間には、交互關係が成立する。卽ち

有節附加形式の回復の場合には、先づ雜集形式にかへたが、移動性雜集形式の回復の場合には、之を附加形式にかへるのである。

移動性雜集形式 ↓ （基部基本感情） ↓ 有節附加形式
← 系統化展開形式（移動性）

の經過であるが、有節附加形式の系統化展開法は、先に附加形式の處でのべたのと同一である。

九

以上の如くであるから、構想の展開系統は、一般に、

無展開形式系 ↓ 延長形式 ↓ 展開形式系

である。逆に

展開形式系 ↓ 延長形式系 ↓ 無展開形式系

は、展開の衰頽方向を示すものである。

そこでこれ迄に得た展開回復方式をあげれば次の如くである。

1、有節變換形式 ↓ 反復形式（基部） ↓ 雜集形式 ↑ 基本感情
← 系統化展開形式（定位性）

2、無節變換形式 → 反復形式（有節　基部）→ 附加形式 ↑ 基本感情
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　← 系統化展開形式（移動性）

3、有節反復形式 → 雜集形式 ↑ 純粹化
　　　　　　　　← 系統化展開形式（定位性）

4、無節反復形式 → 附加形式 ↑ 基本感情
　　　　　　　　← 部分化展開形式（移動性）

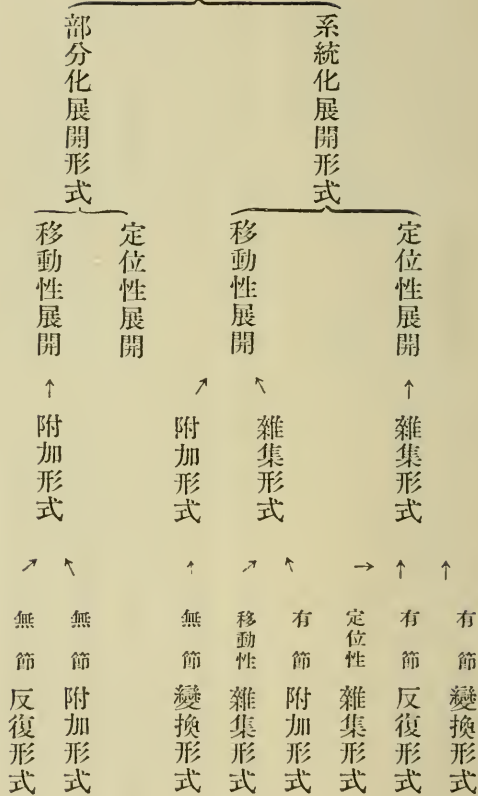
5、有節附加形式 → 雜集形式 ↑ 集中化
　　　　　　　　← 系統化展開形式（移動性）

6、無節附加形式 ↑ 基本感情
　　← 部分化展開形式（移動性）

7、定位性雜集形式 →（基部）↑ 純粹化
　　　　　　　　　← 系統化展開形式（定位性）

8、移動性雜集形式 →（基部　基本感情）→ 有節附加形式
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　← 系統化展開形式（移動性）

以上の關係を逆にして、系統關係を作ると、

- 展開形式
  - 系統化展開形式
    - 定位性展開
      - ↑ 雜集形式
        - ↑ 有節變換形式
        - ↑ 有節反復形式
        - → 定位性雜集形式
    - 移動性展開
      - ↖ 雜集形式
        - ↖ 有節附加形式
        - ↗ 移動性雜集形式
      - ↗ 附加形式
        - ↑ 無節變換形式
  - 部分化展開形式
    - 定位性展開
    - 移動性展開
      - ↑ 附加形式
        - ↖ 無節附加形式
        - ↗ 無節反復形式

となる。即ち變更の中間媒介形式は、雜集形式五箇と附加形式三箇とである。茲に延長形式系の重大さを知り得る。文をかく最初にとにかく長くかくことが奨勵せられたり、推敲を重ねるに隨つて文章の長くなる傾向のあるのは、この性質を基礎としてゐる。

變換形式は移動性展開の衰頽であるから、定位性の展開に導くことは不自然とみえる。しかし訂正と訂正の訓練とは必ずしも發生の性質のみによるものではない。雜集形式に變へて來て、そ

れを定位することによつて、變換性が矯正せらるるからである。これと同樣の關係が、反復形式訂正の場合にもあらはれる。發生の性質を逆行にするのが必ずしも訂正方法とは言はれないのである。

而して以上の展開囘復の方式の基く處は、構想形式の內面的系統によるのである。ただこれ迄の研究の猶なし得なかつたものは、第一にかかる構想形式が、個人に固有するものかどうかといふこと、第二にかかる構想形式は各學年によつて如何に差異あるかといふことである。この兩者が明かになれば、一般的取扱としての方法と、個人的取扱としての方法に、具體案を得るのである。卽ちA學年にA構想形式が多いとすれば、一般的指導法はこれから案出せられ、B生徒はB構想形式、C生徒はC構想形式といふことがわかれば、一學級の各生徒をそれぞれの構想形式群にわかち、それに應じたる指導をなし得るのである。かくしてはじめて綴方乃至作文は指導法を確立しうるのである。

第六章　推　敲

一

構想の展開によつて、構想の様狀を吟味したが、更にここでは文の推敲について考へたい。

推敲とは文を存在の形で考へることでなくて、文を推移の形で考へることである。成立した形として考へずして、産出せらるる狀態で考へることである。換言すれば産出によつて被産出を考へることである。被産出そのものを訂正するのに、産出の狀態からすることである。訂正さるるものはもとより被産出である。しかし被産出を單に存在としてみずして、産出の傾向の定位とみる。産出の傾向の定位が被産出であるならば、被産出を正すには、産出の傾向の中でする外はない。換言すれば描く働の中で訂正する外はないし、更に之を遡れば描く働をも觀る働の中で訂正する外はない。故に推敲の問題は、觀る働と描く働との問題、産出と被産出との問題となる。然るに一般には推敲とは、常に文字、言葉のみの問題、卽ち第二形式のみの問題として考へられて

ゐる。

從來と雖も作文乃至綴方の教授において推敲は顧られなかつた譯ではない。また重大視されなかつた譯でもない。何れの綴方乃至作文の研究にも、必ず推敲は重要なる地位を占めてゐた。けれどもその態度は多く文字言葉を單に符號として取り扱ふ程度の推敲であつた。今坐右の一研究をとると、次の如くに推敲の工夫を定位してゐる。

第一學年の推敲は

1、誤字、脫字を正す。

2、句點、讀點を正す。

3、發音表記の誤を正す。

の三點である。第二學年はそれに加へて、

4、片假名、平假名の混用を正す。

5、意味の不明を正す。

の五點である。第三學年では更に

6、自己訂正の態度を養ふ。

7、意味の重複を正す。

8、「」『の補正。

第四學年は、5に加ふるに

6、自己訂正の習慣を養ふ。

7、意味の不明重複を正す。

8、心持が表れてゐるかどうかを吟味す。

第五學年は、

1、自己訂正を主とする。

2、用語の適否。

3、心持、まとまり。個性を中心とす。

4、文體が一貫してゐるかどうかを見る。

第六學年は、第五學年に加ふるに

5、深味の表現に注意す。

と書かれてゐる。

この方案でみると、第一、第二學年では言葉を言葉として吟味してゐるし、第三學年以上は、これに加へて更に態度を態度として吟味してゐる。かくて言葉はいつも符號となり、態度はいつ

までも抽象的な狀態として、兩者は完全に對立してゐる。故に子供の觀る働が、言葉の中に結晶する働、卽ち描く働となる進行が、ここでは容易に完成し得ないわけである。

しかしこの方案もまた一理がある。描く働は、幅の廣い言葉を全體の傾向によつて確立し、定位したものであるから、描く働は言葉によつて見ることに歸着する。隨つて作文や綴方の問題は、言葉の問題である。卽ち第二形式の問題である。文字をなほすことは、心をなほすことである。心をなほすことは、文字をなほすことである。產出卽ち第二形式をなほすことである。ここにこの方案の理由がある。かつて遠藤隆吉先生に漢文學研究の方法をたづねた處が、「せつせと手寫せよ」と敎へられた。文章を手寫することは、その文章を最もよく理解し味ふことになる。私が國文學をよみはじめた十三四歲の頃、やはり手寫からはじめた。「竹取物語」でも「土佐日記」でも、私はそれを一一丹念にうつした。そのために幸にして、卒然よんでは氣のつかぬ程の文章の細部に氣がついた。遠藤先生の敎を至言だと思つた。今の敎育には手寫の要素が少なすぎる。昔の寫經の必要を、印刷術の未發達ばかりに歸してはならぬ。寫經はすぐれた一つの讀み方、學び方である。それ故文字を正すといふ推敲は、十分に意味のあることではあるが、しかしそれだけでは不足である。そこには文字や言葉を、更にその源の產出狀態、卽ち觀る働に遡源する用意が缺けてゐる。觀る働の鍛錬によつて、描く働を訓練する態度が缺けてゐるからである。故に先

に構想の展開の研究でなした様に、觀る働を重ねることによつて、描く働を正して行かねばならない。そこで觀る働の最初が必ず寫實的であり、鏡像的であるもの程よい。これは觀る働を許すに餘裕があるからである。之に反して、第一回の文意が主觀的で感激的なもの、或は理知的なもの程、展開は困難である。それは觀る働に奥行の少いものが多いからである。文章の基礎はもとより感激にあるが、その感激は感激の形でなくて、感激せしめた對象の寫實の形でなくてはならぬ。寫實の形は推敲に推敲を重ねて之を展開せしめるに十分の可能があるからである。寫實の形であるといふことは、觀る働の正直を示すのであるから、觀る働による鍛錬の場合にも、觀る働による定位の中にも、幾度となく作りかへ、精しくすることの可能を示すものである。推敲に推敲を重ねて、最後の表現層を定位する場合には、第一回第二回の如きはじめの作品は、言はば迅速なるスケッチに當るものである。十分に言葉になつてはゐない。それが秩序を有ち、一貫した層位として展開しなくてはならぬ。

ここに二つの子供の笑話がある。

一、母「坊やは蟲ばかり殺すから、今度生れる時は蟲になりますよ」
　　子「そんなら母ちやんや僕は、前の世で人殺しをしたんだね」

二、母「御飯をたべてすぐねると牛になります」
　　子「お隣の牛は誰だつたの」

この話が何故笑話として成り立つか。第一の笑話で母の産出の主要傾向卽ち文意は、蟲を殺してはならぬとの敎訓で、それを生かすための附加條件が、蟲に生れるといふ敎訓である。しかるにこの子はこの文意には理解を置かず、附加條件を中心にして發展せしめた。文の當然性を發展せしめず、偶然性を發展せしめたので、この表現層にくひちがひが生じた。ここにおかしさが出てくる。第二の笑話でも同樣である。母の定位と子の定位とがくひちがつてゐるために、母の意向はその展開方向を全く變更されてしまつた。食後直にねてはならぬといふ方面に展開すべきものが、隣の牛は前生には誰であつたかといふ展開になつて來る。その兩展開の間には當然性がない。當然性のない兩者をつなぐのは、附加的條件である。このくひちがひがおかしいのである。かかる層位であつては、笑話にはなるが本格的の層位とはならない。展開によつて全體が一つの秩序になる樣にしなくてはならぬ。

二

この當然性を緊張してゆくと、推敲とはそれぞれの層位の中にある當然性を明晰にして、それ

をして秩序たらしむる事である。音樂にヴァリエエションとロンドとソナタとの三つがある。ヴァリエエションはいくら形が變つても、もとのふしの面影が殘つて續くものである。ロンドはある一つのふしが、少しづつ間を置いてたえず聞えて來るものである。ソナタは二つの主なふしがあつて、互にもつれてゆくのである。そのふしのあらはれ方は樣樣であるが、しかしそれを一貫してふしの起伏するのは一樣である。この一貫するものあるが故に、樣樣の變層の中で當然があり、秩序がある。さういふ秩序はその最初からなくてはならぬ。言葉を聞きわける頃から、音をききわけなくては音樂家にはなれぬ。隨つて音樂の天才を出した家庭は、必ず音樂の空氣が豐かであるといはれてゐる。

文章にもかかる秩序あるが故に、その文章はその節節の變化にも係らず、一定の持續をなしてゐる。この一定の持續が文意である。されば文章の中に誤字があり、缺字があり、或は讀み得ぬ字があつても、その缺陷を直に前後の文字からうづめることが出來るのである。かかる持續あるが故に、文にはここに傾向がある。文の傾向とは、或は文の秩序とは、要するに文意である。全體があつて、そこから部分の生じて來る消息である。

かかる秩序ある文章の成立する爲には、文章は言葉でみられなくてはならぬ。言葉で見れば、言葉はすべて文意の象徵となり形象となる。言葉でみるとは、描く立場でみることである。描く

つもりでみることが、觀ることとの基礎である。描くには常に觀るつもりでかかなくてはならぬ。これが描くこととの基礎である。描くつもりでみ、觀るつもりでかく。換言すれば言葉で見、言葉でかく。この働を重ねることによつて、觀る働と描く働とは高まり深まつて行く。これが推敲の働である。この働を更に緊張して行けば、推敲とは、觀る働と描く働とを、一層基礎的にすることになる。それを基礎的にするとは、觀る働と描く働とを分立せしめず、觀る働が描く働に展開する展開點を鍛錬することである。觀る働ばかりを鍛錬してもこれは空である。描く働ばかりを鍛錬しても空である。觀る働ばかりの鍛錬は空しき當然である。描く働ばかりの鍛錬は空しき存在である。前者は空しき態度であり、後者は空しき形體である。何れも展開の姿ではない。展開の姿は、その兩者を同時に鍛錬することである。兩者を同時に鍛錬することを一層緊張して行けば、それは兩者の接合點を鍛錬することになる。この接合點は展開點であり、産出の最後の形であり、被産出の最初の形である。この展開點の鍛錬は、文意の産出と被産出との兩者の、同時の鍛錬である。文意はこの意味に於いて、産出と被産出との兩者の性質を同時にふくむもの、觀る働と描く働との兩者の性質の融合である。故にこの點の鍛錬は、我が國にては舊くよりして重ぜられてゐた。これが推敲の最も基本的なる形である。（小著、東洋美學　參照）

然らばその次の形はどうか。推敲するに從つて增大して行く形を、簡素の形にかへすことである。簡素の形にするとは、文字と言葉との幅を廣くすることである。幅廣くして簡素なる文形は不確定形體である。その不確定形體が、それ自らとして象徵的であり、決定的である時に、その推敲は完成したものとみるべきである。世に蠟人形がある。活きてゐると見ゆるにもかかはらず、どこかに不充分なるもの、不足せるものがある。立體寫眞に於いてもまた同一である。然るに彫刻や繪畫は、その存在形においては遙かに蠟人形や立體寫眞には及ばない。しかしそこには其等にない處の幅がある。彫刻は對象の如き色を有しない。色を有しないことが、彫刻の一つの幅である。繪畫には對象の如き奥行を有しない。奥行を有しないことが、繪畫の一つの幅である。この幅ある故に對象に似ない。對象に似ないから似るのである。似ずして似ることが、似ざるが故に似ることが、幅の形である。「てには」がかかる幅を有するに到れるをみても、日本の文化の長き推敲のあとを知ることが出來るのである。東洋の推敲は、定位を決定に向はしむるよりも、未決定に向はしめる。卽ち幅に向はしめてゐる。東洋には西洋の如くに嚴密なる性質に徹したる描く働はない。それだけにまた簡素と幅との性質に徹したる描く働がある。

三

孔子は伯夷叔齊を批評して、「其の無を降さず、その老を辱めず」いひ、柳下惠、小蓮を批評して、「言は倫に中り、行は慮に中る」といひ、虞仲、夷逸を批評して、「身は淸にあたり、廢することは權に中る」といつてゐる。而して孔子自らは「吾は則ち之と異る。可もなく、不可もなし」と自分の態度を明かにしてゐる。しかして孔子のこの態度は、子思によつて決定される。それが中庸の思想である。先に述べたるが如く、「中庸」には喜怒哀樂の未だ發せざるものを中といつてゐる。これは中なるものである。しかもこの中なるもの、未發の中が發して、皆節にあたるのが和である。この和は發顯したる中である。未發の中によつて、發顯の中が支持せらるるのが中庸である。未發の中は陰である。發顯の中が陽である。一切はこの陰によりて貫かるる統一秩序の上にある。故に「中庸」には「中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す」と言つてある。かかる大きい統一によつて成立するのが、堯であり、舜である。「大なる哉、堯の君たるや。巍巍乎たり。ただ天を大なりとす。ただ堯之に則る。蕩蕩乎たり。民能く名づくるなし」と言ひ、「無爲にして治するはそれ舜か」と言ひ、また自らは心の欲するままに行動して、しかも範をこえざるを最高の境位としてゐる。

されば東洋は古くよりして、未發の中、卽ち觀る働と、實現の中、卽ち描く働との統一の上にその生活の基礎を置いてゐることが知られる。これが同時に、これ迄述べて來た推敲である。推

敲によつて徹するのは、中庸によつて徹するのである。その箇と幅とは、文章の中庸である。故に推敲によつて文章を正すことは、その生活を正すことになる。換言すれば東洋的なる生活の鍛錬である。島崎藤村氏が、文を正すとは心を正すことであるといふ眞意を、ここに見ることが出來る。ここまで來てはじめて文章は生活だと言へるのである。

然らば推敲の論理的基礎は何所にあるか。それを考へなくてはならぬ。

四

漢民族と日本民族との間には、藝術的に樣樣の樣式的相違を持つてゐる。もとより漢民族の中にも、作家の性質は樣樣であつて、時には正反對なる特色を有し、或は漢民族にはみとめられずして、かへつて日本民族の方に近く、日本に認められた作家もある。その著しいものは牧溪である。牧溪は支那の畫史からは、

意志簡當、粧飾を費さず。但し粗惡にして古法なし。誠に雅翫に非ず。（畫史會要）

として顧られず、日本の足利時代になつて始めて非常な尊敬を受け、足利の畫壇は馬遠、夏珪、牧溪、玉澗、顏輝等の最も深い影響を受けるのである。その意味で牧溪は日本に近い畫家であるが、しかし牧溪の畫は決して、日本畫ではない。日本畫と牧溪畫との間には明かに相違がある。牧溪

畫には、日本畫に缺けてゐる沈痛なるものがある。その沈痛なる味は、筆の壓と速との結合した姿であつて、日本ではこの二つは常に離れ勝ちである。速のある線は輕く、壓のある線は遲い。速くて同時に壓のある線は、日本にはない。隨つて日本畫は、速壓の多い牧溪や顏輝を學んでも、依然として日本的な性質を持つてゐる。卽ち日本畫には鬼氣がない。鬼氣は壓と速との密接した姿である。これは漢民族と日本民族との間にある民族的なる樣式の相違である。これを民族的樣式とする。

同一なる漢民族であり、同一なる漢民族的樣式でありながら、これを細かにみれば、そこに時代的相違がある。例へば唐と宋との間の時代的相違の如きである。唐の線は太さの變化と、速さの變化を中心とするものであつて、まだ壓は十分にあらはれてゐない。それが宋になると、壓を中心にした線の世界になる。これを日本の例でみると、同一の大和繪でありながら、藤原期と鎌倉期と足利期とでは、相當に樣式的相違がある。藤原で中心をなしてゐた作り繪の手法が、鎌倉では淡彩の手法となり、足利では壓線の手法となる。作り繪とは不透明性の繪之具でぬり重ねて行き、その上から線の畫き起しをするもので、色が中心である。其れが鎌倉になると、はじめの線を保存して、上からぬる繪之具は淡い。線が中心である。足利になると起伏自由な速さのある線だつた在來の線が、宋元的な壓を得て來る。かかる性質的變化が、同一の大和繪の中に、時代

的樣式の相違としてあらはれてくる。これが時代的樣式である。

同一の民族であり、また同一の時代でありながら、またそれぞれの流派によつて、樣式的相違がある。日本の德川期中にあつて土佐と狩野と光琳と浮世繪とが、互に樣式的相違を持つてゐる如きが之である。同じ德川の時代的共通性を有ちつつ、しかもそれぞれの相違が其處にある。これが流派的相違である。

更に同民族、同時代、同流派の作者であつても、決して同一なる作品を作るものではない。例へば狩野芳崖と橋本雅邦との兩畫伯についてみるに、兩者は狩野勝川の塾で育つた、同門の親しい畫友であつた。しかも其の畫にはあれ程の相違がある。また橫山大觀と下村觀山の兩畫伯にも同樣なる相違がある。雅邦翁が生涯の中にたどつた畫風の相違は相當に大きい。初期と後期との相違は可成大きい。時には雅邦翁の追隨者と翁との相違よりも、もつと大きい相違を示す場合もある。しかし追隨者は依然として追隨者である。雅邦翁の若畫きは、晩年の作品とは如何に違つても、猶翁の作たる共通性がある。翁の必然性がある。その生涯を通じて變化しつつ、しかも遂に變化せざるものがある。追隨者が如何に接近しても、竟に接近し得ぬ性質がある。これが個人的樣式である。

以上の如くして民族的、時代的、流派的、個人的の各様式のあることは明かであるが、しからばそのそれぞれの様式相違の基礎には何があるか。換言すれば様式的相違の基礎に何があるか。民族と時代と流派と個人との様式相違の基礎には、觀る働の相違がある。足利には足利の觀る働、狩野派には狩野の觀る働、雅邦翁には雅邦翁の觀る働がある。この觀る働の相違によつて、それぞれの相違が生ずる。

五

觀る働は次の如き二つの性質を持つてゐる。

一、時代的にみると、觀る働は漸次に別種のものに變化して行く。これを日本の美術史で言へば、飛鳥は白鳳に移り、白鳳は奈良に移る。そこには漸次に變化して行く時代の姿がある。しかもそれは進歩でなくて、變遷である。

二、されど一つの樣式にありては、觀る働の上に進歩がある。飛鳥と白鳳或は奈良との間には、進歩の關係はない。飛鳥が進歩して奈良になつたのでも、白鳳になつたのでもない。變化したのである。しかし飛鳥の樣式、白鳳の樣式の中には、自然に進歩がある。また個人の樣式の中にも進歩がある。けれども一つ一つの樣式は必ず進歩するかと言つ

ても、それは斷言し得ない處である。鎌倉の彫刻様式は漸次に退歩してゐる。德川の狩野様式も漸次に退歩してゐる。探幽の個人様式も亦中年以後に於いて、特に中風におかされた後において退歩してゐる。ある様式には進歩があり、或は様式には退歩がある。進歩するか退歩するかは一般的には斷言し得ない。故に一般的に言へばそこにも變化があると言ひ得る迄である。

以上の如くであるから、美術史は變遷史であつて、進歩史ではない。進歩するか退歩するかは、特殊の事情によるもので、一般的論理的に言ひ得るものではない。

六

然らば觀る働とは如何。

之を色について見る。ここに赤と青とがある。赤は赤、青は青と、色それ自身に於いて區別がある。吾等の視覺作用は、この關係を動かすことは出來ない。赤を青とする事も出來ないし、青を赤とすることも出來ない。病氣によつて赤が黄に見え、甘いものがにがく感ぜられることがあるが、感ぜられるには感ぜられるだけの理由がある。であるからこれとは自ら別である。

赤は自ら青と別種の色であることを明かにし、青も自ら赤と別種の色であることを明かにしてゐる。色は自ら自己を明かにすると共に、自己を他と區別する。而して赤が青と區別さるる爲には、その背後に更に廣汎なる世界がある。赤が赤として有るのみならず、青が青として有るのみならず、更に兩者の關係が成立しなくてはならない。これを他の例でいへば、一本の草、一箇の石、空、それはそれぞれ自ら一つの明かなる存在である。しかも草と石と空とばかりでは、それ自らの意味も十分ではない。それが合して風景となつて、はじめてそれぞれのものが完成する。草は一本でも草であつて、石より區別せられ、空より區別せられる。しかし他より區別せらるるのみでは、それは一つの孤立であつて、完全なる意味をなさない。そこにその相互の關係並びに統一がなくてはならぬ。その背後のものがあつて、それぞれの存在を完全なるものとする。草、石、空のみでは斷片に終るものを、更に一つの風景とする全體があつて、草、石、空も孤立しなくなる。この事は、それを一層進めて、一本の草を、ただ一本の草として置かず、その生育した土と、空氣と、光との關係から觀れば、この土と空氣と光とは描かれざるにも係らず、この草は嚴然たる存在となる。東洋畫の草や鳥は常にこの立場から描かれるので、それは靜物畫とならずして、風景畫となる。東洋畫には靜物畫の概念がない。花鳥畫は風景畫として考へらるるのみならず、逆にすべてが花鳥畫に向つて集中する傾を持つてゐる。草はその生育に參加せる背後のものによ

つて、その背後のものの觀らるるによつて、はじめて完成する。一本の草は一本の草であつて、草以上のものとなる。この關係はその花の赤、或はその花の靑の一色についても、同樣である。花の赤、花の靑を、赤と靑との色の自らなる區別に置かず、その花をひたしてゐる背後のもの、一般的なるものとして、その國とその土との色としてみてくる處に、花の赤と靑とがある。そこに東洋と西洋との繪之具の相違もあり、畫紙畫布の相違も生じてくる。西洋の油繪之具や、水彩繪之具に比較すれば、東洋の岩繪之具や水繪之具は、如何にもこの兩地の觀る働の相違を示すものである。これは赤と靑との色自らの區別のみからは生じ得ないことである。もし色を單に色として見るならば、色は純粹なる日光の分解色に近づくのみである。またそれによつて滿足するであらう。しかるにその方向を取らずして、油繪之具となり、岩繪之具となることは、色が色自らをあらはすのみならず、その背後のものまであらはすからである。一草一石が風景となると同じ働で、色も亦その背後のもの、卽ちその風土となるのである。

かくて直接なる事實の根據となり、背景となる所の、より高きもの、より深きものを探り、それによつて直接なる事實の成立をしることが觀る働である。その成立の由來、成立の過程に遡り、直接なる事實を、その由來と過程との一般的意味によつて浸し、且基礎づけなくてはならぬ。こ

の基礎づけが觀る働である。故に觀る働は還元であり、更に還元より再び歸還する働である。この還元は東洋では舊くより重ぜられた處であつて、佛智にも亦自己の宿業を知る認識を重要なるものとして擧げてゐる。宿業を知るのは、自己を還元してみるのである。而してかかる觀方は、一つの進歩である。觀る働が、事物より新しき發見をなし得るのはこの故である。故にこの意味における觀る働は、生理的乃至心理的の視覺作用ではない。この視覺作用が如何に精しくとも、觀る働を精しくすることは出來ない。またかかる發見に參する觀る働が、歴史的に發展するとは考へられない。そこに藝術が時代的歴史的に發展すると考へられない根據がある。假に觀る働を生理的、心理的の視覺作用と考へても、視覺作用が時代を追つて進歩するとは考へられない。今日の視覺も前代の視覺も殆ど同一であり、その間に何の進歩もない。故に觀る働を、發見的意味にとるも、また純視覺的意味にとるも、時代を經て進歩するとは考へられず、隨つて美術史を進歩史發達史として考へ得ないものがここにある。

かくて觀る働は、眼のみがよくするものではない。一切の動的統一なる人格の立場によつてなすのである。この觀方によつてのみ、創造作用は可能である。されば樣式の最奧の根據たる觀る働は、生命の本質である。

意識は無限の發展であるから、一時間前の狀態も、之を再び現前することは出來ない。故に過

去の記憶を再現した場合でも、現在成立せる新らしき意味によつて再起したのである。それは單なる回顧ではない。新らしき發展である。隨つて還元作用も亦一つの發展である。固定せられたる對象を、その生成の姿にかへして、具體的なる基礎に立てる姿とするのが、觀る働である。觀る働を此處まで入れて來なくて、創造作用はあらはれて來ない。

七

然らば觀る働は如何にして展開するか。

ここに赤い苺の實がある。この苺の實が藝術の形體をとる爲には、第一の認識に於いて、苺の實の認識があると共に、これに對する感動がなくてはならぬ。而して感動は、はじめ苺の實と同じ立場に居ながら、やがて之を超越しようとする認識である。故にこの認識は、

1、苺の赤に卽し、それに動かされる感動の認識。

2、苺の赤と共に動く感動の認識。

3、動かさるると共に、動く赤の認識。

4、明白なる智識の形をとらず、具體的に高まる認識。

の四つの性質を持つてゐる。然るにこの感動の認識は、やがてそれぞれに結晶をはじめる。

1、現在の形の認識。苺の形、苺の色、苺の疎滑、苺の香、苺の表面の凹凸、苺の硬軟等。

2、背後の形の認識。その生育せる風土、苺に對する樣樣の經驗の記憶等。

樣樣の性質の形で結晶する。而してこの全體を含んで具體的に「赤き苺の實」として成立する。故に具體的に「赤い苺の實」は、赤以外に樣樣の認識をふくんでゐる。樣樣の要素が總合せられて、そこに具體的なる「赤い苺の實」が成立する。然らば「赤い」といふ認識は、赤い以外の諸要素をふくみ、しかもそれを統一してゐる。然らばその樣樣の認識に於いて、何故に赤が其等を貫くものとして成立するか。それは最初の認識に於いて、「赤」に對して感動したからである。もしその感動が苺の色に於いてせず、苺の形に於いてしたならば、形がその統一の中心となるべきである。感動の認識が、そのあらゆる他の認識の要素を貫いて、その基礎にあるからである。

この故に赤い苺の認識は、赤によつて苺の形、疎滑、硬軟其の他の諸性質を貫いて、新らしい綜合をなせる一體として成立する。これが具體的の「赤い苺の實」である。されば「赤い苺の實」を超越し、一層高次の認識に達したのである。ここに感動は卽しつつやがて超越する力を示してゐる。隨つて觀る働は、

1、感動の認識、卽ち全體の認識。

2、分散の認識、卽ち知解の認識。

3、感動の認識によつて、分散の認識の統一せらるる認識、卽ち超越の認識。

の三段階を經て、最初の苺の實の認識を超越する。

かくの如くであるから、觀る働は受動的ではない。新らしい形體を作り上ぐる發動的の認識である。この發動的なる認識によつて、具體的なる形をここに創成する。是は單に色形等の感覺或は記憶を見るのでなくて、「赤き苺の實そのもの」を見ると共に、觀る人の「赤き苺の實の背後のもの」を見るのである。然らば單なる苺の實と、この苺の實とは如何に異るか。前者はその形、色等を、屬性として列擧的に有するのに、後者の苺の實は、屬性を列擧するのみでなくて、卽ち屬性の列擧に盡くるものでなくて、その列擧を超越するもの、列擧以上のものである。超越するとは要素の列擧的立場以上に立つて、統一することである。この統一によつて諸屬性を高擧するのである。

この超越せる認識は再び感動性と分散性との認識を通じて、超越性の認識に到り、再びこの第二の段階を超越する。ここに觀る働の深まりがある。この超越を反復して觀る働を高めるのが、推敲である。超越性認識は、常に先行し、且これを支持する感動性認識に支持せられる。前段階に於ける知解性認識も、行動性認識も、それと同一面によつて認識する限、感動性認識となる。感動性認識はその部分的凝集によつて、知解的認識となる。しかもその知解の中に、最初に感動

をふくまなくてはならぬ。感動をふくむといふことは、超越することを意味する。これがなければ知識とはなつても、藝術的形體とはなり得ない。故に推敲を通じて、常に保持せられなくてはならぬものは、この感動性認識である。換言すれば感動を通じて推敲が行はれなくては、それは分散性、知解性の認識に終るであらう。卽ち自然科學的認識にはなり得ても、超越性認識にはなり得ないのであらう。

八

作品は作者の立場からみれば全然自然の摸寫である。作者の構想作用は、自然の摸寫である。但しこの自然とは要するに作者の「觀たる自然」であつて、作者によつてせられたる超越性認識である。構想作用は作者の直接意識よりすれば、自然の摸寫になる。摸寫說は作者の意識上の事實である爲に、活活としてゐる。ただこの自然はもつと精しく言へば、「觀たる自然」であるから、作者の直接意識を離れてみれば、それは全く摸寫以上のものである。もし知解性認識によつて成立する自然であるならば、鏡にものを寫す程の意味において、摸寫的である。しかも自然が超越性認識によつて成立するものであるならば、遙かに摸寫以上のものである。その自然は全身が眼となり、手は眼の延長となるといふ程の狀態では、到底作り得ない。摸寫的態度では作り得

ない自然であるにも係らず、之を摸寫的であると感ずるのは、既にこの認識の段階を一歩超越せることを示すのである。換言すれば、更に一段上の段階に立つて、之を描くのである。描く働のあらはれたことは、觀る働を一歩超越してゐることを示すのである。描くことによつて觀る働は一歩を進める。しかも描く働が觀る働の上に立つ時、そこには依然として摸寫說が成立し得るのである。

超越するのが觀る働の主動傾向であるから、描く働は觀る働の進行の繼續である。描く働が觀る働の次の段階にあらはれても、描く働の中には依然として感動、分散の兩認識がある。更に描く働の行るると共に、その兩認識はその形狀を確定するから、超越の認識が行はれやすい。認識は行動によつて確保せらるるからである。隨つて是等の認識は描く働を動かす力であり、描く働の進むと共に、進むのである。是等の認識は行動を通じて、卽ち描く働を通じて進むのである。故に描く働は、觀る働の外側である。ただ描く働は觀る働の或る度の進行の後にあらはれるが、一度描く働のあらはるるや、觀る働は描く働の中を通じて、その認識を進める。これが構想に於ける推敲の意義である。

著作目錄

支那上代畫論研究　大正十三年十月　岩波書店
東洋畫概論　大正十三年十月　古今書院
繪畫に於ける線の研究　昭和二年十一月　古今書院
東洋美論　昭和四年四月　春秋社
東洋畫　昭和四年十月　春秋社
日本農民史　昭和五年一月　古今書院
東洋美學　昭和七年十月　古今書院
構想の研究　昭和八年六月　古今書院

昭和八年七月二日印刷
昭和八年七月五日發行
昭和八年八月一日再版

構想の研究

定價貳圓八拾錢

版權所有

著者　金原省吾

發行者　橋本福松
東京市神田區駿河臺二丁目十番地

印刷者　田中末吉
東京市牛込區改代町二十四番地

理想社印行

發行所　東京市神田區駿河臺二丁目十番地
古今書院
振替東京三五三四〇番